
エンジェルダスト

鈴雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジェルダスト

【Nコード】

N1916F

【作者名】

鈴雪

【あらすじ】

爆発事件に巻き込まれてしまった僕こと草薙圭一。だけど、目覚めてみたら女の子になっていた?! え、天使? しかも母親!?

突然、改造人間になってしまった僕とその娘のアルトが繰り広げる遙か過去から続く物語、ここに開幕。
修正完了しました。

エンジェルダスト設定集

名前：ノエル・テストロッサ

性別：頭脳男 身体女 年齢：15 職業：学生兼神無特務部隊隊員

身長：168 / 5 cm 体重：98 / 7 kg 体型：いわゆるモデル体型

趣味：アルトと遊ぶこと、料理 好きなモノ：家族と友達 嫌いなモノ：しつこい人間

プロフィール：

事故で瀕死の重傷を負った草薙圭一の脳を機械天使『総合No.1117 ルギス後期型50番』に移植した存在。圭一のプロフィールは後述。

性格は明るく順応性が異常に高い。新しい体もそれなりに気に入ってはいる。

アルトの母親役になったことは困惑しつつも自分なりにできることをしようとし、親バカな行動をすることもある。

異能者で『スターダスト』と呼ばれる能力を持ち、機械神剣『蒼穹』との契約者でもある。

ピーマンとセロリが嫌い。（アルトの前ではそんなそぶりを見せないよう頑張って食べている）

草薙 圭一

性別：男、享年：15 職業：学生

プロフィール：

元ただの一人暮らしの学生だったが、近所で行われていた『神無』の発掘作業で覚醒した自動人形の暴走事故に巻き込まれて死亡。辛うじて無事だった脳を朱音の依頼により、アグニの手によって発掘された機械天使『総合No.1117 ルギス後期型50番』に移植される。

『スターダスト』と呼ばれる能力を持つ異能者であったが、本人は自覚することもなく生活していた。

名前：天野 朱音

性別：女 種族：人間 年齢：20歳 職業：神無特務室実働隊長
長兼考古学者兼漫画家

身長166 / 8cm 体重：60 / 2kg 体格：女神も嫉妬する
プロフィール

趣味：料理とぬいぐるみ集め 好きなモノ：買い物、かわいいもの
嫌いなモノ：虫

プロフィール：

知的な大人の女性といった感じだが、けっこう好戦的な性格。
この人も秘密がかなりあって、そのうち明かす予定。

性格は基本的に面倒見がよく、相手をからかったり観察することが

好き。

見た目二十代前半で、既婚者。

趣味は気に入った人の寝顔を観察すること。

名前：草薙 アルト

性別：女 年齢：推定5歳

身長：119 / 5 cm 体重：21 / 0 kg 体格：子供

趣味：みんなで遊ぶこと 好きなモノ：甘いもの、母親 嫌いなモノ：苦いもの

プロフィール：

機械天使の中でも特異な特徴を持つ『成長する個体』として造られた『製造No.1225ヴィオ型』

偶然目覚めさせたノエルを親として認識、以後、母親と慕うようになる。

性格は無邪気で泣き虫の甘えん坊。

ピーマンが嫌い。

アルトの名前は旧文明で『幸い』を司る神の名前。

名前：上坂 アグニ

性別：男 年齢：28 職業：神無特務室室長

身長：173 / 8 cm 体重：64 / 5 kg 体格：中肉中背

趣味：研究、バイク、写真 好きなモノ：家族 嫌いなモノ：不自由、バッドエンド

プロフィール：

天才的な科学者で、ノエルに使われている機械天使のボディの復元を始めに、いくつものロストパーツの復元を行っている。性格はねじが一本外れていて、圭一には少々呆れられている。ただし、技術者として常に最高の仕事を行うという拘りと誇りを持つ。非常に愛妻家であり親バカ。子供好きだと公言して憚らない。嫌いなものは酢豚のパイナップル。

名前：柏木 はやな

性別：女 年齢：15歳 職業：高校生兼アニマルティマー（自称）

身長：156 / 7 cm 体重：54 / 6 kg 体格：トランジスタグラマー

趣味：イラスト 好きなもの：お兄ちゃん、動物 嫌いなモノ：雷

プロフィール：

『神無』専属の医師、柏木 総一の娘。ノエルとはクラスメイトで友達。明るく、誰とでも仲良くなれるタイプ。

動物との相性が異常に高く、簡単ながら話すこともできる。

名前：草薙 香苗

性別：女 年齢：16歳 職業：高校生

身長：160 / 2 cm 体重：54 / 9 kg 体格：ふつくら

趣味：漫画を描くこと 好きなもの：子供 嫌いなモノ：特になし

プロフィール：

圭一の従姉妹。ほんわかして、包容力があるタイプ。

ノエルと友人になるが、時にノエルが圭一のような行動をすることに戸惑っている。

一人っ子で、小さい子供の相手をするのが好き。

名前：柏木 一馬

性別：男 年齢：19歳 職業：大学生

身長：178 / 2 体重：70 / 3 kg 細身で筋肉質

趣味：身体を動かすこと 好きなもの：かわいい女の子 嫌いなモノ：高圧的な人間

プロフィール：

はやなの兄。現在大学二年生で、工学系の大学に通っている。明るくざっくばらんとした性格。惚れっぽいところがある。

兄弟であるはやなとは仲がいいが、あくまで家族としてである。

名前：先代

性別：女 年齢：不明

身長：168,5 体重：98,7kg

趣味：不明 好きなモノ：不明 嫌いなモノ：不明

プロフィール：

ノエルボディの本来の持ち主。

保存時のミスで脳に重大なダメージを負ったため脳死と判定され、ボディに圭一の脳を移植された。

彼女がどのような天使だったかは一切不明。

最近まで彼女は完全に死んだと思われていたが……

ソフィ

性別：女 年齢：不明 職業：科学者

身長：不明 体重：不明

プロフィール：

ノエルたちが先代と呼ぶ人物の開発責任者兼養母。

先代と同じく一切のプロフィールは不明。

ただ、実子がいたことだけはわかっている。

用語

機械天使

解説：

先史文明時代に生み出された『文明の守護者』
培養したボディーに機械類をインプラントして造った人造人間で、
小型量子電腦、精霊炉、ナノマシーンなど、オーバーテクノロジー
の塊。

機械処理による高い身体性能、ナノマシーンによる高速修復、各種
装備により現代兵器を超越する性能を持つ。宇宙、深海等様々な環
境で活動可能であり、ヴェノムと戦った。

コアが破壊されない限りシステム中枢を除き自己修復は可能である
が、ノエルの場合、現代技術で修復された箇所と生身のままである
脳はその恩恵を預かれない。

ノエルのボディーは最後期型の『ルギス後期型』と呼ばれるもの。

ヴェノム

解説：

星に寄生し、その生命力を喰って生きていく星間寄生生物。見た目
は堅い甲殻を持つ巨大な虫であり、通常兵器は効果が薄く、各国で
は対ヴェノム用の装備も開発されている。

上から順に、女王級、大型種、中型種、小型種に分類され、特に小
型種は対機械天使に特化した存在である。

先史文明ではシンプルに『蟲』と呼ばれていた。

神無

表向きは大手医療機器メーカー『FUGAKUコーポレーション』だが、異能力者と旧文明の遺産の管理と研究を行っている独立機関。前身は戦前から存在した異能力者研究機関で、現在の神無はアメリカの先史文明研究組織『LTI』の介入の後に発展、現在は各国の機関との繋がりも持つ。

機械天使武装及び用語一覧

精霊炉

自然界を循環している地球の持つ生命力、マナをエネルギー源とする半永久機関。

現代では再現不能なオーバーテクノロジーであり、機械天使は量子電脳と生体脳の並列処理で小型化に成功している。反面、持ち主の精神状態がダイレクトに反映される欠点もある。

蒼穹

ノエルの基本装備の機械神剣。

重量、百二十キロ、刃渡り百七十センチ。様々な機械的なギミックが内蔵されている剣。

刀身にエネルギーを纏わせる機能、剣速の補助のためのブースター、銃剣形態、ワイヤー機能などなど、まだ全ては使い切っていない。AIによる持ち主とのコミュニケーションを取れるが、先史文明においても機械天使を除いてここまで高度なAIも珍しい。

イージス

ノエルの左腕手甲に搭載された防御兵装。

内蔵された力場誘導端子によって、前面にエネルギーの壁を作る。ミサイルの直撃も耐えられるが、ノエルのはアグニが製作したデッドコピーであり、オリジナルには強度、範囲共に劣る。

ダブルガトリングガン

ノエル用にアグニが製作したもの。

ノエルのボディがあった施設のデータにあったものを再現した。弾は蒼穹に使用されている弾を参考にしたものを使用している。

月輪

薄い刃を重ねた武装。

本来、展開することで敵に投げつける投擲武装として使用するもの。少々使いまわしに劣る蒼穹代わりに先代は接近戦や乱戦時に手持ち装備として好んで使用していた。

プラズマダガー

見た目は無骨な柄だけの装備だが、エネルギーを籠めることでプラズマの刃を生成する。

主に投擲に使用されるが、手持ち装備としても使え、リミッターを外せばブレードの様にも使える。

第二種兵装

対大型種用追加装備。

大型種の強力な外殻の破壊と、攻撃範囲を広げるために作り出された。

蒼穹に強化パーツを取りつけ、内蔵エネルギーを三つの力場誘導端子によって、収束し加速させることで、長大な光の刃を生み出す。現在のノエルでは四割の力しか出せない。

VWS - 06 『ロードバディ』

アグニがノエル用に作成したサポートバイク。

見た目は一風変わったモトクロス風バイクだが、各所に先史文明の研究で培った技術が導入されている。

蒼穹と同じように各種ギミックが内蔵されている。最高時速三百キロメートル。

ノエルが学生の立場であり、緊急時のための装備であり、使われる機会がない不遇の装備。

ブローグ

その日はいたって普通だった。

いつも通りに起きて、いつも通り朝食を食べて、いつも通り学校に登校した。

そして、普通に授業を受けて、昼休みに友達と弁当を食べただけ。そう、いたって変わりない、いつも通りだった。だけど、放課後になって……

「よー、草薙、これからカラオケいかね？」

帰宅しようとしていたら友達の前田君に声をかけられた。

「うーん、どうしょっか？ 今月小遣いピンチだし……ああ、それに今日は『いだけや』で醤油や砂糖が安かったからできれば買ってきたいし……」

ちよつとだけ悩んで、

「ごめん。遠慮しとくよ」

「そうか、じゃあまた明日な」

前田君は少し残念そうにしながらぴつと手を上げた。

「うん、また明日」

僕はそう言って教室を出た。

もしこの時、僕が彼らについて行くことを選択していたら、この後、僕があれに巻き込まれることはなかっただろう。

スーパーで買ったものを改めて確認する。

砂糖、醤油、その他、必要なものは全部買った。

「よし」

それらを前の籠に詰め込む。

僕は両親がなく、一人暮らしをしている。だから、こういった風に見えるときに買える物はできる限り買っとかないよね。

少し重くてよろけたりしながらも、なんとか自転車を漕ぎだす。
そろそろ家だなとか考えながら角を曲がって、

爆発に巻き込まれた。

最初に衝撃、それから自転車から吹き飛ばされて壁に叩きつけられる。

痛いとか、そう言うのは、なかった。驚きと、なぜ？ というのが先に浮かび上がった。だけど、声に出そうとしても、喉からは何も出てこない。

体は動かなく、感覚もない。意識もだんだん薄れていく。

薄れてく意識の中で、誰かが目の前に立ったのだけ感じて、僕は闇に沈んだ。

プロローグ（後書き）

鈴：「宣言通り出せました。よかったあ……」

刹：「うむうむ。これで俺の出番も」

鈴：「増えないよ」

刹：「……マジ？」

鈴：「うん。今回は君ら朱音だけ登場だから」

刹：「そうか」

鈴：「あの……なんすかそのどでかいハンマーは？」

刹：「貴様を冥界に送るものだー！！」

鈴：「チヨイ待て！　俺があっちに逝ったら本当に出番なくなるぞ
！」

刹：「ふふふ。問答無用！　轟天爆砕！」

鈴：「ぎゃああああああ！！」

ぷちつと大質量の物体によって小さな何かがつぶれる音をたてて場
は閉幕する。

それでは、また次の話が、狐火で会いましょう。

第一話 僕、女の子？

僕が眼を覚ますとそこは見知らぬ天井だった。

「あれ？」

首を動かして部屋を見渡してみた。僕が寝ていたのは清潔そうな白い壁と床の部屋で、病院の一室のようだ。

何でこんなところにと考えてからあの事を思い出して、勢いよく跳ね起きた。

そうだ、確か僕は突然の爆発に巻き込まれたはずだった。となると、ここは印象のように病院なんだろうな。

痛みもないから、あまり重傷ではなかったか、かなり時間が経ったのかな？

「にしても、なんだったんだろうなああの爆発は」

そう言つて僕は頭をかいて……あれ？

今触つてる髪……すぐ柔らかくてさらさらしている。そして、長い。僕の髪はこんな長くていいものではなかったはずだ。

恐る恐る視線を下に移す。

そこには白衣を持ち上げる二つの膨らみがあった。

パジャマから伸びる手も、細いしなやかな指に、白い滑らかな肌。どう見たって女の子の指。

「……」

無言で胸元に手を伸ばし、裾に手を掛ける。開いてから、すぐに閉じる。

「……………うん。」

「なんじゃこりゃ!？」

一瞬だけ松田。作の霊が自分に降りてきた気がした。つて、声も若い女の人のだ!

うそ、なんで!？ うわ! 確認したけど下もないよ!!

「な、なんで女になつてるの？」

鏡を見ようと慌てて立ち上がろうとして、体を支えられず崩れてベッドから落ちてしまった。

あれ？

肩が痛いけど、それより……

「足が……」

足にあまり力が全く入らない。もう一度立とうとしたけどダメだった。ぜんぜん立てない。

うう、だれか来てくれないかな？ それで、状況を説明してくれないかな？ あと、立つのも手伝ってもらいたい。

と、そこで、神さまに願いが届いたのか目の前のドアが開いた。誰かが部屋に入ってきて、

入ってきた人は女の人。しかも、すごい美人。

柔らかなそうな長いピンクの髪、紫色の綺麗な瞳に通った鼻梁と柔和な顔立ち。大人の女性と感じがせるすらった背が高く、抜群のプロポーションを誇る体は漆黒のように黒い服に包まれていて、その貫けるように白い肌と相まって彼女の存在感を引き立てる。

静かで、優しい雰囲気、なんというか、彼女のことを一言で表現せよ。なんて言われたら、天使と答えてしまうと思うぐらい。

「よかった。起きたんだね」

声も鈴が鳴ったような透明で綺麗だった。もうずっと聞いてたいと思うほどの。

じつと彼女に見惚れていたら彼女は突然笑みを深くした。

「ふふ、私の顔に何かついていているのかな？」

「あ、いえ」

自分の顔が赤くなるのがわかった。

僕はしどろもどろながら言葉を搜す。だけど、何を言ったらいいかわからない。いろんなショックで思考が纏まらないのだ。

「そんな、不安そうな表情をしないでほしいな。私の名前は天野朱音。よろしく。草薙 圭一君」

「あ、こちらこそよろしくお願いします」

とつさに頭を下げてから気づいた。

彼女は僕の名前を知っていた。なんでだ？

「まあ、いきなり目覚めたら女になってたんだから驚いてるだろうけど、大丈夫、君は草薙 圭一という人間だよ。ちゃんとどうしてそうなったのかも説明するよ」

ええ、まあ。そうしていただきたいかと。

にしても、彼女を見ているとなんだか安心できた。

こんな風に現状——自分が女になってしまっていることも些細なできごとを感じるほど。

それから彼女に手を貸してもらってベッドに座る。

「あの、僕の姿って……」

「はい」

すぐに朱音さんは鏡を貸してくれた。

「ありがとうございます」とお礼を言ってから鏡を覗き込む。

そこに美少女がいた。まあ、朱音さんを見てしまったから自信はないが。

正確には少女から大人に成長する間かな？

美人というよりはかわいい顔立ち。朱音さんが美術品なら人形のような感じ。

腰に届きそうなサラサラの金髪とぱっちり綺麗な瑠璃色の瞳。すつきり通った鼻梁に、貫けるような白い肌。それらが見事なバランスで配置されている。

うう、完全に女の子だ。胸がある時点で諦めてはいたけど、現実として突きつけられるのはねえ？ てか……

「えるふみみまであるし……」

そう、頭の横、髪の中から長く尖った耳が突き出ているのだ。

特殊な趣味の方にうけそうではあるけど、僕にはうけん。

もう、何がどうなってるのやら。

そこでまた、ドアが開いた。

「どうも。目を覚ましたって聞いたけど、よかったよ。ちゃんと眼が覚めて」

入ってきたのは歳は二十代中ほどで中肉中背の黒い髪は割と丁寧に切り揃えた、メガネをかけている白衣を着た男だった。ぱっと見怪しいところはないが、ただ、その蒼い眼が少しだけ怪しい光を放っている。肌も色白なのか薄いだけなのかわかり辛い色で、白人なのか東洋人種なのか判断し辛い。

「本当によかったよ。もし、眼が覚めなくてもサンプルにはなっただろうけど、やっぱり生きていた方がいいからな」

何だろう、よくわからないが笑顔でム力つくことを言っているらしいやがっているのだけはよくわかった。

はあっと彼女がため息をつく。

「アグニ、彼は目覚めたばかり。もう少し気を使ったことを言った方がいいんじゃないかな？」

アグニと呼ばれた男はふふんと笑う。

「そうしたいのはやまやまなのだが……朱音、俺としては実験が成功かどうかが一番気になるんだ」

断言しよう。こいつはきつとム力つくやつだ。

天野さんは苦笑いをしながらこつちを向く。

「悪意はないんだけど、こういうやつだから、許してあげてくれ」

苦労してるんだな。彼女……

「悪意がない方が性質悪いと思いますけどね」

僕も苦笑で応えた。

第一話 僕、女の子？（後書き）

鈴：「どうもおはようございます。鈴雪です」

刹：「刹那です」

鈴：「初めの部分ですので連続投稿です」

刹：「ちよっちテンポ早すぎるとおもうけどな」

鈴：「それは言わないで。まあ、できれば楽しんでいただきたいかと」

刹：「それでは、また次回に」

第二話 状況説明です

二人に状況を説明してもらったために椅子に座っている。

何とかさつきまで寝ていた部屋からこの部屋まで移動してきた。

内装はシンプルでテーブルと椅子だけしかない。僕は新しくなった体のバランスに戸惑いながらなんとかここまで来た。

それを見て朱音さんは、まずこの体になれるのが最初の課題だねと言っていた。

「まずは、君の体について説明しなくてはね。アグニ、頼む」

「オーケー」

アグニが応える。

「単刀直入に言うが、君は爆発事件に巻き込まれてかなりの重体だった」

重体だった？ でも、今の体に怪我らしい怪我はない。相当時間がたっているのだろうか？

朱音さんは申し訳なさそうな顔になる。

「私が追っていた相手のせいだね……奴を捕まえる前にこんなことになってしまつて申し訳ない」

僕と朱音さんの様子を気にせずアグニが続ける。

「ここに運び込まれた時、君は肋が砕けて、その破片のせいで内臓はズタズタのぐちゃぐちゃ。両腕と左足は粉碎骨折で、右足は千切れてた。脳は運良く無事だったけど、首の骨が折れていた。これでは彼の天才外科医ブラックジャックも体を取り替える以外の選択肢をとれなかっただろう」

目眩を覚える。

いいところ殆どないじゃないか……

「そこで、この大天才である俺が修復していた人造人間、『機械天使』の躯体に君の脳を移植したのだ」

うわ、この人自分で大天才って言っちゃってるよ。

……つておい！　ちよつと待った！

「人造人間！？　どこのSF作品だよ？」

ずいぶん荒唐無稽な話だ。

まあ、目覚めると女の子になっていたなんて事態もずいぶん荒唐無稽ではあるが、そこは否定しておきたい。

そこはかたない期待としては、実はドッキリでこの顔とか全部整形とか……ごめんなさい。ちよつと無理がありますよね。

すると朱音さんがとんと肩を叩いてきた。

「そこ」

そう言つて朱音さんが指すのは……僕の手だ。

なんだ？

言われたとおり、手を見てみると、変なとこに気づいた。

手首より、ちよつと手前の一部だけ丸く、浮き上がってる？

朱音さんがそこに手を伸ばすと、ぺりつと剥がした。

……はい？

それは、たまに見る円形のコンセントに似ていた。直径は十円玉ぐらいで、どう見ても、これは深さが一センチ以上ある。

さらに、朱音さんが鏡を手渡してきて、

「こつちも」

もう一つの鏡も使つて、首の後ろを見せてくれた。首の後ろにも同じような蓋が。

朱音さんが剥がすと、そこにもコネクターがあつた。どう考えても、こんなのある以上、生身じゃない。

「理解しました」

否定したいけど否定できない。もうなにがなんだか。すると、満足そうにアグニは頷く。

「今の状態でも、生身の成人男性の十倍の能力はある。しかも、今は専用の装備も開発途中だから……完成したら一個大隊とも渡り合えるぞ」

くつくつくとアグニは邪悪に笑う。

アグニの様子に引きながらも、なんとなーく、その装備をつけている自分を見てみたい気がした。

「まあ、馬鹿は置いといて」

朱音さんが話題を変えるように手を叩く。

「そろそろいこうか」

行く？ なんだろう？

朱音さんは僕の疑問に気づいたのか、こっちを見て微笑む。

どこか寂しく、悲しそうな笑顔で、

「君のお葬式だよ」

言った。

第二話 状況説明です（後書き）

鈴：「どうも、鈴雪です」

刹：「刹那です」

鈴：「エンジェルダスト、第二話を投稿しました」

刹：「報告しわすれましたが、こっちは不定期的に投稿する予定です」

鈴：「まあ、たまに覗いてもらって楽しんでいただければいいかと」

刹：「それでは、」

鈴&刹「みなさま、よい一日を」

第三話 僕の葬式……

僕は朱音さんが運んできた車椅子に乗って、押されながら外に出た。

アグニは興味がないと、家に残ることに。

周りに民家は見当たらず、少し小高い場所にこの家は存在した。アグニの研究所は外から見ると普通の家に見え、どうやら僕のいた部屋のあそこだけが病院みたいになってたようだ。

朱音さんは車庫から車を出してから、僕を助手席に座らせる。

それから、朱音さんはシートベルトを確認したり、ガソリンのメーターをチェックしたりしてからハンドルを握る。

「じゃあ、いくよ」

朱音さんがそう言うのと共に、車は走り出した。

葬儀の場所は、車に揺られて一時間ほど。うちの近所にあった少しだけ新しそうなお寺でだ。朱音さんはその近くの有料の駐車場に車を置くと、僕を車椅子で押して葬儀場まで移動する。

着く前に確認したけど、耳の方はなんらかの処置がされたのか普通の耳のなっている。

意外と人が来ている。その半分はうちの学校のクラスメイトだ。

大人は少ない。

まあ、親は僕が中学生の頃に他界して、親戚も叔父夫婦ぐらいしかいなかったから当然か。

クラスメイトのみんなは、戸惑った感じが泣いてる人はいない。高校に入ってから知り合って一カ月の相手がほとんどだしな……中学の連中もいるけど、そいつらも困惑といった感じだ。

そして、僕の死よりも、むしろ、朱音さんという超絶美女が訪れたことに面食らっているっぽい。

僕らが進むと次々とクラスメイトたちは道を開けた。まるでモ―

ぜにでもなつた気分だった。

そして僕らは式場に入って、すごく泣いてる人を見てしまった。
「けーちゃんは何で……何で」

かなねえ……

泣いていたのは僕の従姉弟の香苗姉さんだった。

僕は昔から彼女に世話になりっぱなしで、僕の両親がいなくなつてからは、ちよくちよくうちに遊びに来ては、ご飯を作ってくれたりしてくれてもいた。

僕のために泣いてくれてる人がいるのは少し嬉しくて、だけど悲しい。

ぶるぶると首を振る。今は余計なことを考えたくない。

それから朱音さんと敷居を跨ぐ。朱音さんは叔父さんたちに頭を下げると、ご霊前に線香をあげる。それから朱音さんに促されて、僕も僕に線香をあげる。

自分に自分で線香をあげるという状況はなんとも不思議な気分だ。僕はここにいる。だけど、目の前の棺桶の中身も自分で、僕はここで僕自身に線香を……あげている。なんたるこの矛盾は？

ああ、だめだ。頭がごちゃごちゃになってきた……思わず頭を押さえる。線香をあげただけだけど、ここにいたらどうにかなくなってしまいうだ。早くここから出たい。

顔をあげる。朱音さんにもういいですと眼で言っ立っけど、バランスを崩して朱音さんに支えられる。

「それでは」

そう言っ僕らは式場から去っていった。

帰り道、朱音さんが運転する車の中。

「なんか……」

助手席に座っていた僕はぼつりと呟く。

「自分の葬式を見るって、複雑ですね」

朱音さんは答えない。黙って運転している。

だって、と僕は続ける。

「自分のことなのにひどく他人事にしか感じないんです」

朱音さんは答えない。カーブを曲がる。

だけど、と僕は続ける。

「自分が死んで人が泣いてたのは、なんかすごく……嬉しいけど、悲しいです」

膝の上の手をぎゅっと握る。視界が霞み、ポタポタと膝に涙が落ちる。

朱音さんは……

「この車には私しかないし、マジックミラーだから外からも中は見えずらい」

答えてくれた。

「だから、好きなだけ泣いていいよ」

朱音さんの声は、ひどく優しくかった。

そして、僕は朱音さんの言葉に甘えて、少しだけ泣いた。

第三話 僕の葬式……（後書き）

どうもー、エンジェルダスト更新です。

ちよっとしんみりした話になってしまいましたね。

僕は本当の葬式に行った事ないんで、イメージしかありませんし、描写もあまり出来てませんでしたので、よければ誰かご指摘していただけたら嬉しいです。
それでは。

第四話 SFですか？

アグニ宅に着く頃には、僕も泣きやんでいた。

まあ、目元が紅かったりするから泣いたのは丸わかりだろう。だけれど、それを見て朱音さんはポンポンと妹にするように優しく頭を撫でてくれる。

ちよつとだけくすぐったい。だけど、少し嬉しい。

そして、朱音さんに車椅子を押されて家に上がる。

さっきまでいた部屋に戻ると、アグニがコーヒーを飲んでいた。

そして、アグニは僕を見て、

「なんだ？ 君は自分の葬式で泣いたのかい？」

なんつうデリカシーの無さだ。

すぐに朱音さんが動く。どこからかハリセンを出して、

「そういうことは言っちゃダメ！」

スパンとハリセンでひっぱたく。ハリセンで叩く快音を聞いて、ちよつとだけすっきりした。

それから再び、二時間前に説明を受けていた部屋でイスに座る。

「さてと、まだまだ色々話さないかね。君の体についてやこれからのこと」

朱音さんはそう言って笑う。

「確かに、なんで女の子の姿なのかとかも気になりますね」

じろつとこの処置をしたアグニを睨む。死にかけてたのを助けてくれたのに贅沢かもしれないけど、元と同じ男の体がよかったが正直な気持ちだ。

何か理由があつたのだろうか？

「ああ、それは」

アグニが椅子にもたれかかりながら答える。

「女以外の体はなかったんだ」

僕はすっこけそうになった。

な、なかった？ 単に運が悪かったってこと？

朱音さんが溜め息をついて説明をしてくれる。

「残念ながら、私たちが遺跡の軍事施設跡地で見つけたのは、保存されたそのボディーといくつかの予備パーツだけだったんだ。記録では男性体もあったみたいんだけど」

はい？ 遺跡？ 軍事施設跡地？ 何なのそれ？

僕は頭から疑問符を浮かべてそんな顔をしてるんだろうな……きつと。

それに気づいたのか、朱音さんが微笑む。

「ああ、ごめん。これじゃあ私たちに通じてても君には通じないよね」
まあ、そうです。

僕はこくこく頷く。

「実はね、私たちはある組織に所属しているの」
組織？

朱音さんが口にしてないのに僕の疑問に気づいたように頷く。

「先史文明遺失物管理局『神無』。平たく言えば、オーパーツや、特異能力保有者を管理するための組織」

オーパーツに特異能力者？ いきなりスケールでかくなっただな。

朱音さんが続ける。

「その組織で先日発見された遺跡の探索があつてね。そこにあった人造人間の体を君に使ったんだ」

僕の体が先史文明の遺産？ にわかには信じられないが、こんな普通じゃ信じられない状況じゃ安易に否定もできない。

アゲニも頷く。

「保存時のミスだったのかバイオ脳の傷みが酷くて、使い物にならないものだったが、運良く適性がある脳が転がり込んできてよかったよ」

……なんだって？

アゲニの一言が氣にくわなかった。まるで、僕が死に掛けてよかったみたいな風に感じた。

気づいたときはテーブルに乗り上げて殴りかかっていた。足がちやんと動いたが、そんなのどうでもよかった。

「てめえ!!」

アグニは動かない。朱音さんも動かない。

そして、拳がアグニの顔に……当たらなかった。

手応えはあったけど、顔の数センチ前で見えない壁に阻まれるように止まっていた。

「なっ？」

「やめときなさい」

朱音さんが溜め息を吐く。

「アグニはロストパーツで自身の周囲数センチの所に障壁を張ってるから、殴りたいならその障壁の強度以上の攻撃をしないと」

朱音さんの説明の途中で拳を振り上げる。

そんなこと知らない。いい加減こいつを一発殴りたいだけだ。

僕の怒りに反応したのか、拳が淡い光に包まれる。

アグニが目を見開く。

拳を振り下ろして……障壁が砕ける。そのままアグニの顔面に……

……めり込まなかった。

その前に刃が拳を阻んでいた。

「えっ？」

「ストップ」

朱音さんの静かに告げる。

僕の拳を阻んでいたのは、朱音さんの持つ鎌だった。しかもかなりでかい。柄だけでも朱音さんの身長より少し長い。刃も同じくらいある。

一体どこから出したんだ？

「そんなの食らったら死んじゃうよ」

そう言っただけで朱音さんは鎌を折り畳んでテーブルの下に片付けた。

アグニはなんともなさそうな顔をしているが、その額にはびっしりと汗が張り付いていた。平気そうだけど、怖かったんだな。

僕もなんだかどうでもいい気になってしまいイスに座り直そうとして、バランスを崩してしまった。

朱音さんが支えてくれる。

「無理しない。もう少しましになったらあいつぶちのめしていいから、話を変えようか」

朱音さんがそう言ってアグニが少々顔を引きつらせる。

「そついうわけで、申し訳ないけど君は女の体で生きてもらう事になったんだ。これからいろいろ大変だと思うけど……ね」

朱音さんが微妙な笑みで笑う。

僕もひきつった笑顔であったろう。実に先行きが不安になる話しであったのだから。

第四話 SFですか？（後書き）

鈴：「どうも、鈴雪です」

刹：「刹那です」

鈴：「更新が滞っていましたが、なんとか第四話です」

刹：「狐火も近々更新しますよ。てか、ちゃんとしろ作者」

鈴：「この頃忙しくて」

刹：「言い訳するな。だったら、しばらく更新しないことぐらい言え」

鈴：「はい……」

第五話 圭一大地に立つ！

ふみゆ、にしても、足が思うように動かないって不便だな。
なんとなく太ももをさすっていたら、

「それと、動かないようだし圭一の足を調整しなくちゃね」

「ふむ、そうだね」

……え？ もしかしてすぐに動くようになれる？

「研究施設は地下にあるから私が運ぶね」

そういつて朱音さんが僕を持ち上げる。しかも、お姫様だっこだ！
うわ、少し恥ずかしい。

「ちゃんとしがみついててね」

言われたとおりしびしびだが朱音さんにしがみつく。うう、なんか、柔らかくていい香りがする……

僕は顔を赤らめるけど、朱音さんは気にせず歩き出す。その足取りはしっかりしていて、まるで、僕の体重を感じてないように錯覚してしまいそう。意外と力があるんだな朱音さん。

部屋を出て、廊下を少し進んで、その端で、アグニがしゃがみ込むといリズムよく床を叩く。すると、床が開いて地下に続く階段が現れた。なんじゃ、そのギミックは。

「いくよ」

そういつて、朱音さんは下に下りていく。バランスを崩して倒れたりしないかちょっとだけ不安になった。だけど、朱音さんの足取りは階段を下りるという不安定になりそうな事をしてるのに、ここでもしっかりしていた。

そして、扉を開けて地下の研究室に入る。

中は白い清潔そうな部屋で、なかなか広い。そして、イメージ的に研究室と呼ばれるのはゴチャゴチャしてるかなと思ってたけど、割と片づいている。

「天才というものは効率のいいものを好むからさ」

とアグニは準備しながら答えた。さいですか。

朱音さんは手術用のベッドに似た台に僕を座らせると、僕の履いていた靴下を脱がしてきた。

ひゃ！　ちよつ、ちよつとくすぐったかったな？

それから、朱音さんは僕の足を持ち上げて、足の裏を数回、リズムを刻みながら叩く。くつ、少しくすぐったいぞ。

すると、足が展開した。まず、臍が縦に別れて、それからぱかと音が起つように開いて、中のメカが露出する。

うわ……見てていやなものがあるなこれ。

朱音さんは手際よく台から伸びるケーブルを足の中のメカに繋げていく。意外と何も感じないなあ。

しかし……ここまで来て、本当に自分が人造人間になってしまったというのを実感した。

「繋ぎ終わったよ」

朱音さんが振り向いてアグニに言う。

「了解」

答えてアグニがパソコンのキーを叩いた。

瞬間、下半身の感覚が変わった。

な、なんだよ、これ……

こんな感覚を表現できる言葉はまったく見つからない。あえて表現するなら、足が……そうドロドロのゴムみたいになったようだ。

だけど、それもまだ序の口であった。

アグニがさらにキーボードを叩くと、足から何かが……入り込んでくる感覚がした。

痛くはない。だけど、すごく……気持ち悪い。

「うっ！」

吐き気がして、口元を抑える。口の中に気持ち悪い酸味が広がる。「やはり、ちゃんと足の神経系が繋がってないな」

アグニがさらにパソコンに何かを打ち込み、何度も押しては寄せ

るように気持ち悪さが襲ってくる。

は、早く、終わってくれ……

数分か、もしかしたら数秒の間その感覚が続いた。

「終わった」

アグニがそう言ってキーボードを叩いた瞬間。足の奇妙な感覚は消失した。

その時になって自分が呼吸を忘れてたのに気づいて、荒く息を吐き出した。

お、終わった……

それから、朱音さんが僕の足からケーブルを抜いて、足を閉めた。それから軽く揉んでくれる。

ちよつと気持ちいい。さっきの気持ち悪さが少しだけ薄れてきた。「動かしてみて」

朱音さんに言われて足を動かしてみる。

今度はちゃんと動いた。右足を上げる。それから、膝を曲げて、伸ばす。左足も同じように。

「立ってみて」

台から降りて、足を地面につく。

ちゃんと力が入って体を支えられたけど……なんだこりや？ 自分の体なのに自分のじゃない感覚。

なんか軽くて、フワフワして……不安になる。

試しに数歩歩こうとして、バランスがうまくとれない。まるで、平均台の上を歩いているようだ。

ふ、不安だな。

「やっぱりまだ慣れないみたいだね。まあ、しばらくすれば慣れると思うよ」

そ、そうですか……

さらに、先行きが不安になる材料が増える僕なのであった。

第五話 圭一大地に立つ！（後書き）

久しぶりにこっちが更新できました。

狐火ともども暖かく見守っていただければ嬉しいです。

第六話 僕のスペック

場所が変わり、研究室で話すことになったが、いかんせん、余分なものは研究室に置かない主義のアグニは、イスすら研究室に一つしか置いてなかった。

で、アグニがイスに座って、僕と朱音さんは立った状態で話している。

「では、君の体についてもう一度話そうと思うが……何を歩き回ってるのかな？」

アグニが指摘するように、僕は、慎重に一步一步、両腕をメトロノームのようにカチコチ動かしてバランスを取りながら、足先で立つようにぎこちなくウロウロと研究室を歩き回っている。

「いやあ、ただ立っているだけだと不安で不安で」

たははっと笑う僕にアグニは呆れたように溜め息をつき、イスから腰を上げると「座れ」と言ってきた。

意外と優しいところもあるみたい。朱音さんもクスツと失笑を漏らし、アグニに睨まれた。

「まずは、君の体は機械天使総合No.1117 ルギス後期型50番。ようするに、機械天使の1127体目、そしてルギス後期に作られた五十体目。最後に作られた機械天使の一体だ」

「最後？ そのあとは？」

アグニが首を振る。

「ない。文明自体が減びたから、機械天使作る技術も人間もいなくなっちゃった」

そうなんだ。なら僕の体は先史文明最後の遺産。この体を作った人たちに感謝して大切に使わないとなんて考える。

「性能は最高傑作のルギス後期型だけに折り紙付きだ。腕力、脚力は成人男性の数十倍、さらに」

そこからアグニが僕の体の説明を楽しそうに語り始める。何の準

備もなく真空での活動が可能。水深数千メートルにも耐えられる耐圧性、摂氏何千の炎にも耐えられる耐熱性、オプション装備で飛行が可能。etc.etc.

ただ、話が長くわかりづらくて僕は半分聞き流していたし、朱音さんも船を漕いでいた。

「君のために話てんだ。ちゃんと聞ききなさい」

ついにアグニが注意してきた。そこではっとなる。半分意識が飛んでたな。朱音さんも顔を背けてから何か口元で光るものを拭っている。何なのかはあえて言わないでいいだろう。

「だって、ねえ」

「わかりづらいもの」

朱音さんが僕ら二人の感想を言うと、アグニがふうつと溜め息をつく。

「簡単に言えば、リアルスーパーマンだな。地球の自転は流石に変えられぬが」

そういえば、そんな話もあったなあ……朱音さんは「余計わかりづらい！」とスカートから取り出したハリセンでアグニを叩く。その時、チラリとだが、スカートの中身が覗けた。

例の大鎌だけじゃない。数本のナイフに拳銃と何に使うかわからない部品の数々。片側だけでこれ。両側合わせたら……うん、見なかったことにしよう。ちょこつと見えた彼女の綺麗な足を包むガーターベルトが見えたのも心の奥に封印しよう。

「うんよくわかった」

わかったんだ！と朱音さんがびっくりする。まあ、僕にはそのくらいがちょうどいい。

にしてもなあ……

「機械天使の性能はわかったけど、なんでそんな高性能なものが必要だったの？それに、それだけのものが作れる文明が何故滅んだのさ。戦争で文明が滅んだりしたの？」

僕の質問にアグニが首を振る。

「いや、戦争じゃない。地球外生命体による攻撃を受けたらしい。当時の人間も機械天使などを製造して対抗したようだが、敵とほぼ刺し違えの状態で滅んだ。旧文明も機械天使も一部残骸が残っている程度だな」

地球外生命体ですかい！ 話でかいと思ってたけどさらにデカくなるんかい。

だけど……

「ベタだなあ……」

「ベタとか言うな」

だってベタベタだもの。

アグニはこほんと咳払いしてから朱音さんに視線を送る。朱音さんは「Ok」と答える。

「残りはまた今度。一度に言っても仕方ないから今日はここまでね。あと、しばらくの間、私は君と暮らすことになってるから」

と朱音さんが言った。

朱音さん？

「体に慣れるまで誰かが手伝ってあげなくちゃいけないからね。女として暮らすのも初めてなんだから」

そりゃそうですよ！。もしそんな人がいたら、僕はその人と親友になれちゃう気がします。

そんなこと考えていたら朱音さんがうーんと伸びをする。

「じゃあ、君がこれから暮らすことになる私の家に案内しましょうか」

第六話 僕のスペック（後書き）

ちよつと遅くなりましたが、見ていただければ幸いです。
感想、評価お願いします。

第七話 一日の終わり

アグニ宅から車に揺られて三十分。

「ここが今日から君も住むことになる家だよ」

朱音さんに言われて、外を見ると、そこに立派な邸宅があつた。

「わお」

朱音さんの家は白い壁の二階建ての洋風の広い家で、よく整備されてる印象を受ける庭も相まって、まるで人形の家に迷い込んだようだ。

余談だがアグニも着いてくる気だつたらしいが朱音さんにハリセンでひっぱたかれて、すごすごと諦めた。いわく、「ちゃんとデーター取りをしたかった」らしい。

だからといって、女性の家にお邪魔しようとするのもねえ。

車庫に収まった車から降りて門をくぐる。

「お、お邪魔します」

緊張で少し声を上擦らせながら上がる。

「いらつしゃい」

朱音さんはそんな僕に暖かい視線をくれるのであつた。

見た目通りに中も綺麗である。ピカピカの床、柔らかな印象を与えるクリーム色の壁。朱音さんの好みを感じられる。

「んー、さきにご飯にしようか。圭一くんもお腹すいてるよね」

朱音さんがそう言つて僕を居間までリビングしてくれる。

朱音さんは僕をイスに座らせると、「ちょっと待っててね」朱音さんはキッチンに引っ込んで、晩御飯の用意をし始める。

その間、僕は部屋を観察していた。置かれている調度品はかわいらしいものが多く、主に猫か犬だ。

壁時計はこちこちとなる振り子時計。カレンダーもかわいらしい子猫の写真が載っているもの。朱音さんって猫とかかわいいものが

好きみたいだ。

さらに視線を移して、目に止まったものがあつた。写真楯だ。テーブルの上に置いてあつて、晴れた空と綺麗な海をバックに、朱音さんと銀色の髪と青い目の、たぶん僕ぐらいの歳の少年に、ちよつとだけ年下に見える栗色の髪と澄んだ黒い目の女の子が写っている。

三人とも顔立ちは整っている以外共通点がないから、たぶん、友達だろうな。

「はい、お待たせ」

と、考えていたらいつの間にか朱音さんがお皿をテーブルに置いて、イスに座っていた。

置かれた料理はサンドイッチ。それぞれに色んな具が挟まれ、パンも綺麗な狐色に焼いてあつたり焼かれてなかったりと、美味しそう。

「ささつ、食べてみて」

朱音さんがニコニコの笑顔で勧めてくれる。

ではさつそく、

「いただきます」

そう言つて僕はまず、焼かないで、卵焼きを挟んであるパンを取つて一口。

……思わず目を見開く。

「美味しい」

端から聞けば失礼極まりない言葉だろうが、朱音さんの料理は思わずそう呟いてしまう美味しさだった。

まず、柔らかいパンの食感が歯から顎に響く。さらにフワフワの卵焼きの甘さが広がる。と同時にマスタードの辛味が引き締める。しかも、卵焼きの甘味もマスタードの量も絶妙だ。

僕はさらにのサンドイッチを取って食べる。

今度はこんがり焼きあがつたサンドイッチで、ザクツと心地いい歯ごたえの後に挟まった肉の引き締まった感じがどっしりとした重

量感を感じさせてくれる。

肉は時間が経っているのか、少しパサパサするけど、間に挟まれた瑞々しくシャキシャキのレタスで食べにくさは全然ない。

「喜んでくれると嬉しいよ」

朱音さんが夢中でサンドイッチを食べる僕に微笑む。

そうして、しばらく夢中でサンドイッチを食べてから、気になることが浮上した。

「朱音さん、なんで話をあそこで切り上げたんですか？」

今思うと、若干強引に切り上げたように感じる。まだ、説明すべき点がいくつかあった筈だと思う。

「君が疲れてると思ったからだよ」

朱音さんが柔らかな笑顔で答える。

僕が……疲れてた？

「君は興奮してわからないだろうけど、目が覚めたら女になって、知らない人間に囲まれて、自分自身の葬式を見た。普通なら精神的に保たないよ」

こ、興奮してるって、そうなのかな？ 言われて見ると少し体が重くなってきたような……。

途端に瞼が落ちそうになった。やばい。朱音さんが言った通り自分が思ってるより疲れてるみたいだ。

「まあ、君は目が覚めたばかりだし慌てずにゆっくり行こうよ」

朱音さんはそう言うと言自分もサンドイッチを取って食べる。僕も気を取り直してサンドイッチをパクつくのであった。

「はー、お腹いっぱい。ご馳走様です」

僕は満足してイスに深く座り直す。おそらく、今の僕はとても満足そうな笑顔を浮かべていることであろう

そこで、さらに瞼が重くなって眠りに堕ちそうになる。

「もう限界だね」

朱音さんが柔らかに笑った。

「ここが君の部屋だから、自由に使ってね」

朱音さんに言われて部屋に入る。中の装飾は最小限にとどめられていて、人が生活した後は皆無である。まあ、空き部屋って言うってたもんな。それに、限界を迎えている僕の目と思考にはベッドしか映らなくて、ろくに部屋の観察もできなかった。

「じゃあ、お休み」

朱音さんがそう言ってドアを閉めると、部屋が真っ暗になる。余計に眠気が引き立てられて、ベッドに倒れこむ。ふかふかとして気持ちいい。ああ、瞼が落ちてきた。本当に、そろそろ、限、界……そこで、僕の意識のブレーカーが落ちて、僕が迷い込んだ日常生活の終わりと非日常生活の始まりが終わる。

これから始まるのは、今までの生活からは想像できないドタバタして、破天荒で、優しく、そして、辛い戦いの待つ日々。

だけど、この時の僕はそれを知る術はなかった。

第七話 一日の終わり（後書き）

鈴「Eダス更新しました」

刹「お疲れ様恵一、そして、これからがんばれ」

鈴「感想、評価楽しみにしてまーす」

第八話 見知らぬ天井だな

朝の陽射しが眩しくて眼が覚める。目に入っただのは見慣れた家の天井じゃなく見知らぬ天井。

あれ？ うちの天井と違う。うちはもう少し色がくすんでいたはずだ。疑問に思いながらもベッドから降りようとして、壁にぶつかった。

「っ！？」

あれ？ベッドは左が壁際だったのに、なんで右に壁が？！
痛みで、鮮明に思い出した。

そ、そうだ。僕は爆発事件に巻き込まれて、死にかけたところを朱音さんとアグニが脳を女型アンドロイドに移植されて助けられたんだっけ。それで、朱音さんの家に居させてもらうことになったんだ。

頭を振る。うん、今の僕は女なんだ……

改めて白くて細くしなやかな指と膨らんでいる胸を見て少しガツクリする。ちよつとだけ、一晩見た変な夢であることを期待してたんだよ……

だけど、起きてもそのまま。認めようこれが現実なんだ。

しかし、そこで好奇心が湧いてきてしまう。じつと自分の胸を見る。主観的かもしれないけど、一般的なのよりも大きいと思う。うん、きつと大きい。

ゆっくりと手を近づける。ゆっくり、ゆっくり……

あと少しで指が触れ……

「やつほー、圭くん起きた？ …… って何土下座しているの？」

部屋に入ってきた朱音さんが不思議そうに聞いてくる。僕の目線は伏せられてるからどんな表情をしてるかわからないけど、きつと驚いているのだろう。

「いえ、その…… すいませんでした」

こうして、僕の非日常二日目が幕を開いた。

寝間着を脱いで朱音さんが用意してくれた服を着る。自分の下着姿にドキドキしてまた自己嫌悪。

そして、朱音さんに手伝ってもらいながら服を着る。

しかし、これは……

「ゴスロリ……」

姿見の中の自分を見て、思わず呟いてしまった。

ふりふりひらひらなレースやフリルを多用したドレスチックな服で、夏に着るには暑そうである。

「あーん、やっぱり似合うー!!」

朱音さんが目を輝かせながら僕に抱きついてきた。えっ？ えっ？ 朱音さんがすりすり頬ずりしてきた。

「うんうん。寝ている姿見てずつとシミュレートしてみたけど、やっぱり予想通り……うん、これは予想以上かも!」

朱音さんが嬉しそうに頷く。もしか……

「まさか、僕にこんな格好させるためだけに家に連れ込んだんですか?!」

思わずそんな疑問をぶつける。しかし、朱音さんはいやね〜、と手を振って否定する。

「違うよ。それは理由の半分くらいだから」

それでも、そんなこと考えてたんですね。じとつと朱音さんを睨む。

「実際のところ、君にもうどうにもならないって認識を強く持つてもらおうと思ってね」

……どういうこと？

朱音さんの言葉の意味を完全には読み取れず首を捻る。

「つまり、女の子らしい格好をさせたりしてその気にさせようってこと」

なるほど、なんとなく言いたいことはわかった。でもなあ……な

んか悲しいものがあるよ。

僕はスカートの端をちょこつと摘んで一回転してみる。スカートがふわっと広がって、まるで花が咲いたようだ。

なかなかかわいい衣装で、ちよつといいか……いやいやよくない。隣で朱音さんが「やーん、かわいい！」って悶えてるが無視しとこう。

その後、朱音さんにいくつかこれからの生活の説明を受ける。

「これから一、二ヶ月は女の子らしく振る舞えるように私が訓練させるから。学校もそれから通わせてあげられるけど、残念ながら前とは違うところだから」

まあ、贅沢はバチが当たるよね。それに、前と違う学校の方が都合がいい。前の学校だとボロが出そうで怖い。

朱音さんがさらに続ける。

「それと、しばらくしたらだけど、私たちの仕事も手伝ってもらってから」

朱音さんの仕事？ ああ、

「神無でしたっけ？」

僕が言った名前に朱音さんが頷く。その顔はよくできましたと生徒を褒める先生のように。

「私たちの組織『神無』では主に旧文明の遺産の管理と研究を行っているんだけど、君には機械天使関係の仕事を手伝ってほしい」

機械天使関係か……やつぱり機械天使がどんなことができるのか、発掘したものやデータから再現した武装の性能評価テストかな？ 少し面白そう。

「いいですよ」

「たぶん、危険な眼にはあう……えっ？」

朱音さんが僕の返事に眼をパチパチ瞬かせる。どうしたんだろう？

「ほ、本当にいいの？ 危ないし、やりたくないって言えばやらずにすむかもしれないんだよ？」

と、朱音さんが言う。自分で勧誘したってのに何で？ 僕は首を捻る。

「いいですよ。面白そうですし、こっちは助けられた身ですから」
僕が事も無げにそう答えると朱音さんは目頭を抑えた。どうしたんだ？

「何というか……私は妙な人間を味方に引き入れている気がするよ」
なんだかひどい言われようだな僕。

第八話 見知らぬ天井だな（後書き）

鈴：「すいません。少し更新遅くなりました。ごめんなさい」
刹：「それでも読んでいただければ幸いです」

評価、感想お送りされるのをお待ちしております！

第九話 名前を決めよう

「あと、名前も決めなくちゃね」

ポンツと朱音さんが手を叩いて言う。

「名前？ 何のですか？」

朱音さんの言うことの意味を理解できずに首を傾げると、身を乗り出して僕の額を人差し指でつついてきた。

「君の名前だよ。外でその姿で圭一なんて言うわけにいかないし、学校に通うにも偽名にしとかなないとね」

ああ、なるほど。言われてみればその通りだ。偽名くらい必要だろう。腕を組んで考える。うーん？ 名前かあ。どんなのがいいかな？ そつだな……

「遙とか」

「明らかに日本人の名前ね……その髪の色やスタイルにはあわないと思うよ」

思いつきで言ってみたけどあっさり却下されてしまった。まあ、確かに金髪瑠璃色と明らかに外人系の顔で日本人系の名前はピンとこないかも。しかも、自分で言うのもあれなのだが、日本人のプロポーションじゃない。特に胸が。視線を落とす。組んだ腕のせいで余計に谷間が強調されて……目を逸らす。自分のだとはわかってるが、そんなすぐに慣れっこない。

うーん、なら……

「私はノエルって名前がいいと思うな」

「ノエル……ですか？」

僕の言葉に朱音さんが頷く。

「なかなかいい名前だと思うけど？」

ノエルかあ……なんかいいかも。顔が綻ぶのがわかる。

「はい。ノエルでお願いします」

僕が頷くと朱音さんが嬉しそうに微笑む。

「うん。後は下の名前ね。こっちはどうしようか？」

あ、なら……

「カルミアは大丈夫でしょうか？ 僕の誕生花なんですけど」

確か花言葉は希望だったかな？ それを含めて結構この花は気に入っている。

朱音さんが首を傾げる。ありや？ どうしたんだろ？

「いや、名字が花の名前っていうのも……」

あ、そうだよな。普通花の名前が名前なら珍しくないだろうけど名字って珍しいだろうな。ならば、

「じゃあ、テストロッサ」

「ずいぶんあっさり変えたね。あと、それはフェラーリの名前から来てるのかな？ それともアニメや漫画？」

むろん後者です。

「まあ偽名なんて適当でいいし、じゃあ、今日から君はノエル・テストロッサね。よろしくノエル」

そう言っ、朱音さんが手を差し出してくる。僕はそれを握り返す。

「はい、お願いします。朱音さん」

新しい名前を決めてから朱音さんの作った朝食を食べる。

綺麗なキツネ色に焼かれた香ばしい匂いのトースト、カリカリに焼かれたベーコン、綺麗な円を描く目玉焼きに瑞々しいサラダとコンスープと、非常においしかった。

そして、食べ終わると朱音さんが、

「お風呂入るところか」

なんて突然言ってきた。

「は、はい？」

いきなりの言葉に僕は聞き返してしまった。いや、お風呂って……
…なんでいきなり？

「君さ、忘れてるかもしれないけど何日も寝ていたんだよ。お風呂

に入った方がいいよ」

言われてみればそうだな。臭いはわからないけど、入った方がいいよなあ。

と言うわけで洗面所、服を脱ごうとして……気づいた。

「朱音さん」

すぐに朱音さんに来てもらう。そして、僕はわからないことを聞いた。

「あの……これってどういう風に脱ぐんですか？」
前途多難だなあ。

第九話 名前を決めよう（後書き）

評価、感想おまちしております。

第十話 命の洗濯？

紆余曲折あり、朱音さんの指導の下何とか風呂に入ることができた。……また自分の姿にドキドキしたのは悲しかったね。目隠したいけど、それじゃ風呂に入れないし、朱音さんも「慣れなさい」なんて言って却下してきたし。

にしても……風呂はいいねえ。命の洗濯って言っけど、まさにその通りだなあ。暖かい湯船に浸かってノンビリする。この風呂場はなかなか広く、足を伸ばしてのびのびと入れる。なんて贅沢何だろうか。そこ、爺臭いって言っなや。

にしても、ここの風呂場は広い。一瞬、どっかの旅館に来た気がしたほどだ。縁に腕をつけてゆったり。顔が水面に近いから後ろで髪が扇状に広がっている。金色のなかなか豪華な扇だ。

そんなことを考えていたら、

「圭一、入るよ」

そう言っ、朱音さんが風呂場に入ってきた。

は、はい？

僕は目をパチクリさせて、それから、

「ええええっ！？」

いきなりの展開！ ど、どうすれば……あつ、朱音さん水着着てる。競泳用だ。ちょっと残念な気が……いやいや、アホなこと考えるな。

それにしても、水着でも朱音さんのスタイルの良さがよくわかる。水着から出てる部分の白く滑らかな肌に抜群のプロポーションも、グラビアやってるって言ったら信じるぞ僕は。

「あれ？もしかして期待してた？」

朱音さんがからかうように笑いなから言っってくる。僕は顔を背ける。絶対に楽しんでるよこの人。

朱音さんが僕の頬をつつついてくる。

「なんですか？」

僕は顔を向けなおす。朱音さんの手には……シャンプーとリンスのボトルが握られていた。

「髪を洗って上げるから出てきてよ」

「自分で洗えますよ」

子供扱いされた気がしてちょっと語彙が強くなってしまった。しかし、朱音さんは僕にデコピンしてくる。

「君が知っているのは男の子としての洗い方でしょ？ 女の子だと少し違うから教えてあげるよ」

……違うんだ？

手で前を隠しながらプラスチック製の椅子に座って、朱音さんに髪を洗ってもらう。その手つきは丁寧でマッサージのようだ。ちょっと気持ちいい。

「男の子ってがしやがしやって乱暴に擦って終わりだけど女の子の髪はデリケートだから丁寧だね」

ふむふむ、なるほど。CMとかで女の人髪を大事にしているってのは知ってたけど、ここまでだったとは。女になってみるもんだね。

……何言ってるんだろう僕。

そして、耳元で違和感。なにか圧力のようなものが？ そう感じた次の瞬間、

「ぴぎゅ!？」

僕はいきなりのことに背筋に稲妻が走って飛び上がってしまった。耳をくにくにいじられたのだ。長いエルフ耳の内側を。

「ふむふむ、耳が感じる場所と」

朱音さんが感心するように言う。どうやら、僕の耳に興味があったようだが、いきなりは止めて！

「あ、朱音さん!！」

「目を瞑って」

僕が抗議しようとしたら、そう指示してきた。言われなくても最初から瞑ってます。シャンプーが目に入っちゃうし、この位置だと視線が……あれですから。うん。大事な場所が全部見えちゃいますから。

「ばしゃつと頭から暖かいお湯がかけられる。さらに何度かかけられ右手で梳くようにシャンプーの泡を流される。それから、また髪をいじられる感覚が頭皮にやってきた。」

「あれ？ 洗い終わったんじゃないんですか？」

「リンスだよ。最後にしておかないとダメだからね」

そう言って、朱音さんがまたお湯をかけて髪を洗うのが終わった。「このあと、水分を丁寧にとって、ドライヤーで乾かした後、櫛で梳かせばいいから。こんな感じにやらないと、女の子の髪はすぐに髪が傷んじゃうから気をつけてするように。このあと」

そう言って朱音さんがポンポン頭を叩いてきた。

確かに今までの僕がするよりずっと優しく丁寧に洗う感じで手間がかかりそうだった。慣れるのに時間がかかるだろう……ってあれ？

「僕の体は作りものなんじゃないんですか？」

なら髪も同じなんだから女の子と同じやり方じゃなくてもいいんじゃないか？

そんな答えにたどり着いたんだけど、朱音さんは僕の髪をいじりながら答えてくる。

「作りものとまではいかないよ。体は有機物がベースでできているっぽいし、それに覚えておいた方が、後々いいと思うよ。そういう細かいところから女っぽくしないと」

なるほど。今までの生活とは全然違うからこそ、やるなら手を抜かずによれってことか。髪をいじりながら考える。うん、確かに作りものって感じの手触りじゃない。女の子の髪は触ったことないからたぶん。

そう結論づけていたら朱音さんがスポンジを渡してきた。

「背中はしてあげるけど、体は自分でしてみよっか」
と、残酷な一言を告げてきた。

五分後……

僕は鼻を押さえながら浜に上げられた鯨のように荒い息を吐く。

「はあはあ」

じ、自分の体洗って死ぬかと思った。まあ、細かいことは聞かないで？ それと、変態扱いも。ただまあ、一言言っなら、見た目通り肌理が細かくて滑々していた。

「どうだった？」

朱音さんが楽しそうに聞いてくる。

僕は何とかそっちに顔を向けて、

「ノーコメントです」

第十話 命の洗濯？（後書き）

鈴：「つつこまないでください。これは必要な過程なんです」

刹：「だけどねえ」

鈴：「頼むからあいつを変態っていうのも止めてくださいお願いします」

刹：「ならば、お前に言おう。この変態」

鈴：「うわあああん！」

第十一話 初着替えです！

なんとか風呂から生還した僕は先に出た朱音さんに渡された新しい下着を履いて、服を着替えようとする。だが……

「うーむ」

洗濯籠の中にあるものを睨む。今までお世話になっていたものと全く違うデザインのそれと新たにつけることになったあれだ。名前はショーツとブラ。

男なら所持してるだけで犯罪だが、今の僕は女、責められる理由はない。だが……なんだろうこの後ろめたさは？ 思わず拳動不審にきよろきよろ周りを見てしまう。

覚悟を決め先にショーツを取る。危険物を扱うように指先で。特に柄や装飾のない青い色のもので、今まで穿いてたトランクスに比べると布の面積が少ない三角形の頼りなさげな小さな布地。って、なにを事細かに詳細を観察してるんだ僕は？ ま、まあこれからお世話になるものをちゃんと観察するのは大切だと思うからな。うん。（言い聞かせるように）

穿かないわけにもいかず、深呼吸して一気に穿いてみる。

……おりよ？

無心になってブラもつけてみる。こちらも下とお揃いの色で、柄も装飾もないシンプルなデザインであった。ここでも心に響く何かを感じてしまった。

……なんだろうこのフィット感は？ 男では味わえなかったであろう驚くべき、そして形容しづらい感覚であった。今まで肩にかかっていた重さまで感じなくなった。

試しに腕を動かしたり足を動かす。今までとは動きが全く違う気がした。う、動きやすい！ 動きやすいですよこれ！

楽しくなってその場で準備運動だして……鏡に今の自分の姿が映っていた。尖った耳を持つ金髪瑠璃色の眼の若い女が服を着ずに

楽しそうに準備運動をしている。

うう、何してるんだ僕は？ 恥ずかしい。ちゃんと着替えよう……服を取る。今度のはさっきみたいなきれいな着替えにくいものじゃなくて、シンプルな黒いブラウスに胸元に小さなリボンがワンポイント入ったものと、ロングのスカート。

袖を通してリボンの下にあるボタンを留める……あれ？ これボタンの位置が逆。あ、女物って位置が逆なんだっけ。それ以外は男の服とは特に変わらないみたいだ。

それからスカートを取る。たぶん朱音さんは女らしい歩き方を知らない僕に配慮してこれにくれたのだろう。これなら男っぽい歩き方でも少しはごまかせるだろう。たぶん。

足を通して持ち上げる。そして、ホックを留めて終わり。靴下を履いてから鏡を見る。

「おお？」

思わず感嘆の声をあげてしまう。ガラスに黒いブラウスとスカートという格好の女の子、メリハリのある身体も相まって美少女という表現があっていると思う。自分だからちょっと客観的じゃないかもしれないけど。黒い服も白い肌を際立たせる役目まで果たしている。

耳が嬉しそうにぴよこぴよこ動いた。あ、動くんだけこれ。

試しに……

両手を胸の前で合わせて可愛く微笑んでみる。

おお、なかなか様になってる。嬉しくなっていくつかポーズを決めて……何やってるんだろう僕は。他の人からすればイタイ光景でしかないだろう。耳もしゅんとうなだれている。いい加減風呂場から出よ……

にしても……スカートってなんか足元がスースーするなあ。これじゃ、なんも着ていないのと一緒にだよ。

僕はスカートを押さえながらガニ股で歩くのであった。

「圭一、こっち来て」

風呂から出るとすぐに朱音さんに呼ばれた。

「なんですか？」

見ると朱音さんはすでに靴を履いて外に出る準備をしていた。買い物に行くのかな？

そして、朱音さんは靴箱から何かを取り出そうとしながら答える。僕の予想は当たっていた。

「これからの生活に必要なもの買いに行くから準備して」

ああ、なるほど、でも僕に準備なんてないと思うんだけどなあ？ 朱音さんは靴を僕の前に置く。そして、僕の胸の真ん中を指で突く。

「いい？ ここから一歩外に出たら君はもう『草薙 圭一』じゃない。『ノエル・テストロツサ』なんだからね？ 気をつけるように」

ああ、なるほど。朱音さんの言った準備ってそういうことか。心構えってことね。

僕が頷くと朱音さんがにこっと笑った。

「じゃあ行こうか『ノエル』」

「はい、朱音さん」

だけど……

「その前に、人前ではガニ股にならないでね。あと、スカートを押さえながら歩くのも変だから」

「スー・スーするんですよスカートって……」

車内できっちり注意を受ける僕なのでした。

第十一話 初着替えです！（後書き）

鈴：「ごくろうさま圭ー」

刹：「お前、なんであんなに事細かく描写したんだよ」

鈴：「もち圭ーが恥ずかしがるように」

刹：「鬼だ……」

評価、感想お待ちしております。

第十二話 お買い物ですよ。

デパートで買い物をした後、地下の喫茶店に入った。

僕たちは禁煙席に座って、朱音さんはコーヒーとチーズケーキを、僕はチョコパフェを注文する。

「いやあ、ずいぶん買っちゃったね」

朱音さんが空いている席に置いた袋の数々を見る。その総計五個。
「買いすぎです」

買い物をしてた時を思い出す。朱音さんは次々にこれもいいあれもいいと服を取っていった。僕やギャラリーは啞然となってそれを見つめていた。

さらに朱音さんはそれから僕に取った服を着せてサイズを確認して、裾上げが必要なもの、似合いそうなものなどと分けていった。

そして、お会計でブックカードを出して一括払い。噂に聞くブックカードを見てびっくりしてしまった。金持ちなの朱音さん？
「生活に必要なものはこれで揃っているはずだから後は娯楽関係かな？」

娯楽？

「ほら、本や漫画がないと部屋が殺風景じゃん」

なるほど、言われてみればその通りだな。僕もあつた方がいいし。

「じゃあ、この後は近くのブックオフやアニメイトで漫画や本を買おうか」

「はい。って、なんでアニメイト？」

「アニメイトのポイントカード持ってるから」
意外だった。

というわけで、朱音さんは荷物を車に置きに、僕はそれを外で待っていた。けど……

風に髪が靡く。腰まである長い髪なんて初めてだから少し戸惑っ

てしまう。背中をなでられるような感覚は、なんか、自分がオンナノコになってしまったということを改めて認識させられている気がする。そして、自分が男なのに女の子だっという異物なんだと強く意識してしまう。

所在なさにバツクをいじる。朱音さんのお古で、女の子が持つような感じのものだ。もしかして朱音さんは僕にそういつた認識を刷り込むために買い物に連れてきたんじゃないかと思ってしまう。

気分を変えるために空を見る。青く晴れた空、僕はこの色が好き。そうして空を見て心を落ち着かせていたら、

「ねえ、かわいいね君
はっ？」

誰かに声をかけられて、視線を地上に戻すと僕は数人の尻が軽そうな男たちに囲まれていた。

「ねえ、一人？ 一緒に遊びに行かない？」

何言ってるんだこの人たち。僕は男……あつ、今は女だ。

それと、こういう連中にかわいいなんて言われても全然嬉しくない。一緒に遊びに行くなんて論外だ。

「友達待っているところですから」

できる限り、つつけんどんな態度で返す。

だけど、男たちはたにたと笑っている。うざったいな。どっかに行つてほしい。

「友達つて女の子？」

だんまりを決め込む。なんか不愉快になつてきた。

「ねっ？ そこでお茶するくらい」

そう言つて男の一人が腕を掴んできた。そこから不快感が広がる。離してください！

腕を振つて男の手を払う。払われた男が顔をしかめる。な、なんかヤバいかな？

逃げようと思うけど、囲まれていてそんな隙がない。ど、どうしよう？

だけど、まるでタイミングを見計らったように、

「お待たせノエル」

朱音さんが現れた。男たちの一人が口笛を吹く。

朱音さんはスルツと男たちの隙間に入り込んで僕のところまで来る。

「じゃあ行きましょ」

朱音さんが僕の手を取って歩きだそうとする。

「ちょっと待ってよ」

「君ノエルって言うんだ可愛い名前だね」

「ねえ俺たちと遊ばない？」

しつこいなあ……

すると朱音さんは、

「すいません。わたしの恋人に手を出すのは止めていただだけませんか？」

「……はっ？」

はい？

男たちも朱音さんの言葉にぽかーんと口を開ける。

「わたしたちレスビアンですから。男に興味ありません。ねっ？
ノエル」

えっと、ああ、演技か……演技ですよ？

「それでは、女の子に生まれ変わってから出直してくださいね」

朱音さんは爽やかな笑顔でこの場を去るのであった。

だいぶ男たちに離れて、

「あぶなかったね圭一、もう少し気をつけなくちゃ」

と、朱音さんが面白そうに笑いながら言う。

だけど、僕はその目にある疑惑があった。それは……

「朱音さん……レスビアンって本当ですか？」

とっさの冗談と笑いたい。だけど、僕は彼女と会ってまだ一日ほど。無邪気にただの冗談と笑えるほど彼女のことを知っているわけ

じゃない。

「さてどうでしょう」

朱音さんは笑いながら僕の質問を流すのであった。質問に答えて
(!!)

第十二話 お買い物ですよ。(後書き)

鈴：「で、実際どうなの刹那？」

刹：「……ノーコメント」

評価、感想おまちしております。

第十三話　たくさん買いました。

アニメイトに着いて僕はすぐに漫画コーナーに立ち寄った。

「あ、新刊出てる」

そう言っただけ僕は『戦女神セリア』という題の漫画を取る。内容は本に封じられた神がパートナーとともに封印された邪神たちと戦う話だ。わりと好きな漫画で、現在三巻まで出ている。

「面白いの？」

朱音さんが嬉しそうに聞いてくる。

「はい。すごく好きです」

すると、朱音さんは小さく何かを呟くとひょいひょいと『セリア』全巻を入れた。はいっ？

「じゃあ、次ね、つぎ」

ほけつとしている僕をしり目に、楽しそうに朱音さんはいくつもの漫画や小説を買い物籠に放り込むのであった。

そして帰り道、車の中で僕は買った漫画と小説の入った袋を改めて覗き込む。

半分は僕の選んだもの、残りの半分は朱音さんが『オンナノコらしさを学ぶため』といって買ったものだった。

実際これらがどこまで参考になるかはわからないけど、朱音さんの気持ちにはありがたかったが、

「あ、あの朱音さん、本当にこんなによかったんですか？」

実を言うと、かなりの量である。四十冊以上はあるはずだ。なにせ、僕が好きだといったものは全巻買ってくれたのだから。なぜかある漫画と小説を取った時すごく嬉しそうだったのは覚えている。

「いいのいいの。どうせお金なんて腐るほどあるんだもの」

……いったいどのくらいあるんだろう？ 今日だけでもそれなりの額は使ったと思うし、使用限度額無制限のブラックカードを持つ

てたりと、少し気になる。

それから朱音さんが運転しながら聞いてくる。

「にしても、面白い？ 『天使の約束』？」

朱音さんが言った漫画の題は去年デビューした小説家兼漫画家である『黒瀬トワ』の小説。

一人の悪魔の反抗勢力に狙われる青年のために一人の天使が護衛のため彼のそばに現れるというストーリーで、よくある内容であるが、綿密な世界観、魅力的で個性的なキャラクター、主人公が成長して行く様がわくわくさせる話となっている。

「はい、大好きですよ。特にアリス。彼女が好きなんですよね」

「そ、そうなんだ」

そう言って朱音さんは恥ずかしそうにはにかんだ。どうして？

家に戻ってすぐにいろいろ飾ってみる。まあ、飾ってみるって言うっても、漫画やラノベを本棚に入れて、枕もとに目ざましと、壁にカレンダーを立てかけた程度だが、それでもなにかが違うように感じられた。

無機質で空っぽな感じはなくなり、少しだけ、人が住んでいることを感じさせる部屋になった。そんな気がした。うん。私物があるって思ったより偉大だねえ。

うんうん、と僕は頷きながらそのことを噛み締めるのであった。

その後、僕は朱音さんの用意してくれた晩御飯を食べ、また風呂でがんばってから眠りに就くのであった。

第十三話　たくさん買いました。（後書き）

朱「さて、なんでこんなに遅れたのか言い訳あるかな？」

鈴「すいません。すいません。いろいろ忙しかつたんです」

朱「すいませんですめば警察はいらないんだよ？」

鈴「すいませんでしたー！　だからその物騒な釘バットしまって
ええええええ！！」

感想お待ちしております。

- another view - 朱音

- another view -

草木も眠る丑三つ時、私 - 天野朱音は圭一の部屋にこっそりと侵入した。理由は簡単圭一の寝顔を覗くため。

物音を立てないように圭一のベッドに近づくと屈み込んで布団の中圭一の寝顔をそっと覗き込む。そこに圭一の無防備で安らかな寝顔があった。

私は緩い笑みを浮かべる。私は人の寝顔を見るのが好きだ。大好きだ。寝てるときは大抵は誰だつて無防備だから。記憶に薄いけど父もそうだった。決して厳格な人ではなかったはずだけど、それでも寝顔を見るのは新鮮だった覚えがある。刹那は寝言ならだらで、おかげで仕返しの準備はちやくちやくと進んでいる。ふふふ、いつか万倍で返してあげないと。

ぶにぶにと圭一の頬をつつつくと圭一は眉間にシワを寄せる。その様子が可愛くてついへらへらとさらに頬が弛んでしまう。ああ、かわいい。抱きしめたい頬ずりしたいお持ち帰りしたい。軽くキスするぐらいならオッケーかなあ？　せめて記録映像に撮っておくのは許してね♪

ああ、きつと彼は元の姿でも可愛い寝顔を見せてくれたに違いない。うん。是非見てみたかった。

だけど、私の可愛い好きオーラに当てられたのか、圭一の眉間によりシワが集まって、冷や汗をかきながらうーんと唸っている。残念だけど、起きちゃいそうだし、そろそろ止めとこうかな……

そう決めて私はちゃんと軽く圭一の頬にキスをしてから立ち上がる。

「お休み、圭一」

- a n o t h e r v i e w - 朱音（後書き）

鈴：「朱音さん？」

朱：「言わないで……」

鈴：「……本当にレズ？」

朱：「言うなー！　お願いだから言わないでー！　魔が差しただけなんだからー！」

刹：「だが、人の寝顔を観察するのが趣味って、悪趣味だぶるあ！」

朱：「だまってなさい刹那」

刹：「……はい」

感想お待ちしております。

第十四話 神無に行こう

目が覚めて一週間が経った。この身体にもだいぶ慣れてきた。風呂とかは未だ慣れぬが。だが、

「なんか不思議な感覚だな」

「何が？」

庭で逆立ちをしながら呟くと、食後の紅茶を飲んでいた朱音さんが聞いてくる。

「今までできなかったことをあつさりできることです」

そう答えて左手を地面から離して片手立ちになってその状態でバランスを取ってみせる。前はできなかったことである。その状態から軽く腕を曲げて飛び上がり、くると空中で一回転して着地する。まるで曲芸師のようなことを簡単にできてしまった。今では最初のころの身体のバランスの違和感もほとんど感じなくなってきた。

「……私にはその身体に柔軟に対応できる君の頭の方が不思議なんだけど」

なんか、前も似たこと言われたなあ。

まあいいやと朱音さんは飲み終わったカップをシンクに出す。

「出かける用意してね」

出かける用意？

「今日神無の本部に行くから」

いきなりすぎますよー！！

一時間後、朱音さんの車の中で僕はそわそわしていた。

『神無』朱音さんから聞いた限りでは先史文明の残した技術の調査及び特異能力者の保護を中心に活動している特務組織らしい。それはいい、それはいいのだが……

調査と評しているいろされるのでは？なんて考えてしまう。たとえば耐久性を見るためにすごい勢いで硬い壁に叩きつけられたり

とか、「銃弾の雨を浴びさせられたりとか、他にもあんなことやこんなことされるのでは?！」

「あのさ、君が思ってるようなことされないと思うよ。たぶん」

と、朱音さんが言ってるが……ってあれ?

「僕、口にしてました?」

「うん。「銃弾の」のところから」

お恥ずかしい……

「大丈夫だよ。それにしばらくは私が訓練や監督を受け持つ予定だから」

なら少し安心かも。すくなくとも朱音さんはそこまで無茶なことをさせないと思うし。うんきつと大丈夫。

そう考えてるうちに車はどんどん進んでいき、

「さ、ついたよ」

そう言つて朱音さんはあるビルの地下駐車場に入る。入り口横にはビルの名前が書いてあった。うゝん、なんか今へんなものを見てしまったような……

「あの、朱音さん?」

とりあえず、朱音さんに確認を取る。

「なに?」

「今、FUGAKUコーポレーションって書かれていたんですが?」
聞いたことのない会社名だ。というか僕ら神無に行くはずですよね?

「そつだよ」

と、朱音さんはあつさり答えた。

「あの、朱音さんこの会社って?」

エレベーターの中で朱音さんに聞いてみる。

「FUGAKUっていう会社はね『神無』の存在を一般にカモフラージュするために戦後建てられた医療機器の専門メーカー、株式会社富嶽医療が前身なの。ただど得られた技術をフィードバックして

いった結果、世界でもトップクラスの最先端特殊医療機器メーカー FUGAKU に成長したの。まあ、医療機器って普通の人にはなじみが薄いから知らなくても無理ないね」

他の企業の一部も似たことをしていると朱音さんは言った。僕はもうスケールの大きさにためはあ、と頷くしかなかった。

そして、チンと電子音が鳴ってエレベーターが止まる。そこはビルの最上階だった。

エレベーターを降りてから少し歩く。外を見ると海のすぐそばであつた。そして一つのドアの前に着き、朱音さんがドアを開ける。

「社長、天野朱音、ノエル・テストロッサをお連れしました」

朱音さんに続いて中に入ると……

パンと大きな音が立った。空中にひらひらと紙吹雪が舞う。漂ってくる火薬臭どうやらクラッカーのようだ。長身で細みの男が満面の笑みで立っていた。

「ようこそノエルくん。我が FUGAKU へ！ 私が社長の富嶽正輝だ」

第十四話 神無に行こう（後書き）

評価、感想お待ちしております。

第十五話 社長とお話

社長に促され応接用のソファに座る。そして、社長がいきなり頭を下げた。

「君のことは聞いてるよ。目が覚めたら全然違う環境でおどろいたことだろう？」

「ええ、まあ」

起きたら女の子になっていたなんてそうそう体験できるわけがない。身体の違いをはじめ、服の着方、髪の手洗い方、いろいろなものが違っていた。

うんうんと社長は頷く。

「やはり一万年前とは違うのだろうな」

……はい？ 一万年前？

僕が何を言ってるのか聞き返そうとして、

『君のことはアグニが修復した機械天使ってことになっているからいきなり頭の中に朱音さんの声が響いた。』

驚いて朱音さんの方を向くと、朱音さんが笑う。

『テレパシーってやつだよ。さすがに、死にかけた人間の脳を移植しましたなんて言えなかったからね』

なるほど。

「はい」

朱音さんの言葉に乗っかって返事をする。

僕の返答にそうかと社長が小さく笑う。

「では、これからの話なんだが君には『神無』で仕事をしてほしい。内容は天野君に聞いてるね？」

「はい」

頷くと社長は茶色い封筒を取ってきた。

「もし引き受けてくれるならこの封筒を取ってくれ。もし普通に暮らしたいならそれでもいい。どうするかね？」

ぱしつと言い終えた社長から封筒を取った。

少しの間社長は固まり、朱音さんははあつと呆れたようなため息をついた。

「……躊躇とかそういうものは君にはないのかな？」

「いえ、なんだか、すぐにそうしないと迷ってしまう気がしたので、やっと出てきた社長の言葉に僕はそう返答した。

社長は救いを求めるように朱音さんの方を向いて、

「だから言ったじゃないですか。すごく説得のし甲斐のない相手だ
って」

失礼な。

社長との面会の後、朱音さんに連れられて本社地下の研究施設に訪れる。朱音さんが言うに地下という環境はこの手の研究にうってつけらしい。

研究施設の一角にある部屋に訪れる。中に入るとそこにはアグニがいた。

「ようこそ圭一。古の意思を受け継ぐ場所に」

「どうもアグニ。一週間振りですね」

そうだねとアグニが頷く。どうやら呼び捨てだったのはスルーらしい。にしても、気取った言い方だなあ。

アグニはくるっと後ろに向き直る。

「ちようど呼びたかったところだ。来たまえ」

そう言ってかつかつとアグニは部屋の奥に向かう。うん、やつばえらそうだ。

まあ、仕方ないしついていくか。きよろきよろ観察しながら歩く。ここもアグニの研究室と同じく整頓されていてごちゃごちゃしていない。ただ、一角にある青白い何かのカプセルからはケーブルとかが延びててそうではなかったが。

そして、ある程度奥に来て、

「どうだい、お姫様にピツタリな素敵なドレスだろう？」

そう言つて身を翻したアグニが示すものは……

「……コスプレですか？」

そこにあるのは黒を基調にした服であつた。体つきを如実に現すであろうタイトな服、その上に羽織るジャケット、膝ほどの丈のスカート。そして両腕に付けるであろう手甲、そして足の甲をガードするような金属パーツのついたブーツであつた。

まるでアニメに出てきそうな服だ。

「ごめんねー、コスプレみたいな服で」

と、朱音さんが謝ってくる。えっ？ まさか……

「これ朱音さんがデザインしてくれたんですか？」

「うん、似合う服を考えたんだけどごめんね」

寂しそうに朱音さんが笑うのを見て、僕はなんだか申し訳なくなつてしまつた。

「す」

だから、

「素敵な服ですね！ さつそく着てみよーっと」

慌てて服を着る準備を始め、止まる。

アグニはいつの間にかハンドカメラを構えていた。

「アグニ、なんだそのカメラ」

「なに、君みたいな美少女の生着替え映像を撮って売ろうとぶごー！」

僕の右拳がアグニのリバーに入り、ほぼ同時にその逆から朱音さんの拳が顎を叩いた。

うーむ。着替えてみたが……うん。なんかいいかも。肌触りもいいしなかなか。

ただ、気になるのは……

「このヘッドセットなんでウサ耳？ あと、このベルトとかつてなに？」

そう、頭に付けたヘッドセットはウサギの耳みたいに長かつた。そして、右腕にはベルトがぐるぐると巻きつけられていた。腕を動

かすのには邪魔にならないが、なんか気になる。

「かわいいから」

朱音さんが嬉しそうに言う。さいですか。

「右腕のベルトは封印処置だ。右腕はほぼオリジナルのままだからな。それからその服はロストテクノロジーで高い防御力が付加されている。並みの防弾装備より頑丈で、衝撃にも強い」

ふーん。指が露出するタイプのグローブに包まれた手をわきわきしてみる。

「たとえば……ほれ」

「おぶっ！」

どすつとアグニがいきなり腹を蹴ってくる。思わずおなかを押さえて……あれ？ 痛くない？

まったくダメージがなかった。

「この通りただの蹴り程度ではダメージも受けながっ！」

だが、蹴られたのは蹴られたのできっちり脛を蹴るという仕返しをした。

第十六話 もう一つの仕事

着替えた後、椅子に座る。

「じゃあ改めて私たちの仕事を説明するね」

向かいに座った朱音さんがファイルのようなものを取り出しテーブルに置く。

「まず、私たちの仕事は特異能力者の保護と、先史文明の遺産の調査と回収は説明したよね」

そう言つて朱音さんはファイルの中から何枚かの資料とそれにクリップで止められた写真を取り出した。

その写真には発掘現場らしき場所とそこから出土したようにクレインに吊り下げられた泥だらけの巨大な昆虫のようなものが写っていた。

直感というかなんて言えばいいのかわからないが……ただ、これはいてはいけないものだと感じた。

「それは一万年前に先史文明を滅ぼしたと思われる地球外の生命体、名前は『ヴェノム』。私たちの仕事にはその回収と封印も入ってるの」

ふみゆ、見た目は巨大な昆虫で、どこかとげとげしい。だが、
「なんでこんなものが一万年以上土の中で原型を留めているんですか？」

生物ならバクテリアや何やらで分解されてなくなるはずだ。こんなキレイに残っているとは思えない。まさか、どこぞの『あなたはそこにいますか？』なんて哲学的な質問をなさる地球外知生体と同じくシリコン生命体？

すると、朱音さんは頬をかきながら、

「理由はわからないわ。確かに彼らも炭素でできてるから強固な外郭以外は分解されていいはずなのに、ね。一説には星が拒絶しているとも言われてるわ」

星が拒絶？ 意味がよくわからない。

「ヴェノムの生態はあまりわかってないが、発見された資料によると星に寄生する生物らしい。搾取するのにちょうどいい星に取り付きその星の生命力を搾るだけ搾り取ってまた別の星に向かうのを繰り返しているそうだ」

とアグニが付け足す。朱音さんが「横取りするな」とアグニの頭を叩く。

星に寄生するか。な、なんかスケールの大きな話だな。クロノトリガーのラスボスか？

つらつらとそんなことを考えてから、思い出した。

「アグニって防御システム持ってたんじゃないかったですか？ 今日なんでそんな風にひっぱたけるんです？」

先日、殴りかかった時、一発目を防がれたことを思い出す。今日はそれが一度もなかった。

ああとアグニが思い出したように、

「修理中だ。先日ので回路のいくつかがダメになったからな。今度はもう少し面白いものにする予定だ」

「あの時は驚いたわね。君がスターダストなんていうレアスキル有能力者だったなんて」

スターダスト？ レアスキル？

わからない言葉が出てきた。まあ、二つ目は珍しい能力だって意味だらうけどな。

よし、わからないものは聞くに限る。

「スターダストって何ですか？」

「スターダストっていうのは星から力を借りる能力。他の能力よりもずっと純粹な力」

私でもあまり知らないなと朱音さんが笑う。

うーんっと、よくわからないが……

「とにかく、すごく強力な力ってわけですね」

「まあ、そうね」

ふむ。そんな力を僕は持ってたのか。だけど……

「今までそんなの持っていた覚えはないんですけど」

そう、僕はこの体になる前は、完全無欠な一般人だった、と胸を張りながら自信を持って言える。

それがいきなり能力者なんて言われてもな。

朱音さんはうんうん頷く。

「まあ、確かに君は普通の一般人だったんだろうね。でもさ、今は一般人じゃないんだよ」

まあ、そうだけど。

うーんつとそうだなあ、

「もしかして使えるようになったのって、一度死んでリミッターが解けたからとかですか？」

「死んだからじゃないけどまあ当たりかな」

朱音さんが苦笑いを浮かべる。あり？　ちよいハズレ？

「正確には能力に耐えられる体になったからだね。前の体じゃ力が強すぎたはずだし、そのことを判断した脳がリミットを外す許可を出したんだろうね」

ふむ。前の体だと耐えられなかったから使えなかったけど今の体なら頑丈だから大丈夫ってわけね。

そういえばこの体ってどのくらい丈夫なのかな？　ちょっと気になる。

「能力の使い方も私がしばらく教えるから安心して。それとアグニ、今日の予定は彼の試験をするって言ってたよね？」

「ああ、機械天使の戦闘力を調べる予定だ」

アグニが頷くと「こっちだ」と言って立ち上がった。

第十六話 もう一つの仕事（後書き）

刹：「おい作者」

鈴：「……なんだよ？」

刹：「風呂敷広げすぎないよう気をつけろよ」

鈴：「わかってるって」

評価、感想お待ちしております。

第十七話 相棒との出会い

案内された場所は非常に広い部屋だった。天井まで小さなビルくらいの高さで、学校の校庭くらいの広さがある。

中に入るとアグニは入り口の側に置いてあった僕の身長より一回りでかいくらいの長方形の箱に近寄る。すぐにアグニは側面のパネルを跳ね上げ流れる動作で何かを打ち込んだ。

すると、ぱしゅつと空気が抜ける音がしてから蓋が開く。中に入っていたものは……

「剣？」

箱の中には機械でできたようなゴツゴツした大剣。

「君の躯体が発見された場所にあったものだ。おそらく機械天使用の装備だな。持ってみたまえ」

アグニに言われてからその剣を執ってみる。僕の身長より少し長いその剣は、持ち上げると意外と軽かった。ブンブン振ってみるとバットを素振りしている感じに近かった。思ったより軽い金属でできてるのか、単にこの体の力が強いからか、

「重さはだいたい百二十キロほどだったな」

断言しよう。この体が力持ちなだけだ、ってあれ？

「この体、リミッターつけられてるんじゃないんですか？」

確かそうやって普通の人間並みの生活を遅れるようになってるんじゃない？ まあ、普段でも簡単に片手立ちができるんだから十分力持ちなんだろうが、

「武器を執ったらファーストリミッターが外れるようになってるの。セカンドからはこっちから許可出さないと使えないけどね」

と朱音さんが教えてくれる。

なるほど。そういえばいつもよりさらに体が軽くなった気がする。軽く飛び跳ねたり腕を振ったりしてみる。うんいい感じ。

改めて剣を見る。機械でできたという印象のある片刃の大剣で、

側面にはサブグリップと剣を分割するように縦に一本の溝が走っていて、峰の方は複雑に何本もの溝が走っている。そしてグリップにはトリガーまでついていた。

「よろしく相棒」

『お久しぶりですね。マイマスター』

……なぜか返事が返ってきた。

朱音さんは目をへえっと軽く驚いた感じで、アグニはほおっと興味深そうに僕を、正確には僕の持つ剣を見る。

うん、よし。

「やつ、やあ、君喋れるんだ？」

『何を言ってるんですかマスター？ 昔から私は喋ってましたが』
端から見たら持っている剣で腹話術する怪しい人に見えるだろう
など、他人事のように感じる。

さて、どうしたものか……

「僕にとつては始めましてかな？」

『？ 何を言っているんですか？』

なんて説明しようかな……僕は剣に状況の説明を始めた。

十分後、朱音さんとアグニにところどころフォローしてもらいながら説明を終える。

『なるほど。あなたの体はマスターの体ですが、中身は別の人間な
のですね』

あっさり理解してもらえた。あまりにあっさり過ぎて拍子抜けするぐらいに。

「う、うん」

『そうですか』

それっきり沈黙。ええつと……

「何かないの？」

『何かとは？』

不思議そうに剣が聞いてくる。

「だって、僕らは君のマスターを勝手に弄った挙げ句に知らない誰かの脳を入れたんだよ？」

そう、だから彼（？）はもっと怒ったりしていいはずだ。なのに剣はちつとも怒らない。

だが、返ってきた言葉は、

『私は道具です。道具に良し悪しを判断する必要はありません』
だけであつた。

それが無性に悲しく思えて僕は何か言おうとして、

『それに、マスターは最後まで己の思いを貫きました。その意志をあなたが継いでいただけるなら力を貸しましょう』

うーん？　なんか話がいきなりすごい方向に飛んだような？

だから、確認のために聞く。

「つまり、僕に君のマスターの意志を継ぐなら許すと？」

『そう解釈していただいて構いません』

ふみゆ、そうすればこの体の人も許してくれるのかな？　そうだったらそうしたいな。

「この体の持ち主はどういう思いで戦っていたの？」

この体の持ち主が何を思っていたのか、何のために戦っていたのか？　それはただの好奇心だ。何も知らないのに聞いていいのかわからないけど知りたいと思った。

そして、少しの間の後、

『マスターは、夜を護りたいと言っていました。月が輝く夜を』
夜？

『マスターの名前はこちらで月を意味する名でしたので』

僕の疑問に補足するように剣が言った。ふーん？

僕にはよくわからなかった。そのうちわかる日が来るのだろうか？

「僕がそれをできるかわからないけど、よろしく。えっと……」

『蒼窮です』

剣が応える。

「うん、よろしく。蒼窮」

第十七話 相棒との出会い（後書き）

評価、感想お待ちしております。

第十八話 初めての戦い

アグニと朱音さんが部屋から出ていき、部屋には僕と蒼窮だけになる。

『それでは性能試験を開始する』

スピーカーからアグニの声が流れてから僕らが入ってきた入り口とは反対側のシャッターが上がる。そして中から足のない人形のような妙な物が四体出てきた。種類は三種。

大きさは僕より少し大きく、華奢で、精密作業には向いてなさそうな二本指のアーム、足があるはずの部分に球体のパーツが付いている。色は銀色で所々にパーティングライン（？）が走って空中に浮かんでいる。

おもに、四体中二体がその基本フォルム。で、他の二体のうち片方のアームの肘から如何にも伸びるぜと自己主張している薄いアームを二つ持ち、残りの一体が背部に二連装のキャノン砲を装備していた。

最初はダミールンか何かかと思っていたけど、違うみたいだ。

『ガディですか』

ガディ？

『基地防衛のために配備されていたものです。戦闘力は遥かに機械天使に劣りますが、量産しやすかったため大量に製造されました』
ふむ、昔の人たちは機械天使やガディに任せて自分で戦うことはしなかったのかな？ 少しそこが気になった。

と、思考を戻す。じゃああれか、ガディと模擬戦しろってことね。僕は剣を構える。

その途端頭に鈍痛が走る。頭を抑えてから気づいた。なんだ？

この感覚……

相手を見ると距離がどのくらいかわかった。自分の体の状態、動力である精霊炉の出力。視界にロックオンサイトにいくつもの情報

が表れる。まるでターミネーターの視界だ。

「くっ」

ふらつと体が揺れるが踏みとどまる。

なかなか便利そうな機能だけどちよつとキツいな……

『大丈夫ですか？』

「うん」と頷いてガディを睨む。またも頭に情報が流れるが意識すればそこまで辛くない。

そして、

『戦闘開始』

アグニの言葉と同時にガジェが青白いレーザーを撃ってくる。模擬戦とはいえ四体の射撃を受ける気にはならず横に避ける。

そして、振り向くと、避けた後には黒い後……すいません。これ模擬戦ですよ？

『言い忘れたが実弾と実戦用の出力だ』

おい！ いいんか貴重なサンプルを？！
スピーカーの向こうで言い合う二人の声が聞こえるが、こっちはそれどころじゃねえ。

ガディの撃つレーザーや砲撃、やっぱり伸びてきたアームを避けまくる。

だが、アームの一本が肩に当たる。

「いちっ！」

バランスを崩して倒れる。当たった肩が痛むけど、それよりも、か、囲まれてしまった……部屋の隅で逃げ場なし。

お、終わった。凶悪な光を放つキャノン砲と今にも飛んできそうなアームを見て絶望する。

そして、四体の攻撃が飛んできて、

『『天使の羽』起動』

ぐんと引つ張られる感覚とともに視界が高くなる。ありや？――瞬で天井近くまで飛んでいた。

『マスター大丈夫ですか？』

蒼窮が聞いてくる。

「だ、大丈夫だけど」

一体なにが？　と思ひ首を巡らすと、背中に一對の黒い翼が生えていた。

あー、だから跳べたのか……じゃなくて！

「黒いよ！　これじゃ天使じゃなくて墮天使じゃん！」

思わずつつこんでしまう。まあ、それより重要なのは、どうやって飛んでるんだ？　これ？　意識しなくても大丈夫みたいだけど……

「聞きますがマスターは歩く時や泳ぐ時に考えますか？」

いや、考えないけど、僕は飛ぶのは初めてよ？

「おそらく体が覚えているんでしょう」

ふむ、納得いかんが、飛べるんだしいつか。

「ところでマスター」

「なに？」

このタイミングだから重要な話か？

そう思ったが、

「これからは機械墮天使に改名しますか？」

どーでもいー！！

そんなことしていたら、下からレーザーが飛んできた。

おっと。身を捻り避ける。

やばい。ガディのこと忘れてた。うん、いい加減腹を括ろつ。

第十八話 初めての戦い（後書き）

評価、感想お待ちしております。

第十九話 蒼穹のギミック

よし、

「蒼窮」

『何でしょうか?』

「君の機能ってどんなのあるの?」

機械でできた剣ならなんかギミックがあるんじゃないかと思って聞いてみた。そこ、安直だと言うな。

『わかりました。それではこちらから』

蒼窮がそう言うのとグリップが折れ、溝に沿って剣が縦に割れる。そして横のサブグリップが展開した。

『刀身展開、バレルセット、ライフルモードオールクリア。いつでもどうぞ』

うーん? つまり……

「中に銃が仕込んであるの?」

『はい』

うわー、大丈夫かそれ? 銃身歪んで当たらないんじゃないか?

『ご安心を。射撃の都度にバレルを再構築しますので』

どういうことかわからないけど、まあ今は信じるしかないか。

サブグリップを掴んで構える。うわ、構えるのに胸が少し邪魔だよ。視界のロックオンサイトが動く。最初に標準タイプを狙う。そのため下を向いたから髪が顔の横をくすぐる。

「目標をセンターに入れて……スイッチ!」

トリガーを引くと、蒼窮の先端から光弾が発射された。

さらにトリガーを引き、撃つ。ガデイの表面に傷がいくつも付き、ガデイの動きが止まる。

「今!」

蒼窮をライフルモードから剣に戻し羽根を使って髪をなびかせながら一息で床まで飛ぶ。

地面に着地。同時に蒼窮を振りかぶって、袈裟に剣を振る。標準ガディの一体が真つ二つになる。にしても、剣振る時胸って邪魔だな。こう、なんていうか……つぶれる感触も気になるし、腕の動きに干渉するし。

降った勢いのまま振り返って、今にも撃とうとしていた砲撃タイプのガディの砲身を斬り飛ばす。すぐに砲撃ガディはキャノン砲をパージ。標準型になる。

もう一步踏み込もうとして、視界の片隅にアーム型が見えた瞬間、体が勝手に後ろに飛んだ。髪の毛のせいで視界の一部が塞がる。うげ、こういう時は長い髪って危険だ。

そしてアームが伸びてきて蒼窮でガード。髪が数本飛ぶ。んんっ？「なんかさっきから体が勝手に動くんだけど？」

そう、気になっていたのだが僕がそうしようと考えると体が勝手に動く。しかもどの動きもコマ送りしてるかのようにハッキリ見える。

『機械天使には蓄積記憶と呼ばれるものがあります』
蓄積記憶？

『前の台までの機械天使の戦闘データを元に組み立てられた動作パターンで、ある程度ならそれで戦えます。さらに、後付けのようですが戦闘用の支援AIも組み込んであるようです』

ほうほう。なかなか便利な機能だな。

感心しながら羽を降って勢いをつけてもう一体の標準ガディに向かって剣を突き出しつつ地面スレスレに飛ぶ。

レーザーが飛んでくるが、蒼窮の切っ先や服の表面で散った。本当に防御力高いんだなこの服。

そして、蒼窮が突き刺さる。すぐに引き抜いて、バク転で後ろに飛ぶ。予測通り後ろからレーザーが飛んできた。

標準型の後ろに着地し斬り伏せた。

や、やばい。なんかワクワクする。

そしてガディはアーム型一体だけ。

「りゃあ！」

剣を振りかぶり大上段で斬りつける。が、アームで防がれる。あう、さすがにアームは斬れないか。

『マスター、横です！』

言われて振り向くと、もう一本アームが伸びてきた。

うわ！ このタイミングじゃ避けられない！

覚悟して目を瞑った瞬間、

『こちらを』

ばちんと何かが弾く音が起ち、勝手に動いた左手が空中で何かを掴む。そして、それを後ろから伸びてきたアームに叩きつけた。吹き飛ばされ床を転がる。直撃しなかっただけマシか。

着地し、目を開くと左手が蒼窮の半分以下のサイズの剣を握っていた。見れば蒼窮の峰が展開している。

……こんな仕組みもあるんだ。

左手に持った剣は大体六十センチほどの片刃の剣で、峰の一部がグリップになっている以外装飾の欠片もない鉄の固まりだった。

二刀流なんて器用なことできないから峰の中に戻す。

にしてもあのアームは厄介だな。見た目と違ってかなり頑丈だ。さっきのだって少し傷が付いたくらいだ。

こういう時は漫画では同じ場所を狙うのが常套手段だけど、そんな器用なことできないから。

『でしたらこれをどうぞ』

蒼窮の峰の一部と両側面の一部が展開。中からブースターが迫り出す。

うん、なんつーか……

「ギミック多すぎ……」

こんだけ仕掛けがあると強度に不安が残る。

『大丈夫。オリハルコン製ですから頑丈です』

どう大丈夫かわからないけど……って、さっきから気になっていたのだが……

「もしかして僕の考えてることわかる？」

『はい。ある程度は、ですが』

……なかなか便利な機能だね。

気を取り直してトリガーを引いてみる。するとブースターに火がつく。おおっ？

さらに引くと出力が上がる。どうやらトリガーの引き加減で出力が上がるらしい。

うし、その場でぐるぐる周りつつブースターの出力を上げていく。そして、ある程度の勢いに至ったら一気に飛び出す。

遠心力+ブースターの出力で、

「破壊力だ！」

ガディはアームでガードしようとするが、それごと叩き斬った。そのままガジェの横を通り過ぎる。

くるくる蒼窮を回し、右拳を振り上げる。胸がぽよんと躍った。

「勝利！」

決まった。そう確信したが、背後でガディが爆発。吹き飛ばさて顔面から地面に倒れた。

「そういうオチなのね……」

少し悲しくなった。

第十九話 蒼穹のギミック（後書き）

評価、感想お待ちしております。

なお、ガディの名前はガーディアンからです。

第二十話　ちよつとした要望

私は圭一が最後のガディを破壊したのを見て溜めていた息を吐き出す。

よかつたあ、特に怪我しなかつたみたいだ。横のアグニを見ると彼は鼻を鳴らした。

「予想以下だな」

えっ？　予想以下？

「どういうこと？」

「圭一の経験不足を考慮しても予想より性能が落ちている。せいぜい五割ほどだな」

五割……　っね。確かにオリジナルの戦闘力の半分程度は痛いかな。せめて六割なら。

私もそんな失望に似た思いを抱いたが……

「所詮出来損ないのガラクタか……」

その言葉だけは聞き捨てならなかった。

確かにそうなのかもしれない。だが、それは彼という存在の否定に近い。私は拳を振り上げて、

「これから大変だな。俺も彼も」

アグニの言葉に私は拳を止める。

それからアグニは部屋の出口に向かう。

「まずは壊れたガディから使えるパーツを採ろう。こっちのよりは相性がいいだろうからな」

……　もしかして。

「だから壊させたの？」

一度、ガディのパーツを使用することを進言したものの、大量に量産されていたけど神無でガディは貴重なサンプルであり戦力。機械天使が強力だとしても、それ一つに頼るということには社長以外の幹部が何人か反対。結果、現代技術のみで修復された。

でも壊れたなら足りないパーツを他から取って四体から数を減らすだろう。

そして余ったパーツは？ もちろん予備として保管される。でもその時いくつかパーツがなくなっても気づく人間は少ないでしょう。そして、それが圭一の身体に使われたとしても機械天使について知っているのは私とアグニのみ。証拠が見つかる可能性は極めて低い。そのために模擬戦をさせた？

「さあ？」

まったく……相変わらずだね。私は苦笑して圭一を迎えに向かった。

「でも、始末書ものだね」

先ほども言った通り、ガディは貴重である。それを四体も壊したのだから。

「……………そうだな」

若干アグニの肩が落ちる。どうやら失念してたみたいね。ご愁傷様。

シャッターが上がりアグニと朱音さんが入ってくる。

それを見て僕は、

「ていつ」

背中 of 羽でアグニを叩いた。

「な、何をするかね？」

アグニが叩かれた頬を抑えて抗議してくる。

「何も言わずに模擬戦をさせた罰だ！ この程度ですんだことを喜べ！」

けっこう怖かったんだぞ。ちょっとばかりわくわくしたのは秘密だが。

その様子を朱音さんが面白そうに見ている。

「でもノエルかつこよかったね」

えっ？ そうかな？ ちょっと嬉しいかも。

「うん。これから君の二つ名は『金色の墮天使』かな？」

おお、かつこいい。でも墮天使なのね…… ちょっと肩が落ちる僕であつた。

元の部屋に戻った途端、膝がガクガクなつて倒れかける。

「大丈夫？ ノエル」

「は、はい。今さら緊張しちゃったみたいで」

なんとか椅子に座るけど震えは止まらなかった。

朱音さんはただポンポンと肩を叩いてくれた。それから戦闘中に思つたことを言ってみる。

「そうだ、この髪どうにかしてもらえないの？ 戦闘中視界に入つて邪魔なんだよね」

ばつさり切つて視界を確保したいのが正直な意見だ。

しかし、アグニは首を振る。

「君は死にたいのかね？」

は？ 死ぬ？

「えつとね、君、戦闘中どれだけ体温高くなつてると思う？」

僕の疑問に気づいたのか朱音さんはそう聞いてきた。

へ？ 体温が高くなつてる？ そんなの全然感じなかったよ？

「そういつた感覚は調整してあるからな…… 炉心周りはかなり高い。およそ六十二度ほどだったな。かなり高いだろう？」

「まあ、そうだけど…… それが死ぬのとどう関係があるのさ？」

はあ、つとアグニが嘆息する。な、なんだよ。

「君の脳はまだ生身のままだ。そんなものがそんな温度にさらされたらどうなる？」

…… やばいよね？ 人間の体温は約三十六度、高くても四十。そ

んな高温にさらされたら脳がたぶん大変なことになる。

「それと髪がどんな関係が？」

「放熱システムの一部だよ。髪を切ったらその分放熱がしづらくなるね」

へへ、髪もそんな機能あるんだ。

「一応、余裕を持たせるために必要な分より多めみたいだが、ないよりはいいだろう？」

そんなこと聞いたら切るつもり完全になくなりました。

と言うわけで、邪魔にはなるので髪留めで纏める事にしますか。

「他にはなにか要求があるかい？」

アグニが聞いてくる。ん？

「要望としては……服のカラーリングかな？ できたら白を基調に黒の線で」

「それならまだ楽だな。明日までにしておこう」

そう言って、アグニは頷く。

「じゃあ、今日はここまでにしようか」

朱音さんの言葉に僕は頷いた。

着替えて部屋に戻ると、設定し直すから置いとくように、とアグニに服を回収された。あと、微調整しとくと蒼穹も。

「じゃあ、また」

「また明日ね。アグニ」

僕と朱音さんは部屋を出る。

「気をつけて帰ったまえ」

アグニは画面に向いたまま手をひらひら振ってくる。

こうして、初めて神無に訪れた一日が終わった。

第二十話　ちょっとした要望（後書き）

鈴：「やっと、神無編終了」

朱：「おつかれさま。でも、この後が大変だね」

鈴：「……がんばります」

評価、感想お待ちしております。

第二十一話 ミスった！

アグニによって模擬戦をさせられた次の日、朱音さんに連れられて戦闘訓練を受けに来たのだが、

「服を脱げ」

研究室に入ると同時にアグニにいきなりとんでもないことを要求をされました圭一です。

いきなりのことに僕は思考が停止してしまった。

What? 服を脱げですと？

少しの間お待ちください。

「いきなりなに言ってるんだあんたは！」

「そうだよアグニ！ 女の子にいきなり脱げだなんて！」

朱音さんも文句を言う。まったく、うら若き乙女になんちゅう…

…ダメだ、たった一週間で僕の思考は女の子になり始めとる…

別のことでショックを受け僕はうなだれる。

「なにを考えてるのか知らんが調整をさっさとしたいんだが？」

はっ？ 調整？

「この一週間と昨日の戦闘でわかった未調整部分が判明したからな」

な、なんだ…：：：そうだよね。うん、

ちよっぴし安心した。

服を脱いで下着だけになって調整を受けるためにメンテナンス用のベッドに寝る。ちよっと自分の身体を見る。ピンク色の下着に包まれた若い女の身体なんだけど、興奮のこの字も出てこない。自分の身体ってこともあるんだけど、これって良いことなのか悪いことなのか…

「大丈夫。変なことされそうになったらちゃんと止めるから」

アグニが持つドリルを睨みながら朱音さんがそう言うと、残念そうにアグニはドリルをしまった。

……本気で付けるつもりだったのかな？

心配になりながらもアグニがパソコンに何かを入力すると、僕はスイッチが切られたかのように意識を失った。

「で、調子はどうかな？」

調整が終わってアグニが聞いてくる。

ぐっぐつと手を開いたり閉じたりしてみる。それから軽く準備運動。

「ん〜、何というか……よくわかんないかな？」

正直、この体の調子が悪かったのは最初の日くらい。それ以降は前の体よりいいくらいで、良し悪しは言いづらい。

そうか。とアグニはつまらなそうに言う。

「と、返しとくよ」

そう言って、アグニが渡してきたのは……青く丸い結晶のペンダント？　こんなの持ってた覚えは、

『おはようございますマスター』

ペンダントがしゃべった。しかもこの声は……

「蒼窮？」

『はい。このペンダントは私の携帯端末です。これを持っていただければいつでもマスターと会話できますし、非常時に私を呼ぶこともできます』

へー、便利だなあ。

「どうすれば呼べるの？」

『はい、笛を三回鳴らしていただければ』

「……君はマ。マ大使か？」

そのネタを知っているってことにびっくりだ。アグニが教えたのかな？

『冗談です。必要な時に呼びかけていただければいつでも』

ふーん、なら……

「蒼窮、さつそくよろしく」

『イエスマム』

かっつと蒼窮が光り、目が眩んだ一瞬で蒼窮を握っていた。

おお、しかも服まで戦闘用に……

タイトな服とスカートにジャケット。右腕にベルトが巻きつき両腕に手甲と頭にウサミミが装着される。昨日の要望通り白を基調にジャケットやスカートの縁などがアクセントとして黒くなっていた。思った通りこっちがいいな。

「じゃあ、さつそく訓練に行ってみようか」

そう言っつて朱音さんが立ちあがる。僕はそれに着いていこうとならっつて、

「ああ、少し待っつてくれ。その前にあれを調べて欲しいんだ」

そう言っつてアグニが示すのは隅に置いてあるカプセル。中はぼんやりとしか見えない。一体なんなんだ？

「君と一緒に発見されたものでな、厄介なプロテクトのせいで何なのかわからない。だけど君なら何とかなるんじゃないか？」

同じ文明が作ったものなら少しは情報は引き出せるかもしれない。
「まあ、いいですよ」

そう答えてカプセルに近づき、

伸びるケーブルに躓いた。

げっ、やばひ。

朱音さんが慌てて椅子から立ち上がるが、もう間に合わない。ごん！ と音を立てて顔からコンソールにぶち当たる。

つつつつっ！！

「ば、ばかー！！」

後ろから朱音さんに怒鳴られた。ど、どうしょ……も、もし危険なものだったら……

考えているうちにカプセルが開き、中から赤い液体が流れ出す。額を抑えながら顔をあげていた僕は頭から被ってしまった。少し生暖かい。

「わっぷ」

そして、液体を拭って目を開けるとカプセルの中に一人の女の子が入っていた。歳は多分五歳くらいの耳の長い小さな子。

綺麗な金髪で、肌にぴったり張り付いた白い服を着ている。

僕は立ち上がってその子に近づく。すると、その子はうつすらと目を開けて……

「マ……マ」

そのまま意識を失って倒れた。

僕は慌ててその子を抱き止めるのであった。

第二十一話 ミスった！（後書き）

鈴：「新キャラ登場！」

刹：「といっても本格参戦は二話後だけど」

鈴：「圭一にとって重要な存在になる予定です」

刹：「それでは、また」

第二十二話 能力を使ってみよう

カプセルから出てきた女の子はすぐに医務室に運ばれた。

医者の柏木先生とアグニはあの子の症状は「カプセルの中とは環境が違ったための一時的なもの」と診断した。しばらくしたら目が覚めるはずらしい。よかったあ。

それで、僕と朱音さんはその子を医務室に預け、今日の目的である訓練室に向かう。その途中、

「あのさ、ノエル、さっきあの子がなんて言ったかわかった？」

「へ？」

いきなりの質問だった。うーん、あの子が言ったのは確か……

「『ママ』だったと思います」

思い出しながら答える。うん、確か『ママ』だったと思う。

「そう、あれそういう意味だったんだ。ありがと」

「はあ」

突然の質問と、朱音さんの言い方に若干引つ掛かるものを感じながら僕は朱音さんについていくのであった。

そして、案内された訓練室は、狭かった。

僕は首を傾げる。

「すいません、朱音さん。ここって訓練室なんですよね？」

「そうだよ」

……ダメだ。どうしても納得ができない。

「だってスペースがないですよ？」

部屋の広さはだいたい学校の教室程。その真ん中に台があってそこに水晶が一つ置いてある。とてもじゃないが動き回るほどのスペースはない。

しかし、朱音さんは、

「ここにあるよ」

そう言って水晶を指さす。

……からかわれてるのか？

僕はジト目で見るが、朱音さんは気にせずそれに触れる。

「それでは一名様ご案内」

そう言った途端部屋に光が満ちた。

「わっ！」

いきなりのこととで視界が真っ白になり、思わず目を瞑ってしまう。そして、再び目を開けると光が収まっていて、

「うそ……」

目の前には先ほどの狭い部屋はなく人の気配がないビル群だけがあつた。

「今日は他に訓練所使う人いないから貸し切りだよ」

朱音さんが楽しそうに笑うけど、僕はただ呆気に取られていた。

だって、いきなり狭い部屋からこんな場所に移ったんだよ？

周りは雑多のビルが立ち並んでいるが、そこに人の気配なんてなくまるでゴーストタウンのような印象をうける。空にはちゃんと雲や太陽があるからここは地下でなく屋外かな？ まあ、もしかしたらモニターで空を映してるだけかもしれないが、

「どうなってるんですか？」

僕はついついそう聞いてしまう。

すると、朱音さんは楽しそうな笑みで、

「あの水晶の中はね圧縮空間になってたの」

圧縮空間？

「簡単に言えば縮めた空間を水晶の中に封じ込んであって、私たちはその空間に入ったの」

ふーん？ 便利なものだ。これがあれば住宅事情も一気に解決じやん。

「しかも、時間の流れも外とは違って二十四倍の早さ、つまり一時間で一日分の訓練ができるの」

おおつ、まるでドラゴン。ールの精神と時の部屋みたいだ。まあ、あつちは一日で一年だけど。

そんな風に僕が感動していたら朱音さんがばんばんと手を叩く。

「それじゃあ訓練を始めるよ。まずは能力の使い方から。早速使ってみて」

「待ってました！」

僕はワクワクして朱音さんの次の言葉を待つ。しかし、朱音さんは何も言わない。

……あれ？

すると朱音さんは首を傾げて、

「なんで能力使わないの？」

ええっ？

「いや、アドバースとか待ってたんですが？」

「できないよ」

あつさりおつしやつた！

朱音さんは腕を組んで、

「能力の使い方は人それぞれだからね。私の感覚を伝えて先入観持たれても困るし」

そういいながら朱音さんは手を差し出し、ばちばちと放電させる。

そういえば、朱音さんは雷を操る能力って言ってたっけ。

つまり、能力の使い方は個人のフィーリングってわけですか……

僕はちよつと悩んだけど、言われた通り能力を使おうとしてみる。まずは人差し指を一本立ててみる。そしてそこに力が集まるイメージを思い描く。すると指先に青い光が宿った。

よし、さらにその光が指から離れて一つの球ができるのをイメージしてみる。するとさらに指先の一点に光が集まって指から離れた。やった、できた！

「どうですか？」

朱音さんの方を見る。朱音さんは満足そうに頷く。

「もうつっこまないから」

……どういう意味ですか？

さらに朱音さんの指導の元、四時間かけて能力の訓練を行う。

内容は精製した球を自在に動かすこと。

朱音さんはどんな姿勢でもいいと言ったので僕は座り込んで球を動かすことに意識を集中した。能力にもよるが、これくらいなら発動できる人間ならちょっとやればすぐにできるそうだと。

パイロキネシスなら、炎を操る訓練、サイコキネシスなら物体を動かす訓練を最初にして感覚をなれさせるらしい。

それと、蒼窮にも能力の補助システムを昨日のうちに組み込んだらしく、ちゃんと使えばもう少しくらい余裕ができるだろうとのこと。

「にしても綺麗だね。君の能力光」

同じように座り込んでいた朱音さんが僕の作った球を見ながら呟いた。

「そうですか？」

僕は座り込んだまま振り返る。

「うん。優しくて澄んだ綺麗な光りだよ」

朱音さんが微笑みながらそう言ってくれる。な、なんか嬉しいな。ちよつと頬が赤くなる。そして、朱音さんはふふ、と笑って腰を上げる。

「じゃあ、この訓練はここまでにして休憩してから次に行こうか」

第二十二話 能力を使ってみよう(後書き)

評価、感想お待ちしております。

第二十三話 あの子は大丈夫かな？

「ぜえ、ぜえ……」

僕はぐでつと背中から地面に寝転がる。

正直、朱音さんの訓練はきつかった。能力の訓練から始まり、座学、体術から射撃の訓練などなど。しかも、体術の訓練では手加減なく投げられたり極められたり、痛くて痛くてしょうがなかったよ。今も身体中が痛い。もう数時間前なのに……

朱音さんはしゃがみ込んで僕を見る。

「初日だから流す程度だったんだけどな……お疲れ」

そう言って朱音さんがボトルを差し出してくれた。なんか不吉な言葉が聞こえたけど僕には聞こえない。聞こえませうん。

僕は起き上がってそれを受け取る。

「あり……がとう、ございます……」

ぐびつと一口、少し甘いスポーツ飲料が乾いた喉を通り過ぎる。

なんかじわーっと体中に染み渡っていく気がする。ああ、これが五臓六腑に染み渡るってことかな？

ふうつと一息。少し余裕ができたかな？ にしても、思ってたより辛い。ちょ、ちょっと協力することは考えなおそうかなあ？ あ、でも能力の使い方はもう少し知りたいかも。

そんなことをつらつらと考える僕であった。

そして、一時間ほど休憩を取ってから水晶内の空間から出る。

念のため外に出てから時計を確認したけど本当に一時間も経っていないかった。びっくりだ。

「もう一度あの子の様子見に行こうか」

朱音さんの提案で医務室に行こうとして、アグニが訓練室に入ってきた。

その姿はなんというか、くたびれていた。別に見た目は変わっていないんだけど、雰囲気の数日間働き続けたって感じになっている。

「ちょうどよかった。二人とも来てくれ」

そうとだけ言ってアグニはさっさと部屋から出た。

僕たちは慌てて後をついて行く。

「いきなりどうしたの？」

朱音さんが聞くと、

「子供の癪癪は宇宙一の兵器だったんだ」

とだけ返した。もちろん僕らにちゃんと意味は通っていない。

そうしてるうちに医務室に到着。先ほど来たが、ここには右手にベッドが二つあり、左手前に先生が使うためと思われるいくつもの棚がある机が設置されている構成だ。

アグニはドアの横に背を預けて中を示す。僕らが中に入ると……

子供の泣き声が響いていた。

「ママあとどこにいるの……？」

その子は二つあるベッドの奥に腰掛けながら目を擦っている。

うーん？　これって……

僕らはアグニを見る。やれやれと言った感じにアグニは肩を落として、

「目を覚ましたと思ったらいきなりあれだ。しかも言葉もわからないしな」

ここの責任者である医務官の柏木先生は子供に受けるものを探しに出て行ったらしい。こんなところにあるのか甚だ疑問ではあるけど。付け加えると柏木先生は四十台を越えた感じがするちょっと白髪の入ったばさばさ髪の典型的な日本人だった。

もう一度女の子の方に向く。今はさっきの服とは違って少し大きめの白衣を着せられていて、えぐえぐとしゃくり上げながら涙を零している。ばたばた流れる涙が白衣に跡を付けている。そして、特徴的な長い耳もなんか先っぽが下がっていた。

……やっぱり、いきなり知らない場所に放り出されて心細いのか

な？

って、あれ？

「アゲニ、言葉がわかんないってどういうこと？ あの子、日本語しゃべってるじゃん」

僕の言葉にアゲニは首を横に振る。

「悪いが俺には聞いたことのない言語にしか聞こえん。朱音はどうだ？」

「ごめん私もわかんない」

……えっと、どういうこと？

僕が首を捻って考えていたら、

『おそらくマスターは一度、日本語に変換して認識しているのだと思われます』

意外にも蒼穹が理由を答えてくれる。って、変換？

『あの子が今話してるのはマスターたちが先史文明と呼んでるものの言葉ですの』

あー、はい。なんとなく分かりました。つまり、僕は意識してなかったけど内蔵されたコンピューターあたりがそっちの言葉を理解できるように日本語に変換してくれてたってわけね。

なるほどそれなら二人がわからんわけだ……ってありや？

「蒼穹って最初からこっちの言葉しゃべってなかった？」

『以前、こちらのネットワークに繋げる機会がありましたのでその時に』

ふーん？ 簡単に言ってるけどそれって、すごくない？

「ほらほらノエルそんなことより……」

っと、そうだった。まずはこっちだったね。

僕は女の子に目を向ける。うし、子供の相手って全然したことないけどやるしかないんだ。

意を決してその子に近づく。

「こんにちは、僕はノエル。あなたのお名前は？」

僕が聞くと女の子は顔をしゃくりながら顔を上げる。

「アルト……」

女の子はひつくとしゃくりながら答える。
途端に頭痛が走った。

「っ!？」

そして何か、断片的なイメージが走る。薄暗い部屋と青白い光を放つカプセル。そして、そのカプセルを見る誰か。

その誰かは僕とアルトちゃんと同じ長い金髪と長い耳を持っている。その顔はよく見えない。

『この子の名前はアルト』

！？ 今の子の名前？

『幸いという名の光がありますようにって願いの名前だもんね』
その人はこつちを振り返って微笑む。その顔は……

「どうしたの？」

ぽんと朱音さんが肩を叩いてくれて正氣に戻る。

「いえ、なんでもないです」

僕はそう答えて心配させまいと笑う。

何だったんだろう今は？ よく思い出せない。なにか大切なことのはずだったのに……

まあいいや、今は女の子の方が大切だ。

そう考えて僕はアルトちゃんに視線を戻す。って、あり？

なんでかいつの間にか泣きやんでいた。しかも、じっと宝石のよう
にきれいな紅い目で僕の顔を見ている。

そして……ぱあっと花が咲くように笑顔に変わった。なぜ？

「ママ……!」

そう言っ
てアルトちゃんが抱きついてきた。

……はい？ 僕が、ママ？

「あの、ノエル、この子なんて言ったの？」

突然のアルトちゃん
の行動に朱音さんが聞いてくる。

「えっと……僕が、ママだそうです」

突然のことに正直に答えてしまう。

そして、三、二、一、ハイ！

『えええ！？』

僕と朱音さんの叫びが重なった。

第二十三話 あの子は大丈夫かな？（後書き）

鈴：「さあて一体どういうことなのか！」

刹：「いきなり現れた少女アルト。彼女は圭一のことをママと呼びました！そして圭一が見たビジョンとの関係は？」

鈴：「彼女は何者なのか？！圭一との関係は？」

刹：「乞うご期待なのです！」

鈴：「それでは、こちら神無広報委員会と」

刹：「常盤学園放送部の提供でお送りしました！」

第二十四話 僕がママ？

アルトちゃんによる突然の爆弾発言により僕らの時が止まった。

そして……徐に朱音さんが肩を叩いてきた。困惑しながらも朱音さんの方を向くと、

「ノエル、まさか君に隠し子がいたなんてね……で、パパは誰なの？ それともママ？」

「朱音さん！？」

いきなり何を！

しかし、文句を言うその前にアグニが優しく、苛つくほど優しく肩に手を置き、

「言いたくはないんだ。このことは俺たちの胸の奥に仕舞っておこう」

「だから違う！」

思わずアグニを張り倒してしまう。そんな僕を尻目にアルトちゃんは「ママ」と嬉しそうにしがみつくのであった。

「まあ、要するに刷り込みだな」

十分後、からかうことを止めて椅子に座ったアグニがそんなことを言う。

「刷り込み？」

僕はベッドに腰掛けながらアルトちゃんを膝の上に座らせてアグニの説明を聞く。

刷り込みってあの、ヒナが親鳥を見てそれが自分の親だと認識するあれ？ 人間でも有効なのか？

「恐らくこの子は資料にあった自立成長型の機械天使の後期型だな。自立成長型はマスター認証した相手と常に一緒にいることで相手の癖や思考を覚え息のあったパートナーになるのを目的に創られたそ

うだ」

骨格は他の機械天使と違うため人間と同じように成長し、なんてアグニが説明を続けるが、僕はまったく聞いてなかった。

息のあったパートナー、ね……僕を見て説明が難しかったからかうとうとし始めたアルトちゃんを見る。

なにか面白くない。子供まで戦わせるなんて、そこまで追い詰められてたんだからしかたなかったんだろうけど、一発、制作者を殴ってやりたくなった。

朱音さんは、ただじつとアルトちゃんを見ている。そこにいかなる感情が込められてるのか判断できないけど、僕と同じようなことを考えているんだと思う。

「まあ、育成に時間がかかることや、確実にパートナーになるかどうか問題で数体しか作られなかったはずなんだが……」

いつの間にか説明を終えたアグニはじつとアルトちゃんを見る。

そして、ため息をつく。

「まあ、その子と意志疎通できるのはお前しかいないし、完全に懐いてるみたいだから、お前が引き取ってくれ」

……へ？

アグニの言ったことを少しの間理解できなかった。引き取る？

この子を？ 誰が？ それはもちろん僕で……

やっと意味を理解して……いや無理でしょ！？ 僕、子供の相手なんてどうすればいいのか分かんないんだから！ だけど朱音さんも「ナイスアイデア！」とアグニをほめている。いや、止めてくださいよ！

「無理だよ！ 僕まだ十五だよ！ 引き取るって無理だから……！」

「大丈夫、お前の歳は一万歳以上だから」

それこの身体の歳……！！

ええっと、どういう反論しようか……少しの間考えて、朱音さんの顔を見たら閃いた。

「そ、そうだ！ 朱音いいんですか？ 僕、今あなたの保護下なん

ですから、この子の面倒も入っちゃうんですよ?」

「ナイスアイディアって、言っただけで、さすがにそこを考えるとくれれば……」

「ん? 別にいいんだよ? 部屋まだいくつか余ってるし」

朱音さん!!

だが、さらなる反論を用意しようとして、

「あのさ、ノエル、ちゃんと見なよ」

見る? 何を……あ、

見れば、アルトちゃんが悲しそうにうるうると目を潤ませながら僕のことは見ている。

「ママ、ママはアルトいない方がいいの? アルトのこと嫌い?」

ああ、見ないでくれ。そんな捨てられそうな子犬がするような悲しそうな目で僕を見ないでくれ……

もう詰みだ。腹をくくるしかない。

「わかりました。この子は僕が預かります」

こうして僕が折れると、アグニと朱音さんはハイタッチを決めるのであった。

第二十五話 一緒に家に帰ろう

「じゃあアルト帰ろうか」

母親らしく（まだ完全に納得してないが）ということではアルトちゃんではなくアルトと呼んであげる。だが、なんだろう、呼び方を変えたただけなのに距離がぐっと近くなった気がする。もちろん物理的な意味でなく心理的に。なんで？ …… まあ、いいか。それを考えるより今は引き受けたからにはしっかり親代わりをこなさす方が優先だ。

「うん！」

と、元気よく返事を返してきた。

そして帰ろうとしたんだけどその前に……

「で、なんで写真とらないといけないのさ」

僕は随分と金がかかっていそうなカメラ一式を構えるアグニを睨む。

「記録だ記録。ほーら、アルトちゃんママに隠れたりしないで笑って笑って」

アグニがおいでおいでと手招きするが、アルトはカメラから隠れるようにギュッと僕にしがみつく。僕はその様子にくすつと苦笑してしまう。

「ほら、アルト。隠れてないで、ね？」

「う、うん……」

アルトの背を軽く押して前に出すと途端にアグニがパシャパシャとフラッシュをたいた。

なんか熱心な気がすんのは気のせいかな？

「じゃあ、そろそろいいんじゃない？」

「あつ、はい。アルト」

朱音さんに振り向いて答えてからアルトに手を差し出す。すると

アルトは嬉しそうに「えへへ」と笑いながら僕の手をとる。その小さくて暖かな手は断じて兵器のものなんかじゃない。例えそうだとしても親代わりになる僕がさせない。

どうして初対面も同然の子にそう思えるのかわからないけど、そう願ってしまふ。不思議だな。思わず笑ってしまふ。

だが、その様子をさらに撮るアグニ。

「いつまで撮ってるのさ？」

さすがにうつとおしい。

「おっと、すまん。この頃使ってないから腕が鈍ってないか確かめたかったんだ」

本当だろうか、さつきから微妙な熱意がある気がしてならないんだが。いぶかしげにアグニを見てると、アグニが僕の表情に気づいたのか笑いながらポケットに手を入れる。

「俺の趣味は旅行先で写真を撮ることなんだよ。この写真なんかどうだ？ なかなか自信作なんだが」

そう言ってアグニが自分が撮ったという風景写真が裏表紙に小さくプリントされた手帳を見せてくる。山頂で撮った朝焼けの景色が写っていた。

ふーん？ こういう趣味もあるんだ。ちょっと意外な一面を垣間見た瞬間であった。

そして、今度こそ帰ろうとして、

「ああ、あと忘れてた。蒼穹置いてってくれ」

「へ？ どうして？」

アグニの突然の言葉に僕は首を傾げる。

「蒼穹の中のデータからアルトちゃん用の日本語修正パッチを作るからだよ」

なるほど。僕はポケットからペンダント状態の蒼穹を取り出してアグニに渡すのであった。

そして、家に着くとアルトはわーと目の前の家に感動したように

見つめている。その前も車内でアルトは流れ行く景色を飽きもせず
に楽しそうに眺めていた。

「アルト、ここが僕らのお家だよ」

朱音さんは「ママなんだからママっていったら？」なんて後ろで
茶化してくるけど無視だ無視。口では勝負にならないに決まってる。

そして、アルトはじつと家を見ると、

「きれーなおうちだねママ！」

と、アルトが破顔する。

「そうだね。見た目通りいい家だよ」

僕は微笑みながらまたも疑問が浮かんた。この子はこの家が綺麗
だといった。それは先史文明の人間の感性も僕らに近いということ
なのか？ そういえば、この身体もわりと美人な方だし……むむむ、
気になるけど、今はそんなこと考えてる場合じゃないな。

「じゃあ、いこうね」

「うん！」

僕はアルトの手を引いて家に上がった。

そして、アルトに家の中を簡単に案内した。アルトは部屋に入る
たびに物珍しそうにいろんなものをぺたぺた触っている。

「さて、アルトちゃんのことはどうでしょうか？」

その様子を視界の片隅に置きながら朱音さんに聞く。

「……きみ、ここまで来ても嫌なの？」

朱音さんが呆れ気味にため息を吐く。いや、そうじゃないですよ。
さすがの僕もそこまで往生際悪くないですよ。それに母親役をしつ
かりこなそうって、さつき決めたし。

「そうじゃなくて、明らかに親子なんて無理な歳の差だし、部屋だ
って」

「アルトちゃんは君の姉さんのセレナ・テストロッサの娘、だけど
事故で夫とともにアルトちゃんに物心つく前にセレナは亡くなって

しまった。だから君が代わりに育ててきたら、いつの間にかママと呼ばれるようになっていった。OK？」

……ずいぶんと流暢に朱音さんはカヴァーストーリーをでっち上げた。でもなあ、

「なんかありきたりすぎますよね」

ぽそつと僕は呟く。すると、朱音さんはきらんと目を光らせる。

「もつと凝った話のほうがいい？　なら……五年前、まだ十歳だったノエル・テストロツサは欲情したロリコン親父によって襲われてしまい、どん底の精神状態に陥ってしまった。が、心優しき幼馴染の宇紗野ハルに慰められ、いつしか二人は心を通わせ」

「すいませんごめんなさい。それは勘弁してください。普通の方がいいです」

重いし、そんな相手いないし、意味分らない上にこのままじゃ同情と憐みの目で見られることになってしまう。

結局、カヴァーストーリーは朱音さんが最初に言ったものを採用。そして部屋は僕と一緒にいうことになった。

「ママと一緒にじゃないのは寂しいがっちゃんじゃないかなあ？」

なんて言われたら頷くしかないですよ。うん。

& a m p ; # 8 1 9 5 ;

第二十六話 子供って可愛いかも

まあ、簡単な設定も決まりアルトと暮らすことになったのだが、まあ、子供とは思ったより手がかかるということが初日のうちにわかった。

例えば、

「た〜んけん、たんけ〜ん」

朱音さんがご飯を作ってる間とてとて家の中を走るアルト。僕はないように着いていく。そしたら、

「わふ！」

どしんと廊下の壁にぶつかってアルトが倒れた。

「大丈夫?!」

な、斜めに走ってたから壁にぶつかるかな? なんて思ってたけど、まさか本当にぶつかるとは……慌てて僕はアルトに駆け寄る。

「いたい〜」

涙目で額を抑えるアルトを立たせてあげる。

それからぼんぽんとお尻をはたいてあげる。

「アルト、もうちょっと気をつけようね。アルトが怪我したらママも朱音お姉ちゃんも心配だからね」

うん、と素直に頷くアルト。泣きそうな顔がちょっとかわいい。

だけど、その後も三回ほどアルトは壁にぶつかるのであった。だ、大丈夫かな? これからが不安になる……

そんな風に家の中を走る回る以外にも、興味が惹かれた色んなものに触れたりする。例えば、花瓶に触って落としかけたり、テーブルの上にある小物を落としたり……さつきから落としてばっかだね。あと、

「ママこれなあに?」

テレビの画面を触りながらアルトが聞いてくる。

「これはテレビだよ」

「てれび？」

うんと僕が頷いてテレビの電源を入れると画面にちょうどアニメがやっていた。内容はかわいらしいモンスターと人間が仲間と冒険するアニメだ。

アルトが驚く。

「うわー！」

「これは遠くの映像を映す機械でね」

って聞いてないか。夢中でテレビを見るアルトを僕は微笑ましく見続けた。

んで食事の時間。今日のメニューは朱音さん曰わく子供はみんな大好きハンバーグ。

アルトのだけお子様ランチ風で、お皿に乗ったご飯の上に旗が刺さっている。

あとハンバーグも食べやすいようにという朱音さんの配慮から最初から細かく切って置いてある。食器も僕らがお箸だけどアルトは食べやすいようフォークとスプーンだった。しかも、どこにあったか子供用。

「アルトちゃんおいしい？」

朱音さんが質問するけどアルトは意味がわからないようで子首を傾げる。

「おねえちゃんはおいしい？　って聞いたんだよ」

すかさずアルトに翻訳すると、アルトは元気よく頷く。

「うん！　おねーちゃんのごはんすごくおいしいよ」

「おいしいそうです」

すぐに僕は翻訳する。

うつ、アグニ早く修正パッチ作ってくれ。いちいち翻訳するの面倒だよ。

アルトは口いっぱいハンバーグを頬張る。その様子はとても微

笑ましかったのだが……フォークを握って使うという見ててハラハラする手つきでハンバーグを口に運んでいる。

落としたりしないかな？ 服に着いてソースでシミがつかないかな？

しかし、僕の心配をよそにそんな危なっかしい手つきでまたハンバーグを運ぼうとして、

「あっ」

ついにハンバーグをぽととテーブルの上に落としてしまった。

あちゃー、やっぱりやっちゃったか。アルトは悲しげに落ちてしまったハンバーグを見ている。僕はそのハンバーグを箸で取って、

「ほら、アルト、あーん」

あーんをしてあげる。アルトは嬉しそうに口を開けてそのハンバーグを食べる。

朱音さんはそんな僕らを優しげな微笑みを浮かべながら見つめていた。

ただ、食事が終わった後、

「ねえ、ノエル、アルトちゃん是我的ことなんて呼んでた？」

なんて聞かれた。おねえちゃんって言ってましたよと言ったら、

「そっか、おばさんじゃなかったんだよかった」なんて呟いていた。やっぱり気になるのかなあ？

で、食事が終わった後、後片付けをしていたら朱音さんが、

「二人ともお風呂沸いてるから入っちゃって」

え？ お風呂？ むむむ……

「朱音さんが一緒に入ってあげてくれませんか？」

なんてつい頼んでしまった。

だって、忘れられてるかもしれないが僕は元男。幼稚園児ぐらいの子とはいえ一緒に入るのはちょっと恥ずかしい。でも、

「私は言葉わかんないからね。それに、ほら」

そう言つて朱音さんがアルトを指す。

「ママ、アルトといつしよに入るのいやなの？」

と、悲しそうな目で僕を見てきた。うう、その目にはちょっと弱い。

「ううん、じゃあママと一緒に入ろっか」

「うん！」

アルトはママとおふろへと嬉しそうに笑う。その笑顔を見たら僕は「ま、いっか」という気分になった。

で、部屋に寝巻とバスタオルを取りに行き、朱音さんからアルトの寝巻を受け取ってから風呂場に。

それから僕がアルトと湯船に浸かっている時だった、アルトは水面（湯面？）に浮かぶ僕の髪を弄る。

「ママのかみつてやわらかくてすべすべ」

楽しそうに僕の髪を弄るアルト。なんとなくその感じが心地いい。

「アルト、髪洗つてあげるから一度お風呂上がろっか」

ざばつと湯船から出る。アルトも「はい」とすぐについて来る。そして、プラスチックの椅子に座らせて、朱音さんに渡されたシャンプーハットを付けてあげる。それから髪の手を洗いはじめた。

アルトは目をつぶりながら嬉しそうに笑っている。うーん、さらさら綺麗な髪だな。それに僕の髪によく似ている気がする。やっぱり同じ機械天使だからかな？

なんとなく楽しくなっていた僕なのでした。

で、風呂から上がってリビングに戻ると朱音さんがいっと牛乳の入ったコップを差し出してくれる。

「ありがとうございます」

「おねーちゃんありがとー」

僕らはそれを受け取る。

ふつと一息ついて足を肩幅まで開き、開いてる左手を腰に手を当てて右手にしっかりと握ったコップを口にあて一気に煽る。これぞ、

牛乳を飲む時の正式スタイルだ。これは譲れん。

「ノエル……男の子みたいでみっともないよ」

僕元男ですよ！？　まさか忘れられてる？　それかなりショックですよ！！

それからリビングでゆっくりしてたら、アルトがうとうととした。

「アルト、もう寝る？」

「うん」

第二十七話　ぐちぐちぐちっ

僕はアルトとベッドに入る。でも、このベッドはもとも一人用でアルトが小さいとはいえ二人だとちょっと狭い。

「大丈夫？　狭くない？」

「ん〜ん」

アルトは嬉しそうに笑って僕に抱きついてきた。

「ママのおっぱいおきき」

すりすりアルトが僕の胸に顔を擦り付けてくる。う、ま、まあ一般より大きい。確か朱音さんがEだって言ってたっけ……で、さすがに恥ずかしいな。

「あ、アルト、できたらそろそろやめてもらえないかな？」

くすぐったさとか恥ずかしさで真っ赤になって頼むとアルトは名残惜しそうに顔を離れた。

ふ、ふう助かった。正直、胸って存在にはまだ慣れてないし、

「あのね、ママ〜」

「ん？　なに？」

思考から戻ってアルトに聞くとアルトははにかむように手を出してきた。

「あのね、おててにぎってて」

「うん。いいよ」

そして、アルトが安心できるような手を握ってあげる。アルトはえへへと嬉しそうに笑ってくれた。僕も頬が緩む。

かわいいなあと思えた。

「アルト、おやすみ」

「うん、ママおやすみ〜」

目を閉じると、すぐにアルトは規則正しい寝息をたて始めた。

あまりにかわいくて僕はぷにぷにその頬を突つつく。そんなことしたら、

「ノエルもう寝た？」

朱音さんが部屋に入ってきた。

「いえ、起きてますよ」

「じゃあ、ちよつといいかな？」

どうしたんだろう？ こんな時間に、ってまだ九時にもなっていない、

僕はアルトと繋いでいた手を放してそつとベッドから抜け出す。

「なんですか？」

「ん、ちよつとね」

そうだけ言つて歩きだす朱音さんに僕も着いていく。

そして、到着したリビングで朱音さんは嬉しそうにグラスとワインボトルを準備した。よく見ればテーブルにはおつまみらしきチーズやジャージャーキーが置いてある。

「……あの、朱音さん？」

「これ、結構高かったんだよね」

そう言つて朱音さんはコルクを抜いてとくとくとワインをグラスに注いだ。えつと、だから朱音さん、一体何を？

朱音さんはここ一週間で僕の定位置になった席にワインの注がれたグラスを置く。

「ほらほら、せっかく入れたんだから早く飲もうよ」

あ、やっぱり？

まあ、グラスが二つあったんで予想はできたが、でも、

「僕未成年ですよ？」

「大丈夫、私だって十五の時から飲んでたし、それに君の身体はアルコールは飲んでもすぐに分解されるから酔うことなんてないしね」
さいですか……

僕は諦めて椅子に座り、グラスを取る。

「ごちになります」

「はい、どうぞ」

朱音さんはそんな僕を頼杖について眺める。

んで、一口。

「おいしい……」

自然と言葉が出た。なんていうべきなのかよくわかんないけど、すごくおいしい。

「当り前だよ。これ最高級のワインだよ」

朱音さんが笑いながら自分もグラスに口を付ける。それから、置いてあつたジャーキーを一口、なんか、似合わないよなあジャーキー。朱音さんの見た目にもこのワインにも。

そう思いながらも僕もジャーキーを食べる。だってうまいもん。にしても、うらやましいな」

朱音さんは柔らかな笑顔で僕のことを見る。

ん？ 何がだ？ ジャーキーをぱくつきながら話を聞く。

「私には子供いないのに、君にはもう……」

おおよと、朱音さんがわざとらしく泣く。

だってなあ……

「朱音さん旦那さんいないじゃん」

ぼろっとそう零す。子供欲しいならまずはいい人見つけないと、

「私もう結婚してるんだけど……」

朱音さんの独白にぼろっと啜えてたジャーキーを落としてしまった。

え？ うそ……

「ええええ？！ 朱音さんもう結婚してたの！？」

「……なんか失礼な反応だね」

思わず身を乗り出して聞く僕に朱音さんが白い目を向ける。

だって、朱音さんってすごい美人でいろいろできる人で高嶺の花って感じするし、それを落とした猛者がいたとは！

あれ？ でも、

「旦那さん見た覚えありませんよ？」

「遠くに仕事行ってるからねえ」

そうなんだ……そこで朱音さんは飲み終わったグラスに次の分を

注いで、また一口、

「ほんと、うらやましいなあ」

……すいません朱音さんなんでそんな低い声なんですか？

それに、なんでもう目が据わってるんですか？　そして、なんですかこの悪寒は？

「私なんてまだできないのに……毎晩頑張っても無理だったし、不妊治療なんて意味ないし、四日ほど生理来るの遅れてもしゃー！？　なんて期待して又大喜びしたことだってあったっけ……」

やばい、本格的にやばい……

逃げようと思ったけどいつの間にか僕の首元に突き付けられた鎌を見て諦めた。おとなしくお話を聞けばいいんですね……

「それにね彼はいい人だけど、でも不満がないわけじゃないんだよ？　そりゃあ、私のこと大事にしてくれて、ちよくちよくプレゼントとか送ってくれるけど、でもね、優柔不断でうつかり屋さんで、鈍感で甲斐性なしでデリカシーない上に物事深く考えないで子供じみたことするし、人がひた隠しにしてる趣味を暴露したりするし、気障なものいいしたりもするし、子供の頃から中身がなんも成長してないんだよ。それも彼の美德ではあるけど、でももうちよつと成長してほしいの。ああ、あとドがつくほどのシスコンなところも直すべきだね。本当に妹に甘くて……」

その後、日にちが変わっても間朱音さんの旦那さんに対する愚痴は続き僕がベッドに戻れたのは四時ぐらいであった。

戻るとアルトはすごく幸せそうに眠っていた。僕はその頬をまたぶにぶにする。

ぐすん……アルト、ママもう挫けそうだよ……

第二十七話　ぐちぐちぐち　♪（後書き）

鈴：「刹那……お前」

刹：「言っな、頼むからなにも言わないでくれ」

鈴：「朱音にここまで（不満を）言わせるなんて……刹那、恐ろしい子！」

刹：「うっせーよ!!」

評価、感想おまちしております！

第二十八話 おじさんだつて

アルトと暮らすようになって早二週間がたった。その間に色々あったけどその話はまたの機会に。

で、今はアルトを託児所に預けて朱音さんの訓練を受けている。そしてラストの模擬戦を終えたところ。

「ありがとうございます……」

僕はげえげえ荒い息を吐きながら通りのど真ん中に座り込む。朱音さんは鎌を振って折り畳むとスカートの中に片付ける。

「はい、お疲れ様。最初の頃よりだいぶよくなったね」

朱音さんが笑う。そりゃあしごかれましたから。最初の頃は一発もらっただけで痛みで動けなくなってたから、そうならなくなっただけでも大した進歩だと思う。

この一週間を思い出す。次の日から初日なんて目じゃない訓練の量と二回ある朱音さんとの模擬戦。途中でちゃんと休憩もあるけどそれでもキツイ。

「君って物覚えよくてほんと教えやすい生徒だよ」

朱音さんが自分のことのように楽しそうに笑う。嬉しくなって僕も頬が緩む。

だいぶ落ち着いてきたから尻を叩きながら腰を上げると、

「よう、お二人さん。もういいかい？」

後ろから声をかけられた。振り向くとそこには日焼けしてがっしりした体格、短めに切られた黒い髪の二十代後半に思われる人、

「篠原隊長」

自衛隊からの出向部隊の隊長である篠原謙吾さんとその部隊の方々がいた。

「はい、今終わったところですからどうぞ。ノエル行くよ」

ぺこりと朱音さんはお辞儀をしつつ出口に向かう。

「あつ、はい。それでは篠原隊長」

僕もお辞儀しながら朱音さんと一緒に訓練所から出た。

うんうん、やっぱりいいなあ、あの二人。去っていく二人を部隊の全員で見送りながら一人で頷く。

今ではノエルちゃんは神無でアイドルのような存在だ。

かわいい顔立ちの僕っ子で、まだ二週間もたつてないのに朱音さんと人気を二分している。俺もノエルちゃん派だ。

先日はあの二人と戦場に立てるかもしれない自分たちは幸運だと洩らした隊員もいたが同感だ……と話が逸れたな。そろそろ気を絞めるか。

「よし、やるぞお前ら！ あの二人に遅れをとらないようにな！！」
『了解！！』

隊員全員の気合いの声が轟いた。

「ですが隊長、俺たち本当にあの二人と肩を並べられるんですかね？」

ぼそつと副長の上坂の呟きに改めて訓練場であるビル群を見る。

小さなビルがいくつか倒壊し、通りのアスファルトは所々が捲れている。

訓練所の惨状に隊員たちは汗を垂らす。しかし俺は答えん。断じて女の子に敵いそうにないなんて言えるか！！

僕はシャワーで汗を流してから託児所に向かう。うむ、もう自分の裸に完全に慣れてしまったな。喜ぶべきなのか悲しむべきなのか

……

託児所に着くとアルトとアグニがいた、ってアグニ？ もしかしてアルトの相手してくれてたのかな？

「アルト」

僕が声をかけるとアルトはくるつと振り返って満面の笑顔を浮かべる。それから立ち上がってこっちにとてと近づいてくる。

「ママっ」

ぽふつと僕の腰らへんにアルトが抱きついた。僕はこの二週間でポニーテールになったアルトの頭を撫でる。アルトのきれいな金髪はふわふわしててずっと撫でたくなるなあ。

ついでに、アルトの耳は普通の状態になっている。どういう仕組みかわからないけど、僕の耳もなんかアグニがプログラムを打ちこんだとたん引っ込んだのだ。

なんでも体内中のナノマシーンに働きかけたとかどうとか。

「ごめんね、ちよつと遅くなっちゃったかな？」

「ん〜ん、おじさんがあそんでくれてたから〜」

ふるふるアルトが首を振る。おじさんか、アグニ。見れば白衣の後ろ姿の肩が小刻みに揺れている気がする。

……ちよつとからかつてみよつか。

「そつかあ、おじさんが遊んでくれたんだ。じゃあおじさんにちゃんとお礼言おうね。『おじさんありがとうございます』って、おじさんも喜ぶよきつと」

「うん！」

おじさんと言う度にアグニの肩がピクピク反応している。やっぱり嫌だったか。

そして、とてとてアグニのそばまでアルトが駆け寄って、

「おじさん、ありがとう！」

満面の笑みでアルトがお礼を言うとアグニが振り向く。うお、泣いてるのかよアグニ！一瞬涙が血涙にも見えたぜ。そんなにシヨックだったんだ……でも、ここまでシヨック受けるもんなのか？それともトラウマでもあるのか？

そして、アルトの肩に優しく手を置いて、

「頼むから……ぐすつ、せめてお兄さんと呼んで……」

泣きながらアルトにそんな懇願をした。

しかし、大の大人が泣きながら頼む内容じゃないぞそれ。

案の定アルトはこっちに怯えながら駆け寄ってきて、

「ママ、あのおじさんこわい……」

「ぐはっ！」

ついにトドメとなり、泣きながらアグニは倒れた。そこに涙でできた水たまりが生まれる。きゅーしょにあたったこーかはばつぐんだー。そんな言葉が頭に浮かぶ。

「俺まだ二十代……」なんて聞こえた気がするけど、気にしない気にしない。

……後で謝つとくか。さすがに悪かったと思うし。

アルトの頭を撫でながら、僕はそんなことを考えた。

第二十八話 おじさんだって（後書き）

鈴：「憐れなりアグニ……」

刹：「そっぴゃあいついくつなのさ？」

鈴：「二十九だけど？」

刹：「……まあ、確かに嘘は言っていないな。うん」

評価、感想お待ちしております。

第二十九話 明日から学校か

で、食堂。アルトと朱音さん、あとアグニとご飯を食べる。時間をズラして来たため他には何人かしか食堂にいない。

この食堂はメニューが豊富な上に、おいしいなかない場所だった。

僕は頼んだカルボナーラスパゲッティをアルトと食べる。あーんとしてあげるとアルトは嬉しそうにスパゲッティを食べる。うーん、やっぱりかわいい。僕は目を細めてアルトを見る。

「アルトおいしい？」

「うん、おいしいよ」

僕が聞くとアルトは嬉しそうに頷く。それを見て、

「アルトもだいぶ言葉を覚えてきたな」

立ち直って今は鯖味噌定食を食べていたアグニが唐突にそんなことを呟いた。なんでも遊ぶという行為は後に情操教育がどのような結果をもたらすかを調査するための一環だったらしい。

ついでに言えば、この二週間のうちにアルトには出来上がった日本語修正パッチを入れられている。あとは、細かい言葉を教えていけばいいそうだ。まあ、そうでないとアグニと一緒に遊ぶことできないしね。

「そうだね。この一週間ノエルが毎日買ってきた絵本を読み聞かせてあげたおかげかな？」

エビにサツマイモにエリンギなどいくつもの天ぷらとコロケ二つに卵とワカメとネギにテンカスをたっぷり載せた上で七味をかけたうどんを啜りながら朱音さんが答えた。てか具乗せすぎだよ朱音さん。

「この調子ならあと一、二週間でこっちの言葉に慣れるんじゃないのかな？」

そんなに絵本って効果あるのかな？

僕はアルトにあーんとしながら寸前で自分が食べながら考える。
するとアルトがぷうつと頬を膨らましていた。あーもうかわいいな
あ。つつい膨らんだ頬をつつく。

すぐにアルトは膨らませるのを止めてしまう。僕は残念に思いな
がらアルトの頬をつつつくのをやめた。

「そういえば、圭一は明日から学校だったな」

アグニが思い出したように呟く。

「ん？ そうだね」

そう、僕は明日から陣内高校に通うことになっている。実は陣内
高校は僕にとって縁の浅からぬ人物がいるのだが、朱音さんが他に
ちょうどいい学校がなかったとのことで、仕方ない。すでに制服と
教科書も準備してあるし、勉強の方も朱音さんに見てもらってたか
ら大丈夫。

まあ、知らない人たちに囲まれて過ごせるかという不安はちよつ
とだがある。でも、それでも学校生活は楽しみだった。

「そうか、がんばれよ」

「……うん」

アグニにそんなこと言われるとは思っていなかったから、ちょ
っと面食らったけど気持ちは嬉しかった、

そんな感じで昼飯の時間は過ぎていった。

余談だが、朱音さんは最後まで卵を残して最後にちゅるんと飲み
干した。まるで蛇だった。

そして、そのあと、もう一度訓練をしてから家に帰ってきた。

そして、お風呂上がり。アルトの髪を櫛で梳いてあげる。

朝、アルトの髪を整えて上げてリボンを結んであげる。そして、
お風呂前にリボンを外し、上がったら梳いてあげる。これはもうこ
の二週間でできた日課だ。

この髪を梳くのが僕は割と好きだ。アルトの髪は量が多いから大
変だけど触ってて感触がよくていい感じ。アルトも髪を梳くのが好

きなのか終始笑顔だ。

「んっ、終わったよ」

ぽんとアルトの頭に手を置く。

「ママありがとー」

アルトがぺこりと頭をさげてお礼を言う。僕はその様子がかわいくてついつい頭を撫でてしまう。その様子を朱音さんが眺めていて、「早く寝ちやいなよ。明日からノエル学校あるんだから」

はーいと僕とアルトは元氣よく頷いた。

んで、今は僕はアルトと一緒に布団に入っている。すでにアルトはすーすーと静かな寝息を起てて眠っている。

僕は何となくアルトから視線を壁の方に向けた。そこには僕が明日から通う学校の制服がかかっている。胸元に赤いリボンに、長すぎず短すぎないスカート。所々が女の子が好みそうなデザインになっている。

一度着てみたけどなかなかいい感じでアルトも「ママにあってるよー」って言うてくれてちよっち嬉しかった。

「よろしく頼むね」

僕はそう服に頼んでからアルトをキュッと抱き締めて眠りに落ちた。

第二十九話 明日から学校か（後書き）

評価、感想お待ちしております。

第三十話 いってきます。

朝、目が覚めるとアルトはまだ寝ていたから、僕は起こさないようにパジャマをつかんでいたアルトの指をそつと外してから静かに布団から抜け出す。

それから一度身体のコンドিশョンをチェック。ここ二週間でこういった機能の使用はだいぶ慣れてきたし、今は視界に表示されるようにすることで直接頭に入れるよりも負担を減らしてある。

……毎度のことながら右腕以外のほとんどがイエローってのは怖いな。蒼穹はいつも通りオールグリーンだけど。

『私はほぼ原形ですから』

そういうことを言える蒼穹がなんかうらやましい。

それから着替えを持って風呂場に向かう。

すでに朝のシャワーは日課となっている。部屋から出て風呂に向かうと先に起きて洗濯をしていた朱音さんとバッタリ会った。

「おはようございます朱音さん」

「おはようノエル」

挨拶を交えてから僕は脱衣所でパジャマと下着を脱いでシャワーを浴びる。

そして、軽く汗を流して風呂から出ると、用意しといた換えの下着を付けて陣内高校の制服に袖を通す。

まずはYシャツを着て、チェック柄の膝よりちよつと短いくらいのスカートを履く。それから胸元で薄いピンクのリボン結び、黒地に縁が紅いブレザーを羽織って、鏡を見てリボンが曲がってないかなどを確認。うん、問題なし。

女の子の服着るのも完全に慣れたなあ……ははっと思わず苦笑いしてしまう。

それから僕は脱衣所を出てリビングに向かうと朱音さんが目玉焼きを焼きながら「ちよつと待っててね」とったので席について待つ。

と、ドアを開けてアルトが目を擦りながらリビングに入ってきた。
「おはようアルト」

「ママ、おはよー……」

眠そうにアルトが答える。僕はその様子に苦笑しながら席を立つ。
「ほらアルト、顔を洗ってきなよ」

「うん」と答えるアルトを促しながら洗面所に向かう。

顔を洗って濡れて目が開けられないアルトは手探りでタオルを探すけど、うまく取れなくてタオルを落としてしまった。

僕がそれを拾って渡してあげるとアルトは嬉しそうに笑って顔を拭く。

「ありがとうママ」

「どういたしまして」

それから、リビングでアルトの着替えを手伝ってあげてから髪を梳いてあげて、整え終えたらリボンで髪を結ぶ。

それを終えて席に着くとちょうどよく朱音さんが焼いたトーストを置いたところであつた。

すぐにみんな席について食べ始める。

「ああ、そう言えばノエル、あのことちゃんと覚えてる？」

「あのこと？」

いきなり朱音さんが言ったことに首を捻る。

「今日から通うことになった陣内高校にいる人のこと」

あ、そのことか。

僕は思い出す。陣内高校、それは僕の従姉妹であるかなねえこと
草薙香苗さんが通う学校なのだ。

「大丈夫だとは思っけど気をつけてね」

「わかってます」

僕は頷く。まあ、朱音さんの心配もわかるけど、ちょっと考えてくれ。

普通死んだ親戚のが女の子になって自分の前に現れるなんて思う
だろうか？ よっぽど下手なボ口を出さなければ大丈夫だろう。

……間違ってもかなねえなんて言えないな。僕しか呼ばなかったし。

「ママ、おかおしわしわにしてどーしたの？」

アルトが手を伸ばして僕の額に触れる。あ、そんなにしわが寄ってたかな？

僕はアルトに微笑みながら大丈夫だよと言う。だけど、アルトは納得できなかったのか、朱音さんの方を見る。

「あかねおねーちゃんも、あんまりママをこまらせたらめっだよー！ すとれすはびよーのたいてきなんだから！」

僕らはアルトのその言葉に噴き出して笑うのであった。

そして、朝ごはんを食べ終わると僕はカバンを持って玄関に向かう。

「それじゃあ、行ってきます」

僕は靴を穿きながら見送りに来てくれた朱音さんとアルトの方に顔を向ける。そこで朱音さんの後ろでアルトが寂しそうな顔をするのに気付いて僕はその頭をなでて上げる。

「朱音さんの言ううとこ聞いていい子にしててね。夜にはちゃんと絵本読んであげるから」

そう言うアルトは一転して笑顔になった。

「うん！ アルト、いい子にしてる！」

元気よく頷くアルト。うん、やっぱりアルトはいい子だ。

僕は嬉しくて頬を綻ばせながら、朱音さんを見る。

「それじゃあ、アルトのことお願いします」

「うん。にしても本当にお母さんみたくなってきたね」

にやにやと笑う朱音さんに苦笑を返しながら僕はドアノブに手をかける。

「じゃあ、行ってきます」

『いつてらっしゃい』

第三十話 いってきます。(後書き)

次回は学校編です。

第三十一話 学校です

教室に入って、ふと思った。新人役者のオーディションってこんな感じなのかな？ と。本物なんて知らないけど、要するに自分たちの仲間になるかもしれない人を見るんだし同じようなものかな？

そして、壇上に立った自分に教室中から集まる視線。うう、恥ずかしい。

「はじめましてノエル・テストロッサです！ よろしくお願いします！」

僕は強ばる顔でぎこちなくとも笑おうと努めつつ、自己紹介して勢いよく頭を下げる。

そして教室は静まり返る。も、もしかして、なにか失敗しちゃったかな？

僕が心配になって顔を上げると突然歓声が鳴り響いた。思わず引いてしまっていたら、「赤くなってる！ かわいいー！」「髪きれー！」とか主に男子とほとんどの女子が騒いで、何人かは品定めするような目を向けてくれた。

ああ、でもよかった。歓迎されてるみたいだ。ほっと溜息をつきながら僕は笑う。そしたら、みんなぼけっとこつちを見たと思った。なんかさらに歓声が大きくなった。な、なんで？

「はいはい、みんなそこまで。テストロッサさんはあそこの空いてる席をどうぞ」

古屋先生が指すのは窓際の一番後ろの席だった。

補足すると古屋先生はまだ若そうな肩まで髪を伸ばした利発そうな女の先生だ。

「わかりました」

僕は教壇を降りて、その席まで歩き、座る。カバンの中から教科書や筆記用具を取り出していたら横からトントンと肩を叩かれる。

そっちに向くと隣の席の女子がひらひらと手を振っている。整っ

た顔立ちでセミロングのかわいらしい人だ。

「よろしくテストロッサさん。困ったことがあったらなんでも聞いて」

と言ってくれる。僕は「ありがとう」と返す。少し嬉しくて頬が緩むのであった。

そしてHRが終わると予想通り転校生なら必ず受けるであろう洗礼、質問タイムが始まった。

「テストロッサさんってどこの出身ですか？」

「ヨーロッパの出身だよ」

質問してきた女子に心の中で謝る。本当は僕、外に出たことすらないです。すいません。

「日本語すごく上手だね。どこで習ったの？」

「習ったんじゃないかって覚えたが正しいかな？ 私、物心付いた時から日本に住んでたから」

中身が日本人なんて言うわけにいかないしね……

「なんでですか？」

「お父さんがこっちで仕事しててね。それにうちの両親日本が好きだったから」

両親はうん、こっちで働いていたよ。それは本当だから。

さらにいろいろ聞かれるがなんとか誤魔化しつつ心の中でずっと謝り続けた。ごめんなさいほとんど嘘なんですよ……

そして一時間目の授業、数学。目の前で中年ほどの先生が因数分解についての説明をしているのだが……うわ、ダメだ。見ただけで問題の答えがわかる。まあ、僕自身が高性能コンピューターみたいなもんだからなあ。

この身体になる前は少し苦手だったのに反則級だなと思わずくすくすと笑ってしまった。

それから僕はなんとなく教室全体に目を向ける。なんか久しぶり

だなあこういう雰囲気は。

先生が前で話しながらも前後の人間で話していたり、真面目にノートをとって鉛筆を動かす音とか、教室がいろんな音で満ちている感じは、前の学校とはまた少し違って感じたけどまたその輪に入るようで、ちよつと嬉かった。

んでお昼。朱音さん手製のお弁当を取り出していたら、

「テストロッサさん」

また隣の女子から声をかけられた。

「あ、えつと」

そう言えばまだ名前聞いてないや。

僕が何に困っているかすぐに気づいたのか彼女は小さく笑う。

「はやな、柏木はやな。よろしく」

「あつ、どうも柏木さん」

僕が頭を下げると柏木さんははやなでいいよと言う。

柏木さんは日本人らしい黒髪を肩ぐらいで切りそろえている僕より少し背が低いくらいの小柄な女の子で、整った顔立ちをしている。「で、なんですか？」

「テストロッサさんはまだ校内のことよくわかってないよね？ よかったらこの後案内しよつか？」

笑いながら柏木さんが提案してくれる。確かに、見取り図は見たけど実際に見ていた方がいいよな。

僕はありがたく柏木さんをお願いをするのであった。

陣内高校の構成は校舎左手に一回り小さい建物に体育館とその横にプール。右手奥にちよつと古びた建物がある。話ではその建物が学食だそうだ。

柏木さんはまず授業に使う教室を案内されてから、校舎の左にある建物にある学食に案内してくれる。

「だいたい見て回ったかな。あとは……こっちなかな？」

そう言つて案内されたのは右手奥にあつた古びた建物。
「ここが部室棟に使われている旧校舎だよ」

第三十二話 再会

現在僕は追いつめられています。いや、突然何言ってるん？ と思われそうですが、順番を追って説明しましょう。

僕は柏木さんに案内されて部屋棟と呼ばれる古めの建物に訪れました。そしたらいきなり柏木さんが僕の手を引っ張って、端にあるこの部屋に連れ込まれたんですよ。
もしかして……

以下圭一の妄想です。

「テストロッサさんってかわいいね」

「あ、あの…… 柏木さん」

「ねえ、食べていい？」

「か、柏木さんホントに待って!!」

「ダメ、待たない」

「いやー!!」

以上、圭一の妄想でした。あくまで妄想です。

僕はガタガタ震えだす。

「あ、あの柏木さん、そ、そういうのはホントにす、好きあった相手同士するべきで、まだ僕らは知り合ったばかりなんですから、だからまずは友達から……」

僕は部屋の角まで逃げる。こ、これで後ろからなんてことはないはずだ。

だが、彼女は呆れたように僕を見る。

「なにか壮絶な勘違いしてるみたいだけど違うよ」

えっ？ よかったあ……

僕がほつと息をつく、彼女はぱんと手を合わせてくる。

「お願い！　うちの部の危機を救って！」

……はい？

柏木さんの話によれば、彼女の所属する漫研は去年、部員の殆どが卒業してしまい、現在柏木さんと三年の部長一人の計二名が所属しているだけだそうだ。

しかし、この学校では部として認められるのは三人からで、このままでは同好会になってしまい、部室から立ち退かなければならぬらしい。

「だからお願い！　名前貸してくれるだけでいいから！」

どうしよう。僕だと本当に名前を貸すだけになるし……

「他の人は？」

「何人が頼んでみたんだけど漫研ってだけで敬遠されちゃって」

柏木さんは首を横に振る。

うーん、困っている人を見捨てるのもなあ……うん、仕方ない。

「滅多に部活に出れませんか？　いいですか？」

「本当！？　ありがとう！」

僕がそう言うのと柏木さんは嬉しそうに僕の手を取って上下に振った。

ま、いいか。そう思ったところでドアが開く。

柏木さんが振り返る。

「あつ、部長！　新しい部員捕まえましたよ！」

「えっ、本当に？」

そして聞こえるのは、聞き覚えのある声、なぜなら部室に入ってきた人は僕がよく知る人物だったから。

腰まである綺麗な黒く長い髪、少し赤みがかった目。おっとりした雰囲気と優しそうな顔立ちのその人は僕の従姉妹で、よくお世話になった人……

「あれ？　あなたはけーちゃんのお葬式にいた……」

かなねえ……

かなねえって、漫研に所属してたんだ。しらなかった。

少し思考がフリーズしかけたが、気を取り直し、朱音さんが考え
といてくれた作戦を実行する。

「会うのは二度目でしたね香苗さん。私はノエル・テストロッサ。
よろしくおねがいします」

ぺこつと一礼。少し胸が締め付けられる。

「あ、……どうも。草薙 香苗です」

慌ててかなねえも頭を下げる。

柏木さんは僕らを交互に見てから首を捻る。

「あれ？ 知り合い？」

「まあ、そんなところですよ」

ポリポリと頬をかく僕。うまく笑えてるか自信ない。

「けーちゃんとは友達だったの？」

「ええ。こっちに越してきた時にたまたま友達になりました」

それが『草薙 圭一』と『ノエル・テストロッサ』の『関係』。

事故が起こる二週間前にビデオショップで『たまたま』知りあつて、
アニメ談義をしたら意気投合して友達になった、というものだ。

「圭一くんからあなたのことは聞いてました。頼りになるお姉ちゃ
んだって」

「そ、そうなんだ」

かなねえは複雑そうに表情を曇らせる。

僕はそのままなんとかこの場を乗り切ろうと話をしようとして、

唐突に涙が零れた。

「あ、あれ？」

「テストロッサさん？」

僕は涙を拭うけど一向に収まらない。次々と涙が零れる。柏木さ
んとかねえが心配そうに僕の顔を覗き込んできた。そして、かな
ねえの顔を見るとまた涙が零れそうになった。

ああ、でもなんとなくわかった。なんで自分が泣いているのか。
自分がよく知ってる相手なのに、関係を最初からやり直すことになっただのが、すごく悲しくて、寂しいんだ。

少しの間、僕は柏木さんとかかねえの前で泣き続けた。

第三十二話 再会（後書き）

評価、感想お待ちしております。

第三十三話 帰宅しましょうか

ようやく泣きやむとかなねえは僕に微笑んでくれる。

「ありがとう。けーちゃんのことと泣いてくれて」

今のは友達が死んだのを悲しんでるように見えたのかな？ 少しずきつと僕の心は痛んだ。

そこで少し申し訳なさそうな表情の柏木さんがばんばんと手を叩く。

「じゃあ、湿っぽいのはこのぐらいで、そろそろ教室に戻らないと次の授業に遅れちゃいますよ？」

あ、本当だ。もう昼休みも終わりそう。

「それじゃあ、また今度か……香苗さん」

やべー、危なくなねえって言いかけたよ……

僕は冷や汗が出そうになるが、そんな僕を不思議そうに見てからかなねえはにこつと笑う。

「うん。またねノエルさん」

かなねえもまた僕の名前を呼くれた。少し嬉しかった。

それから五時間目、HRと滞りなく今日一日の内容が終了する。

「疲れた」

僕はぐでぐでと椅子の背もたれに寄りかかる。久しぶりの学校は思ってたよりも疲れた。

しかも、休み時間には何度か教室の外で僕と言う外国人転校生を見ようとやってきた連中もいて、なんか動物園にいる珍獣にでもなった気分だった。

くつと伸びをしていたら、

「ねえ、テストロッサさん」

柏木さんに声をかけられる。

「なんですか？」

ぐりと柏木さんの方に顔を向けると彼女に、

「一緒に帰らない？」

と、誘われた。

それで帰り道、柏木さんと話しながら家路に着く。途中まで他の人たちも何人かいたけど、僕と柏木さんは他の人よりわりと離れた方に家があるみたいで、途中で別れて今は二人だけで世間話だ。

「ふーん、柏木さんのお父さんってFUGAKUで働いてるんだ」

「そうなんだよ。びっくりだねテストロッサさんの知りあいも同じ会社なんだ」

FUGAKUで柏木って人を一人知ってるけど、まさかね……

そんな風に話していたら道が二つに分かれてる場所に差し掛かる。

「私はこっちだから」

「あ、あたしはこっちだから、じゃあねテストロッサさん」

そう言っただけで別れる前にちょっと出来心で、

「また明日、はやなさん」

と名前で呼んでみた。さっきも名前でいいよって言ってたし、女の子って親しくなった相手を名前で呼ぶみたいだからね。

少し驚いた顔をしたけど、すぐにはやなさんは嬉しそうに笑ってくれる。

「うん、また明日ノエル」

ありゃ、いきなり呼び捨てか。

そうしてはやなさんと別れて家に向かった。

そして、家に着いて。

「ただいま」

ドアを開けて、家にながろうとするとぱたぱたと足音が近づいてくる。

「ママおかえりなさい！」

「アールト」

僕は走り寄ってきたアルトが抱きついてくるのをなんとか受け止める。っと、危ない危ないバランスを崩すところだった。

それから、アルトに遅れて朱音さんが出迎えてくれる。

「おかえりノエル」

「ただいま朱音さん」

お互いに笑顔で挨拶を交わした。

「今日いきなり香苗姉さんに会って焦っちゃったよ」

「あゝ、そのうち会うかな？　って思ってたけどもう会っちゃったんだ」

「へゝ、その人、ママのしりあいなのか？」

晩御飯の時間、三人で今日一日のことをいろいろと話した。

アルトは朱音さんに買い物に連れて行ってもらって、いろいろ買ってもらったらしい。

むう、それは母親役であるはずの僕のするはずのことなのに。朱音さんにはお世話になりっぱなしだなあ。次は僕がしてあげられたらいいんだけど。

それから、晩御飯を終えて、食後のお茶を飲んだときだった。

「ノエル学校は楽しかった？」

と、真剣な表情の朱音さんに聞かれる。それに対して僕はできる限り嬉しそうに笑う。

「楽しかったですよ。さっそく仲がよくなれそうな相手ができましたから」

そう言うのと、朱音さんも表情を緩める。

「そう、ならよかった」

それからお互いの顔を見ながら声を出して笑って、アルトに「なにかおもしろかったの？」なんて不思議そうに聞かれたのだった。

こうして、僕の新たな学校生活が始まる日が終わった。

第三十三話 帰宅しましょうか（後書き）

評価、感想お待ちしております。

第三十四話 写真

週末、圭一が神無で訓練してる間、アルトはあまりにも暇だったため神無内を探検していた。そしたら、篠原謙吾と隊員たちに神無の社長であるを富嶽 正輝を見かけたので声をかけた。

「おじさんこんにちは！」

『うわ！』

しかし、彼らはなにか別のことに夢中になっていたせいでアルトの声に全員が驚きいてしまった。そして、社長は手に持っていたものを慌てて隠そうとするが、慌ててたせいで一枚アルトの前に落としてしまう。

なにげなくアルトはその紙を拾おうとして、

「あ、すまない。それ大切なものだから返してもらうね」

そう言って社長がそれを有無を言わず取り上げる。すると、

「あつ……」

アルトの目じりに涙が溜まる。

「ああ、ご、ごめん！　かわりにこっちの上げるから！　ねっ！」

そう言って社長は慌てて別の紙をアルトに渡す。アルトは不思議そうにそれを見て嬉しそうに笑った。

「おじさん、ありがとう！」

アルトのお礼に社長は困ったように笑いながら、

「それと、そろそろノエルくんを迎えにいった方がいいよ。あと、

おじさんじゃなくてお兄さんな？」

「うん！」

そう答えてアルトは軽い足取りで訓練室に向かう。それを見て社長たちはふうつとため息をついたのであった。

週末、神無の訓練所に赴いて訓練を受ける。朱音さんの予定では平日は簡単な練習をして、こうやって休日にはここで実践訓練をす

るつもりらしい。

「ママ」

訓練所を出るとアルトが出迎えてくれた。

「あれ？ アルト待っていてくれてたんだ？」

「うん、篠原のおじさんがむかえに行ったらって」

隊長もおじさんで定着か……なぐむ……って、ん？

「アルト、それなに？」

アルトのポケットから何か薄い紙のようなものがはみ出している。アルトがかわいらしく首を捻るとともにぴよこつと結んだ髪とリボンが踊る。

「ほら、それ」

僕はポケットからはみ出た紙を差す。するとアルトは嬉しそうに「はい」つと、その紙をポケットから取り出して僕に見せてくれる。それは写真で、ご飯中に僕がアルトのほっぺについたソースを拭いてあげている姿が写っていた。

「社長のおじさんにもらったの」

「へー、いい感じに取れてるね。題して『親子の食事』かな？」

朱音さんが覗き込みながら写真にそのまんまな題名をつける。うん、確かにいい感じだ。あとで社長にお礼を言わないと。でも、いっつとったんだこんなの？

「よかったねアルト。こんどおじさんにお礼言わなくちゃね」

「うん」とアルトが頷く。

「あのね、おじさんはママたちのお写真ももってたよ」

なんて話してくれる。そういえば、何度か社長や隊長たちに被写体になってくれて頼まれたっけ。まあ、しぶしぶ何回かは一緒に写ったけど。

「でも、ママたちおよー服着てなかったの。なんで？」

なん……だと？

「ねえ、アルト、他に誰が写ってた？」

託児所に移動して僕らはアルトに質問をする。それにアルトは首を捻りながら答えてくれる。

「えっと、ママとね、あかねおねーちゃんとさなえさんに〜クリスさん」

早苗さんこと早苗里香さんは社長秘書で、ショートカットの髪のスレンダーな美人。クリスさんは技術部門の人間で本名クリス・克蘭さん。普段はダボダボの作業着に身を包み、メガネをかけて、茶色の髪を三つ編みにしてるが、いざ作業着を脱ぐとなかなかのナイスバディで、メガネ外して髪を下ろせば癖毛ながら美人に入る部類の人である。

二人とも何度が預けたアルトの相手をしてくれたりもしたので知りあいだ。

続いて朱音さんがアルトに聞く。

「場所はどこだったかな？」

「おふるだったよ」

「そ、そう、お風呂……」

ここにはシャワー室以外にも泊まり込みの人のために大浴場があり僕らは何度か利用している。つまり、風呂場に盗撮用のカメラか何か仕掛けられているということか……

「他にはなにかないかな？」

「アルトちゃん、ね！」

「ひっ」

ついつい聞こうとする勢いのあまりに……アルトの目じりに涙がたまっ

た、「うわあああん……！」

アルトは怯えてついに泣き出してしまった。しまった。アルトは悪くなんてないのに……

僕は慌ててアルトを抱き締めてあやす。朱音さんもアルトの頭を撫でながら謝る。

「ごめんねアルト。ママもお姉ちゃんももう聞いたりしないから」

「ごめんねアルトちゃん。お姉ちゃんたち、ちょっとやりすぎちゃって」

「ぐす……ぐすん……」

で、しばらくして泣き止んでから、僕はアルトを放す。

「それじゃアルト、ママ達は大切な用事があるからちよつとだけ待っててね。後で一緒に遊ぼうね」

と言いつつ僕は部屋を出て行った。

基地資材置き場の一角。ひっそりと数人の男たちが集まっていた。中心にいる社長の手には写真が握られていた。乙女のあられもない姿の写真が。

「こ、これは！」

「はー、たまんねえ」

「生きててよかった！」

「ノエルちゃん萌え」

「社長……一生あなたに着いていくっす！」

と口々に呟く男たち、

「これは二千元、こっちはピントがぼやけてるから五百円からだな」と、バカ社長は写真の仕分けながらその値段を決めていく。そこに、

「僕も買いたいんですけどオススメは？」

「なら、これ……だ……な」

彼が顔を上げるとその顔から一瞬で血の気が引いた。なにせ、僕と朱音さんと早苗さんにクリスさん四人が仁王立ちで逃げ道を塞いでいるから。しかも、三人は鬼も裸足で逃げ出す迫力を醸し出している。

元男としてある程度理解はできる。しかし、自分のシャワーシーンの写真を見た瞬間に溢れだした怒りと嫌悪感はどうにもならない。

「あなたたちって人は……」

「社長、仕事もせずに……こんなことを」

「班長……信じてたのに」

押し殺した声で女性陣は呪詛を吐きだす。

そして、朱音さんが鎌を取り出す。早苗さんがバインダーを振りかぶる。クリスさんがレンチを握りしめる。僕は蒼窮を握りしめ、

「お仕置き……だね」

『ですねマスター』

僕の呟きを蒼穹が肯定する。

その後、資材置き場から悲鳴と怒声が何度も聞こえたのは言うまでも無い。

後日、アグニは女性陣に頼まれ対盗撮用のシステムの開発を頼まれた。最初は乗り気ではなかったものの女性陣の熱意（殺気？）に押されて一日で作ったそうだ。

第三十五話 ノエルってどんな子？

皆さんこんにちは、はやなです。

ノエルがうちの学校に転入してきてもう二週間が経ち、だいぶ彼女もこの学校に馴染みました。彼女自身おとなしく、人当たりのいい性格だから今ではクラスのみんなから好かれています。

あたしの方は登下校の道が途中から同じだからよく一緒に学校に行きます。今では一番の仲良しかな？

そして、学校につくと、背の高いなかなか美形な人が校門の前に立っていた。あ、成瀬先輩だ。

「こんにちはテストロッサさん。はじめまして僕は成瀬明人と言います」

そう、彼女はその容姿と性格から非常にもてる。数日で裏ランキングの彼女にしたい女の子部門トップに踊り出て、一週間前からは彼女の所に男子が告白しに来るようになった。

まあ、初めて見た時、思わず妖精か天使かと思っちゃうくらい綺麗だったし人気があって当然よね。あたしなんか一瞬背中に羽があるのを幻視したくらいだ。その羽が黒かった気がするけど……

ノエルはあたしの方を向くとそっと聞いてきた。

「成瀬さんって？」

「三年の先輩でうちの野球部エースだよ」

ふーん、と興味なさそうに相槌を打つノエル。

成瀬先輩はルックスはよく、性格も好青年で女子の人気も高い。

「俺とつきあってください」

とさわやかな笑みで手を差し出してくる。

でも、たぶんノエルは振るだろうなあと漠然と予想は着いた。どうも彼女はそういったところに無関心だから。

そして、直後あたしの予想の通りに、

「ごめんなさい」

とあっさり断るのを聞いた。

そして、呆然とする成瀬先輩の横を「いこ」っとあたしの手をひっぱりながら彼女は通るのだった。

「つて、あっさり断っちゃったんですね」

次の日、部室であたしは先輩にそう報告する。

「へー、そうなんだ。これで撃墜数は五人だっけ？」

イラストを描いていた先輩は顔を上げて少し驚く。

そう、彼女はこれまで告白してきた男子五人全てをふってしまっている。その中に、今回の成瀬先輩も含め女子の人气がトップクラスの人も二人が入っている。

理由を聞くと「なんでもないよ」とはぐらかされてしまう。

「よく考えると彼女ってあまり自分のこと話さないんですね」

「そうなんだ？」

そう、彼女は自分のことをあまり話さない。家族の話とかもなんにも。たぶん、クラスの誰もが彼女が普段なにをしてるのか知らないだろう。

私だって、彼女の家を見たことすらないのだ。

「少し気になるね」

先輩が楽しそうに笑う。

「ですね」

あたしも笑う。たぶん考えていることは一緒。あたしたちはふっふっふと笑いあうのであった。

「というわけでただいま私たち漫研究撃レポーターはノエルさんの後をこっそり着いていつています」

放課後、帰宅する彼女を先輩とこっそり尾行する。途中、着いてこようとしたネコはごめんと謝って返す。

その間見たノエルの行動はまあ普通だった。途中コンビニに寄ってなにかを買ってから店を出る。

それから、道の片隅で泣いている男の子がいて、ノエルはその子に近寄るとしゃがみ込んだ。たぶん話を聞いてあげてるのかな？
ここからだとよく聞こえない。

男の子が傍にある木を指さすとノエルがそっちに顔を向ける。その木はなかなか立派で結構な高さがあった。そして、そこに風船がひっかかっている。ああ、風船を離しちゃったのかな？

するとノエルはぼんつと男の子の頭を叩いてから、傍の塀に右足をつける。少しの間ぐつぐと具合を確かめてから、それから残った左足で地面を蹴った！そして、左手で身体を持ち上げ、塀の上に乗る。

両足が塀の上に乗った瞬間、曲げた足を伸ばしてさらに飛び上がる！そして、空中で風船をキャッチ！少しスカートがめくれて中ノエルは片手でスカートを抑えながらふわりと綺麗に足から着地した。一瞬またなにか羽のようなものが見えた気がする。

男の子に風船を渡して頭を撫でる。そして、お礼を言うその子に微笑みながら去っていった。

「いい子だね」

「うん」

やっぱり彼女はいい人だと思う。率先してなにかするわけでもないけど、誰かが困ってたらつついっただけで済むタイプだ。

そして、それからすぐ、けっこう広い庭のある白い家に入るノエル。角からこつそり顔を出して持ってきた双眼鏡で確認すると天野と書かれた表札と、その下に『ノエル・テストロッサ』『アルト』と書かれた表札がもう一つ張り付けてあった。

「あの家に住んでるんだ」

よし、家の場所は確認完了。今日は撤収しましょうか。

そう決めてその場を退散しようとして……

第三十六話 遊びに来たよ

僕は帰り道でため息をつく。今日もまた男子に告白されたのだ。

正直、男子に告白されるというのは気持ち悪い。まあ、相手はこっちが元男だと知らないんだからしかたないんだけど、こっちは男に告白されて喜ぶ性癖はない。

まあ、この頃は申し訳なさも感じ始めたけど、今日のはそんな気持ちも抱けない。なにせ、断った瞬間、もっとよく考えろとか。ふん、よく考えなくても男とつきあうなんて断固辞退させていただきますよーだ！

まあ、その相手は思いっきり投げてやったんだけどね。これも朱音さんの教育の賜物だ。

そんなこと考えてるうちにうちに着き、靴を脱ぐ。と、その時見なれない靴が二つ玄関にあるのに気づいた。ありゃ？ お客さん？ そっいえば、リビングから朱音さんが誰かと話しているのが聞こえる。内容はよく聞こえないが、なんか楽しそう。

僕は手洗いをしてから荷物を部屋に置きに行く。それから客間でもあるリビングに。

「朱音さんただいまー、お客さん来てるの？」

部屋に入ると朱音さんと……はやなさんとかなねえがお茶を飲んでいた。

は？

「おかえりノエル」

「やつほー、おじゃましてるよー」

「こんにちはノエルさん」

手をひろひらせるはやなさんとかねえ……なんで二人がいるの？

突然の事態に僕は首を捻るしかなかったのだった。

買い物を終えて歩いていたら角から顔を出している二人組を見つ
ける。

うちを見る？

その視線の先がたぶん私の家の方向で、そして、ノエルと同じ制
服。もしかして、ノエルの友達かしら？ でもだからと言ってこっ
そり覗くのも変だし……

少し悩んでから私は声をかけることにした。

「ねえ、君たちうちに何か用事あるの？」

「で、その後話したら、ノエルの友達だつて聞いてね」

「いやー、あの時はびっくりしました。すごい美人が音もなく後ろ
に立ってたんですから」

楽しそうに笑う二人。うん、一つ聞いとう。

「なんでうちに来ることを僕に言わなかったんですか？」

そして、二人はうんと頷きあつてから、

『面白そうだったから』

ぐっとサムズアップ。

あー、そうですか。相性いいんですねあなたたち。かなねえは困
ったようにあははと笑っている。

僕はなんか疲れた気がしながら椅子に座ると、朱音さんがお茶を
注いでくれた。

「どうも」

そして、一口お茶を飲む。それから少し雑談をしていたら、がち
やつと後ろからドアを開ける音がした。

振り向くと、アルトが目を擦りながら部屋に入ってくる。そうい
えば、この時間はよくお昼寝してるんだっけ。

「ママ、かえってきてたの？」

アルトを見て二人が朱音さんを見る。あー、朱音さんの子かと思
ったのね。でも、ぜんぜん似てないから、不思議に思ってるだろ
うな。はあ、

「うん、ただいまアルト。ママたちの声うるさかったかな？」

『え？』

二人がこつちに向き直る気配がしたが気にしない気にしない。

「ん〜ん。ママのこえがしたから起きたの」

あーもう！ 嬉しいこと言ってくれるなこの子は！

そっかあと抱きしめながら頭を撫でてあげる。

「じゃあ、もう少し寝てる？」

「うん〜」

こくんと頷くアルトを僕は抱きあげて隣の部屋にある和室に敷かれた布団に寝かせてあげる。そつと頭を撫でてからリビングに戻る。と神妙な顔で二人が待っていた。

二人の方を見るとすつと視線が外れる。もしかして、寝かせに言ってる間に朱音さんがあの話をしてくれたのかな？

なら苦労してる女の子って思われたのかもしれない。すると、かなねえが一言。

「あ、あの……頑張つてね」

「うん、あたしも何かあったら手伝うよ」

なんてはやなさんも言ってくれた。少し嬉しい。持つべきものは友達なんだね。

「にしても、その歳でお母さんやってるなんて、だからみんな振るんだねえ」

「そうだね。で、お父さんの幼馴染の人ってどんな人？」

ちよつと待て。

「あー、朱音さん？ 話したんだよね？」

「うん。ノエルは昔欲情したロリコン親父によって襲われてしまい、どん底の精神状態に陥ってしまったが」

「それってこの前作ったウソだよな！ 僕は無理やりされたことないし、幼馴染の彼氏もない！！」

だー！ なに吹き込んでるんだこの人は！
油断ならないのが身内にいるよまったく！

「え？　嘘なの？」

はやなさんの呟きに僕は頷く。

あつたりまえだー！　二人して何信じてるのさー！

「アルトは僕の姉さんの子なの！　でも、姉さんも義兄さんも死んじゃったから僕が引き取って育ててるの！　ママっていうのは僕と姉さんが瓜二つでそれに物心ついた時から面倒見てるからー！」

僕は息継ぎせず全力でアルトと僕の関係を告げる。こっちも嘘だけどさつきよりは現実味があるしね。

「あ、そうなんだ。うん、そうだよね普通」

かなねえが髪をかきながら頷く。

「って、そういえばノエル、さつきから僕って言ってない？」

……あ。はやなさんの指摘に気づいてこほんと一度咳払い。

「えー、何のことでしょう？　私は私としか」

「いや、誤魔化さなくていいから」

はやなさんがひらひら手を振って僕の言い訳を否定。

うつつ、やっぱりそう簡単に変われないのか？

「前は僕を使ってたの。でも、おかしいと思うから私に直そうとしてたの……」

「そうなんだ。別におかしいと思わないよ？」

そんな風に僕らは少しにぎやかに話すのであった。

「にしても、ノエルも友達できたんだったら呼んでもよかったのに。私は歓迎したよ」

二人を見送っていたら朱音さんがそう言ってくれた。

朱音さんがそう言うけど……

「……どういう風に接すればいいのかよくわかんないですよ」

僕はぽりぽり頬をかきながら答える。

女の友達ってこの年の男の子には未知の領域だからね。

そっかと朱音さんは頷く。そして僕らは家に戻ろうとして、
「少しづつ慣れていけばいいと思うよ」

とだけ言ってくれた。それに僕は「はい」とだけ答えた。僕も、二人とちゃんと友達になりたいから、がんばろう。

第三十六話 遊びに来たよ（後書き）

評価、感想お待ちしております。

第三十七話 はやなさんの家

今日、学校の休みの日に僕ははやなさんの家に遊びに行くことになりました。理由としては朱音さんが「家に遊びに行くのは大切だよ！」と言ったため。まあ、僕もそうした方がいいよなと思っただし、ちょうどよかったかも。

「いらっしやいノエル。ここがあたしの家だよ」

というわけで、彼女の家に着。まあ、よくありそうな二階建ての家だ。

「おじゃましまーす」

家上がると居間に案内される。何の音もしないけど、確か前に聞いたけどはやなさんの家はお父さんとお兄さんの三大家族らしいが、今日はいないのかな？

家に入るとちょうど誰かが階段を下りてくる。

「おかえりはやな」

そう言ったのは大体大学生当たりの男、中肉中背という言葉が似合いそうな背格好。その顔ははやなさんに少し似ていて髪は短めだった。

「ただいまお兄ちゃん。ノエル紹介するね。あたしの兄の柏木一馬」

「はじめまして。はやなさんにはお世話になっています」

ぺこっとお辞儀するが、返事がない。あれ？

顔を上げるとすでに目前まで迫っていた。

「うお！」

驚いて身を引いてると、彼はいきなり僕の手を掴んできた。

「付き合ってください」

「お断りします」

きっぱりはつきりお断りさせていただいた。何度も言うが男と付き合う気はまったくない。友達ならいいけどね。がくつと一馬さんの肩が落ちるが気にしない。

「もう、お兄ちゃん。バカなこと言わないでよ」

それから少しもじもじして、

「そ、それによかったらあ、あたしが付き合っても……」

……はい？

妙な発言が聞こえたような気がしなくてもないが、うん。気にするな僕。

「にしても、はやなの友達が女子大生とは思わなかったよ」

あう……

「僕、ぴちぴちの高校生なんですが……」

え？　つと一馬さんが固まる。

そう僕は割と歳を間違えられる。まあ、この身体が女性にしては背が高く、プロポーシヨンもいいせいでもあるんだけどね。

「あー、その……ごめん」

「いいんです。慣れてますから」

ひらひら手を振って否定する。

「じゃあ、あたしの部屋はこっちだから」

一馬さんに礼をしてから階段を上るはやなさんに着いていく。二階にはドアが三つ。そして、右手側の奥がはやなさんの部屋だった。「ここがあたしの部屋だよ」

実を言うとはやなさんの部屋に入る時、割とわくわくしていた。

女の子の部屋と言えば、（僕の理想だが）優しい色合いの壁紙が何かでふかふかの絨毯が敷いてあって、ベッドの上には人形が飾られていて本棚には女の子らしい恋愛小説があるんだろうなと想像していた。

……うん。絨毯はあったね。ベッドにかわいい人形も置いてあった。さすがに壁紙を換えてはいなかったけどこれも想定内。だけど

……

壁に男の子に人気のロボットもののアーケードゲーム『ウォーズリンク』のポスターが貼ってあり、視線を向けた本棚に男の子が好

みそうな漫画。

「僕の理想半分返せー!!」

「い、いきなりどうしたの?」

少しはやなさんに引かれる。

「いや、理想の『女の子の部屋』が五十パーセントしか存在しなかったから」

「……まるで初めて女友達の家遊びに来た男の子のような心境だね」

的確に僕の心境を言い当ててくれるはやなさん。

「なんていうか、君本当に女の子なの? たまにお兄ちゃんみたいな男の人相手にしてる気がするんだけど」

ドキツと心に言葉が突き刺さる。

「いや……その僕、両親に男の子として育てられてたんだ」

「そうなの?」

「そうそう、本当は男の子が欲しかったらしくてね。小学校まで自分のこと男の子だと思ってすごしてたんだ」

少し苦しい言い訳かなと思ったけど……

「あー、だから『僕』なの?」

「そ、そうそうなの。まあ父さんのが移ったっていうのもあるんだろうけどね」

僕は苦笑しながら頭をかいていたら、にこにこしながらはやなさんが僕を見ていた。

「どうしたの?」

「えっと、ノエルがかわいいなって」

え?

いきなりのはやなさんの言葉に僕は少し考え込んで、引いた。や、やっぱりはやなさんはそっちの気があるんじゃない。

「そういうことじゃないの。なんていうか……ギャップがね?」
ギャップ?

「なんか最初、ビスクドールとか、そういう人形のような感じがあ

ったんだけど、付き合ってみるとすごく人間ぽい印象になったんだよね。今の百面相も面白かったし」

「そうなんだ……」

なんとなく人からそう言われるのはむず痒かった。

「ほら、ゲームやる？ この前発売したウォーズリンクの家庭用移植版あるんだよ」

……うん、やっぱりはやなさんは女の子というより男の子の嗜好の持ち主だ。

僕らはその後少しの間ゲームをしてから遊びにいくのであった。ゲーセンでウォーズリンクが主だったけど。それでも楽しかったよ。

第三十七話 はやなさんの家（後書き）

評価、感想お待ちしております。

第三十八話 お届けしましょう！

さて、皆さん僕は重大な危機に直面しています。なぜならば……

「ママ」

教室の入り口で手を振るアルト。その横にはかなねえ。
なんだこの状況？

それは些細なミスだった。

「あれれ？」

アルトはテーブルの上においてあるものを見つけました。
ママががっこーにもっていくおべんとうです。

わすれてっちゃったみたいです。

あかねおねーちゃんに言おうと思いましたが、今はとてもいそが
しそうです。ママもじゃましちゃダメって言っていました。

うん。だからアルトがとどけてあげよつと！

お昼になりました。さつそくお弁当です。

「ノエル、ご飯食べよ」

「うん」

僕ははやなさんと机をくつつける。

さらに数人の人と机をくつつけてお昼タイム……あれ？

僕はカバンの中を開けたんだけど、弁当箱がなかった。

「あー、弁当忘れた」

僕はぺしつと額を叩く。どうしよう？ 家に連絡して……ダメだ。
朱音さん少し前から締め切りが近いって焦ってたっけ。

実は朱音さんは漫画家でもあったのだ。しかも現在超売れっ子の
『黒瀬トワ』の正体で、僕はかなり驚いたものだ。どうりで漫画買
ったとき嬉しそうだったのね。

「あちゃー、ならああたしの分わけよつか？」

「んー、いいよ。混んでるかも知れないけどちょっと購買まで行ってきた」

僕が席を立とうとして、

『マスター、マズい反応です』

いきなり首にかけた待機状態の蒼窮が報告してきた。

マズい反応？ 僕は問い返そうとして、

「ママー！」

そこで聞き慣れた声。もしや……

僕とはやなさんが振り向くとかかねえに連れられたアルトがそこにいた。

『遅かったですか……』

私が授業を終えて教室に戻る途中になんとなく校庭を見た時だった。

「えっ？」

私はピタツと止まって正門の方を凝視する。そこに五歳くらいの金髪の女の子がいたから。

えっと……

「あれ？ 草薙さんどうしたの？ あれ？ 誰だろ？」

それを聞いた瞬間、私は駆け出した。

「ごめんなさい！ 急いでますので！」

私は階段でぶつかりかけた相手に謝りながら駆け降りる。

そして、げた箱を出ると、そこにアルトちゃんがいた。

「あ、アルトちゃん！」

「あ、かねえおねえちゃん」

「それで、連れてきてくれたんですか……」

「う、うん」

僕はアルトを見る。

「ママ、はい、おべんとー！」

わざわざ届けに……少しどころかなり感動。だけど、ちゃんと母親としてしなければ、

「ありがとうねアルト。でも……」

僕はアルトの頬をひっぱる。

「一人は危ないから、家を出るときは誰かと一緒じゃないとダメって言っただよね？」

「ひたい！ ひたい！」

僕はういんういん頬をひっぱる。ああ、柔らかくて気持ちいい。しばらく堪能してからぱちんと放すとアルトは涙目で頬を押さえた。

「いいアルト？ ママのためにしてくれたけど、こういうことしたらママ心配するからもうしちゃダメだよ？」

「うん……ごめんなさい」

しゅんとうなだれるアルト。僕はその頭を撫でてあげる。

「と、ここまでは建前で、ありがとうねアルト。すぐくっれしかつたよ」

すると、さっきまでうなだれていたアルトはきょとんとしてから嬉しそうに頷いた。

「うん！」

一方後ろでは……

「どういふことなのかな？」

「ママってことはあの子、テストロッサさんの子？」

「はー、だから……」

まずい。このままじゃ妙な噂が立ってしまう。

「みんなーちゅーもーく！」

と、突然はやなさんが壇上に立つ。

はやなさん！ やっぱり持つべきは友だね！

だが、

「ノエルはね、昔口リコン親父に」

「はやなー！！」

僕は大声で怒鳴る！

「アルトは姉さんの子！ 単に姉さんが義兄さんと旅行中事故で亡くなっちゃったから僕が引き取ったの！」

はあはあ僕は息を荒く吐き出す。

「あ、そうなんだ」

「そりゃそうだよね」

「だね」

あははとみんなが笑うとみんなが肩を順番に叩き、「がんばって負けないでね」「応援するよ」と労ってくれた。

それから、突然頭の中に、

『ノエル大変！ アルトが書き置き置いていなくなった！！』

大音量のテレパシーが届いた。余りに大きな音に思わず顔をしかめてしまう。

かなねえが「どうしたの？」と聞いてくれたけど何でもないと返す。

『大丈夫です。ここにいます』

『本当に？ よかったあ。すぐに迎えに行くからプツツとテレパシーが切れる。』

それから十分後……

車のエンジンの音が聞こえてきた。中庭を見ると紅いスポーツカーが急停車していた。朱音さんの車だ。

僕はアルトと一緒に中庭に出る。

「ごめんねノエル！ 私が目を離れた隙に！」

「いえ、大丈夫です」

朱音さんは目元にクマができ、若干やつれていた。大変な時に少し申し訳ないなあ。

そして、アルトは朱音さんに僕と同じように叱られてから、朱音さんと帰って行った。

「がんばってねママ〜!」

と元気に手を振るアルト。僕は手を振り返した。

まあ、その一件で僕に告白してくる男子は少なくなった。

うん、それはいいけど……

「なんでこうなるのよ……」

僕は頭を抱えた。ぽんつとはやなさんが肩を叩いてくれる。

現在、学校中で僕に子供がいることが噂になっていた。しかも、

一部に根も葉もないものまで……泣きたくなる。

「私、そのうち引きこもっちゃうよ?」

「まあ、そのうち沈静するよ。うん」

はやなさんがそう言ってくれたが、全校集会で改めて説明するまで僕の苦行の日々は続いたのであった。

第三十八話 お届けしましょう！（後書き）

刹：「圭ーあはれ……」

鈴：「まあ、話がこじれるよりはいいんじゃない？」

刹：「そうだけどさ……」

評価、感想お待ちしております。

第三十九話 発掘

現在、僕は朱音さんの車に乗って郊外に來ています。周りにはあまり民家がなく雑木林ばかり。

理由はそこでヴェノムの死骸が発見されたく、僕もその発掘を見学することになったからです。

そして、少し緊張する僕に対してアルトは楽しそうに外の景色を眺めている。その余裕がちよつと羨ましい。

「ん、そろそろかなあ？」

朱音さんが呟くと、でかいテントが見えた。

「ああ、あれあれ」

そう言つて朱音さんは車の速度を上げると開けた場所に出る。そこは、山のふもとで、ちょうど開けた場所だった。

立て看板に『がけ崩れ注意！』とかかれ柵が張り巡らされている。朱音さんは作業車搬入口を通つて中に入る。

そして、テントに付くとその傍に車を止めた。僕らが降りると、すぐに篠原隊長が駆けつけてきた。

「朱音さん、お疲れ様です！」

「お疲れ様篠原君。状況は？」

そして、二人がいくつかやり取りをしてるのを僕は見る。

なんていうか、こういうところを見ると普段は気のいい人たちだけど二人がその道の人なんだと納得できた。

「それではこちらに」

そうして案内されるのはテントの中だった。

ぐくりと息を呑む。緊張するのは、そこにいる人類を衰退させた敵への恐怖からか、それともかつての敵がいるのに気づいたこの身体のせいなのかわからない。

とりあえず頭をぶんぶん振つてその考えを払う。

入ってみると、テントの中は照明とかのおかげでだいぶ明るい。

そして、中心には巨大な穴。おそらくあの下にヴェノムがいるのだろっ。

そして、穴から延びたケーブルの先にNBC防護服に身を包んだアグニと柏木先生がいた。

そこにはたくさん機材があり、たぶんそこでヴェノムの状態やらなんやらを見てるのだろっ。

「どう？ 今回のヴェノムは？」

「まあ、『死んで』いるな。内部からエネルギー反応は完全にゼロ。いつもと同じだね」

と、アグニが言う。

「まあ、死んでるにこしたことはないよ。生きていたら厄介だからねえ」

柏木先生がぼりぼり頬をかきながらそんなことを言ったけど、

「こちらとしては生きてるサンプルも欲しいところだがね」

こらこらアグニ。危ないこと言うな。

にしてもヴェノムかあ……あれ？ そういえば、

「なんでヴェノムって名前なの？」

ヴェノム、その意味は毒であるが、なんで毒なんて名前を？

星の命を糧にする。そこから毒ってことなのか？ とか、いろいろ考えていたら、

「それは、連中の体液が猛毒だからだよ」

あー、猛毒かあ。だから二人ともそんな仰々しい格好を……え？ 体液が猛毒？

って、ことは……

「は、は、早くここから出ないとー!!」

僕はアルトを抱きあげ、大慌てで走り出す。このままじゃアルトが、アルトがあああ!!

「落ち着きなさい!!」

だけど、朱音さんに一括されて僕は動きを止める。

うつ、確かに。落ち着いて、落ち着いて防護服を着ないと……

「そもそも君らにはヴェノムの毒は効かないから。仮にも決戦兵器として作られたものがそんなのでやられたら洒落にならないでしょう？」

……言われてみれば。

僕は安心してアルトを下ろす。あれ？ でも……

「隊長も朱音さんも防護服着てないですね？」

僕とアルトが着なくていい理由は分かったけど、なんで二人はアグニや柏木先生と違って防護服着てないんだろう？

すると、朱音さんは腕を上げる。

「私は免疫があるの。それに現代人は多かれ少なかれ持つてるから。篠原君や、隊員の間みなも事前調査で平気な人だけを集めてあるしね」

あー、なるほど。そうだよな。それくらいするよね。僕は胸を撫で下ろす。

それから改めてアグニたちの作業を見学するが……専門用語ばかりでさっぱりわからなかった。

理解は早々に諦めアルトの相手をしようと思ったら、いつの間にか穴の縁から下を覗き込んでいた。危ないなあもう。

僕は慌ててアルトのそばに行く。

「アルト、ここは危ないよ？」

僕がアルトに声をかけると、アルトが振り向く。

で、楽しそうに下を差す。

「ねね、ママ。あれきれいだよ」

なんのことだろう？ 僕も身を乗り出してアルトが示すものを見る。

底に、何か硬質ななにか、おそらくヴェノムがあって、その周りの土が光を反射してきらきら光っていた。なにか土に混じっているのか？

なるほど、アルトの言う通り綺麗だった。でも、ヴェノムがなあ……見ててなんか怖いし、

「アルトあつちに戻っておやつ食べようか」

そう誤魔化すと、アルトはぱつと朱音さんたちの方に向かって駆け出した。は、早いな。

「ママー、早くー!」

「あ、うん。ちょっと待って……」

手を振るアルトに答えて、

足元が崩れた。

重力の法則に従って僕は穴の中に落ちていく!

「んなー!」

いきなりの事態に僕は反応できず……底に叩きつけられた。

い、いたひ……僕は痛む背中を押さえる。ビル三階分の高さを落ちたと思うけど、特に大きな怪我はない。

さすがは機械天使ってこと? 痛いけど……

僕が起き上がると上から声がする。

「ノエルー、だいじょーぶ?」

「ママー、だいじょーぶ?」

朱音さんとアルトの声だ。二人とも心配そう。

「うん、大丈夫。すぐ上がるから!」

僕はそう答えて、ごつごつしたものを支えに立ち上がる。足はふらついてないし大丈夫。

すぐに『天使の羽』を展開。飛び上がって、穴の外に出る。

「ただいま」

「ママー!」

アルトが抱きついてきた。

「だいじょうぶ? けがないよね?」

「ははは、大丈夫だよアルト」

まあ、普通の人なら大けがだろうなあと僕は人ごとのように思う。僕はアルトと朱音さんとアグ二たちのところに戻ろうとして、二人が慌てているのに気づいた。

「エネルギー反応増大！ な、なぜ！？」

「ふむ、なぜだろうな。死骸と思っていたのだが……」
え？ それって、まさか……

「全員退避！ ヴェノムが目覚める！」

その言葉と同時に、後ろで、何かが動く音がした。

第三十九話 発掘（後書き）

鈴：「ついにヴェノムと出あうことになる圭ー」

刹：「さて、彼の運命は？」

鈴：「あと、ここで謝罪です。昨日投稿したものはもうちょっと後で出すつもりのものだったものだったので削除しました」

刹：「もう少ししたら改めて投稿します。それでは！」

評価、感想お待ちしております。

第四十話 目覚め

穴の周りから地面が崩れ始める。

慌てて僕はアルトを抱えて崩壊する地面から離れる。朱音さんも大きく後ろに跳ぶ。崩れる地面に引つ張られていくつかの機材が倒れた。

アグニや柏木先生がいる場所まで崩壊は伸びなかったが、二人とも装備を棄ててすぐに撤収する用意を始めている。

僕と朱音さんはそれぞれ武器を装備を出す。僕は蒼穹を転送して戦闘服を展開、朱音さんも鎌を取り出す。

そして、それが穴から這い出してきた。

最初に見えたのは長い角。それから全体が出てくる。

言ってみればその姿は甲殻を持つ昆虫にそっくり。だが、サイズが全然違う。昆虫は十メートルもないし、借りにそんなサイズに膨れ上がったのも自重を支えきれずに死んでしまう。

頭は一回り小さく、長い角と小さな角が一本ずつ。目らしきものは見当たらず、その甲殻は棘々しく、毒々しい。

生理的な嫌悪感を抱かせる色だ。なるほど、ヴェノムと言う名前も納得できる。

僕はアルトを庇うように前に出る。

と、自動的にヴェノムの情報が呼び出される。目の前のヴェノムは中型サイズだということと、いくつかの攻撃手段。これで中型……

少しの間、ヴェノムは周りを見るように首を巡らせる。そして、僕の方を見た瞬間、がばつという擬音が似合いそうな音を立てて頭の一部が開く。そこには目の様なものが……その眼が光った瞬間勝手に左腕が動く！

手甲の一部が展開、力場誘導端子によって前面に防御フィールドが展開される。これが左腕に装備された防御システム、『イージス』

防御力は高く、前面だけではあるが、かなり堅いフィールドが展開される。まあ、それでもこれはデッドコピーであり、オリジナルには劣るらしい。

ヴェノムは目のような器官から光線を放つ。僕はイージスによってヴェノムの光線を防ぐ。くっ、強い！ 弾かれそうになる左手を右手で抑える。後ろでは怯えたアルトがぎゅっと僕にしがみつく。大丈夫。大丈夫だから。

弾かれたレーザーが機材やテントを破壊する。一瞬でテントが燃え上がる。

十秒間の照射をなんとか防ぎきるけど、くそ……左手の回路の一部やられた。腕は動かせるけど、イージスの出力が五十パーセントに低下。もう一度防いだって言われても無理だなたぶん。試す気にもならない。

ヴェノムが動く。だけど、足が竦む。

怖い。怖い。怖い。自然と息が荒くなる。目の前でヴェノムが動くけど僕は動けない。そしたら、

「ノエル！」

肩をとんとと朱音さんに叩かれた。

「しっかりしなさい」

不思議だった。その一言ですうつと僕の肩にあった重しがなくなった気がした。

やるしか、ないんだな……僕は目の前の敵を睨む。

左手に武器を転送する。機械天使用の装備は一つだけできたってアグニが言ってたはず……

転送したのは二連装のガトリング砲。正直、あんなのと蒼穹で斬りあう気にはなれない。

「アグニ！ アルトを連れて早く逃げて！」

僕はヴェノムの気をこちらに逸らすためにガトリングを撃ちつつ三人から離れる。朱音さんも雷の弾を生成して僕の反対側に回り込みながら撃ちこむ。とりあえず、アルトたちが逃げたら僕も逃げる

ぞ！

ヴェノムが煩わしそうに僕の方を向く。う、こっちむくなよ！
あ、だからと言ってアルトや朱音さんの方に向けってことじゃないからね！ 弾が当たって甲殻にダメージはあるみたいだけど、砕けない！

対してヴェノムがその鋭い前足を振るう！

「うわ！」

身体を投げ出すように避ける。危な！

転がりながら態勢を立て直し、銃口を向ける。が、再び翻った前足に弾かれる。

「しまった！」

銃身が歪んでこれ以上撃てそうにない。くそ！
ガトリングを棄てる。

僕はライフルモードにした蒼穹を構える。まだ僕の実力の熟練度では朱音さんのように攻撃には使えないとのことだ。

だけど、その時に上から足が迫る！ 鈍重そうな外見のくせに素早いな！ 横っ跳びで避け……

「そっちはダメ、ノエル！」

え？ 朱音さんの声で気づいた時には、遅かった。もう一つの足が真横から迫ってる。

天使の羽……ダメだ間にあわない！ 蒼穹を盾にしてガード。だけど、重い。弾き飛ばされ、地面に強く叩きつけられる。さっき穴に落ちた以上の衝撃。肺から空気が絞り出される。苦しくはないけど、ぶつけた背中がかなり痛い。でも、まだなんとか大丈夫。

僕は起き上がろうとして、

ヴェノムがアルトたちの方を向く。おい、ちょっと待って。狙ってるのはアルト？ なんて？

篠原隊長たちが援護してるがそっちには向かない。やっぱりアルトの方へ向いたままだ。だから待って、なんでアルトなのさ。

アルトはアグニに庇われるように逃げてるけど、とてもじゃないけど、逃げ切れるとは思えない。その顔は不安そうに僕の方を見ている。

なんでその子を狙うの？

「うっ！」

頭が痛くなる。でも、すぐ気にならなくなる。

その子じゃなくこっちに来てよ。ほら、私の方に……さっきまで僕が相手だったでしょ？

おかしいな感覚。僕なのに僕じゃない。他の誰かが一緒になにかを考えてるような感覚。ただ……今はあまり気にならない。私がないのかよくわからない。

またあいつの目が開く。だめだ。だめだよ。その子を攻撃するな。だからダメ。その子は、僕の、私の、大切なものなんだから！

「あ、あああああ！！」

飛び出す。翼を振ってその反動で加速。と、同時にその横つ面を蒼穹で叩く。顔の向きが逸れ、上空に光線が飛ぶ。

その隙は逃さない。蒼穹を腰のアタッチメントにセット。空いた両手に短刀を転送。無骨な柄だけのものだけど、出力することで、プラズマで出来た十センチほどの刀身が展開される。

投擲、目に突き刺す。苦しそうにのたうつ『蟲』

さらに僕は飛び出すと同時に武装を転送。私が好んで使っていた装備、『月輪』を両手に執る。月輪は六十センチほどの長さの薄い刃を数枚重ねてある武器で、小型な分、蒼穹よりも振りやすい。

右の一刀目で首の隙間に刃を潜らせて切る。噴き出す紫色の体液。苦しげに振りまわされた前足を左手の刃で受け流し、返す刃で切断。さらに月輪を展開。刃を一回転させる頃には刃で出来た華が咲く。私はそれを回転させながら『蟲』に向かって投げる。

本来はこれはこうして投擲武器として使うのが正しい。だけど私はこれを好んで剣のように使っている。

そして、二つの月輪が『蟲』の甲殻を抉る。苦しむ『蟲』

その隙に僕は蒼穹を執って飛ぶ。高く、でも隙を逃さない程度に。そこできると、頭を下に足を上に入れ替え、蒼穹を構える。

『蒼穹、第三、第四機構解放』

『イエス・マスター』

私の指示に蒼穹が答え、ブースターがせり出し、同時に各部が展開する。そして、『天使の羽』とブースターで地上に向かつて一気に加速。と、同時に蒼穹の展開した部分から蓄えといったエネルギーを放出。全体をコーティングする。

出力は五十パーセントだけど十分！

地上の『蟲』に高速で接近。これでおしまい！

『空断・煌き』

その脳天に私という彗星が突き立てられた。その頑丈な甲殻に覆われた頭が砕かれ、縦に断たれる。これなら、もう動かない。

緑色の体液の汚された地面に降り立つと、みんな驚きの顔で僕を見ている。そういうえば、途中から援護がなかったな。

その中で朱音さんだけが僕に近づいてきた。

「大丈夫？」

『大丈夫です』

私はそう返したけど、彼女は首を捻った。ああ、そうか私の言葉は彼女に通じないんだ。

「大丈夫です」

改めてそういう僕に朱音さんはなにか言ってるけど……

あれ？ 朱音さんなんて言ってるの？ うう、なんか眠い。どうして？ ああ、もう時間切れみたい。

これ以上は僕の人格を圧迫してしまう。もう戻らないと……
そして、私は再び眠りにつく。と、同時に僕も意識を失った。

第四十話 目覚め（後書き）

評価、または感想お待ちしております。

第四十一話 謝罪

戦闘が終了して六時間後、発掘現場は慌ただしかった。

ヴェノムの緑の体液に汚された地面、なぎ倒されたクレーン車、数多くの機器が散乱する中心で頭部を砕かれたヴェノムが新たなクレーン車に固定され大型トラックの後部に収容される。

ダラリと力なく垂れ下がった足が死を連想させる。

それを少し離れた場所から眺める人物がいた。眼深いコートを羽織った人物で口元しか見えない。その人物は少しの間ヴェノムを眺め、ふんと鼻を鳴らして去って行った。

気が付くと周りに真つ暗な世界が広がっていた。

身体感覚もなく、現実味もない。夢かなと思ったけど、それにしたって意識がはっきりしすぎていると思う。感覚だけで、ないはずの首を捻る。ここはどこだろう？

そして、少しして目の前に誰かがいるのに気づいた。

その人は……歳の頃はたぶん十代後半くらいだろうか。長く鮮やかな金色の髪と長い耳を持つ女性で、その目は閉じられている。僕の基準ではトップクラスの美少女だ。って、あれ？

よく見ればそれは今の僕だった。自分で自分を美少女だって褒めちやったよ。でも、なんで目の前に？

理由を考えていたら『僕』がゆっくり開く。だけど、鏡映しのようにそっくりな『僕』は僕の青い目と違って、アルトと同じ綺麗な紅だった。違う？

それを疑問に抱いてからすぐに気づいた。

もしかして、目の前にいる人は、この身体の元の持ち主なんじゃない？ まさか、勝手に身体を使っている僕に化けて出たんじゃないのか？ その考えが思いついた瞬間ないはずの背筋が寒くなった。

なんとか弁解しようと思ったけど言葉がでない。そして、僕が慌てふためいていたら、彼女の表情は悲しげなような……す、すいません！ やっぱり自分の身体を勝手に使われるのは嫌ですよ！？

僕は謝ろうとして、

「ごめんなさい」

謝られました。え？

僕は突然の謝罪の言葉にますますわからなくなった。だって……謝るのは勝手に人の身体使ってる僕の方なんじゃないのか？

「なんで謝るんですか？ 謝るのは僕の方でしょ？」

気づくと声が出ていた。見れば、いつの間にかいつもの身体がそこにあった。しかし、僕が声を出したのに彼女は僕の疑問に答えない。

「ごめんなさい。あなたを巻き込んでしまった」

また謝ってきた。巻き込んだ？ ヴェノムとの戦いか？

「いやだから、お礼とか言うのはむしろ僕の方だし、巻き込んだってどういうことですか？」

「ごめんなさい」

答えではなくまた謝ってきた。ちょっとムツとなる。こっちの質問に答えてよ。

よし、なら少し冗談を行ってみよう。

口元に両拳を顔の前に持ってきてぐつと腰を落とす。

「好きです。付き合ってください！！」

「ごめんなさい」

うん。まあ、OKはないと思ったけど、ちょっと残念だね。そして、

「ごめんなさい。私は——」

最後になにか言った気がするけど、それがなんなのか僕には聞けなかった。

今度こそ僕が目覚ますと見慣れた天井がそこにあった。

……メンテナンスベッド？　なんでこんなところに？

確か僕はヴェノムの発掘現場にいたはずなのに………そうだ、ヴェノム！　僕は起き上がりうとして、体に走る痛み顔をしめた。

「無理しないほうがいいよ。左腕は動力伝達系がやられてたし、右腕も神経ケーブルと関節が逝ってたんだから。まあ、もうメンテは終わってるし、右腕も自己修復を終えてるけどね」

朱音さん……壁にもたれかかっていた朱音さんが教えてくれる。左腕に覚えはあるけど……右腕はなんで？　ガードした時かな？

「朱音さん……ヴェノムは？」

「死んだよ」

そっか、死んだんだ………すごいな篠原隊長や朱音さん。僕が気絶してる間に倒すなんて。

「どうやってですか？　僕途中で気絶したからどうなったのか気になっ」

朱音さんが目を丸くする。

「……本当にわからないの？」

？　どういうことだろ？　僕が気絶してる間に何かあったのかな？　しばらく朱音さんは考え込み、

「ノエル、一つ聞いていい？」

「なんですか？」

そして、朱音さんは……

「君の中身は草薙圭一？　それとも他の誰か？」
えっ？

朱音さんの質問の意図がわからなかった。僕が、他の誰か？

だが、僕が聞き返す前に朱音さんは首を振った。

「ごめんね。変なことを聞いて。今はゆっくり休んで」

そう言っ部屋から出て行った。僕はそれを見送りベッドに横た

わる。

僕が誰だ……か。なんとなく夢の中の『彼女』を思い出しながら僕は再び眠りに付いた。

私は通路を歩きながら考える。

圭一を回収した時に蒼穹に聞いたのだけど、戦闘中に圭一の思考を読み取ってら、戦闘中何度も圭一の思考が妙になっていたらしい。蒼穹はそれに懐かしいものを感じると言っていた。

さらに圭一が最後に使った技『断空・煌き』は先代が使っていた技の一つだとも蒼穹が証言した。

つまり、あくまで推測だが、あの子の中にいるかもしれないのだ。『先代』の人格が。

それがなにを意味するのかまだ私にはわからない。アグニもまたどうなるかはわからないといった。まさに神のみぞ知ることだけだった。まあ、全知全能の神がいないのはよく知ってるけどね。私は自嘲気味な笑いを零す。

さて、アグニと少し話さないかね……

第四十一話 謝罪（後書き）

評価、感想お待ちしております。

第四十二話 機械天使とヴェノムとは

数日後、僕は再び神無のラボに訪れていた。

「おはよう圭一。体は大丈夫かい？」

「大丈夫だよ。ヘーキヘーキ」

ぐるぐる腕を回す。問題は欠片もない。むしろあの夢を見てから妙に調子がいい。

そうかとアグニは頷くと、軽く頭を下げた。

「すまなかつたね。まさかあれが動くとは思わなんだ」

アグニがそう謝るけど、あの時のあれは確実に死んでいたと思うからアグニが謝ることじゃないだろう？

「ふむ、せっかくだからこの機会に色々説明するか？」

楽しそうな顔でされたアグニの突然の提案に僕は首を捻る。説明？ なんの？

「機械天使とヴェノムについてね」

朱音さんが難しそうな顔でアグニの言葉をそう補足すると、そばのプロジェクターが付く。そこに僕が写っていた。

なるほどね。今更ながら僕はなにも知ってないのに等しいからね。まずは機械天使だな。まず我々が機械天使と呼ぶ兵器。その当初の製造目的は『文明の守護者』だ」

文明の守護者……よくわからないけど守るための存在だったってことか？

『マスターたちが先史文明と呼ぶ世界は今と違ってほぼ一つに纏まっていた。しかし、『外敵』がいることは予想されておりましたので、開発されたのが機械天使なのです』

蒼窮がそう補足する。なるほどね。僕は頷く。

「そういう理由で創られた機械天使は当時最強の存在だったそうだが説明をとられたから残念なのかアグニはしょんぼりしながら続ける。

「構造を簡単に説明するならば、機械天使の機能を司るコア、そして動力炉の精霊炉、肉体を強化する強化骨格と全身に精霊炉が生成した流体エネルギー『天使の血』を送るエネルギー流動経路とナノマシンで構成されている」

ここまではなんとかわかる。自身のシステム毎日チェックしているからね。天使の血つてのは初めて聞いたけど……エネルギーのこ
とかな？

「コアと精霊炉などの中枢部を除きナノマシンによる各器官の自己修復機能もあるからほぼメンテナンスフリー。夢の完全兵器だな」

わ、すごい。あれ？でも……

「僕の体あちこち壊れてたのはなんで？ 修復できるんでしょ？」

「どうもその体はナノマシンの修復機能の一部が壊れてるようですね。しかも保存も完璧ではなかったためだ」

ああ、そういえばそんなこと言ってたな。だから未だにあちこちコンディションがイエローなんだ。

僕は頭をかく。んー、でもなんで壊れてたんだ？ 寝る前に激しい戦闘でもあったのきや？

「……………」

蒼窮は黙っている。なんとなくこの剣の反応から話すべきことじゃないってことがわかる。けど、いつかは話してくれるかな？

さらにアグニは続ける。

「コアの演算能力も非常に高い。胸部に収まるサイズだが現行のコンピュータを遥かに超える。まあ、それくらいでなければその体の制御は無理だろう」

『補足するなら、生態脳と並列処理することで演算能力を飛躍的に向上させています。おかげで精霊炉の小型化に成功しています』

ほー、ってさっきから感心してばかりだな……

「このコアが機械天使の最も重要な部位だな。この部分にダメージがあれば機械天使の機能の大部分がダウンする。生身の部分の生理と機械間のすり合わせもコアで行われてるからな。死にたくなけれ

ば壊されないよう」

アグニの忠告には「いと返事を返す。でも、胸部ってことは重要な部分だから否が応でも守るだろうけどね。」

「まあわかってると思うが機械天使にも『人間』としての機能は問題なく存在する。その気になれば受胎できるのも驚きだな……必要なのか疑問ではあるが」

「なんで？」

思わず呟く。受胎、つまり子供が作れるってことで……兵器にはいらない機能じゃないのか？

おかげでこの前あった生理、初めての経験だったからびつくりしたの何のって。しかもすげーきつくてその日一日中不機嫌だったと思う。

「恐らくは人類が滅んだ時の保険ではないかね？」

人類が滅んだ時の保険？ どういうこと？

「つまり、人類が全滅した時に新しい人類の母になることも考えてたんじゃないかってこと」

あー、なるほど。僕は手をぽんっと叩いて納得して……って、んなアホな。突っ込み直す。

機械天使が新たな人類の母って……何考えてるんだとしかいいようのない保険である。保険の掛け方が間違っただけと製作者たちに対して声を大にして主張したい。

「機械天使は戦闘兵器じゃないですか。人より死ぬ可能性が高いですよ？」

「それでも生身の人間より頑丈だから生き残るって考えてたんじゃないか？ ま、他にもいくつか方策があったみたいだがね」

アグニがあっさり言う。いや、でも……やっぱりおかしいだろ？
そこに蒼穹が……

『そう言った目的以外にも警護任務についていた機械天使が警護対象の人物と結婚して子供を出産したってケースもありました』

そこで蒼穹がすぐに補足してくれる。へーそんなことあるんだ。

蒼窮の発言に感心し……え？　なんですか？

「まじ？」

「まじです。当時は機械天使にも人権が存在してましたから、ちゃんと手順を踏めば結婚も可能でした」

目を丸くした僕と朱音さんの問いに蒼窮が答える。

ふーん。ちよつと興味深いな。そういえば全然当時のことを僕は知らないし。

「他には？　機械天使は当時どんな風に扱われてたの？」

「他ですか？　創られたばかりの機械天使がよく関係者の下で暮らしたりしてましたね。中には養子として迎えられた方もいたそうです。先代もそうでした。それに、なにより守護者である彼女たちを人々は感謝し誇り高い守護者と称えていました」

ありや、想像と全然違う。なかなかいい関係じゃないか？

蒼穹の話に朱音さんが感心したようにふーんと頷いている。へへ、つと感心する僕にアグニも興味深げに頷いている。

「なら次はヴェノムだな」

蒼穹の話が終わるとアグニがそう言つてスライドを変える。いくつかの種類が表示される。個々のサイズも一緒に表示される。

一つはこの前僕らが戦った中型。そして、それを上回る大きさのカマキリのようなヴェノム。そして、それらよりずっと小さい人の形をしたもの。

「簡単な生態については説明したから今度は種類だな。主な区分は大型種、中型種、小型種の三種に分かれ、その頂点に女王級が存在する」

真面目な顔でアグニが解説する。ふむ、女王ね。本当に蟲みたい。「中型はまだいいが、厄介なのは大型種と小型種だな。個体数が少ないだけに能力も高いようだ」

ふーん、この前戦った中型がまだいいほうね……って、ちよつと待った。

「なんで小型が厄介なのさ？」

大きいのが強いのはわかるけど小さい方はなぜ？ 倒しやすいと思っただけ……

僕が眉間にしわを寄せていると、アグニは変わらず真面目な顔で答える。

「小型種は元々存在してなかったが、対機械天使として生み出されたものだと資料に残っている。戦闘力そのものは中型よりスペックが若干上程度らしいが、小型な分、機動力と制御力が高く厄介なようだ」

アグニがそう言うて締める。機械天使と同等の戦力か……となる
と本来の力が出せない僕は勝てないことになるのかな？ ちよつと顔をしかめてしまう。次出会うのが小型でないことを祈ろう。

ん？ そういえば、

「中型と機械天使の戦力差はどのくらい？」

起きてから気になっていたんだけど僕はあっさり中型に負けてしまった。本来の戦力ならどうなんだろう？

アグニはとてもいい笑顔を浮かべて、

「ザクでガンダムと戦うくらいの戦力差だな。主にヴェノムの方が」とおっしゃりました。わーお、中型って実は弱かったのか？

「中型は雑兵だ。大型や小型と比べて個体数が多いが能力で劣っている」

あれが雑兵？ ぞつとしないな。

あの場には篠原隊長たちに朱音さん、神無で戦闘力がある人間の半分以上がそろっていた。

一応他にも能力持ちの人間はいるらしいけど基本戦闘はしないらしい。まあ、当然か日本だし。

「あれらの頂点に立つ女王はそれらの個体を従いその星に存在する敵性体を滅亡させ、その後で星から力を吸い上げるようだね」

なるほど……

「その女王は？」

「すでに先史文明で倒されたようだな」

つまらなさそうにアグニが答える。

なんだじゃあ特に心配しなくていいのか。

『女王級との戦いは熾烈を極めました。機械天使も人類もほんの握りを残して全滅しています』

蒼穹が言つに先代もその戦いに参加していたそうだ。

ずきつと頭が痛むが気にしない。顔に出ないよう努力する。

『完全には殺しきれなかったものの現在は仮死状態で封じてあります』

仮死状態か。なんかいやな感じがする。そのうち目を覚まさないよね？

だが、アグニは僕とは違う方向に興味を抱いたのか目を光らせる。
『封じてある？ どこかね？』

『申し訳ないのですが、そのことは特秘事項であるためお教えできません』

蒼穹の言葉に残念とアグニは肩をすくめる。いや、残念がられても困るし。

「まあ、今日はこんなところかな？」

朱音さんがぱんつと手を叩いてプロジェクターを止める。まあ、一気に説明されてもわからないし、このくらいがちょうどいいかな？

僕はくつと伸びをする。それから朱音さんはこっちを向いて、

「じゃあ、ノエルはこの後もう一度検査ね」

「はい」

僕はめんどくさげに手を振るのだった。

第四十二話 機械天使とヴェノムとは（後書き）

機械天使の簡単な構造説明とヴェノムの種類に関する回。

まだ細かい設定あるけど全部載せるとなると長いのでここらで失礼します。

第四十三話 古い夢

あれから数日がたった。僕はまた夢を見ていた。夢じゃない夢を。遠い過去の夢を……

私は久しぶりにできた数日だけの休暇を満喫していました。

正直この時期に休暇が与えられるなんてない、と思っていたからとても驚いてしまいました。むしろ部隊のみんなの方が乗り気になって、困惑する私を快く送り出してくれたくらいです。

そして、家に帰ってきた私をお母さんは笑顔で「おかえりなさい」と迎えてくれました。その言葉が嬉しくて、思わずちよつとだけ泣いてしまいました。

戦場において長い間会えなかった妹も、変わらず懐いてくれたのも嬉しかったですね。

そして私は妹にできうる限り一緒にいました。甘えん坊のこの子がいなくなっても寂しがらないよう、この短い時間で目一杯。

そして、休暇の終わる夕刻、迎えの車が来て、私の久しぶりの休暇は終わりを迎えました。

「それではお母さん。いってきます」

「いってらっしゃい。ちゃんと帰ってきてね」

お母さんが心配そうに、だけど柔らかく笑いかけてくれる。私は強く頷きます。

妹はとてとと足元に近づいてきて、

「おねーちゃん、また帰ってくるよね？」

不安げに私を見上げてました。

「だいじょーぶ。お姉ちゃんはちゃんと帰ってくるからね」

だから、私は安心してくれるように妹を抱きしめてそう囁くと、彼女は私の言葉に強く頷いてくれました。

「うん！ おねーちゃんいつてらっしゃい！」

妹が元気よく、でも少し寂しそうに笑ってくれました。私はその頭を撫でてあげます。

そして、迎いの車に乗った私は、二人が見えなくなるまで手を振りつけました。

「いいご家族ですね」

運転手さんの言ってくれた言葉に頷きます。

「はい」

そして、早く戦いを終わらせて、平和に家族で暮らそうと、そうまた願っていました。

自然と目が覚めた。僕はアルトを起こさないように体を起こす。今の夢、夢と呼ぶにはあまりにも生々しく鮮明だったもの。前にも似た感覚に襲われた覚えがある。そう、僕がアルトと初めて会った時の感覚そっくりだ。

でも、今度のははっきりと覚えている。

あの中にいた『母』はたぶん三十過ぎくらいだったろうか、セミロングまで伸ばした艶やかな金色の髪に紅い目。そして、特徴的な長い耳。顔立ちは柔和な笑顔の似合う、今の僕がもう少し年をとったらこうなるんじゃないかと思われる顔だった。

『妹』もアルトにそっくりな子。ただ、歳は十歳ほどで、アルトより年上だと思う。

そして、彼女たちの夢は全然知らないはずなのに、とても懐かしく思えた。

「なんなんだかな……」

私は……僕は、一体誰なんだろう？

僕はそう自問してみるけど、答えなんて出るわけがなかった。

第四十三話 古い夢（後書き）

さて、一体彼は、彼女は誰なのか？

これからそういった心理的な部分をうまく書けたらいいなと思っています。

それでは、また次回でお会いしましょう。

第四十四話 他が思う故に我あり

僕は誰なのだろうか？

あの夢を見た後からよくそう考えるようになった。みんなはきっと僕を『ノエル・テストロッサ』だつて答えるだろう。

なら、僕は？ 『草薙圭一』？ それとも『ノエル・テストロッサ』？ それとも……

僕は何て答えたらいいのだろうか……

「……エル、ノエルってば！」

呼ばれたのに気づいてはつとする。

「どうしたの？ ボーっとしてたけど」

はやなさんが心配そうに僕の顔を覗き込む。

「ごめん。ちよつと考えごととしてた」

僕はポリポリ頬をかきながら答える。ちよつと考えごとに潜りすぎたかな？

「ならいいんだけど」

はやなさんはそう呟くと、表情を弛ませる。

「でも、お兄ちゃん喜んでくれるかな？」

幸せそうに笑うはやなさん。

実ははやなさんはもうすぐ来る一馬さんの誕生日にケーキを焼こうと計画し、うちで練習しているのだ。

僕は助手兼試食係り。アルトはリビングでケーキの完成を待っている。あと、朱音さんは今仕事だからいない。できたら一番意見を聞いてみたい人だったのに。

はやなさんがカチャカチャとボウルの中のクリームを泡立てる。

「ふふふ」

はやなさんは幸せそうに頬を弛ませる。きつと頭の中で完成したケーキに一馬さんが喜ぶ姿を浮かべているのだろう。

なんというか……

「お兄ちゃんが好きって漫画とかの中だけだと思ってたよ」
つい呟く。

そう、はやなさんは一馬さんのことが好きなのだ！ 正直聞いたときは驚いたよ。

「むー、だって、好きなものは好きなんだもん」
はやなさんが少し頬を膨らます。

だってさあ……日本は近親間の結婚とかは禁止だよ？ あえて言うなら『両親』『祖父母』『叔父・伯父』『叔母・伯母』『兄弟姉妹』はアウト。セーフなのは従兄弟から。

え？ なんてそんな細かいこと知ってるか？ 漫画に乗ってたの覚えてただけだよ。

「それに、そもそもお兄ちゃんと血は繋がってないもん」

……え？ なにその突然の爆弾発言？

「そ、そうだったんだ」
「うん。死んだ私の親と友達だった今の父さんが引き取って育ててくれたんだよ」

ふ、ふーん。なかなか複雑そうな事情のようで……顔立ちが似てると思ってたけど一緒に暮らしてるからかな？

僕はそう結論していたら、チンと音が鳴った。

で、只今焼き上がったはやなさんのケーキを試食しています。

うん、スポンジは柔らかく、クリームも甘すぎず。かなりおいしい。初めてにしては相当なできなんじゃないか？

「おいしいよ。これなら大丈夫だと思う」
「そう？ よかったあ」

安心したようにはやなさんが笑う。アルトも満面の笑顔でおいしそうにケーキを食べている。

はやなさんも食べてみていたけどやっぱり他の人の意見も聞きたいらしい。

「はやなおねーちゃんのケーキすごく美味しいよ!」

アルトの感想にはやなさんはありがとうと頭を撫でる。

僕はそんなはやなさんが少しほえましく、こんな風に思ってくれる相手がいる一馬さんが羨ましく思えた。

僕は……どうだろ? 僕には好きな相手ができる気がしない。男を好きになるのは一生無理だろうし。例えできても本当のことを話したらどうなるだろうかと考えてしまう。

だから、僕は少しだけ真っ直ぐに人を思うはやなさんが眩しかった。

「じゃあ、また明日ノエル」

はやなさんを見送りに家を出る。

「うん。また明日」

「ばいばいおねえちゃん!」

僕とアルトは手を振ってその背中を見送る。だけど……

「はやなさん!」

つい呼びとめてしまった。

少し彼女に聞きたいことがあるから。

「な、なに?」

驚いたのかはやなさんの顔には一条の汗。ちよつと声が大きかったかな?

でも、僕は少し悩んでから、意を決してはやなさんに聞いてみた。

「あのさ……僕って誰なのかな?」

はやなさんは僕の問いに不思議そうに首を捻って答えてくれた。

「誰って、ノエルはノエルでしょ?」

そう、だよな。そうとしか言えないか。

予想通りの答え。別に予想の斜め上の答えを期待していたわけじゃないけど、それでも……

「うん、ありがとう、ごめんね変なこと聞いて」

僕が謝ると、いいよとはやなさんは笑って今度こそ帰った。

「え？ 君が誰なのか？」

数日後、僕は訓練中に朱音さんに聞いてみた。なんとなく聞いたくなったのだ。朱音さんならなんて答えるのか。

朱音さんはうーん、と考えると、

「ノエル……かな？ 正直、私は『草薙圭一』っていう君との接点
が全くないからそうとしか言えないから」

まあ、そうだよな。別に変な答えを期待してたわけではないけど。
そんな僕を見てて朱音さんは一度大きく息を吐いてから微笑みま
す。

「ノエル、『我思う故に我あり』って言葉知ってる？」

朱音さんの突然の問いに僕は首を振ります。なんだろう突然。

「昔の哲学者が言った言葉だね、たとえ世界の全てが虚構であつた
としても“自分はなぜここにあるのか”と考える事自体が自分が存
在する証明であるという言葉なの」

朱音さんはそう説明してくれる。

どうも僕が悩んでいることを朱音さんは見透かしていたようだ。

確かに思つてるときは僕なのかもしれない。でも、そういうものが
欲しかったのかな？ また暗い顔で押し黙ってしまう。

だけど、朱音さんはまだ続けた。

「でも、私は、うっん、私たちはこうも思ふの『他が思う故に我あ
り』」

『他が思う故に我あり？』

「どういうことですか？」

よくわからない言葉、さっきのは全てが虚構ならという前提だつ
た。なら他人だってその言葉においては虚構って考えるんじゃない
のか？

「さっきの言葉は自分以外のすべてを疑った言葉、でも、それじゃ
寂しいでしょ？ 他の人が虚構なんて」

そう言つて朱音さんは笑う。とても綺麗なとても素敵な、そして、

とても不敵な笑みを浮かべて。

「だから私と、私の旦那は考えたの。お互いを思えるなら、または思い出に残ってるなら自分はその思いや思い出の中に存在してるんだって。だから『他が思う故に我あり』」

朱音さんは楽しそうにステップを踏みながら僕に笑いかけてくれた。

「そして、それは君にも当てはまるよ。私が君を思うなら君は私の中に存在する。アルトちゃんの中にも、はやなちゃんの中にも、アグニの中にも」

そう言っ て朱音さんは僕の胸を差す。

「だから、君がどうなるうと、私たちの中では常に君は君だよ」

僕は一度指さされた胸元を見てから顔を上げる。それから笑う。

朱音さんのいうことはよくはわからなかった。

だけど、今はそれでいいだろう。そう思えたから。

第四十四話 他が思う故に我あり（後書き）

少し、哲学ぶった回でした。

いや、これは単なる感傷か。

それでは、ここまで読んでいただいた方に感謝を。

第四十五話 買い物、そして、

さて、皆様、だんだん夏休みが近づいてきました。帰宅時、はやなさんとかなねえはその話で持ちきりです。

「もうすぐ夏休みだね。海に行きたいなあ海！」

楽しそいにかなねえが笑う。そういえばプールとか海が好きだったもんなあ。

はやなさんもうんうんと頷く。

「みんなで行きたいね。そうでしょ、ノエル？」

「う、うん……」

僕は曖昧に笑います。海かあ。まあ、楽しみでわあるんだけど、問題があるんだよなあ……

だって、みんなで行くとなると海に近い民宿やホテルに泊まることになるだろう。まあ、個人でもそうだけど。で、そういうところは入浴場が定番。

そう、入浴場……みんなで入るあの。

…… 入人数でお風呂に入るのは苦手だし、もう一つ問題がある。だって、僕、元男なんよ？ いくら自分のに慣れたとはいえ他の人は大丈夫なのかと問われればノーだ！

くっ！ 行きたいことは行きたい！ だが……

「ノエルどうしたの？」

そんな僕に不思議そうに問うはやなさん。

「あつ、いえ」

どうしよう。なんて誤魔化せば…… あつ！

「み、水着買わないと思ってってたんだよ！ ほら、もう去年の小さいし！」

と、とつさとは言え、なかなかばつちりな言い訳だと、自画自賛しちゃったりなんかしちゃったりして。

だけど……

「あつ、じゃあ今度買いに行こっか」

あー、そうなりますかあ……

と言うわけでそんな話をした週末、みんなでデパートの水着エリアで色々見えています。

うーむ、男の時は柄が気に入ったんだけど女の子ではデザインも気にしないといけない。色々取って鏡の前で見比べてみる。個人的には露出度が低い方がいいけど……

と、考えていたら、二人が色々な水着を持ってきた。

「ねえねえ、ノエルこれなんてどうかな？」

「これノエルちゃんに似合うと思うよ！」

と、数々の水着を押し付けられる。そして、僕がなにか言う前に試着室へと連行されていった。

そして、最初にはやなさんが持ってきた黒のビキニ。

「大人っぽいあなたの雰囲気を強調するための一品」

「うう。露出が少し多くて恥ずかしい……」

鏡を見ながら呟く。大胆なカットの大人向け水着。隠れてるのは胸とか大事な部分だけど、まるで下着だけで外に出てる気分だ。

まあ、男の時だって、そうだろ？ って意見もあるけど、女になった結果妙な羞恥心まで手に入れちゃったんだよ。うん。

「なら、これどうかな！」

そういつてかなねえが出したのは紫のワンピース。

「落ち着いた雰囲気醸しだしつつも可愛さを演出するのにいいかなって」

「あ、これいいかも」

なんとなく恥ずかしくないし、なかなか……でも、

「少し胸が苦しいかな？」

なんか少し胸元に圧迫感。

「まあ、サイズは後で調整するとして……次！」

今度はまたビキニ。ただ、今度は白く、腰には蒼のパレオ。さっ

きのと比べ、露出もだいぶ抑えられている。

「これも……いいかも？」

うん。候補の一つだ。

そうして、僕は色々の水着を試着するのだった。

「なかなかいい買い物だったね」

僕の隣を歩くはやなさんが、ん〜と伸びをしながら呟く。

あの後、僕たちはデパートで服や小物を見たりしてはやなさんもいくつか買い物をしている。

「だね」

僕は買ったばかりの水着が入った袋を抱えながら笑う。なんか、この水着は気に入った。どんなのかは今度見せましょう。

「この後どうしよっか？」

「あ、ならその喫茶店に寄らない？ ケーキが美味しいらしいよ」
はやなさんの呟きにかなねえが提案する。

なんかいいなあこの空気。僕は自然に顔が綻ぶ。

こういうのもあれだが、昔の僕は友達は少ない方だった。中学時代も親しい友達は前田君ぐらいだったし……そう言えば前田君元気かな？

と、そんなことを考えていたら……進行ルート上に三人の影が現れた。

「君たちかわいいね？」

「よかつたら、俺らと一緒に油茶しない？」

と、いきなり見知らぬ男たちに声をかけられた。

……またこのパターンですか？

二回目ですでに辟易しそう。僕は小さくため息をつく。

男たちは三人、いかにもなちゃらちゃらした見た目をしている。

少しだけ男たちが近づいてくると、はやなさんは身構えて、かなねえは少し怯えたように引いた。で、対して僕は二人の前に出る。

「ね？ どうか？ ちょうど人数も三人どうしだし」

「お断りします。」

僕はきっぱりはつきり断る。この手のタイプははつきり断った方がいいって朱音さんも言ってたし。

「まあまあ、そう言わずにさ、そこでお茶するだけでも」

そう言って手を伸ばす髪を金髪に染めた男。僕はぱしっとその腕を払った。

「だから、お断りします。行こうはやなさん、香苗さん」

僕はそう言って、二人とここを離れようとするが、男の一人に腕を掴まれる。

「そうつれないこと言わないでさ」

あー、しつこい！

僕は拳を固めて……

「いい加減にしなよ。嫌がつてるじゃないか」

どこかで聞き覚えのある声を聞いた。

そっちに向き直ると、懐かしい顔であり、さっきまで考えていた相手。

「前田君？」

僕はついその名前を呟いてしまった。

第四十五話 買い物、そして、（後書き）

ノエル、昔の友達に出会う。

これって結構王道なパターンですよ？

では、また次回お会いしましょう。それでは！

第四十六話 旧友との再会

目の前にいるのはよく知る友人。久しぶりにあつた彼は全然変わらない。

「前田くん？」

かなねえが問いかける。と、前田くんが笑う。

「お久しぶりです香苗さん。元気でしたか？」

前田くんの言葉にかなねえが頷く。

「まあ、ゆつくり話すのは後にしましょう。まずは」

そう言つて、男たちの方を向く。

「なんだお前？」

男の一人が前田くんに問いかける。

「ただのお節介かな？」

それに前田くんがそう答える。

その言葉に男が動く。

「なら引つ込んでろ！」

拳を振り上げて殴りかかる。フォームもなににもなつちやいない動きだ。そして、男がパンツと前田くんの後ろのアスファルトに倒れた。

僕以外なにが起きたか理解できず唖然としている。前田君がしたことは何てことはない。相手の殴りかかってきた腕をとり、投げたのだけだ。

前田くんは実家が柔道場で本人もかなりの腕だ。そこいらのチンピラではかなわないだろう。実際、以前にお節介で絡まれていた女の子助けるの見たことあるし。

「な、なにしやがった、てめえ！」

そういつてもう一人が飛び掛るものの、またあつさり投げられてしまう。こいつら弱いな……

そしたら、一人が懷からナイフを！ って、おい！

「危ないだろ！」

僕はその手に蹴りを入れてナイフを弾き、足を振りぬいた勢いで左の後ろ回し蹴り。

男はあっさり気絶した。ふう、これで一安心。そこでとんとんと肩をたたかれる。はやなさんだ。

「終わったみたいだけど、早く逃げよ？」

そういわれて周りを見ると野次馬がたくさん。あまり注目されたくないし、もしかしたら他にも仲間がいるかもしれないから、はやなさんの言うとおりに逃げますか。

というわけで、僕たちは急いでその場を離れてとある公園まで逃げました。前田君も一緒だ。

「ここまで来れば大丈夫ね」

思わず悪役の言うようなセリフを言ってしまう。と、それから僕は前田君に向き直る。

「わざわざ助けてくれてありがとうございます」

僕は『ノエル・テストロッサ』という女の子として軽く頭を下げる。かなねえの経験もあるし、知り合いを偽ることに慣れてしまった。……本当は慣れたくなかったよこんちくしょう。

「いえ、俺も知り合いがいたから割って入っただけだから」

そうなんでもない風にいつてくれる。ふう、やっぱりいい人だよ前田君。

「ところで、君って……」

「あ、申し送れました。私、草薙香苗さんの友人のノエル・テストロッサといいます」

以後お見知りおきをと、僕は手を差し出す。嘘をつかないとならないから、僕はちよつと心が痛かった。

前田君はどうも、と言って僕の手を握る。それから手を離すと不思議そうに首を傾げた。

「そつえば、どこかで前に会ったことないかな？」

一瞬ドキツとしてしまう。もしかしたら、僕が元・草薙圭一ということに気づかれたのかと思ったけど、そんなことないだろうから葬儀のことかな？

「たぶん、けーちゃんの葬儀の時じゃないの？ ノエルちゃんも来てくれてたし」

と、かなねえが助け舟を出してくれる。

「ああ、そういえばいたね。車椅子に乗ってたっけ」

そう前田君は頷く。もしかして、こういう時のために朱音さんは僕を葬儀に連れて行ったのかな？

と、考えてから前田君がちよつとさびしげな微笑を浮かべる。

「草薙に外国人の友達がいたなんて知らなかったよ」

僕も知らないなあ。僕に外国人の友達がいたなんてのは。

「いい奴だったのになあ」

と、寂しそうにつぶやくのが、僕のことをそういつてくれる人がいて、不謹慎だけど少しうれしかった。

その後、少し話してから僕らは分かれることとなった。

「じゃあ、またね」

「また」

そう言って分かれるとき、かなねえの時も感じた寂しいような悲しい気持ち占めていた。

なぜなら、またあつた知り合いは僕が草薙圭一とは認識できないから、僕は僕で『ノエル・テストロッサ』の仮面を被って嘘をつくしかないから。

そして、それはより自分が『草薙圭一』ではなくなったことを意識させるから。

「どうしたの？ ノエル？」

はやなさんが不思議そうに僕の顔を覗き込む。
なんでもないよと僕は首を振った。

第四十六話 旧友との再会（後書き）

ちょっと更新遅くなりました。

ふう、少し、ノエルが旧友の反応に悩む姿を描けたかな？
それでは、また次回でお会いしましょう！

あと、よいお年を。

第四十七話 疾走

「圭一、新しい装備ができたぞ」

週末、毎度の如く神無にやってきた僕らはすぐにアグニに呼び出された。

そして、アルトを預けてから、研究室に入ってきた僕と朱音さんに開口一番に告げるアグニ。

「い、いきなりだね」

朱音さんもアグニの言葉に苦笑いで言うが、アグニは気にせず奥にあるシャッター横の赤いスイッチを押す。

ゆっくり開いたシャッターの先にあるもの。それは、バイクだった。そうバイク。

「これは？」

「君用のバイクだ」

事も無げに言い切ったアグニをじっと見る。それからバイクに。

見た目は中型の確かモトクロスだったかな？ まあ、そういう競技に使うようなバイクであり、鮮やかな蒼と白のカウルに銀色のフレーム、シンプルな外観ながら所々がSFに出てきそうなメカニカルな外見。

まあ、僕自身SFの存在のようなものだけど。

ぼんぽんとアグニがバイクを叩く。

「VWS-06『ロードバディ』 最高時速三百キロメートル、迅速に現場に向かうためや君の補助をするように作ってある」

とアグニが説明するが、バイクか……

「なんでバイク？ いざとなれば飛んでいけばいいじゃん」

と、僕が聞くけど、

「君は街中を飛ぶつもりか？」

「人前で飛ぶつもり？」

二人同時に呆れたように聞き返された。

ま、まあそうだなあ。なに言ってるんだる僕？

「でも街中飛ぶようなことあるのかな？」

僕は訓練受けたりしてるけど別に戦闘員じゃない。あくまで万が一の保険。それに、神無という組織には自衛隊からの出向部隊以外にも特務課というそれよりの部署があるらしいしね。

「まあ、機会は少ないだろうな」

バイクのハンドルあたりの具合を確認しながらアグニがあっさり認めた。

それからエンジンのあたりを見る。

「だからといって用意しないよりはいいだろ？」

備えあれば憂いなしって訳ね。まあ、そういう好意は嬉しい。

「備えあれば嬉しいなってやつだ」

……つつこむべきかなあ？

「じゃあ、一度走ってみるか？」

と唐突にアグニが提案してきたのは僕が乗り心地を確認していた時だった。

へっ？走る？

「この子、免許持っていないけど？」

朱音さんの言うとおり、僕はバイクの免許をもっていない。だってまだ十五だ。それに、あまり興味もなかったし。

「俺が持つてるからな。免許自体はそのうち教習所通わせて取ればいいだろ」

そう言っアグニがヘルメットをこっちに放ってきた。で、自分もヘルメットを付ける。

ああ、アグニがバイク運転するのか。だけど……

「大丈夫なの？」

一応確認。いっつも研究室に引きこもっていると思ってたし。

「休日の山登りはいつもバイクだ」

と、アグニは返してきた。まあ、信用するか。

で、ただいま例のバイクで走ってるのですが――

「甘かった……」

僕は涙を流しながら必死にアグニの背中にしがみつく。そして耳には、

『その二人乗り！ 止まりなさいiiiiiiii！』

段々ドップラー効果で音が小さくなるパトカーの警告。そう、こいつ調子にのって法定速度無視してかつ飛ばしているのだ。

そう、している、つまりまだ加速している。

「アアアアグニ！ と、止まれって！」

「ああ、大丈夫だよ！ しっかり捕まれ！」

すると、アグニはさらにアクセルを回してパトカーを引き離そうとする。

「あほおおおお！」

僕の切実な叫び声もドップラーしながら後方に流れていくのだった。轟々と流れる風が頬を打つのが痛い。必死になって運転するアグニにしがみつく。

これは、パトカーも追いつけない。そう思ったが、

『甘い！ 甘いわ！』

パトカーまで加速しだす。ちょっとおおお！ あんたもルール守ろうぜ！？

体に内臓されてるスピードメーターはすでに二百オーバー、これだけの速度が出るとかなり怖くなってくる。

「圭一、次に体を左に倒せ！」

アグニの指示に従い体を右に倒すと、アグニはスピードを維持した状態で路地に飛び込む。これは、撒けたか？ 淡い期待が僕の中に生まれる。が、

『甘いといったあー！』

その叫びとともに僕らを追いかけるパトカーは……ドリフトしてきた。うおい警察――！

「はっはっは、楽しいなあ圭ー！」
「僕は楽しくないー!!」

そして、長きデッドスピード対決を征し、辿りついたのは神無から少し離れた埠頭。そこにバイクを止め、アグニはヘルメットを外し、シートから降りる。

「ふう」

と一息ついた瞬間、僕はその背中に蹴りを入れた。

「な、なにをする？」

蹴られた箇所を撫でながらアグニが振り向く。

「警察に捕まったらどうする気だった？」

質問に質問で返す。免許取る前に前科持ちになるつもりはないぞ僕は。

するとちゅちゅとアグニが指を振る。

「甘いな。捕まらなければいいのさ。あと、背中の感触はうれしかったぞ」

どこの犯罪者の理屈だそれは。あと、後半の発言にもう一発ゲンコを入れる。

しばらく痛みにもだえていたアグニだったが、しばらくしてすたすたと僕に背を向けて海に向かって歩き出ししゃがみ込んだ。なんだろう、その背が煤けて見える。

頭の角度からおそらく水面を見ているのだろうか。

そして、ぼつりと一言。

「オレ、もうおじさんなのか？」

――いきなりなに言ってるのこの人？

「アルトにおじさんって言われたしてから他の託児所の子供たちにもおじさんって言われるようになってしまったよ。あはは……」

そういやこいつ子供に人気なんだっけ。でも、その姿はとても『おじさん』ばいよ。

心の中でぼそつと呟く。

「なんか言ったかね？」

「いいえ」

そ知らぬ顔で首をふる。

そうかとアグニは呟いて再び押しは引く水面に目を向ける。

黄昏たその姿はさらにおじさんくさい。

「ふふふ、これでもまだ若いんだがね？ まだ二十代だよ？」

あんた、本当におじさん呼ばわりされるの嫌なのか？ そのセリフものすごく『おじさん』ばいよ。

「なにか言ったかね？」

「なんも」

こいつ心読んでるんじゃないだろうな？ あと、まさか愚痴るために僕を連れ出したのか？

アグニがそばに落ちていた小石を水面に向かって投げる。ぽちゅんと水面に波紋が広がる。

「確かに妻や子供はいるのだが」

「いるんだ！？」

思わず大声で問い返してしまった。

こ、こいつの奥さんになれる人って菩薩さまみたいな心の人？

それとも旦那と同じマッドサイエンティスト？ ぶるつと震える。

まさか二人掛りで僕を改造しようとかしないよね？ たとえばドリルとか、自爆装置とか、マーボーとか、研ぎ澄まされた爪とか、

ビームとか、ジェットとか。

い、嫌だあ……

嫌な想像で背筋がびっしょりと濡れる。

「何でそこだけ露骨に反応するのかね？ まあ、みんな驚くけど。

まあ俺も結婚なんてできるとは思ってなかったのだがね。ああ、あれはオレが二十歳の頃だったか……」

しかも惚気だしたよこの人。僕はそれから一時間アグニの惚気に
適当に相槌打ちながら遠い地平線を見つめるのであった。

へ？ アグニの奥さんはどうなのか？ 聞いてたけど覚えてない。
半分上の空だったからなあ。

第四十七話 疾走（後書き）

鈴：「皆様お久しぶりです。作者の鈴雪です」

刹：「刹那です」

鈴：「ずいぶん時間をかけてしまいました、やっと投稿することができました」

刹：「正月の外伝『天使の火』以来だなあ」

鈴：「定期的に更新しようと思ってたんですが、思いのほか手間取ってしまいました。見捨てずに読んでいただければうれしいです」

刹：「さて、それでは、また次回」

遅くなつてすいませんでした。この話を読んでいただけることを願っています。

第四十八話 社長のお話

それはあのヴェノムとの戦闘から少し経ってからの休日だった。

「あ、ノエル今日社長室に呼ばれてるからいきなりですねえ!!」

「じゃあちよつと行ってくるね」

僕はアグニと手を繋いだアルトに手を振る。

「ママいつてらっしゃーい」

見送るアルトに手を振りながら僕はエレベーターに乗り込んだ。

お気に入りの桜色のワンピースを纏った僕はFUGAKUの地下施設でアルトをアグニに預けて社長室に向かう。

なんか、あまりかまって上げられてなくて悪いと思うし、そのうち遊園地とか連れてってあげようかな。

にしても社長も一体何の用なんだろ？ 朱音さんも教えてくれないうし。

「社長、ノエルを連れてきました」

そして、社長室につく。社長に会うのって例の写真事件以来だ。ちゃんと対応できるか心配だ。

社長室に入ると、社長はのんびりと重箱に箸を伸ばしている。

朱音さん時間間違えてないよね？

と、心配したけど朱音さんは気にせず社長室に入る。ああ、いいのか。

朱音さんは社長のそばまで近づいて重箱の中を覗き込む。

「おいしそうね。これ春菜が作ったの？」

だれ？ 春菜って、お弁当作ってるってことは社長の奥さんか？

「ああ、そうだよ。また君が遊びに来てくれるか聞いていたな」

そのうちねと言って朱音さんは来客用の椅子に座り、僕も慌てて倣う。

社長はそれを見てから立ち上がって僕に頭を下げた。な、なんで？

「先日はどうもありがとう。おかげで負傷者が出なかった」

先日のこと、ヴェノムのことか。

「いえ、仕事ですから」

僕はそう社長に答えながらも、できるなら次はごめんだとも思っていた。

戦うというのは、怖いというのが僕はこの前のことでよくわかった。訓練なんかとは違う、本当に殺生するか死ぬかのどちらか。正直、あの場にアルトたちがいなければ裸足で逃げ出していた。

でも、同時にあんなのを放っておけないという気持ちもある。あんなものの上を知る以上なにかをしないとイケないと思える。

中途半端な気持ちだと内心苦笑する。

そんな僕の葛藤は知らない社長はありがとうと言って椅子にかけ直す。

「でも、できたら危険手当とか欲しいですね」

冗談めかして言うてみたが結構切実な話である。なにせ僕は朱音さんに貰うお小遣い（月千円）以外収入がない。だからアルトの絵本とかですぐに飛んでってしまうのだ。

おじさんたちの仕送りでの生活でも二千元程度の小遣いはあったしねえ。

「危険手当なら先月の給料と一緒に君の口座に振り込んであいてあるんだけどね？」

社長が不思議そうに問い返す。

「……えっと、僕の口座？　しかも給料？」

「天野さんに渡しておいたんだけどねえ」

社長が朱音さんに目を向ける。僕も横に顔を動かすと、朱音さんはそっぽを向いてぴゅーぴゅー口笛を吹いていた。

「朱音さん、まさか……」

僕が確かめるのを躊躇っていたら、

「忘れてたかね？」

社長の言葉に朱音さんはこくと頷いた。

「朱音さ〜ん」

「ごめん！ ノエル本当にごめん！！」

僕が恨めしそうに睨むと朱音さんはぱんと手を合わせながら頭を下げる。

朱音さんも結構うつかりなところがあるんだなあ。まあ、後でどれくらいあるのか見ておかないと。

「さて、そろそろ本題に入ろうか」

社長がぱんぱんと手を叩く。

本題、別にお礼を言うのが目的だったわけじゃないのか。

「先日から、アメリカの方で対ヴェノム用兵器の開発が急ピッチで進んでいるらしい」

そういえば、朱音さんも前に言ってたな。世界各国には神無と同じ組織があるって。

日本の神無は医療関係、対してアメリカとか諸外国は軍事利用だったっけ。

「ずいぶん急な話だね。前までとりあえず程度にしか研究していなかったよね」

「まあ、対ヴェノムは建前でこちらを警戒してのことだろうね」

こちら？ 社長の言葉に朱音さんがふんと鼻で笑った。

「まったく、これだから面子と誇りを勘違いしてる連中は」

朱音さん、かなり棘の混じったこと言ってるね。

にしても二人の言っていることがよくわからない。こちらを警戒ってどういうことだ？

「向こうの連中、機械天使のことをずいぶん馬鹿にしていたくせにね。いざ力を見せられたら」

「まあ、アメリカは生きたヴェノムとの戦闘でずいぶん痛い目を見ているからねえ。確か中型一匹に一個中隊壊滅だったかな」

僕を警戒してる？ この前のヴェノムが理由みたいだけど、僕は

あの時気絶していたはずだなあ。にしても一個中隊、規模はどのくらいかわからないけど、二人の話からすれば結構な規模なのか？ 完全に話しに置いていかれてる僕を置いて二人は話を進める。

「そんなわけだから、向こうから呼び出しとかもあるかもしれないから、その時はよろしく」

「了解。せいぜい引つ掻き回してくるわ」

二人がくつくつくと笑う。その様は悪代官と越後屋、もしくは悪戯小僧の集いのようであった。

第四十八話 社長のお話（後書き）

鈴：「やっと、エンジェルダスト続き出せた」

刹：「遅かったなあ」

鈴：「そこは反省したい。次からは前のペースで出せればと思っている」

刹：「言葉だけじゃなく実践するように」

鈴：「はい……遅くなりましたが、見ていただけることをお待ちしております」

第四十九話 不安定な兵器

社長室から出て僕らはまたエレベーターで地下に降りている。そこその高さから相当下まで降りるから割と時間がかかる。うん、なら今のうちに聞いておくか。

「あの、朱音さん、ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

「ん、なに？」

朱音さんが振り返る。

「あの、さっきの話なんですけど」

僕はまったく着いていけなかったから、こころで説明してもらえたらありがたい。

「ああ、ならアグニも入れて説明するから」

朱音さんがそう答えるのと同時にちーんと目的地への到着を告げるベルがなった。

そしてアグニの研究室で朱音とアグニがプロジェクターを用意し、説明の下準備を済ます。

「それでは、第二回なぜなに機械天使講座を開始しまーす！」

朱音の言葉にノエルの膝の上に座ったアルトがぱちぱちと手を叩いた。

ノエルの方は自分の質問の内容がちゃんと聞けるのかということで心配したが、まあ、聞いとく必要があるかと納得する。

アグニが教鞭をパチンと鳴らす。

「さて、まずノエル、君はなにか聞きたいことがあったのだったね？」

アグニの言葉にノエルはちゃんと聞いてくれたとほっとしてから頷いた。

「うん。アメリカは機械天使を馬鹿にしていたって言うていたけど、なんで？ 機械天使は先史文明の主力兵器だったんでしょ？」

ノエルが一番の疑問はそこだった。主力だったはずの兵器を馬鹿にするとはどういう理由なのだろうか？　というものだ。

「ふむ、それは機械天使という存在についての一つの要素、『人間』が理由だ」

アグニの言葉にノエルはわからないとばかりの眉根を寄せる。人間、どういふことなのだろうか。

「機械天使は人間の持つ不確定要素も取り入れられている」

人間の持つ不確定要素、それは感情であり、進化、成長すること。それらの不確定要素は兵器を不安定にする要素であつたが、それすらも先史文明の科学者たちは兵器の一部にしようとしたのだ。

だが、それは兵器としての視点からすれば非効率的かつ、不安定極まりないものだった。

「そういうわけだからアメリカは兵器として不安定な要素を持つ機械天使よりも、安定した戦力であるガディに目をつけた」

ガディは機械である。戦闘力は機械天使に及ばぬものの、安定した戦力を提供する。

どちらが優れているのかは一概には決められないものの、ただの兵器という観点からすればガディは機械天使よりも完成度が高い。

「しかし、俺からすれば、機械天使とはガディよりも面白い兵器だ。言ってみればどこまでも進化するかもしれない兵器なのだから」

アグニの言葉にノエルは引きつった笑顔を浮かべる。褒められてんだかなんとか。

「続いて、機械天使の不安定にしている要素の一部である動力、精霊炉について語ろう」

アグニが手元のパソコンを弄ると画面に円柱のような突起物がいくつが付いた、機械でできた心臓のようなものが写される。

「これが機械天使の精霊炉の図だ。これは星にアクセスすることでマナを機械天使のエネルギー『天使の血』に変換することができる」

画面の中で星から伸びる『マナ』と書かれた矢印が精霊炉を指し、精霊炉から伸びた『天使の血』と書かれた矢印が『機械天使』と書

かれた人型の絵を指す図が現れる。

が、再び現れるよくわからない単語にノエルは首を捻る。

「しつもん、『天使の血』っていうのが機械天使のエネルギーだとはわかるけど、マナってなに？」

「マナとは地球の生態系を循環している地球の持つ生命力と思われるものだ。超能力などもこれらを触媒にして発動しているみたいだな」

ノエルの質問にアグニは流暢に答える。だが、いきなり出てきた地球の生命力という単語にもノエルは理解が追いつかない。

それを敏感に感じたのか朱音はノエルに一つの話をする。

「ねえ、ノエルはガイア理論って知っている？」

朱音の質問にノエルは首を振る。

『ガイア理論』とは地球と生物が相互に関係し合い環境を作り上げていることから、地球を一つの巨大な生命体と見なす1960年代にジェームズ・ラブロックによって提唱された仮説である。

「ようするに、地球は一つの巨大な生き物っていう考え方でね、君はその大きな生き物の力を借りることができるって考えればいいんだよ」

と、諭す様な朱音の言葉にノエルは、はいと頷く。

話を続けるぞとアグニが告げると教鞭をぴしっとならす。

「星という莫大なエネルギー源があるため精霊炉は半永久的に活動する。だが、その上限は不安定だ」

画面が切り替わる。今度はハートマークと精霊炉の図が映される。「機械天使は生体脳とコアで並列処理することにより精霊炉の小型化に成功している。だが、それは同時に機械天使の精神状態が出力に影響することとなった。例えば、テンションが高かったり、ポジティブな精神状態なら出力が上がり、逆にテンションが下がったり、ネガティブな精神状態なら出力は下がる。また、マナが足りないエリア内、例えば砂漠地帯でも出力は下がる」

最初にテンションUpと書かれた上向きの矢印がハートの横に現

れると、対して精霊炉の横に出力Upという矢印が現れる。さらにアグニがクリックすると、テンションDownという下向きの矢印と出力Downという表示が出る。

アグニの説明にノエルはむーっと唸る。予断だが話が難しいせいかアルトはすでにおねむになっている。

「なんでそんな不安定なシステムなの？」

「開発経緯はあまり残ってないが、先ほど言ったとおり、先史文明は人のもつ不確定要素に対して肯定的だったからな。そのくらいのデメリットは目を瞑ったんじゃないのか？」

なんとも言えない答えである。彼らが何を考えていたのか今はもうわからないが、よほど人間の持つ可能性を信じていたのだろう。とノエルは結論する。

「まあ、こういう理由で機械天使は不安定だが、条件がそろえば天下無双の力を奮えると言うことだ」

アグニの言葉に微笑を浮かべるノエル。天下無双、そういいながらも自分は弱いなあと考えたから。

「今日の話はこんなところか。さて、片付けた後に定期検査するか用意しとけ」

そう言っアグニはプロジェクターを止めて片付ける。

「了解、朱音さん、アルトお願いします」

ノエルはすやすや眠るアルトを朱音に預けてメンテナンスベッドに向かうのだった。

第四十九話 不安定な兵器（後書き）

鈴：「どうも鈴雪です」

刹：「刹那です。さて、今回出た設定だが」

鈴：「うちの作品の根幹とまではいれないが重要なところだな」

刹：「まあ、お前の設定好きは今更だからな。あんまり風呂敷広げるなって、これ何度目だよ言っの」

鈴：「まあ、がんばるよ。毎度のことだけど」

刹：「それでは、また」

鈴：「次回で会いましょう」

第五十話 別れの夢

僕はまた夢を見る。遙か遠き別れの記憶の夢を。

彼女はその手に長大な剣を携え、白い翼を広げ蒼穹を駆ける。その視線の先にあるはこの星を我が物顔で闊歩する蟲のような姿の化け物。

目標を定める。体を前方に投げ出すような姿勢となり、それと同時に背の翼を広げる。

そして、剣を右に構え、羽ばたいた。

一気に後方に視界が流れるほどの加速、その加速を生かし、剣を振る。空気抵抗すら切り裂き、振り抜かれた刃が彼女の目の前の蟲の頭を破碎する。

「十五……」

彼女はすぐに刃を引き抜き、その紫の返り血を浴びながらも蟲の屍骸を蹴って次の目標に向かう。

そばにいた次の獲物の背に刃を突き立てる。だがそこで終わらず、潜り込ませた刃の先を展開、砲撃形態に武器を変更。

「十六！」

叫びとともにトリガーを引いた。

放たれた弾丸はその凶悪な運動エネルギーを持って哀れな敵対者の体内を蹂躪し、その腹部から突き抜ける。

ノルマを満たした彼女はそこで一度周りを見る。他の仲間たちも次々と敵を屠る様子が広がっている。こちらにはまだ損害がないように、ほっと一息をつく。

（ここは大丈夫かな？）

人類の生活圏に『蟲』が接近していると突然のスクランブルで飛び出したが、どうやら中型種ばかり。厄介な大型も小型もない。まだ数匹残っているが、この数ならすぐに殲滅できるだろう。

威力偵察かなにかのための群れだったのかもしれないと彼女は思考し、

『……さん、大変です!』

自分の名前を呼ばれていることを遅れて気づく。

「ん、ごめん。なにかな?」

オペレーターの切羽詰った様子に新たな敵が接近しているのかと考え、

『ソフィ博士が、お母様が倒れました』

告げられた報告に彼女の思考は真っ白に染まった。

基地に戻り、気象コントロールシステムが降らす雪の中、彼女は母、ソフィが搬送された病院に向かう。息を切らせて病室に入るとそこには医者と妹がベッドに横たわる母さんを見ていた。

「おねーちゃん……」

妹は涙や鼻水を流してぐしょぐしょにした顔を上げる。

ぽんと一度妹の頭を撫でてあげてから彼女は母さんの枕元に近づく。

「母さん、具合はどう?」

ゆっくり母さんは枕元に立つ娘に顔を向けると、そつと微笑む。その顔は家を出た時に比べ少し頬が痩せこけ、隈も浮かんでいる。

「ええ、大丈夫。ごめんなさいね、あなたも忙しいのに」

いいのと彼女は笑いかける。

「あの、少々よろしいでしょうか?」

医者に声をかけられた彼女は妹に一言言ってから病室を出た。

「……もう一度お願いします」

彼女は縋る様な思いで今のが聞き間違いであることを願う。

「残念ですが、手遅れです」

再び医者は、はっきりと丁寧に事実を告げた。

彼女は自身の聴覚センサーが誤作動を起こしたと思った。思いた

かった。だが、自己診断システムは正常、オールグリーンを示している。

診断プログラムと聴覚センサー両方が誤作動を起こしてるんじゃないか？ そう考えたが、冷静な自分が現実を見ると叫び、受け入れるしかなかった。

「もつと早く発見していたなら侵攻を抑えられたのですが、ここまですべて症状が進んでいる以上、もう手の施しようがありません」

母さんの病気、それは数年前に蟲の毒の影響で生まれた変種のウイルスによるものだった。

発生当初は猛威を奮ったこの病も現在では侵攻を抑制する薬もあり、死亡率は低い。だが、母さんの病気はすでに末期であり、その薬もなんの意味もないものだった。

ふらりと彼女はよろけ、壁に背を預ける。母が死ぬ。その事実が彼女の肩に重く押し掛かった。

「そういえば、父さんは雪が好きだったよね」

彼女は努めて平静を装いながら母と話していた。妹は疲れたのか母さんのお腹の上に頭を乗せて眠っている。

母さんはもって数日かそこらだと医者に宣告されたが、言うかどうか悩んでいた。

雪を見ながら思い出すのは、妹に物心付く前に亡くなった父親のことだった。雪が好きで、いつか本当の雪を見たいと嘯いていたことを彼女は思い出す。

「そうだったわね。それに、雪が降る中で安らかに逝ったわね」

母さんの言葉にずきりと彼女の心が痛んだ。彼女の上官でもあった養父は作戦中に怪我を負い、そして、蟲の毒に感染してしまった彼は、母さんと彼女が見守る中、雪の降る日に眠るように息を引き取った。

「ねえ――、あなたに頼みがあるの」

名前を呼ばれて彼女は母に向き直る。

娘と向き合った彼女はいつもと変わらない、柔らかで優しい笑顔を浮かべる。

「この子の未来を、あなたが守ってあげて」

その言葉に彼女は母が自分の死期を悟っていることを理解した。

うん、そう小さく頷いて、ぽろっと涙がこぼれた。そして、それは次第に後から後から溢れてくる。

そんな彼女の頭を母さんは優しく撫でていた。

翌日、母さんは退院し家に帰ってきた。最後は家族だけで過ごしたいと彼女が願ったからだ。

「今日はみんなで一緒に寝ましょう」

母の提案に妹は嬉しそうに頷き、彼女も頷く。この時には、母の死を自分でも不思議なほどに静かに受け入れていた。

三人で一つのベッドに横になつて寝る。

「おとーさんってどんな人だったの？」

「んー、優しくてね、それでいて強い人だったわ」

「うん、私に家族って言うものを教えてくれた人だったよ」

暗闇の中ぽつぽつと他愛のない話をする。

いつも通りで夜をすごして、彼女が目を覚ましたのは朝方だった。

「おはよう二人とも」

「おはよう母さん、――」

「おかーさん、おねーちゃんおはよー」

順番に起きて順番に挨拶を返す。見れば今日も曙光の空に雪が降っている。

三人は布団から出ずにいた。そして、唐突に母さんが口を開いた。

「リ――あなたは私の自慢の娘、私の誇りよ」

「うん、ありがとう母さん」

母さんの言葉に彼女は嬉しそうに寂しそうに笑う。

「――、お姉ちゃんと仲良くね？ 幸せになつてね」

「……うん」

頷いてから妹が泣き出す。その妹を母さんは抱きしめる。

「泣かないで、泣かないでね？」

「やだよ、おかーさんがいなくなるなんてやだよ……」

そつと、彼女も妹の頭を撫でる。

そして、妹が泣き止むと、母さんは心地よさそうに息をつく。

「なんか、また眠くなってきちゃった」

母さんの言葉に彼女が微笑む。

「なら、もう一度眠っていいよ。母さん頑張りっぱなしだったでしょ？ もう休んでいいよ」

穏やかな気持ちで彼女は母さんを見つめる。

「うん、そうするね」

母さんは大きく息を吐いてから目を閉じる。

「おやすみなさい。私は、二人みたいな娘がいて幸せだったよ」

それは、別れの言葉。そして、母さんからのありがとうの言葉だった。

私は涙を流しながら起きる。そして、後から後から零れ落ちる涙を拭う。やっと涙が止まってから、私は、僕は上を向く。

「ごめんね母さん」

ただ、僕は謝ることしかできなかった。星になった『彼女』の母に。

第五十話 別れの夢（後書き）

鈴：「今回は難しかった……」

刹：「まあぼちぼちじゃないか？」

鈴：「圭一というかノエルと『彼女』の境界が狭まってるように見せられていたら上々」

刹：「ああ、そうなのか」

鈴：「まあ、少しずつこういうのはできたら嬉しい」

刹：「うん、まあがんばれ」

第五十一話 夏休み始まる

僕は今朝の夢について考えていた。

夢じゃないって言われたら信じてしまいそうなほど、あまりに現実感のある夢。

やっぱり僕は先代の記憶を夢として見てるのだろうか？

だとしたら、何というか申し訳ないと言っべきか、自分からじゃないけど勝手に見てごめんなさい。

でも、考える。夢を見た直後『母さんごめんね』と確かに僕はそう言った。

ごめんねと謝った。そして、夢の内容から約束を破った。つまり彼女は妹を守りきれなかったのだろうか？

他人が人の過去を覗き見るのはいいことじゃないと思うけど、なにがあつたのか知りたいし見てみたいと思ってしまう。

「ねえ、ノエル。難しい顔してどうしたの？」

はやなさんに声をかけられた。

「あ、ごめん。ちょっと今朝変な夢見ちゃってね」

誤魔化すように笑う。はやなさんはふーんと頷く。

前から思うことだけどこの考え込む癖もなんとかしないと。

「でも明日からが楽しみだね」

「うん」

はやなさんの言葉に頷く。だって明日から。

「夏休みですが、みんなあまり羽を伸ばさず節度を持って生活してください」

そう、夏休み！ うーん、楽しみ。予定でははやなさんたちと旅行に行ったりするしね。

「海に行くの楽しみだね」

「ですね。思いつきり泳ぎますよ」

現在、部室で僕、はやなさん、かなねえが集まって夏休みの話をしている。

そういえばこの体泳げるのかな？ 体重は変わらないけど確か骨格とか金属製だったはずだし……

「えっと、海に行くのはあたしにお兄ちゃんにノエルと香苗さん、朱音さんとアルトちゃんの六人。部屋取れるかな？」

うーんとはやなさんが考え込む。

「あ、朱音さんが言ってたけど別荘あるから宿の心配いらなくてあるんだ別荘！？」

二人が目を見開いて驚く。まあ、普通そうだよなあ。僕も始め聞いたとき驚いたし。

でも朱音さんだしね。

それからそのうち集まる約束をしてから家に帰宅。

「ママおかえりー」

「ただいまアルト」

家に帰るとアルトが迎えてくれる。はあ、アルトはやっぱりいい子だよ。

その頭を撫でながら家に上がる。

「朱音さんは？」

「お部屋でお仕事してるよ」

締め切り近いらしいからなあ。かわりに晩御飯作るか。

なにがいいかな？ 朱音さん、徹夜らしいから体力付くものを……

冷蔵庫になにかないかな？ なければ買い物に行つて、あ、そう
だ。

「アルト、明日お買い物行こつか？」

「お買い物？」

アルトが首を捻る。

先日、朱音さんから受け取った通帳には僕が今まで見たことのない金額が載っていた。ふつ、最初はゼロの数を間違えたかと思った

よ。

まあ、そういうわけで今は手元にお金があるし、アルトになにか買ってあげるのもいいよな。

「服とか色々買おうと思うんだけど」

アルトがぱあつと表情を明るくする。

「うんいく！」

よし、明日はたくさん買ってあげよう。

それから、アルトと一緒に遊んでから疲れて寝てしまったアルトを寝かしつける。

で、そうしてから僕は電話の前に立っている。

はあつと息を吐いてから受話器を取る。確か非番な筈だから……教えられた番号をプッシュする。少し待つとがちゃつと音がして、

『はい、立花です』

知らない女の人の声が出た。ああでも、奥さんいるっていったしな。

「テストロッサと言います。あの、アグニ先生はご在宅でしょうか？」

『あ、主人にですか？ 少々お待ちください』

電話越しにアグニを呼ぶ声が聞こえた。それから少しして、

『ああ、ノエルか。どうしたのだい？』

アグニが出たものの少し僕は黙っていた。

『どうしたんだい？』

アグニが問いかけてくる。うん、そのために電話したんだ。黙ってちゃだめだ。

「ちょっと相談あるんだ。今朝、僕夢じゃない夢を見たんだ」

『？ 言っている意味がわからないのだが』

だよ。僕も言っていることがわからないし。

「僕が他の機会天使と一緒にヴェノムと戦ってた」

『……それで？』

アグニが続きを促す。僕は夢の内容を話すか考えたがそれはいいだろうと決めた。アグニは精神科医ってわけじゃないし。

「うん、よくわからないけど、目を覚ましたら僕は泣いてて、ごめんって謝ってた」

向こうも黙る。やっぱりわからないかな。

だけど、少ししてからアグニから返事が返ってくる。

「……おそらくそれはコアのメモリー内に残った先代の記憶の残滓を夢として見たのだろうな。謝ったのもその影響かもしれない」

「そうなのかな」

「あくまで多分だ。確証はない」

アグニの返答に小さく笑う。まあ、そうだよな。

「そっか、ありがとう。ごめんねいきなり電話して」

「かまわないさ、ではまた」

「うん、また」

僕は電話を切った。少しの間それでじっとしてからふうつと息をついて思考を切り替える。

さてと、ご飯を作るかな？

第五十一話 夏休み始まる（後書き）

鈴：「夏休み〜」

刹：「どうでもいいが、夢の話について考えるのと一緒にするものか？」

鈴：「やあ、ちょっと必要な理由もあるのだよ」

刹：「ああ、そう。まあいいや」

鈴：「それでは、また次回！」

第五十二話 アルトとお買い物

陣内町駅前はそのこ所發達している。東口から左手には商店街があり、賑わいがあり、反対の西口は出てすぐに全国的に有名なデパートがあり、そのすぐ横には映画館がある。

今日、僕はアルトの服を買いにその西口にあるデパートに来ていた。

「いいお洋服があればいいね」

「うん、楽しみ！」

嬉しそうにアルトが笑ってくれて僕も笑みを深くする。

せっかく給料が入ったんだからなにか親らしいことやろうと思つての行動。

目当ての店は、前に朱音さんに連れられて服を買った店。店についていくつかの服を見る。うーん、どれがアルトに似合うかな？

純白のワンピース、赤のノースリーブのブラウス、他多数。どれも似合いそうで悩む。むしろこの子に似合わない服なんて少ないんじゃないか？ なんて考えてしまう。

ためしに試着させてみる。数は絞れたけどまだ数があるし、もう少し絞っておくべきかな？

「アルトはどれがいい？」

僕が聞くとアルトは少し悩んでから、

「これ」

白に色んな花の絵がプリントされているノースリーブのワンピースを示す。

「これがいいの？」

「うん！ これがいい！」

アルトが笑顔で頷く。

よし、僕はそれをカゴに入れる。んっ、そうだなそれと……これいいかな？

僕は一緒に薄い水色のカーディガンやブラウスなどいくつかも一緒に買うことにして、レジで精算。

「はい、アルト」

「ママ、ありがとう！」

買った服を入れた袋を渡すと満面の笑顔でアルトが抱きついてくる。

それが嬉しくてアルトの頭を撫でる。はあ、アルトって本当に撫で心地がいいなあ。

「じゃあ、お昼食べてから帰ろっか」

「うん！」

そして、僕たちはデパートの外に出て商店街のファミレスに向かう。

でも、夏休みが始まったばかりだからか、それとも日曜日だからか、今日はかなり混雑していた。人の波とは、まさにこのことだね。

「アルト、はぐれないように手を繋ごう……ね？」

僕はアルトに手を伸ばして、だけどそこにアルトはいなかった。

「アルト？」

さっきまでアルトはここにいたのに、ま、まさか迷子につちゃった？ そんな！？ こんなに人がいる中で？

「アルト？ アルトー！！」

僕が声を張り上げるがアルトから返事は返ってこない。

周りはいきなり騒ぎ出した僕を一瞬見るが、立ち止まってなにがあつたかは聞いてくれはしなかった。

どうしよう？ どうしよう？！

『マスター、落ち着いてください』

混乱する僕に蒼窮の叱責が浴びせられる。

「で、でも……だ、誰か危ない人に連れてかれてたら！」

誘拐とか、人質とか、とにかく危ない目にあってたら……

『だから落ち着いてください。各種センサーを利用すればこの中からでもあの子は見つけられます』

蒼窮に言われてやっと気づいた。そうだよこの体は普通じゃないんだ。最近では馴れてきたのか実感が薄くなってるけど。

すぐに内蔵されたセンサー類に命令を出す。

聴覚センサーは有象無象の音の中からアルトの声だけを拾えるように、視覚もアルトの姿を掬い上げられるように、全てのセンサーにアルトを掴まえられるよう命令する。

そして、

『ママ、見つからないの……』

すぐに聴覚センサーがアルトの声を拾い上げた。やった！

センサーの情報で場所がわかるとすぐに足が動く。人ごみを避けながらその方向に向かうと、アルトは商店街入ってすぐのファミレス前で、僕と同じくらいの男の子に手を引かれていた。

「アルトー！！」

僕の声にアルトが振り返った。

目尻に涙を溜めて、今にも泣き出しそうな表情をしてたけど、一瞬ではあっと明るくなった。

「ママ！」

すぐに男の子から手を離してアルトがこっちに走って僕の足に抱きついた。僕はアルトの頭を撫でてからしゃがむ。

ちゃんと言っておかないとな。

「もう、どこ行っちゃってたんだよ！ 心配したんだよ！」

アルトの頬を押さえて、真っ直ぐ目を合わせて僕は怒る。

「ごめんなさい……」

しゅんとアルトがうなだれる。僕はそんなアルトを抱き寄せての頭をポンポン撫でる。

「うん、なにもなくて良かった」

ギュッとアルトを抱きしめる。と、少し影が差す。

あ、さっきまでアルトと一緒にいた相手を思い出した。お礼ちゃんと言わないと。

「その子のお母さんですか？」

顔を上げようとしたらちょうど声をかけられる。

なんか聞き覚えのある声……

「はい、ご迷惑おかけしたみたいでありがとうございまして……す」
顔を上げてお礼を言おうとして相手の顔を見た。

そして、相手の顔を見た瞬間に聞き覚えあるはずだと納得した。

「前田、くん？」

アルトと一緒にいたのは、先日久しぶりにあった友達、前田君だった。

「あれ？ 君は香苗さんと一緒にいた」

前田くんがなにか言う前に僕は口を開いた。

「ノエル、ノエル・テストロッサです。またお会いしましたね」

自分に言い聞かせるように僕は再び名乗った。

「で、テストロッサさんはアルトちゃんの服を買いに来たら、はぐれちゃったんですか」

「はい、そうなんです」

またはぐれないようにしっかりとアルトの手を握りながら、前田君に説明する。

それから、前田君はしゃがみ込んでアルトと視線を合わす。

「良かったねお母さん見つかった」

「うん、お兄ちゃんありがとうございます」

ぺこっとアルトがお辞儀すると前田君が目尻を下げた。

「それじゃあ、俺はこれで」

そう言っただけで立ち上がって背を向ける前田君。その背に、

「あ、あの」

声をかける。前田君は振り向いた。

「お礼と言っのもあれですが、お昼一緒に食べませんか？」

そして、ファミレスで僕はドリア、アルトはお子様ランチ、前田君はナポリタンを食べる。

「おいしいねママ」

「そうだね。でもアルト、ちゃんと口拭いて」

お子様ランチに着いてるスパゲティのソースだらけになったアルトの口を拭いて上げる。

「テスタロッサさん？」

半分くらいまで食べ終えてから前田君が声をかけてくる。

「なんですか？」

躊躇いがちに前田君はちらりとアルトを見てから口を開く。

「あの、一体いくつなんですか？」

前田くんの問いかけに、やっぱり気になってたかと苦笑した。

「香苗さんの二つ下、同年ですよ」

えっと、前田くんが呟く。まあ、見た目はもう少し上に見えるしなあ。だけど、

「女の子に歳を聞くのはマナー違反なんじゃないかな」

つい僕はそう言って小さく笑う。

……何言ってるんだらう僕。ふと冷静になって恥ずかしくなる。

気恥ずかしさをごまかすようにコーヒーを一口。苦味に顔を顰めた。匂いは好きだけどやっぱりブラックはまだ苦手だ。

「すいません」

前田君は頭を下げるけどいいよいいよと言いながらコーヒーにミルクと砂糖を三つずつ入れる。

「じゃあ、アルトちゃんのお母さんて言うのは」

「アルトは私の姉の子なんです。事故で死んだから僕が代わりをしてるんですよ」

さらっと、嘘の経歴を語る。それで僕の答えに神妙な顔で前田君は再び頭を下げる。

「すいません」

「いいよ気にしなくて」

僕はそう答えてからコーヒーを一口。うん、こんな感じ。僕は思わず頬を緩める。と、前田君がじっと僕の顔を見ていた。

「なに？」

「あ、いえ。ちょっと見惚れてました」

うわ、恥ずかしいことさらって言うてくれちゃったよ。恥ずかしくてちよつと頬が赤くなっていると思う。見れば前田君も真っ赤になっている。

そういえば彼女無しだしけつこう初心なところがあるかな？　じつと前田君の顔を見つめ返す。

……　かつこいいよなあ。

ふとそんな思考が流れてからぞくつと背筋に悪寒が走った。

一体、僕は今何を考えた？　その思考に入った瞬間、思わず席に頭をこすり付ける。

「ど、どうしたんですか？」

「どうしたのママ？」

突然の僕の奇行に前田君とアルトが問いかけるが、そっちには顔を向けない。いくらなんでも今の思考はありえない。

「いや、自分の思考に絶望してるんだ」

僕の返答に前田君とアルトは不思議そうに首を傾げたのだった。

そして、お昼ご飯を食べ終わると、前田君と別れてアルトと一緒に家路に着く。

「おにいちゃん、またね」

「ああ、じゃあね」

そう言つて僕らは別れる。

家に向かう道、その間にふと考えたのは前田君のこと。昔のような付き合いはもうないだろう。だけど、また友達になれたらなと思うと自然と笑みが浮かんだ。うん、友達。

そう、かなねえと同じようにゆっくり新しい関係を作っていけばいい、そう思えたから。

第五十二話 アルトとお買い物（後書き）

鈴：「どうもお久しぶりです鈴雪です」

刹：「刹那です」

鈴：「夏休み編初日の回です」

刹：「買い物かあ、俺はあまり服は気にしないからなあ」

鈴：「一番高い服って言われればお前の場合、式服だもんな」

刹：「あれ、ん百万するんだ。当然だろ？」

鈴：「まあ、それは置いといて次は狐火を更新できたらなあと思っ
ています」

刹：「おう、早く俺の活躍を書いてくれ」

鈴：「うむ、それでは」

刹：「また次回に」

第五十三話 超常能力保護課

へロー、ノエルです。今日も僕は神無に來ています。

と言つても今日は特訓のためではありません。『超常能力発現者保護課』 - 簡単に言つと超能力者を保護する仕事をしているところに挨拶に行くのです。

「でも、ずいぶん遅いですね」

つい前に行く朱音さんに洩らす。

だって僕がここに来て二ヶ月以上は過ぎている。挨拶しに行くには遅くはないか？

「ごめん。うちの『遺失技術研究課』だけでも一杯一杯かもしれないと思つてたし、向こうもなかなか都合がつかなくて」

朱音さんが困つたように笑う。そんなに忙しいのかな？

「向こうはしょっちゅう全国に飛ぶ必要もあるし、情報の精度の吟味とかで忙しいみたいだから」

そんな風に理由を聞いているうちに『超常能力発現者保護課』とかれたプレートのある部屋につく。

朱音さんはノックもせずに部屋に入る。

え、勝手に入っていいの？ 僕は少し迷つたが、すぐに続いて部屋に入る。

そこではこつちと違つて数人の人間が行き來していた。

「そつちの情報はガセ？ なら戻つてきて。次の仕事があるから」

「郊外の街でそれらしき情報がありました。もう少し調べてみます」
仕事の話らしきものが飛び交う。

これは、ノックしても意味ないな。むしろ邪魔になる。

その間を僕は朱音さんの後についていくが、仕事に集中してるのかこちらを見る人はあまりいない。

「あ、朱音さんおはようございます」

朱音さんに気づいたひとが声をかけてくる。

「おはよう。課長は？」

「奥の応接室で待っています」

ありがとうとお礼を言つて朱音さんは奥にある応接室というプレートがかけられた部屋に向かう。僕も軽く会釈してからついていく。ドアを開けて部屋に入る。

「お久しぶりです天野さん。そちらが？」

そう言つて立ち上がったのはパリツとスーツを着こなした長身の男性で、歳は二十代後半くらいかな？ 白い髪にメガネをかけて、少しかっこいい感じがする。

「お久しぶり犬神君、こつちがうちの新人のノエル・テストロッサ」
朱音さんに紹介されて一歩前に出る。

「ノエル・テストロッサです。よろしくお願いします」
犬神さんという人に頭を下げて挨拶する。

「『超常能力発現者保護課』課長、犬神士郎だよろしく」
それから三人とも椅子に座る。

犬神さんは目つきが鋭くてなんか居心地が悪い。なんていうか、狼に睨まれた兔？ つて、そんな表現ないし、蛇に睨まれた蛙か。

「聞いているかもしれないが、この課は主に特殊な能力を持つ人間を保護するのが目的だ。そして働く人間も大半が特殊な体質の持ち主だ」

と、変なことを考えていたら犬神さんがこの部署の説明を始めた。特殊な体質か。僕も元はそのうちに入るんだよね。

「犬神君も少し特殊な体質なんだよ」

と朱音さんが耳打ちする。特殊、どんなのなんだろう？

「天野さん、あまり言い触らしてもらいたくないのですが」

犬神さんは責めるように朱音さんを見る。

「ごめんねと朱音さんは謝るのに軽いため息をつく。」

「狼男は知っているか？」

あまりに有名な名前に頷く。満月を見たら狼になる人間だよな。
「私はそれに近い体質だ」

近い体質？ 意味がよくわからず首を傾げ、固まってしまった。犬神さんが変貌していったのだ。

鼻が高いどころじゃない、突き出し、牙が伸び、毛が体を覆う。数秒後、そこには狼の顔をした人間がいた。

こ、怖いです。肉をあつさり引き千切りそうな牙、鉄をも切り裂きそうな爪。

僕より強いなんて言われても納得するぞ。

「と、こんな体質だ」

そう言っただけで手も長い爪が伸び、ふさふさの毛に覆われていた。

それから犬神さんが元に戻るのを待つて話を続ける。

「こんなふうに、通常とは違う人間がここには集められている。そして全国から情報を集めて同じ人間の保護にも勤めている」

犬神さんの説明を受けながら考える。

超能力と言うのだから、僕のようによくわからない力を使ったり、朱音さんみたいに雷を使うようなものを想像してただけに、犬神さんの能力には少し面食らった。

もしかしたら世界中に流れる吸血鬼の伝承も同じような人たちの存在から生まれたのかもしれない。

「一体どんな仕組み？」

ついポロツと漏らす。

僕的能力といい、常識じゃわからないようなものばかりだ。

「犬神君の場合は遺伝子ウイルスが特定条件を満たした時に活性化し、宿主の遺伝子内に眠る情報を元に構造を変化させたっていうのがうちとこっちの共通見解ね」

すぐに朱音さんが説明してくれる。

遺伝子ウイルス？ 名前だけでは想像しづらいけど特殊な遺伝子ってところかな？

「この遺伝子ウイルスは先史文明時代に作られた特殊なウイルスと

「いう見解もあるよ」

すかさず朱音さんの補足説明。ああ、だから神無は両方の研究と保護をしているのかと、少し納得する。やっぱり先史文明については後から研究を始めたのかな？

それから二つの課での取り合わせについていくつかの話をして、

「まあ、今日は顔合わせ程度だけどこんな感じがしら」

「そうですね」

朱音さんの言葉に犬神さんが頷いて二人がソファから腰を挙げ、慌ててそれに倣う。

「今日は忙しい中ありがとうございます」

頭を下げる。さっき部屋を通っている時に見たけど、僕たちよりも忙しそうだしね。

対して犬神さんは手を差し出す。

「いや、こちらこそこちらの世話になるかもしれないから、これからよろしく頼む」

顔を上げるとさっきまでの事務的なしこまった顔とは違う微笑が浮かんでいた。

狼男だということも含めて怖そうなイメージを持っていたが、なんだかほっとした。

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

そう言って握った手はさっきは硬いことに気をとられて気づかなかったけど温かった。

ノエルちゃんと天野さんが部屋を出てから十分ほど立ち、気になっていた匂いの元に近づく。

その気になるものは観葉植物。無言で手を葉の間に入れるとプラスチックの感触が手に帰ってくる。

「やはりな」

そう呟いて俺は手を引くと、そこに小さなカメラ。くんくんと鼻に近づけて匂いを嗅げばすぐに誰のものがわかる。

そして、嘆息。まったく、あいつはこの前のことで反省をしていないのか？

部下の行動に頭を痛めながら部屋を出る。そして、部屋を見渡し忙しく動き回る部下の中から目的の相手を見つける。

「渡辺」

資料を大量に抱えて歩くその背中に声をかける。

「はい、なんすか、ぶちよ、う……」

振り向き、俺の手の中にあるカメラを見た途端、渡辺の言葉は尻すばみになっていき、宙に視界を泳がす。

現実逃避しているのか？

「すいません、俺、これを出さないといけないんで」

そう言って背中を向けるがその襟を掴む。

「まあ待て。これは、お前のだろ？」

振り返らせると渡辺は完全に怯えきつた表情で何度も首を横に振る。

俺はそこまで怖いのか？ ふとおびえる部下の顔にそんな愚にも付かない事を考える。

とりあえずいつまでも呼び止めたままなのはあれだと考えスーツのポケットに無理やり突っ込む。

「これつきりにしておけ。先日のこともあるからな」

渡辺はぶんぶん首を振る。どうでもいいが、首が痛くならないのか？

それからその肩に手を回し、誰も聞いてないことを確認してから、
「その、今回は目を瞑る代わりに、後で……テストロッサ君の写真を私のところに持って来い」

とだけ言い含める。意外そうにこっちを見る渡辺に咳払いをしつつ、自分のデスクに戻った。

犬神士郎二十八歳、クールで硬派に見せているが、実はノエル・テストロッサ非公式ファンクラブの会員ナンバー002のプラチナ

メンバーであった……

第五十三話 超常能力保護課（後書き）

鈴：「他部署とのお話です」

刹：「まあ、前からあるってことは言ってたしな」

鈴：「ストーリーに本格的にはあまり参戦しませんが、そのままほつとくのもあれだと思ったので」

刹：「何度も言うが無駄な設定はあまり用意しないように」

鈴：「わかってるってば……」

感想、拍手お待ちします。

第五十四話 夏だ、海だ、水着だ！

「海だ、海だよー！！」

「うみー！！」

アルトとはやなさんが今にも飛び出さんばかりに窓にへばりつく。現在、僕らは朱音さんの運転する車で、朱音さんの所有する別荘に向かっている。

メンバーは僕にアルト、朱音さんになねえとはやなさん。そして一馬さんの六人で、後部座席は僕ら女の子グループ、助手席に一馬さん。アルトは僕の膝に乗っている。

みんなで旅行、実は楽しみで昨日はよく眠れませんでした。

かなねえは二人の様子を微笑ましそくに、一馬さんも二人ほどじやないけど嬉しそうに海を見ている。

「もうすぐつくからね」

朱音さんの言葉に僕らはおー！ と答えるのでした。

そして、朱音さんの別荘に到着。

うちより小さいが十分な広さを持つ青い屋根に白い綺麗な家だった。すごいなあ、こんな別荘持つてるなんて……本当に何者なんだろう？

「り、立派ですね……」

はやなさんは恐れおののくように感想を零す。

「そう言って貰えると嬉しいよ」

はやなさんの言葉に朱音さんが嬉しそうに笑う。

さて、まずは荷物、一馬さんがトランクを開けて荷物を下ろしてくれる。

「はい、はやな、次、草薙さんで天野さん、テストロッサさんどうぞ」

自分の荷物を受け取り持ち上げる。

アルトとセットになってるから、バックはそれなりに大きいけど重さはまったく感じない。やっぱりこの体便利だわ。

中に入って荷物を置く。部屋割は車の中と同じ。僕、アルトにはやなさんとかかねえが同じ部屋。

朱音さんと一馬さんはそれぞれ別室。

僕らが荷物を片づけていると、アルトが僕の袖を引っ張る。

「ママ、早く海に行こー！」

痺れを切らしたアルトが少しむくれた顔でお願いしてくる。

今日をずっと、楽しみにしてたからなあ。

「うん、準備ができたらずいに行こうね」

アルトの頭を撫でながら、僕はこの前みんなで選んだ水着を取り出した。

熱い日差し、ごみの目立たない綺麗な砂浜、そして、押しては返す澄んだ青い海、なんとも美しい光景が広がっている。

「やつぽー！」

「わーい！」

海につくと、僕が選んであげたフリル付きのワンピースを着たアルトと、水色のビキニのはやなさんが砂浜を駆け出す。

すぐに水際で水をかけあう二人。こう見ると、似てないけど姉妹かなんかみたいだな。

砂浜を踏みしめる。ビーチサンダルを履いているけど、指をくすぐる砂が心地よい。

「元気だね」

「ですね」

その後に黒を基調にした大人っぽいビキニの朱音さんに、薄紫のワンピースのかねえが続く。で、僕は二人の後ろについていく。いや、だって恥ずかしいんだもん。

僕が着るのは白のセパレートタイプの水着。腰に水色のパレオを

巻いてるし、そこまで露出してないさと自分に言い聞かせるが、やっぱり恥ずかしい。

家で何度か試着してポーズを決めたりして馴れるよう頑張ったけど、やっぱり中と外じゃ大違いだ。

でも、一度深呼吸吸し、大丈夫、男なんてパンツ一丁じゃないかと言い聞かせて心を落ち着かせる。なんとか落ち着いて、頭を上げて二人に並ぶ。

一馬さんは先に来て、てきばきとパラソルやイスを準備してくれている。ありがとうございます。

と、なんか周りから注目されているのに気づいた。ま、まあ自分で言うのもあれだけど、かなりレベルの高い美女、美少女が揃ってるからなあ。

なんか注目されるなんて、こそばゆいというべきか。

ふう、ともう一度息を吸う。焼けた砂の香り、磯の匂いが鼻孔を擦る。さて、遊びましょう！

「ビーチバレー！」

「バレー！」

はやなさんとアルトがボールを掲げる。

二チームに別れてビーチバレーをするのは事前に決めていたことで、チーム分けもすでに済んでいる。

一試合ずつローテーションで交代、一回目はAチーム、はやなさんに一馬さんとBチームは僕と朱音さん。かなねえは審判でアルトは見学。

はやなさんは、なんで慢研にいいのか不思議なくらい運動できるけど、一馬さんはどうだろうか？ と、一馬さんを見る。ボクサータイプの海パンを履いた一馬さんの体は筋肉質でがっしりしているし、運動は得意そうだ。

「では、試合開始！」

はやなさんの号令の元、試合が始まった。

試合はどつちかが点を取れば相手も取り返すという様相を見せる。たぶん身体能力やらなんやらはこつちが上だろうが、二人は息のあつた動きを見せる。さすがは兄弟。だが！

「ノエル！」

朱音さんがトスで高くボールを上げる。すぐに僕は飛び上がって背を逸らし、

「一撃入魂！」

弾丸スパイクを撃つ。狙いははやなさん。

この力なら、はやなさんじゃ打ち返せないのは計算済み！ 勝った！

でも、二人は僕の予想を裏切った。

僕が撃つ瞬間に、一馬さんは後ろのはやなさんのポジションに、はやなさんはさっきまで一馬さんのポジションに向かう。

なっ！

一馬さんが僕の球を、レシーブではやなさんのところに上げる。そのボールを、飛び上がったはやなさんが、隙だらけになった僕に向かつて叩き込んだ！

「ふぎゃ！」

ボールは僕の顔面にめり込み、明後日の方に飛んでいく。どすんと僕は背中から砂浜に倒れた。

何だ？ 何だあれは？！ 一瞬の交錯の後、お互いの役割に目標をスイッチ。信じられないが、目配せ一つもなくやって見せた。

この二人、とんでもないコンビネーション！ さ、さすがは兄弟……、倒れながらも見えた二人のハイタッチする姿はとても様になっていた。

こうして第一回の試合はAチームの勝利で終了した。

ビーチバレーを楽しんだ後、僕はアルトと砂の山を作っていた。いや、山じゃない。先端に向かって正方形が絞られるような四角錐は……

「できたピラミッド！」

「できたー！」

スコップ片手に喜ぶ僕とアルト。だが……

後頭部になにかが直撃して僕は、ピラミッドに顔面を叩きつけてしまった。

「すいません！ 大丈夫ですか？」

ずぼつと顔をピラミッドから抜く。顔の砂を払うと、そこにビーチボール。どうやらこれがぶつかっただけらしい。

「ええ、大丈夫ですよ」

につこり笑いながらその相手に答える。その人はもう一度すいませんといいながらボールを持って去っていく。

顔の土を拭う。うっう、口の中がジャリジャリして気持ち悪い……

「はい、テストロッサさん」

そこに一馬さんが声をかけて何かを渡してくれる。これは、ペットボトルか。

すぐに蓋を開けて中の水を顔にかける。顔の砂を落としてから口を濯ぐ。

「災難でしたね」

「ええ、水ありがとうございます」

答えながらピラミッドを見る。綺麗な顔型が出来上がっていた。

あーあ、せっかく作ったのに。でも、ちよつと顔型は面白いな。

アルトも悲しそうにピラミッドだったものを見る。僕はアルトの頭を撫でる。

「また作ろっか」

そう言っただけで、嬉しそうにアルトが顔を上げる。

「うん！」

そして作り直そうとして気づいた。砂浜の一角に人が集まっている。

なんだろう？

「なにかなあ？」

アルトも気になるみたいで、手をつないで一緒にそこに何があるのか見に行く。

人だかりを掻き分けると、そこに、砂の城が建っていた。

「うわあ」

「すごおい……」

人一人分の高さを持つ、西洋風の城。これは一つの芸術だ。

一体誰がと思って、せっせと城を作っている人物を見る。拔群のプロポーションを誇る体に黒い水着を装着した、ピンク色の長い柔らかなような髪を持った女性、って……

「朱音おねーちゃん」

嬉しそうにアルトが声をかけると朱音さんが振り向くと、にかっという笑みを浮かべる。

「あ、ノエル、アルトちゃん。ちょっと待ってね。これで仕上げだから」

そう言って朱音さんが白の頂点に旗を刺した。

「かんせーい！」

朱音さんの宣言に、どよめきながら周りから惜しみない賞賛と拍手が送られる。

確かにこれはすごい。朱音さんは満足そうに額の汗を拭って……ボールが中心の塔に命中した。

崩れた塔が下の建造物を巻き込みながらただの土の塊に変わる。

って、このボールは……

「あ、すいませーん。ボールとってください……」

その場の人間の非難が籠もった視線に尻すばみになったのは、予想通り、さっき僕にボールをぶつけた人だった。

朱音さんは黙ってボールを拾って、その人に歩み寄る。

「はい、気をつけてね」

そう言われボールを渡された人は謝りながら去っていった。

僕はじつと朱音さんの背を見ていて、唐突に朱音さんが振り向いた。

「ノエルたちも一緒に作る？」

少し残念そうだけど、いつもの笑顔を僕らに向ける。
力作が壊されたって言うのに……僕は微笑む。

「はい」

「おねーちゃん、アルトもやるー！」

アルトも嬉しそうに手を上げて答える。

僕らが手伝ったせいか、朱音さんだけの時より少しバランスが悪いかもしれないけど、僕らは泥だらけになりながら城を作り直したのでした。

第五十四話 夏だ、海だ、水着だ！（後書き）

鈴：「久しぶりに投稿しました鈴雪です」

刹：「どうも、刹那です」

鈴：「夏休み旅行編突入です」

刹：「こういうイベントなら後は、夏祭りに肝試し！ 稲川〇二のCDで百物語！！」

鈴：「そこまではやらないけど楽しみにしてもらえたら嬉しいです。それでは」

刹：「また」

評価、感想楽しみにしております。

第五十五話 カレーを作ろう

ばしゃばしゃと波打ち際を歩く。押し寄せる波、素足に触れる冷たい水と一緒に流れる砂の感触が気持ちいい。

すでに日は沈み始めた黄昏時だけど、昼の日差しが肌を焼く感じも心地よかった。女の子の肌はデリケートって言うし、敏感にいろいろ感じるのはそのせいかもね。

にしても、女ものの下着をつけた時にも感じたけど、水着も男と違う。

なんというかフィットするのだ。水を吸ったせいか余計にそう感じる。

男の場合、ボクサータイプはだぼつと余裕がある。学校指定の水着が近いかもしれないけど、あれとも別格。

このフィット感は違う。なんか体の一部みたいな感じがちよつとするけど、だからといって裸とは違って、不思議な感覚だ。下着を着たときも感動してしまったが、これはまた別の感動がある。

つて、なにそんなことで感動してるんだらう僕……

なんとなく周りを見るが、ちらちらとこちらを伺う視線にも、最初の恥ずかしさはない。遊び始める前に比べると、この格好の羞恥心を感じなくなった気がする。それこそパレオを持ち上げても平気な程度には。

ふむ。

ちよつと小走りに、あははうふふと彼氏から逃げる女の子風に駆け出してみても、何やってんだろとすぐに自己嫌悪。

「ノエルー、そろそろ戻るよー！」

と、そこに片付けを始めている朱音さんに呼ばれる。

「はい！」

すぐに僕は片付けを始める朱音さんのところに戻った。

遊び終えた僕らは別荘に戻って、シャワーを浴びてから、一馬さんにアルトの相手をそてもらって、みんなで晩御飯のカレーの準備。みんなで材料を切ったり、具材を追加したりします。

「朱音さん玉ねぎこの位でいいですか？」

飴色になるまで炒めた玉ねぎをはやなさんが朱音さんに見せる。

「うん、こんな感じ」

朱音さんは一欠片だけ、口に放り込んでぐつと指を立てる。

「朱音さんってここまで玉ねぎに火をいれるんですか」

肉を手頃な大きさに切って、下味を付けていたかなねえが感心したように鍋を覗き込む。

そうだよーと答えながら、はやなさんのフライパンをコンロから下げて、底の深い鍋で、かなねえが用意した肉や人参を炒め始める。その横で、僕は沸騰するお湯に鰹節を潜らせて出汁を取る。

いい感じに出汁が取れたら網で鰹節を掬う。この時、鰹節を絞ったりしないように注意。生臭くしなるからね。

「朱音さん出汁入れますねー」

その出汁をカレーに混ぜる。

「へー、ノエルってカレーに鰹出汁を混ぜるんだ」

僕が出汁を入れるのにはやなさんが興味深げに覗き込む。

「うん、意外と旨いよ」

前、マンガに本場では鰹節に似たものを、スパイスとして入れると載ってたから、試してみたんだけど以来気に入った作り方だ。

和風出汁が入ることでマイルドな感じになるし、具は海鮮風が一番マッチするけど肉とも相性はいい。

「でも、それってカレーうどんに近いよね？」

ふと、はやなさんが呟く。

……言われてみたら、量は違うけど同じことしてるだけだな。

と、かなねえが複雑そうな顔で僕を見ていた。

「香苗さんどうしたの？」

声をかけるとかなねえははっとして頭を振る。

「ちょっと昔のこと思い出しちゃった」

そう言って笑うかねえ。

昔……あ、そういえば、鰹出汁カレーって、昔かねえに食べさせたことあった。完全に忘れてた。

これだけでバレルなんてことはないだろうけど、気をつけないと、な。ちょっと自身を戒めた。

そして、完成したカレーが白いマットを敷いた食卓を彩る。

皿に炊いておいたご飯を盛って、その上からルーをかけて並べる。辛いのが苦手なアルトとはやなさんには福神漬也大盛に。

うーん、いい香り。各種スパイスの香りがなんとも食欲をそそる。待っていた一馬さん呼んで、全員イスに座って手を合わせる。

「それでは、いただきます」

『いただきます！』

スプーンを取って早速一口。

うん、旨い。

煮崩れした柔らかい人参にジャガイモとたまねぎ、下味として付けた肉から香るスパイス。

美味しい蜂蜜でふんわり辛さを抑えつつも確かな各種スパイスの香りと唐辛子の辛さ。そして、それらの中で底辺からひょこつと顔を出す鰹出汁の旨味。

なんとも言えない味わいだ。

「おいし〜！」

アルトがギュツとスプーンを握りしめてニコニコ笑顔を浮かべながら、美味しそうにカレーを頬張る。

「ほんと、みんなで作ったから特にね」

はやなさんも嬉しそうにカレーを食べる。

「うまい」

一馬さんは若干プルプル震えながらカレーを口に運ぶ。そ、そんな震えるほどうまいのか？

ああ、美味しいなあ。みんなで楽しく食べてるから余計にそう感じるのかも。

賑やかにみんなで囲う食卓を、僕はカレーと一緒に頼張った。

ご飯の後はお風呂。男の一馬さんは後になったがいいよと言ってくれたので、遠慮なく風呂場に向かう。

これだけの別荘だから風呂場もスゴいだろうな。と期待する。だが、僕は一つ忘れていた。同年代の女の子とお風呂に入るのはこれが初めてだということを。

「ノエルのブラかわいいねー」

脱衣所で服を脱いでいたら、いきなりはやなさんが僕のブラを覗き込んでくる。

「僕ははやなさんの方が、かわいいと思うけど？」

僕は薄い桜色の装飾のあまりないブラ。対してはやなさんのは水色のフリルをあしらったかわいらしいデザイン。

僕はそういったほうがかわいいと思うけどなあ。はやなさんがかわいって言うのも色だからだと思う。

「そうかなー？」

「そうだよ」

はやなさんが首を傾げる。それを見るとまだ女の子の感覚が分かってないのかも、と後ろに手を回してホックを外しながら考える。でも、少なくともこんなやり取りはできるようになったなあ、と少し感慨深くなる。体育とかで着替えるたびに、恥ずかしくて真っ赤になっていた頃が懐かしい。

下着も脱いでタオルを取る。さあ、いざお風呂に！

第五十五話 カレーを作ろう（後書き）

鈴：「どうもー、今回カレーの作り方どうでしょうか？」

刹：「お前の好きなカレーの作り方だな」

鈴：「いいじゃないじゃん。うまいんだから」

刹：「まあ、確かにそうだけども、人によって好みもあるし」

鈴：「それでは、また次回！！」

刹：「逃げるな！！」

第五十六話 温泉に入ろう（前書き）

温泉です。女湯でのお話なので、読まれる時はお気をつけください。

第五十六話 温泉に入ろう

この別荘のお風呂は露天風呂になっていた。半分屋外という恥ずかしさはあるけど、頬を撫でる風と、綺麗な星空の下にいるのは、なんか気持ちいい。露天風呂も悪くないね。

うーん、星が綺麗……遥か遠くから、自分で光を放って輝いてるなんてスゴいなあ。

「ノエルー、なにぼうつとしてるの？」

だが、はやなさんの言葉に現実へと戻される。

しかたなく視線を地上に戻す。

最初に視界に入ったのは、声をかけてきたはやなさん。

インドア系の人間ながら引き締まったボディー。綺麗な鎖骨のラインに、胸には綺麗に膨らみ。うん、はやなさんはないって気にしてるけど、そんなことはないといいたい。

そこから臀部に見事な稜線を描く腰にキュッと締まっていながら柔らかそうな尻。

その美しいラインはいわゆるトランジスタグラマーと言うべきだろうか。

真っ白な肌と合わせてまるで陶器のようで、邪な意味ではなく頬摺りしてみたくなくてしま……ごほん、ごほん！

なんというか、男にとつて鼻血やらなにやらが止まらないこと請け合いの光景が広がっている。だいぶ慣れたと思っていただけまだ恥ずかしい。

「でも仕方ないよ。だって星がこんなに綺麗なんだもの」
そうフォローを入れてくれるかなねえに目を移す。

雰囲気のせい或少しふつくらと思っていたが、決してそうじゃない。

柔らかな腰のライン、はやなさんより一回り大きな胸、そして、ふつくら丸みのある安産型のお尻。普段、服でわからなかったライ

ンがはつきりわかる。

はあ、あたりまえだけど、子供のころとは全然違うんだね。あの頃はぺったんこ、げふんげふん！

「ノエル、のぼせないでね」

そして、朱音さんは……その、すごい。

まずは、型崩れなどしてなく綺麗なラインを描くその大きく張り出した胸に目が行くだろう。

大理石の肌には傷なんか見えず、日頃から鍛えてるためか、無駄な贅肉が住む余地のない締まった腰のラインに肉付きのいいお尻。

なんと言つべきか、神がかつていとも言える芸術的な造形。

同性であるはやなさんとかかねえも見惚れてたもんなあ。僕も朱音さんを見ていると自分のスタイルに自信が……って、いらないう自信！！

「ママー、髪洗って」

みんなを観察していた僕の膝にちょこんとアルトが座る。

アルトは起伏は殆どなく……ってもういいでしょこんな描写！

「うん、綺麗にしてあげるよ」

アルトの頭にピンクのシャンプーハットを装着させてあげてから、シャンプーを泡立たせて、わしゃわしゃとアルトの髪を洗う。アルトは目に石鹸が入らないようにぎゅうつと瞑っている。かわいいなあ。

泡をお湯で流してから一緒に湯に浸かる。

少し熱めのお湯が心地よい。邪魔にならないように結った髪を揺らす風も気持ちいい。

と、そこでじつとはやなさんが僕を見ていた。いや、視線を辿ると、正確には僕の胸。

「な、なに？」

胸を隠しながら問いかけると、はやなさんは深いため息をつく。

「ノエルって羨ましいくらい胸があるなって思ってたの」

うつうつ、やっぱり胸だったのね。

お風呂ですでに上気してるだろうが、恥ずかしくて顔がさらに赤くなってるだろう。

「ねえ、触っていい？」

するとはやなさんがわきわきと指を動かしながら近づいてくる。僕はすぐに身を引いた。

「絶対いや！」

僕は、守るように体を縮こめるが、

「えい！」

かわいらしいかけ声とともにかなねえが僕を羽交い締めにする。い、いつの間に？！

「さあ、今よはやなちゃん！」

かなねえの言葉にはやなさんは目を爛々とさせてにじり寄る。ちょ、ちよつと待て？！

はやなさんのほうを見ると……なんか鼻息荒いんだけど？ なんか目が赤々と紅に朱の散った色になってるよ！？ 怖い、怖いよ！！
「ノエルの……」

助けを求めて朱音さんを見るが、アルトの目を隠すだけでなにもしてくれない。た、助けてよ！

そして、肌にはやなさんの息がかかるくらいまで近づいたと思ったら、はやなさんの手が僕の胸を鷲掴みにした。

「ひゃん？！」

むず痒いようなよくわからない刺激に妙な声を出してしまう。

「うっ、やっぱり大きい……ちよつと分けなさいよこのウォーターメロン！」

そう叫びながらはやなさんがさらに僕の胸を揉む力を強くする。
「む、むり！ もう、やめ、ふひゃー！！」

僕ははやなさんの気が済むまでいろいろされてしまうのだった。

十分後……

「うっ、お嫁にいけない……」

僕はしくしく泣きながら膝を抱えて湯船に浸かっていた。はやなさんが謝ってくるが、なら止めて欲しいと思う。

なにせこの子、文にできないことを僕が泣くまでやったんだから。ノリノリで手伝ったかなねえも顔を真っ赤にしてるし……

アルトと朱音さんがいい子、いい子と頭を撫でってくれるのがなんか悲しかった。

「ねー、許してよー」

「いやだ」

風呂を上がって部屋に戻っても不機嫌なままだった。だが、

「はっ！」

いきなりはやなさんが投げた枕が目の前に迫る。反射的にそれをはらう。

「なんなのいきなり？」

はやなさんの行動がわからず問いかけてみる。

はやなさんは小首を傾げて笑う。

「遊べば不機嫌じゃなくなるかなと思ったから」

と答えてくれた。

まったく、その程度で僕の機嫌がよくなるとでも……

「えい！」

かなねえのかわいらしいかけ声とともに、ぼすつと後頭部に枕が当たる。振り返ればニコニコとかなねえが次弾の用意をしている。

よかるう、なら相手になろう。

さつきはらった枕を拾う。こうして、枕投げ大会が勃発した。

第五十六話 温泉に入ろう（後書き）

鈴：「温泉のお話、ちょっと描写するのが恥ずかしかったかも……」

刹：「温泉か……」

鈴：「はっはっは、覗きたかったか？」

刹：「ま、まっさか」

鈴：「目を逸らすなよ」

第五十七話 動物園に行こう！

翌朝、いつもより早い時間に起きると、すでに朱音さんとはやなさんは布団にいない。もう起きたのかな？

僕はアルトを起こさないようにそつと布団から出て着替える。なんとなく早く起きすぎたかな？ と、思つてふらふらとする。

「ノエルおはよう」

あ、はやなさん。

「あ、はやなさんおはよう。散歩？」

声をかけるとうんと頷くはやなさん。

はやなさんは玄関で靴を履いていたのだ。

「どう？ ノエルも朝の海を見て行つてみない？」

んゝ、どうしょつか。アルトが起きるのももう少し後だよな？

「うん」

燦々と降り注ぐ日差しを浴びながら僕らは海岸沿いを歩く。キラキラと朝日で光る海。

ぐつとはやなさんが伸びをする。

「恋人とかと歩けたら最高だね！」

と、はやなさんが冗談めかして笑う。

僕はそれに苦笑を返す。恋人があ、僕には縁のない言葉だな。

まあ、恋人の代わりとは言わないが、はやなさんの後ろには野良の犬と猫が付いてきている。はやなさん動物に好かれやすいからなあ。

そつと、はやなさんの横顔を見る。若干日焼けしたかなと思う肌、かわいらしい顔立ちにちよつとドキドキする。って！

落ち着け僕。はやなさんは友達だ。それに女同士だぞ？
胸にそつと触れて落ち着けと呟く。

「どうしたのノエル？」

僕はなんでもないと答えつつ別の話題を考える。

「あ、そういえば一馬さんの誕生日どうだった？！」

ちよつと大声になりながらも、思い出したことを尋ねてみる。

「えっ、あ、うん。ケーキ喜んでくれたよ」

はにかみながらはやなさんが笑う。

そっか、協力した甲斐があつたかな。

「ただ、やっぱり振り向かせるには決定力に欠けてるのよね」

はあ、とはやなさんが呟く。

まあ、妹が自分のことが好きって気づくなんてなかなかないだろうなあ……それにこういうのもあれだけど、家族がケーキ焼いただけじゃね。

「もつとがんばらないと！」

そう気合いを入れるはやなさんは空を仰ぐ。

「あ、おはよう」

はやなさんが突然そう言つて横に手を伸ばすと、カラスがはやなさんの肩に降りた。

えっ？

さらにしゃがみ込んで猫と犬を撫でてあげる。カラスつて人の腕に降りるんだ……って、爪とか刺さらないの？

じゃなくて、動物たちに好かれやすいタイプって知っていたけど、まさかここまでとは。

「そっかあ、今日は天気は崩れないんだ」

つて鳥と喋ってるよこの子！

友達の意外な特技を知った日だった。

そして、別荘に戻った僕たちは起きたみんなで朝ごはんを食べると、今日行く予定の鴨嘴アニマルランドへと向かう。

割と有名な動物園で小学生の時に一度行ったっけなあ。

「ママ、早く早く！」

アルトがぐいぐい腕を引っ張る。

「あはは、アルト動物は逃げないよ？」

そう言っただけ、今日を海と同じくらい楽しみにしてたしなあ。

ゲートでチケットを見せて園内に入る。

「うわー！！」

ゲートを潜り園内に入るとアルトは目を輝かせた。

なにせ中は動物の王国。子供には魅力的だね。

「ママ、あっちあっち！」

アルトが大はしゃぎで遠くの動物を指差しながら僕の腕を引っ張る。

こんなに喜んでくれるなら僕も嬉しいな。

アルトは見るもの全てに喜んでくれる。

ライオンに猿に、特に象やカバに喜んだ。

「わー、おっきい！」

のしのしと歩く象に目を輝かせるアルト。

にしても、象って肌が乾いてるように見えるけど痒くないのかな？ ふとそんな疑問が浮かび上がったが、まあ気にしないでおくか。

象がリンゴを食べる時なんかアルトの興奮が最高潮に達していた。

「あ、りんご食べた！」

鼻で取ったりんごを口に放り込む瞬間にアルトは指を差しながら身を持ち出す。

ああ、かわいいなあ。僕は象よりアルトの嬉しそうな姿の方が嬉しかった。

それからみんなでふれあい広場で動物と触れ合う。

「ふかふかあ〜」

アルトは触れ合い広場にいる羊に抱きついてそのウール百パーセ

ントの毛に顔を埋める。

むむむ、気持ちよさそう。

「えい！」

というわけで、僕もアルトの上から羊に抱きつく。

うわー、フワフワ。

「ままおもい」

「ごめんね」

アルトが苦しそうに呻いて慌てて謝りながら体を起こす。

「あはは、くすぐったいな！」

一馬さんは集まる犬に囲まれて頬を舐められている。

はやなさんという柏木家って動物に好かれるんだね。

「右向けー右！」

はやなさんの号令にウサギたちが一斉にはないけど右に向き直る。すご！？ この短期間で教え込んだのか？！

かなねえと朱音さんはそれに目を丸くして、アルトはすごい！と純真に喜んでいた。

そして、今日一番のイベントに向かう。

「アルト、楽しみだね」

「うん！」

今から僕らが見るのは、一日に一回行われる人気のイルカショー。会場に入ればたくさんのお客。僕らも空いてる席で、できる限り見やすい場所を取る。

そして、ショーが始まる。

まずはお腹を引きずりながら現れたアシカのキャツキボール。

飼育員が投げるボールを受け取り、投げ返す。

そして、メインイベントのイルカが登場。

飼育員の指示に従い、見事なジャンプを見せる。

空中で輪を潜ったり、一回転を決めてみせ、さらにはヒレのみ水中に残し、水上を走るような動き。

すごい。と純粹に感動してしまう。水しぶきの輝きも相まってとても綺麗だった。

「ママ、イルカさんすごい、すごい！」

アルトは満面の笑顔でイルカの芸に感動している。

「それでは、見に来てくれた皆さんも体験してみようー！」

司会のお姉さんの言葉に、すぐにアルトは手を上げた。懸命に背を延ばして手を上げる姿はすごくかわいい。

「はい、じゃあそのかわいいお嬢さん、こっちに来てもらえるかなあ？」

そうして指名されたのは、アルト。

一瞬、アルトはきよんととして、

「やったあー！」

大喜びだ。

不安だから舞台のそばまでアルトについていく。ああ、大丈夫かな？ 滑って転ばないかな？

「はじめまして、お名前は？」

「アルト・テストロツサです！」

元気にアルトが答える。

「アルトちゃん今日は誰と来たのかなあ？」

「ママとお姉ちゃんたち！」

よかった。緊張していない。

「じゃあ、アルトちゃん、お姉さんたちとさっそくイルカたちに指示をしてあげてね！」

「はい！」

アルトはぎこちなくだけど頑張って司会のお姉さんの言う手の動きを真似する。そして、イルカが指示に従うと目を輝かせて喜ぶ。

ああ、かわいいなあ。本当にかわいい。

そして、最後にイルカの伸ばしたヒレと握手してイルカの飼育員体験が終わった。

「アルトちゃん初めてイルカに触れてどうだった？」

『えっと、えっと、すっごいツルツルでした!』

全身で喜びを表現するアルト。そして、舞台から戻ってくると僕の腰に抱きついてきた。

「楽しかった?」

「うん! えーと、えっとねアルトが手を振ったらイルカさんがね」
アルトは使える限りの言葉で喜びを表現してくれる。
ああ、よかった。朱音さんにありがとうと言わないと。

そして、閉園の時間を迎えて、僕らは動物園を出る。アルトは遊び疲れて僕の背ですやすやと眠っている。

時折イルカさんと呟くからイルカと遊ぶ夢を見ているのかもしれない。

「アルトちゃん疲れちゃったんだ」

ぷにぷにとはやささんがアルトの頬をつつく。

まあ、あんなにはしゃいでたからね。小さく苦笑を浮かべながらアルトを背負い直す。

「テストロツサさん、俺がおんぶしますよ?」

「一馬さんありがとうございます。でもいいんです」

僕はアルトの重さを背中に感じるのが親らしいことをしているように、少し嬉しいのだ。

だからいいんだ。

「それに一馬さんも荷物いっぱいじゃないですか」

一馬さんは両手には、売店で僕らが買ったお土産が下げられている。

お菓子から人形、五人分のお土産はそれなりの量になる。

「いや、これくらい軽いさ」

指摘されると、そう言っただけそうに荷物を持ち上げてみせる。

「なら、僕も軽いです」

そう言い返して見せてみた。

「ほら、二人とも早く!」

あ、
やば。
朱音さんに呼ばれ、
慌てて僕は車へと向かった。

第五十七話 動物園に行こう！（後書き）

鈴：「お久しぶりです鈴雪です」

刹：「刹那です」

鈴：「動物園のお話を書いてみました。ただ、一部は鴨川シーパラ
ダイスに行った時の経験がベースです」

刹：「まあ、いいんじゃないかそんな感じで」

鈴：「それでは、みなさん」

刹：「また次回にお会いしましょう！」

第五十八話 夏祭りに行こう！

別荘に帰ってきて、晩御飯を食べてから僕らは浴衣に着替える。

僕は着付けの仕方がわからないからはやなさんに手伝ってもらう。

「ん、よし！」

そう言っではやなさんがぱんと背中を叩いてくれる。

僕の浴衣は薄い蒼に、あちこちに白い羽と黒い羽が舞うように描かれているデザイン。金系銀系がふんだん使われた白と黒で上下に別れた帯。髪を結っているリボンも右が白で左が黒に分かれるように調節されている。

うん、いい感じ。ちょっとすすしいけど、夏だからね。

くるっとその場で一回転してみる。なんか、綺麗に着飾ってくれるのは嬉しい。

アルトは朱音さんに気付けてもらっている。

「はい、できたよ」

「えへへ、お姉ちゃんありがとー！」

ぺこっと頭を下げてからアルトはこっちに駆け寄ってくる。

「ママ、どう？」

「うん、すごく似合ってるよ」

そう言っであげると、アルトは嬉しそうに笑った。

アルトの浴衣は薄桃色の地に、八分音符や十六分音符が飾るといふデザイン。普段は僕を真似して結っている髪をおろしている。それから、アルトは手を差し出す。

「ママ、これお願い！」

そう言っで差ししたのは、八分音符の形の飾りがついたゴム。

「はい、じゃあ後ろ向いて」

そう言っつと、嬉しそうにアルトは僕に背中を向ける。

その柔らかな髪をそっと取って、きゅっとゴムで纏める。

「できたよ。うん、かわいい」

「ありがとうママ！」

振り向くアルトの頭を撫でてあげる。

「じゃあ、準備も終わったなら行きますか！」

『はい！』

祭りとは様々な音が踊る場所だ。

景気のいい呼び声、行きかう人の足音、たぶん、音だけでも飽きることはないだろうと思うくらいに音が満ちている。

「よー、お姉ちゃん綺麗だね？　一つ買ってくかい？」

「あ、じゃあ二つ」

そうして受け取ったリンゴ飴をアルトに上げる。

今みたいに何度も呼び止められるし注目されてる。まあ、見た目は綺麗な外国人の姉妹だから注目されるかな？

「えへへ、楽しいねママ」

嬉しそうにリンゴ飴をなめるアルト。

その頭には狐のお面に、片手には綿飴。うーん、お祭りに必要な神器が少し欠けてるような……

そこで、危うく通り過ぎるところだったのは水風船。

「そうだこれ！」

僕はぐるっと振り向いてそこに向かう。

「おっちゃん、挑戦者二人ね」

「あいよー」

小銭を渡して、紐の代わりに細い紙が持ち手の釣り針を受け取る。

「アルト、これはね、この釣針でこうやって、風船についた輪ゴムをひっかけて吊り上げるゲームなんだよ」

そう言っ僕がつってみせるとアルトはおーと口を丸くして目を輝かせる。

「アルトも！」

そう言っ、アルトも挑戦する。

釣り針を水の中に垂らして、ゴムにひっかける。そして一気に引

っ張って……ぷつんと切れてしまった。

「あー」

と残念そうに表情を曇らせるアルト。

「残念だったね。はい」

僕は最初につった風船をアルトに渡す。と、さっきまでの沈んだ表情を一変させるアルト。

「ありがとうママ！」

ふふ、アルトが笑ってくれてよかった。でもこっから僕の超絶技能を見せてやるぜ。

そして、僕は袖をまくるとまだ切れてない針を垂らして次の獲物をすくい上げた。

数分後、屋台に浮かぶ風船の半分ほどで釣糸が耐えられなくなっ
て切れてしまった。

むう、三分の二は釣るつもりだったのに。屋台のおっちゃんもずいぶん驚いてたなあ。

とりあえず、釣った風船のほとんどは返還、僕とみんなの分だけもらっていく。あんなに持っても意味ないしね。

「ノエルって、変な特技持ってるね」

驚きを通り越して呆れた顔をしているはやなさん。浴衣は水色の地にいろんな鳥が飛び交うデザインでよく似合っている。

僕の技に驚きながらも、膝を屈めて猫にポップコーンを食べさせていた。

器用な人……。

「あはは、そういえばけーちゃんも得意だったね」

と、笑うのは紫陽花がポイントとして配された白い浴衣のかなねえ。

またやってしまった。まあ、大丈夫大丈夫と自分に言い聞かせる。
「本当にノエルさんで面白いね。でも本当に外国人？」

一馬さんはははと笑ってから首を傾げる。

すいません。中身生粋の日本人です。納豆、漬物に刺身みんな大好きです。

嬉しそうにぼんぼんするアルト。ああ、すごくかわいい。やっぱり祭りに来た子供はこれ持ってなくちゃ。

朱音さんも苦笑を浮かべている。これくらいコツを掴めが楽勝なのになあ。

そうして僕は今日のメインイベントである花火を見る。

「たーまやー！」

「かーぎやー！」

空中で炸裂する花火を見つめる。本当に綺麗。たった一瞬の美だけど、だからこそその美しさなんつって。

「綺麗だねえ」

「そうだね」

はやなさんが返事を返してくれる。

「花火に願い事したら叶うなんてものがあればいいのに」

ぽそつと漏らすはやなさんの言葉に苦笑を浮かべる。

やっぱりはやなさんのお願いつて一馬さんとのことかな？

まあ、友達としては叶うことを願うけど、でも……

「はやなさん」

「なに？」

「……言葉にしないと伝わらないものもありますよ」

こつちを向いたはやなさんの眼をできる限り真剣に見る。

はやなさんはじつと僕の眼を見返してくれた。僕は小さく笑う。

「はやなさんは、僕みたいにできなくなる前に実行してくださいね」

僕にはもう恋愛なんてできないだろうからさ。はやなさんは頑張つて。

僕の言葉にはやなさんはうんと頷いて、また花火へと目を戻した。

僕も花火を見る。

本当に綺麗だな……

翌日、僕は朱音さんの運転する車で陣内町に戻った。

アルトがイルカさん々と寝言を呟くのを、頭を撫でてあげながら微笑みかけ、それから僕は海を見つめる。

海をみながら、またこんな風にみんなで遊びに來たいなと小さく願った。

第五十八話 夏祭りに行こう！（後書き）

鈴：「久々にエンジェルダスト投稿しました」

刹：「遅かったな」

鈴：「いろいろあつて、ね」

刹：「まあ、いいや。今回で旅行編終了」

鈴：「次回は真面目パートになる予定です」

刹：「それでは、また」

評価、感想お待ちしております。

第五十九話 小型種襲来！

旅行から帰ってきてすぐ数日後、僕はすぐにお仕事に呼ばれることとなった。

具体的にはまたヴェノムの発掘隊の警護。

先日の原因不明の覚醒がまたないとも限らないというわけだが……ぶっちゃけ暇だった。発掘作業は手伝えないし、朱音さんは監督を指揮するアグニと話している。

アルトは……念のためにはやなさんに預けてきた。外に行けば篠原隊長たちがいるけど、嚴重に警戒している人たちに話しかけるのもなあ。

今回、警護部隊には自走砲に装甲車、果てにはアパッチまで導入されてる。よっぽど前回の印象深かったんだな。

でも……

「蒼窮、ヒマー」

『マスター、はっきり言わないでください』

僕のボヤキに隣に立てかけた蒼窮が難色を示す。

まあ、不謹慎な発言なのは認めるけどさー、僕は数ヶ月前までの一般人で

こんなことするなんて夢にも思ってたし。

警備がこんなに暇なんてなあ、だからといって何かが起きられても困るけど……

どれくらい時間が経っただろうか？

体内時計を確認すれば、二時間半くらい。

くあつと何度目かの欠伸。うー、早く終わらないかなあ？

そんなことを願っていたら……センサーが高エネルギー反応を捉えた。すぐに蒼窮をとって身構えるけど、目の前に反応はない。

いや……反応は――

「上?!」

僕は振り仰いだ。

上から何か来る!

次の瞬間、何かがテントが引きちぎり、静かに地面に降り立った。

「なんだ?」

アグ二の言葉が聞こえたが、無視。

僕は目の前に現れたそれを凝視した。

真っ黒な人影。二足歩行で腕も2つ、ちゃんと頭もある。

四つの角が王冠のように頭部から伸び、二つの目らしき器官がその下にあり、口と思われる部位は鋭い牙が並んでいる。

体は非常に生物的ながら鎧のような見た目、手足はスマートながら力強いという相反する二つの印象が同居し、腕と足からは、刃のようなものが伸びている。

肩も非常に鋭角的でタックルを受ければまずズタズタに引き裂かれるだろう。

まるで昔見た仮面ライダーをもっと生物的にしたような見た目だ。そこまで観察してから身構える。各種センサーから得た情報から目の前にいるのはヴェノムの小型種だと識別される。つまり、通常の機械天使と同等の相手。

全然中型と雰囲気が違う。なんというか強い威圧感を感じる。

「まさか、小型種?!」

朱音さんの声が響くとともにそれはじやりと地面を踏みしめながらこつちに向き直る。僕は身を固め、朱音さんも大鎌を構える。

そして、

——お前、主の匂いがする。主がどこにいるか知ってるか?

一瞬、なにを聞かれたか、いや正確には誰が聞いてきたか認識でしなかった。

……えつと?　しゃべった?　誰が?　ヴェノムが?

「えええ!?!」

「ちよつとノエルどうしたの?」

いきなり叫んだ僕の肩を、朱音さんが叩く。

いや、なんであなたは冷静なの!?

「ただただ、だってしゃべったじゃないですか! ヴェノムが喋ってますよ!? 僕そんなの聞いてない!!」

僕は逆に朱音さんの肩を掴んで揺さぶる。確かに喋ってた!

だけど朱音さんは訝しげに眉を顰める。

「え? なに行ってるの? ヴェノムが喋った?」

『マスター、ヴェノムが喋るなんて聞いたことはありません』

……え?

——答える。主はどこ?

再びヴェノムが問いかけてくる。

「ほら! 今喋った!!」

僕はそう言って目の前のヴェノムを示すが朱音さんは首を振る。

「もしかして疲れてるんじゃないかね?」

哀れむように僕を見るアグニ。なぜか冷静に重要な資料を集めていた。

それを睨んでから、僕は再びヴェノムに向く。

確かに喋ったよなあ? 日本語で。でもみんなに聞こえないとすると……

「もしかして、あのヴェノムテレパシー使えるとか?」

朱音さんが僕の思いついた答えを口にする。

だったら声が聞こえるのもわかるけど、なんで朱音さんたちには聞こえないんだ? 僕が機械天使だから? それとも、単に僕に問にかけてるから?

でも、ヴェノムの主ってことは女王級のことかな? でも、僕はどこにいるか知らないし、話す気もない。

五人の隊員がテント内に入ってくる。

そして、外から準備されていた自走砲やらが動く音が聞こえてきた。ヘリのプロペラ音まで聞こえてくる。そういえば、他にも機関銃とかが設置されてたっけ。

でも、それが動いてるって……

「隊長が一斉攻撃の準備してるんだよ。以前の反省から今回は俺が設計した対ヴェノム用火器の持ち込みが許可されている。ああ見えてやる時はやる男だから、俺や君がいても構わずぶっ放す。頑張れ、ノエル」

なるほど、どうりで冷静なわけだ。

本当にアルト連れてこなくてよかったー！

確かに篠原隊長たちの装備は自動小銃と各種装備が基本、一応何人かはヴェノム用のロケットランチャー。ヴェノムと戦うのは言うてみれば戦闘機と戦うに等しいから地上兵士は最小装備らしい。

自動小銃の方はアグニが開発した弾で、ひるませるのがやつらしいし。

一時期、僕が使ってる弾を人間用の火器に使えないか？ という話もあったそうだが、もし流用したら、反動で狙いは付かない上に脱臼すら起こす代物らしく、しかたなく人間が使えるレベルにデチューンして作ったとか。

まあ、その制約も薄い砲台とかは専用の大型爆弾を搭載してるとか。まあ、僕が失敗したらその全てを使ってヴェノムを殲滅するんだろうな。負けられないなあ……

そして、ヴェノムがまるで武闘家のように足を開き、腰を下ろし、そして拳を構える。

堂に入った構えで隙なんか見えない。なんかイメージと全然違う。

——答えないなら。力づくでいかせてもらう

力づくですか。僕は乾いた笑みを浮かべながら構え直す。

「ノエル、気を付けて。彼、手練だよ」

朱音さんの忠告とともにヴェノムが動く。地を蹴り、一気に僕に接近、右拳振るう。

右腕の刃を蒼窮で受ける。が、その状態でヴェノムが踏み込み、左足が迫る。

脇腹！ 足でガードするが、勢いに押され後退する。

横手から朱音さんが手から雷撃を放つ。

ヴェノムは素早い動きで右へ、左へとステップを踏みながら攻撃を避けつつまた僕に迫る。

数発だけ当たるが外郭の数ミリの所で弾かれるのが見えた。そういえば、力場で弾くんだったっけ。

真っ直ぐ早い右拳が迫る、紙一重で避けながら蒼窮を振るうが左の刃で受けられる。

すかさず右足が迫る。一步後退するが、肩と頬に掠る。さらに止まらずに振り上げた足で踵落とし。

反射的に肩から体当たりして逃げるが、敵は崩れたバランスのまま体を独楽のように回し拳を突きだす。

ギリギリ蒼窮でガード。重いがなんとか受けきる。

追撃に対し、僕は飛びのきながらライフルモードにした蒼穹で牽制。ヴェノムは後ろに飛んで離れる。

強い……体が反応してくれなかったらとづくに終わってた。

「いい動きをするね。いい師匠に恵まれたのかな？」

朱音さんは目の前の相手にそんな評価をしている。いや、なにそんな冷静に……

ヴェノムの小型種ってこういう風に厄介なんだ。

『いえ、違います』

だが、蒼窮が否定した。

『こんな戦い方のヴェノムは初めてです。小型種は確かに高い知性を持ち合いますが、奴らはもっと動物的な動きをします』

なんだって？

「なら、こいつは？」

『わかりません』

まあ、でも目の前のヴェノムが、どうやら少し特殊らしいということだけはわかった。

ソードに戻した蒼穹を構え直し、息を整える。

このまま、引いてくれたらなあ……

そう、考えるけど、彼をほっておいてなにかが起きてても目覚めが悪そうだ。できるなら、ここでどうにかしたいけど……

じつとヴェノムはこっちを見つめて、

——お前、人間ではない？

と、再びテレパシーを送られた。

……は？ まさか、こいつ知らないで襲いかかった？

——なら、手加減はしない

い、今まで人間と思って手加減されてた？ や、やばいよな。

朱音さんに注意しようとして、先にヴェノムが動いた。反射的に僕も動く。

さつきよりも早く真正面から向かってくるヴェノムに向かって蒼穹を振りおろし、ヴェノムは伸ばした手で蒼穹の側面を押して、軌道を変える。

んな？！

さらに、ヴェノムは蒼穹を流した手で僕の腕をとり、伸ばした手で服を掴みながら、体重移動をすると……すばんと僕を投げた。

せ、背負い投げ？！

僕は投げ飛ばされ、地面に叩きつけられる。

「ノエル！！」

そして、痛みに耐えながらも立ち上がろうとして、眼前にヴェノムの足の裏が迫る。なにかをする暇もなく、僕は顔を踏みつけられ、朱音さんの叫びを聞きながら意識を断ち切られた。

第五十九話 小型種襲来！（後書き）

鈴：「バトル編です〜！」

刹：「少しテンション高いが、まあ、書きたがってたからな」

鈴：「いやー、今回は難産でした。なお、ヴェノム小型種のイメー
ジは仮面ライダーギルスと仮面ライダークウガ・アルティメットフ
ォームに仮面ライダーシンです」

刹：「なんども直したもんなあ」

鈴：「この場を借りて、自衛隊という組織、及び考察を手伝って
いただいた知人にお礼を申し上げます」

刹：「それでは、楽しんでいただければ幸いです」

鈴：「では、また次回にお会いしましょう」

刹：「それでは」

第六十話 共闘！

彼の意識がなくなる瞬間に、私は自分の意識を目覚めさせる。前回と違い、意識を混ぜ合わせず私は目覚めることができた。混ざると自己の境界が曖昧になって自我崩壊の危険性があるんだけど、喜ばしくないことね。

即座にシステム診断……前回と変わらず。ダメージ診断……頭部に若干のダメージ以外問題なし。

それを確認し、私の顔を踏みつける脚を掴む。

そのまま力任せに腕を振って『蟲』を地面に叩きつける。

起き上がって、体についた埃を払う。鼻からも鼻血が出てたから拭う。すでにナノマシーンが治癒したから新たな鼻血は出ていない。頬の出血も収まっている。実質彼の戦いでダメージはないに等しい。

見ればゆっくり『蟲』が起き上がる。

私は蒼窮を構える。

『マスター？』

「行くわよ蒼窮」

私の言葉にすぐ理解したのか蒼窮も了解の返事を返してくる。

蒼窮を振るう。『蟲』は腕の刃で防ぐ。拳が迫るが柄頭で殴って軌道を逸らす。

さらに一合、二合と斬り合う中で、膝を狙って蹴り。バランスを崩してやる。

そして、崩れたところで、きゅるっとその場で数回転し、刃に遠心力を乗せる。

「地断・旋！」

だが、『蟲』は無理して踏ん張らずに、わざと地面に崩れてそれを避ける。でも、無茶な体勢では逃げるのもままならないでしょ！回転しながら後ろ回し蹴り。虫が弾かれる。

翼を展開、広げて制動をかけると共に、羽ばたきで前へ飛ぶ。刺突。だが、虫も背中の中を羽を広げて上に逃げられる。

すぐに地面を蹴り追いかける。

テントを出るとすぐにヘリコプターだっけ？　それが視界に入っ
た。

それに乗る兵士たちが『蟲』に向けて武器を向け、

「止めなさい！」

遅かった。発砲。と同時に『蟲』がヘリに突進。

弾幕をすり抜け、腕から伸ばした刃でローターを切断する。ヘリの長所はその小回りと展開力。だが、はつきり言っただけのほう
がそれが上。

バランスを崩され地面に向かうヘリ。

っ！？

私はすぐに蒼窮を向け、その側面にワイヤーを撃ち込む。そのまま自分を支点にヘリを力づくに振り回して、地面に下ろそうとする。だが、ワイヤーにかかる圧力に左腕の関節とモーターに過負荷がかかる。

ちっ！　左腕が完全だったら！

諦めが脳裏を通り過ぎ、だが、そこに意外な手助けがあった。『

虫』が私のワイヤーを掴んだのだ。

なに？

疑問に思ったけど、ありがたい。そのまま、二人分の力でヘリを地面に下ろす。

荒っぽく下ろすことになったが、とりあえず搭乗者たちは大丈夫だろう。まあ、一人投げ出されてたけど。

「ありがとう、って言うべきかしら？」

ワイヤーを戻しながら『蟲』に目を向ける。

『蟲』がこっちに振り向く。

——問題ない。むしろ礼を言うのはこっちだ。とっさとは言え、危うく人を殺しかけた。

なんですって？

「あなた、いったい……」

そこまで声をかけようとして、悲鳴のような鳴き声が響いた。見れば地面から這い出す『蟲』、しかもあれは……

先端が鋭い一本槍のような甲殻。その特徴にすぐ該当種が浮かぶ。すぐさま周りに待機していた兵たちがありつただけの火力で攻撃する。

「逃げなさい！」

だが、私の声は彼らに届かず、攻撃を続ける。

それが無駄だとは知らずに……

一瞬、爆煙が『蟲』を包む。油断なく武器を向けているけど……煙を切つて一閃。一台の自走砲が直撃を受ける。原型を残すものの、融解する。その前にいた歩兵数人は影しか残らなかった。

あの子の記憶にある『対レーザー装甲』を採用したおかげだろうが、もう使いものにならない。

歯を噛み締める。

あれは中型でありながら『蟲』の中でも防御力はトップを争う種類。

その甲殻と、防御フィールドは強力無比。私たちの武器でも、強力なものなら倒せないこともないが、基本的に弱点の腹を狙うしかない。

また、装備もさっきのレーザーくらいしかないが、その体当たりは非常に厄介だ。まだ、目覚めたばかりで飛べないようだけど……私は蒼窮を向ける。一先ずこっちに注意を向けないと！

突撃しようとし……視界をさっきよりも細いレーザーが走る。防御フィールドを抜き、その表面に穴を穿つ。

地からではない。今のは、空から！

見れば右手からレーザーを出した先ほどまで戦っていた彼。

——手伝おう。

と、こっちを見て伝えてくる。

「ずいぶん変わり者みたいね。でも、なんで？」

――師に、人のために生きる。と言われてるからな。

なら、なんで私たちを襲ったのよ。あと師ってなによ。
と、ツツコミたくなるがそれはまた後でいいだろう。

「二分、稼げる？」

――承った。

よし！

正直なげとも思うが、なんとなく『彼』は信じられると思った。
「よろしく！」

私はすぐに翼を広げ、高く空に舞い上がった。

俺はそれを睨む。

同種。それは理解できた。先程からガンガンとこちらの頭によく
わからないことを訴えてくる。

だが、貴様は仲間ではない。先の消し炭になった人を思い出す。
一瞬でその命は消えた。

――お前は敵だ！！

叫び、飛ぶ。

両の刃を五十センチまで伸ばし、その防御壁ごとその殻を断ち切る。

俺の体は相手に対し小さい。与えるダメージは消して大きくない。
だが、自分を傷つける存在である俺に注意を引きつけることはできる。

目覚めたばかりで悪いが、しばらくは俺と踊ってもらおう。

私は必要な高さで一回転する。

「蒼窮、第二種兵装」

『ですがそれは……』

蒼窮が躊躇する。

「いいから準備して。第一種も使えないし、他の装備じゃあれは破

れないでしょ」

『了解』

蒼窮を持つ私の右腕の周りの空間が歪む。

同時に蒼窮も可変。ライフルモードのようにグリップが九十度に折れ、各部がパーテイングラインを境に展開する。

先ずは背に支持機転となる大型アームが表れ、蒼窮の上部のハードポイントと連結する。

続いて出たのはパーツを腕にロックするための爪とレール。

そして、蒼窮と私の腕を囲むように、側面と上部に力場誘導端子とそれを守る装甲が現れる。そして耐ショックアブソーバが三つ出現し、アームと本体上部、そして私の腕に展開する。

それらのパーツが組み合わされ、鋼鉄の重奏を奏でて、己の姿を揺るぎないものにする。一度、溜まったエネルギーと熱を各部のラジエータが発散する。

こうして完成するのは、腕と一体化した巨大な、刃を持たない剣。
『コンプリート』

トリガーを引く。

展開した蒼穹の各部からエネルギーが噴出、それを誘導端子が導き、収束し、加速することで長大な光の刃を作り出す。

私自身の出力の低下のせいで、その刃の出力は半分、いや、それよりも低い。四割くらいだ。

でも、

「蒼穹いくよ！」

『エクシード・ドライブ』

蒼穹内に蓄積した『天使の血』を全面解放、刃がさらに強く輝き、一時的に八十パーセントの力を発揮する。

よし！

翼を広げ、限界速で地上に向けて羽ばたいた。

刃を振るたびに、紫の血が吹き出る。

どうやら、こいつは先ほどの光線以外装備はないらしい。

さきほど、また撃ったが、そんなもの当たりはしない。

そして、再び瞳が開く。

——待っていた！

先のでタイミングはわかった。光線が出る直前に刃でそこを斬る。噴き出す血と、響く絶叫。これでもう光線は撃てまい。

そして、約束の二分。上空からなにかが空気を切り裂き近づく音。見上げれば、一本の流星が迫っていた。

現状出せる限界の速度で落下する。一瞬だけ哀れな獲物の姿を視界が捉えたが、すでに殆ど視覚は機能していない。ただ、そこにいることだけ理解できればいい。

超高速で蒼穹から地上に向けて、私は鋭く研ぎ澄まされた流星となる。

私自身の速度に、この前以上の高所からの落下による位置エネルギー、そして、『対大型種用第二種兵装』によって強化された蒼穹による一撃は、この前の比ではない。

「空断・煌き！！」

そして、その身に、その脳天に私、リン——という名の刃が突き立てられた。

その刃の前に、いかに強力無比な防御フィールドも甲殻も断ち割かたれるしかなかった。

夥しい血液や肉、そして、甲殻の破片が視界をさえぎる。

そして、私は地面に降り立つ。

と、同時にラジエータが内部に溜まった熱を放出。各種アラートが走って顔を顰めた。

外殻装甲、耐ショックアブソーバに守られていたとはいえ、その衝撃は体中に走っている。不完全な体には少しきつかったかもしれない。

「蒼穹、第二種兵装解除」

『了解』

連結部分が解かれ、パーツ状態に分解、その直後には再び格納庫へと転送される。

地面に屍餅をつく。もう、体中がたがたで立つのも辛い。

——すごいな。

と、そこで『彼』が空中から声（？）をかけてきた。

「まあ、このくらいはね」

そう返すと、彼はこちらに背を向けた。

「あ、もう行くんだ」

——ああ、別の場所を探そう。

探すっね。

どうやら主とやらは女王級ではないみたいだけど、どういうことかしら？

——止めないのか？

困惑気味に『彼』は問いかける。

「私はこれ以上無理だし、あなたは人は傷つけないんでしょ？」

彼は私の問いかけに頷く。

「なら、かまわない。いきなさい」

——感謝する。

そう言って彼は飛び立った。

ふう。息を吐く。そろそろ、戻らないと。

私は目を瞑り、意識を落とした。

そして、僕は目を覚ます。

「ん、あ？」

目を開けると、そこに敵はいなかった。

ただ、ヴェノムの血や、甲殻、そして肉が地面を汚しているのが視界に入った。

な、何があつたの？

僕は、ただ、呆然と見ることしかできなかった。

第六十話 共闘！（後書き）

鈴：「どうも、作者です」

刹：「刹那です」

鈴：「小型種とのバトル終了！」

刹：「後半は中型に対して共闘してたけどな」

鈴：「彼が何者なのか？ そのうち明かされるかと」

刹：「でも、こうなると色々大変だろうな。背後の組織とか。てか、エクシードドライブって……」

鈴：「言わないでくれ……」

刹：「それではまた次回！」

鈴：「アデューー！！」

コメント欲しいよお……

第六十一話 対策会議

あの後、僕はすぐにアグニのトレーラーの簡易メンテナンスベッドに寝かされた。体中にダメージが蓄積しているらしくてすぐにメンテナンスするんだとか。

確かに体中が痛い。後始末する隊長たちには悪いけど寝させてもらおう。

僕は目を閉じて意識を落とした。

本部に戻り、ノエルをメンテナンスベッドに寝かせている間に私たちは会議に出ることになった。

そして、予想通りに会議は紛糾していた。まあ、用意したはずの対ヴェノム用火器が効果がなかったのだから当然ね。

結局、対策として、研究チームがより強力な装備を作り出すことを求められた。

言うは易し、するは難しだけど。そんなことを考えていたら、

「例の逃がした小型はどうなった？」

やはりその話ね。初めて確認された小型種、というより中型以外が確認されたのもこれが初めて。

それは、搜索に力も入る。

「現在全力で搜索していますが、なかなか尻尾を捕まえることができません」

「そうか、急いでくれ」

わかりました。と情報室の室長が席につく。

攻撃を受けたものの、その小型ヴェノムが人間を助けた。それはこの場の全員に報告が行き届いている。もちろん、ノエルと会話したこともだ。

地球を襲う異星人と思っていたものがこちらと対話を試みた、彼らへの認識は大幅に変わる事態だ。搜索は相当力が入られるだろ

う。

「ところで、博士、最近ヴェノムの覚醒が連続して起こったことなんだが」

「目下調査中であります」

何かを言う前にアグニが出鼻を挫く。

鼻白む情報室室長だが、すぐに気を取り直す。

「いや、君の管轄の機械天使の覚醒の直後に、今まで一度しか確認されてないヴェノムの目覚めが連続で起きた。なにか関係あるかね？」

一切に私たちに注目が集まる。

私たちは真つ正面からその視線を受け止める。そして、

「ありません」

はつきり断言した。すでにこの話が出ることは予想がついている。「あくまでも、今回ののは偶然だと私は思っています。彼女は関係ありません」

アグニの言葉に数人がほつと息をつく。

確かに、もしノエルの子なら、それは目覚めさせた神無の責任になる。そしたら、他国の連中に追求される恐れがある。

そうして、神無の力が削られれば、結果的に無関係な人間を危険にさらされる。彼らはそれを避けたいのだ。

「だが、実際に二度だ。今までなかった覚醒が二回現実起きている。本当に関係ないのかね？」

しつこいわね。まあ、食い下がるくらいすると思っただけだ。

「はい。機械天使とヴェノム、マナをエネルギー源にしていることを除き、両者は全く違う存在です。さらに言えばそのエネルギーの変換も全く違う原理でなされています」

すらすらとアグニが答える。これらの問いは私たちの予想の範囲内。十分反論できる。

「そうか、だが同じエネルギーを元になっているならなんらかの影響を与えるんじゃないか？」

「ナンセンスですね。止まったエンジンの横で別のエンジンを動かしてもなんの影響は出ませんよ」

すぱっと両断するアグ二。私が出る幕は全くない。まあ、私は単に観察と記録のためにいるだけだけど。

「だが、マナというエネルギーに関してはまだなにもわかってないと等しい。ならなにが起きても不思議はないのではないか？」

彼らは怖くてしかたがないのだ。

かつて現在よりも進んだ文明と相討ちだが滅ぼした侵略者。それが、大量に復活するかもしれない。その恐怖はこの場にいる全員が共有しているだろう。

その引き金になったのがノエルかもしれない。そう思うのも無理はない。

そして、アグ二は、

「なら、封印しますか？」

そう言った。私は慌てない。この提案も私たちの『予定』の内だ。「確かにエネルギーであるマナに関してはわからないことだらけです。なんらかの影響を与えたかもしれませんが、ですが、今後もヴェノムの覚醒がないと限りません。また今回のようなことがあった時彼女がいなければどうなりますかね？」

あの子がいなかったら、彼らが用意した火器が聞かなかった以上、さらなる被害が出ていただろう。

そうなれば今度こそ他国からの横槍もある。

「それに、彼女がおとなしく封印されると思いますか？」

その一言に数人が息をのむ。現代兵器ですら敵わなかった敵を倒した機械天使。味方なら頼もしいが、敵に回った場合の脅威は想像に難くないだろう。

そして、そうなった場合、神無が目覚めさせたものとしてそれを抑えねばならない。

そこで社長がごほんと息を吐く。

「まあ、その辺でいいだろう。彼女は現状のまま我々の協力者とする

る。だが博士、万が一がないように彼女の手綱はしっかり握って
てくれ。以上だ」

社長の言葉に室長が席につく。

彼もわかったのだろう。ノエルは現在の神無にとって、たった一
枚の切り札だということを。

私はアグニとともに研究室に向かう。

「あちこち大混乱だよ」

ボソツとアグニが呟く。

「ここだけじゃない。たった一日でUSAの『LTI機関』、EU
の『オリュンポス』どこもかしこも対ヴェノム兵器の見直しが始ま
っている」

それだけ今回の出来事は衝撃的だったということだ。

対ヴェノム兵器の威力は先日まで神無の提供したノエルが最初に
倒したヴェノムのデータを基準にしていた。

だが、今回現れたヴェノム。それに対してはまったく効果がない
ことがわかってしまった。

これから、どうなるのかしらね？

「それと以前から懸念していたノエルの脳だが」

やっぱり来た。大方予想はできてるけど……

「前回から浸食の範囲が広がっている。すでに四割行っているだろ
う」

「そう」

思ったよりも侵攻してたわね。

「これから、彼女がどうなるかはわからない。だが」

アグニの言葉に頷く。

もう、話さなければ。

第六十一話 対策会議（後書き）

鈴：「今回は対策会議の話です」

刹：「毎度思うが組織と言うのは本当にめんどくさいな」

鈴：「言うな。書き手も面倒なんだ」

刹：「まあ、がんばれ。応援はしてやる」

鈴：「はあ、次回はちよつと重い話しかもです」

刹：「お楽しみに。それでは！」

第六十二話 告げられた真実

「んー、肩がこつたなあ」

ベッドから起き上がった僕は、伸びをしたりして体を解す。

念の為、自己診断すればいつも通り、右腕以外殆どがイエロー。相変わらず安心していいかよくわからない色だ。

「そう、身体の方は一応大丈夫だから」

朱音さんがそれだけ言った。なんだろう、いつもとなんか感じが違う。

「あの、今回どうなつたんですか？ 僕またなにもできなかったみたいなんですけど……」

顔面踏みつけられた後の記憶がまったくないんだよなあ。

朱音さんは目を瞑る。

「君と小型種が戦闘していたら、小型種がヘリのプロペラを両断。とつさに君がワイヤーで支えようとしたら小型種が協力。無事にヘリは地上に下ろされた」

へ？

そんな覚え……瞬間、頭が痛くなる。断片的に飛び込む場面。

ヘリにワイヤーを撃ち込む僕、それを助けくれる小型種。な、なにこれ？

僕の様子を無視して朱音さんは続ける。

「その後、発掘途中だった中型種が覚醒。篠原隊長たちが攻撃するものの無傷。小型種の協力を得た君の攻撃により中型種は撃破。小型種は逃走した」

知らないシーンがどんどん流れてくるのに戸惑っていたら朱音さんがじつとこつちを見つめていた。

「やっぱり覚えてないのね」

「えっと、言われたら何となくは思い出しました。でも……僕がやつたって思えません」

朱音さんが確認するように聞くのになんとか答える。まるで他人が行った映像を見せられている気分だ。

「蒼窮、今回も？」

朱音さんが今度は蒼穹に尋ねる。　今回もって？

『はい』

えっ？　蒼窮はなにかわかってる？

「一体なんなの？」

『マスターの精神パターンが途中から違うものになりました。そのパターンは……先代のマスターのものです』

……何だって？　僕の先代の精神パターン？

まったく理解できなかった。それってつまり、僕が彼女になっていたってこと？

「前から話そうと思ってたんだけど、君の脳は以前からナノマシーンによって機械天使の身体に適した形に作り直されてたの」

脳が？

えっと確か僕は脳だけ人間のままなんだっけ。で、その脳が作り直されているのか。

「現在侵攻は四割、はつきりしたことはまだわからないけど、これまでの君の症状から」

一度朱音さんは言葉を区切る。

そして、まるで末期癌を伝える医者のような表情で、

「もしかしたら、君という存在から私たちが先代と呼んでいる存在に成り代わるかもしれない」

そう教えてくれた。

……そっか、これでたまに見ていた夢の意味がわかった。

あれは、たぶん先代に成り代わっている部分が見せてたんだ。

「そうなんですか」

僕は椅子に座る。そっかあ、僕、先代になるんだ。

そんな僕をいぶかしげに朱音さんは見つめる。

「あのさ、ちゃんと話し理解できてるよね？」

朱音さんの問いかけに首を捻る。

「はい、理解してますよ？　僕が僕じゃなくなるんですよ？」
朱音さんが頷く。

「それがどうかしたんですか？」

僕の言葉に朱音さんの眉がピクツと反応する。

「別に、僕は元々死んでるんですし、元に戻るだけじゃないですか」
先代が蘇れば、僕なんかよりよっぽど強いだろうし、アグニの研究も協力してくれるかもしれない。それに、アルトもほんとの意味で母親ができる。

メリットが多いと思うけどなあ。

「本当に……君は不思議な子ね」
苦笑気味に朱音さんは笑った。

それから、簡単な検査を受けてから家に帰る。

でも、その途中でアルトを迎えにはやなさんの家による。

「ママお帰りなさいー！！」

勢いよくアルトが僕に抱きつく。

「あは、アルトただいま」

抱きついてきたアルトを抱き上げて頭を撫でてあげる。

はやなさんは僕らを見て笑った。

「アルトちゃん、本当にママが好きなんだね」

「うん！」

アルトが元気よく頷く。

そう言ってもらえて嬉しいな。

「はやなさん、ありがとう」

「お姉ちゃんありがとうー！」

僕がはやさんにお礼を言うと、アルトもぺこつと頭を下げる。

「……ねえ、ノエル。なんか会ったの？」

へ？ はやさんの言葉につい首を捻る。なんかおかしいところあったかな。

「いや、なんか、少し寂しそうな感じがして……ね」

はやさんはポリポリ頬をかく。

寂しそう？　なんで？

すぐにはやさんはなんでもないと言ったけど、僕はその言葉が気になった。

「あのね、それで一馬お兄ちゃんが」

家に帰ると、アルトがはやさんちで会ったことを話してくれる。僕はそれを聞いていて、ふと思った。

ああ、確かに、アルトやはやさんと別れるのは、寂しいかな。

ただ、それだけ。

第六十二話 告げられた真実（後書き）

刹：「なんつうか……おかしな奴だなノエル」

鈴：「まあね、元々彼女のコンセプトはそういう人間だから」

刹：「ふーん、ずいぶんとあれな感じだな」

鈴：「まあ、彼女の内面はゆっくり内外両方から見せるからきつと」

刹：「自分で苦手と言っている心理描写か。まあ、頑張れ。作者の腕の見せ所だぞ」

鈴：「おう」

評価、感想、拍手楽しみにしています。

第六十三話 妹の夢

「はい、終わったよお姉ちゃん」

その日、私はオーバーホールを受けていた。

メンテナンスベッドから降りて、ぐつぐと体の具合を確かめる。

「どうかなお姉ちゃん？」

「うん、いい感じ。さっすが私の妹」

えへへ、と母と同じく科学者の道を進んだ妹が笑う。

今回、オーバーホールついでに妹が研究していた新型フレームへの交換に、インプラントされた機器も最新の物に一新された。

以前より出力も身体強度も上がっているし、これなら……
ぐつと手を握り締める。

「お母さんの残した資料を元に作ってみたんだけど、やっぱりお姉ちゃんと相性がいいね」

そう笑う妹は、すでに見た目では私と同じくらい。月日が経つのは早い。そのうち成長しない私を追い越すだろう。

嬉しい反面、寂しくもある。もう少し姉らしくしてたかったのになあ。これじゃあ、すぐにどっちが妹かわからなくなりそう。

「そっちの計画は？」

とりあえず、その思考を捨てて話題を変える。

「うん、進んでるよ。あと一年くらいかな」

現在優先されて進められている計画は二つ。『蟲』の女王級の討伐。そのための機械天使のアップデートや対女王級の新型兵器の開発が進められている。

そして、もう一つ。生体停止保存法で保存することによって保存した人類を衛星に保存して打ち上げる種の保存計画。

生体停止保存は身体の機能全てを停止させることで恒久的な保存を実現している。問題として、生体を構成する原子や電子の動きもほぼ停止する。つまり非常に脆くなってしまうのだが、それも数年

前に解決し、実用段階に至った。

現在、大地は蟲の毒に完全に汚染され、人類の生活圏は地下になつてしまった。だが、それでも蟲の毒は彼女たちを脅かしている。すでに人口は最盛期の四分の一以下。汚染された大地の再生にも五千年以上かかることも判明している。その大地が再生して、地上に降りたつたとしても現在より文明は衰退することもわかつている。でも、それが生き残るために人類の選んだ答え。

「でも、そのためには……」

妹が、ア……は口をつむぐ。

そのために、月にいる女王を倒し蟲の脅威を排除する必要がある。当然私もその作戦に出ることとなるし、このアップデート。

「お姉ちゃん」

ぎゅつとア……は私の手を握る。

「大丈夫」

そつとその手の上に手を置いた。

「私は必ず帰ってくるから。一人にしないから」

そう、母さんの約束だから。大切な妹だから。

たとえ、戦いが終わればこの子も眠るとしても、私はその間もずつと守り続ける。またこの子の笑顔を見るまで。

「うん、私もがんばるから」

そう笑う妹に、私はもう一度微笑んだ。

「よっ、終わったか？」

そこにひとりの青年が入ってくる。

「……二さん！」

ぱあつとア……は笑顔でその青年を迎える。

彼、……二は私の所属する部隊の指揮官で、信頼している相手だ。妹も彼には好意を寄せている。

「こんにちは！　なんでこんなところに？」

すぐに妹が駆け寄る。

「一応彼女は俺の部下だからな。それに君の顔も見えたかつたし」

「あはは、お世辞でも嬉しいです」

はにかむ妹に笑う彼。その妹の嬉しそうな姿に、改めて私は護りきろつと強く願った。

そこまで私は目を覚ました。

「また夢か……」

最近前よりもはつきりと昔のことを思い出している。

まずいな浸食が進んでいる。僕が消えるのは意外と早いかも。

ぐるつと頭を巡らせると、そこにすやすや寝息を立てるアルト。

僕はその頭を撫でる。

「護る……か」

彼女は、護りきれたのだろうか？

と、そこまで考えて思い出した。

「蒼穹」

『はい、なんでしょうかマスター？』

すぐに返事が返ってくる。

ここに見てきた相手がいたんだよな。少し考えてから聞いてみる。

「あのさ、先史文明の人間は地球が回復するまで衛星の中に自分たちを保存して宇宙に逃げたんだよね？」

『……はい』

蒼穹、今少し齒切れが悪くなかったな。

「その人たちは？」

『事故により衛星が墜落、そこにあつた遺伝子データは全て失われました』

そう、なんだ。じゃあ彼女の妹も……

少し胸が苦しくなった。ああ、だからあの時、母さんに謝ってたんだ。

その日、アルトと一緒に遊んでいた時だった。インターホンが鳴って朱音さんが出た。

「はい天野です……ああ、はやなちゃん。うん、ノエルはいるよ。ちよつと待つてね。ノエル！」

「はい！」

はやなさんと聞こえた時点で、用があるのは僕だと当たりはついていた。

「はい、ノエルです。はやなさんどうしたの？」

玄関に向かうと、そこにははやなさんがいた。

少し気合の入ったおしゃれな服装とポーチにスニーカーというちよつとアンバランスだけどお出かけ向けの格好だった。

「あのさ、ノエルちよつと出かけない？」

そう言つて笑うはやなさん。でも、その笑顔はいつもと何かが違う。そんな気がした。

第六十三話 妹の夢（後書き）

鈴：「最近コメントとかがない」

刹：「だから言うな」

鈴：「どうしたら伸びるのかなあ？」

刹：「さあな。いろんなところで宣伝すればいいんじゃないのか？」

鈴：「最近君投げやりだね」

第六十四話 はやなさんとデート

僕ははやなさんに誘われて郊外の遊園地に来た。近場で割と有名であり、そこそこの人の入りようである。

本当はアルトも連れてきたかったけど、はやなさんの雰囲気から朱音さんとお留守番してもらっている。

今度は一緒に来たいなあ。

「で、どこから行く？」

僕が聞くとはやなさんはうーんと悩んで、

「いろいろいつてみよー！」

と元気よく腕を振り上げた。

いつも通りに見えるけど、なんか僕にははやなさんが無理してるようにしか見えなかった。

いくつかのアトラクションを回る。ゴーカー、メリーゴーランド、そして、

「よーし、次はあそこ！」

次にははやなさんが指したのは定番オブ定番ジェットコースター。

「乗ってみたかったんだよねえ」

「そうなんだ。なんで？」

ジェットコースターは定番なのに。

「このジェットコースターは最近リニューアルしてね」

ふむふむ。

「日本二番目の高さで角度を誇るレーン！」
なに？

「魔の四連続ループが待ってるんだよ！」

ちよっと待て。

確かに高い。目測で高さを計測。次に四連続ループを見る。

でも、このくらいなら、自分で飛んだり跳ねたりするほうがなあ。

「じゃあ、乗りましょうか」

「おー！」

そして、僕ははやなさんと並んで……

コースターが高みに登っていく。

「なかなか高いなあ」

「うんうん、これは楽しめそう」

高さを計測した程度じゃわからないけど、思ったよりも高く感じる。

そして、

「ぎゃーーーーー!?!」

「わーーーーー!?!」

「ひいひいひい?!」

「やつほーい!」

「のおおおお!?!」

「すごいすごい!?!」

ジェットコースターを降りる。うつ、くつ、おかしい。

オートブランサーがいかれたのか、足元が覚束な……ああ、膝が笑ってるせいかな。

「悲鳴上げまくりだったね」

言わないで。あとあれは悲鳴じゃない。魂の慟哭だ。

にしてもなぜだ？ 数回しか飛んでないとはいえ、自分で飛ぶのと変わらないくらいの勢いだったけど……体が固定されてたからか、それともアトラクションだから？

それらの疑問がいくつか浮かぶけど答えは出ない。

「にしても、すごかった……体と魂が離れるかと思ったよ」

「あはは、そんなに?」

はやなさんはうーんと首を捻り、そばにあった休憩所を見る。

「えっと、そこで休もうか？」

はやなさんの言葉に僕は頷いた。

夕方、帰りの電車で、

「あ、ノエル、ちょっと寄りたい場所があるんだけどいいかな？」
その提案に僕は頷いた。

一つ前の駅に降りるとはやなさんは町が見渡せる高台に向かった。

「ここはね、私のお気に入りの場所なんだ」

町を見渡せる場所でぐっと伸びをするはやなさん。

僕はその横に並んで、なんとなくはやなさんを見る。物憂げな表情で夕日を見つめていて、その顔にドキツとする。

「ねえ、はやなさん」

「なにノエル」

僕は少し悩む。聞くべきか聞かざるべきか。

そして、

「なにかあったの？」

結局聞くことにした。

はやなさんは一瞬目を見開いてから、寂しげに笑った。

「やっぱりわかった？」

「付き合いはそこまで長くないけど、友達だからね」

そういえばまだ三カ月くらいか。

そっか、とはやなさんが笑う。

「ふられたんだ」

ぼつりとはやなさんが呟く。

ふられた？ つまり……

途端に空気が重くなる。

「勇気を出してお兄ちゃんに告白したんだけど『妹としか思えない』
ってね」

まあ、当然っちゃ当然の返事だ。

「なんか、突然だね」

「まね、誰かが言えるうちに言えって言ってたから」

ふーん……って、それ僕じゃん。

な、なんか罪悪感に似た何かを感じるんだけど……

「まあ、だから気晴ししたくてノエルに声をかけたんだ」

そう言っではやなさんが笑う。その少し影のある笑顔に、僕はなんとか笑い返すしかできなかった。

まったく、一馬さんの反応は当然とはいえ、もったいない。

はやなさんははつきり言ってかわいい。それに元気でそばにいて楽しい。僕が男ならはやなさんをほっとくなんて考えられない。あーあ、なんで僕は女に産まれたんだろ？

——あれ？　なんだろ。今なにか違和感が……

「今回のことは私やつぱりシヨックだったんだ」

はやなさんの言葉に現実へと帰る。

まあ、そうだよな。ふられたんだもん。

「でも、少しすっきりしたんだ。ちゃんと自分の気持ち言えたんだもん。まあ、明日からどんな顔して会えばいいか悩んでるけど……」

僕は黙っではやなさんの独白を聞く。

「今日は付き合ってくれてありがとうノエル」

「うっん、僕も楽しかったよ」

はやなさんがほほ笑み、僕も微笑み返す。

「じゃあ、帰る」

「はい」

そして、僕の家につくと、一馬さんが待っていた。

「よ、はやな」

「お兄ちゃん……」

はやなさんが顔をそむける。さっき言っただもんなあ。どんな顔してあえばいいのかって。

「ただ、一馬さんはずんずんとはやなさんに近寄ると、手をはやなさんの頭にのせ、がしがしと撫でる。」

「わきゃきゃきゃきゃ!?!」

突然の一馬さんの行動にはやなさんが悲鳴を上げる。

「たく、帰るぞ」

「う、うん」

はやなさんが頷くと、よしと一馬さんも頷く。

「テストロッサさんも、妹に付き合ってくれて今日はありがとう。じゃあ、また」

「あ、はい。それでは」

そうして二人は連れ立って帰った。

一馬さん、はやなさんのことが心配だったのかな……そう考えた
ら少し笑みが浮かんだ。

さて、僕もそろそろ家に入るか。

「ただいま」

「おかえりー、ママー!」

第六十四話 はやなさんとデート（後書き）

鈴：「エンジェルダスト、はやなに関する話です。こういう何気なもののがノエルの物語には重要。ほら、思い出がまた一つ増えた」

刹：「一馬め、はやなをふっってしまうとは……」

鈴：「君はどっちつかずだもんねえ」

刹：「わりいか？」

鈴：「いんや。ただ一言、シスコンめ」

刹：「うっせえ」

鈴：「では、みなさん、次回もお楽しみに」

第六十五話 朱音さんが大変だ！

私、朱音が朝ご飯の用意をしていた時だった。

食卓の彩りはほぼ完璧。だけど……あれ？ ソースがない。

ノエルは目玉焼きにソース派なのに。

どこ片付けたっけ？ なかなか出てこない。

うーん、なんか嫌ね。この小魚の骨が引っかかっているような感覚。

「あ、そうだ」

その時、ふと思いついた。

暗示系の術と探査系の術を組み合わせれば記憶を遡れる術ができるかも！

さっそく試してみよう。

それから十分後……

「うん、こんな感じかな？」

出来上がった術をさっそく使ってみる。

記憶を遡る。えっと最後に使ったのは多分昨日の晩御飯だけど……頭の中にイメージが流れる。ああ、間違えて冷蔵庫に入れたんだ！ふう、やつと思いついた。

即席にしてはなかなか……ってあれ？

どんどん頭にイメージが浮かび上がる。こ、これって術が暴走してる？

大変。止めないと。

だけど止めようとする間に指数関数的に術が加速していく。

う、うーんこれは……忘れてたような恥ずかしい思い出まで再生されるのは困るなあ。どうしよう？

そうこうしてるうちに、今まで出会った人々の記憶、そして、私の大切な人が……

僕はふわっと欠伸をしながら起き上がった。はあ、今日もよく寝たなあ。

アルトを起こさないようにベッドから出る。

それからシャワーを浴びるために部屋を出て、ふと気づいた。

あれ？ いつもなら朱音さんが忙しく動き回ってるのに今日は静かだな……

不思議に思っリビングに向かう。いつもならそこで朱音さんが朝ご飯の用意をしてるんだけど……

リビングに入ると、朱音さんは椅子に座ってボーっとしていた。

「おはようございます朱音さん」

声をかけるが朱音さんは反応しなかった。

「朱音さん？」

どうしたんだろう。そばによると朱音さんがこっちを向いた。

そして瞬らぬ瞳で小首を傾げる。

「お姉ちゃんだあれ？　ここどこ？」

へっ？

「朱音、さん？」

僕が声をかけると朱音さんはますます首を傾げた。

「朱音ってだあれ？」

……えっと。どういうこと？

「なに言ってるの朱音さん。あなたの名前でしょ？」

するとぷうつと子供みたいに朱音さんが頬を膨らます。

「あたしアリスだよ。朱音なんて名前じゃないんだから」

ふざけてる……わけじゃないよね？

「えっと朱音さ」

「アリス」

朱音さんが訂正する。

「あか」

「ア、リ、ス」

はい、わかりました。

「アリス、ちゃん」

僕がアリスと呼んだ途端に朱音さんが嬉しそうに笑う。

その笑顔は、いつもの華やかな笑顔とは違う、お日様のような笑顔だった。

「お姉ちゃんのお名前は？」

「ノエル……」

僕の返事に朱音さんが頷く。

「ノエルお姉ちゃん。よろしくね！」

朱音さんの言葉に僕は引きつった笑みしか浮かべられなかった。

「という訳でアグニ、状況はわかる？」

あの後、さんざん朱音さんと話したけど、結局ふざけてるんじゃないかと本当にアリスという女の子になつてるとしか思えなかった。

そして、どうすればいいのかわからずにすぐアグニに電話した。

『おそらく幼児退行だと思うが……原因はわからないな』

そりゃそうか。

にしても幼児退行ね。リアルで見る日が来るとは思わなかったよ。

『まあ、ほっとけば勝手に治るわけないか……ちょっと待ってたまえ。今からそつちに行く』

お願いします。

で、朱音さんもとアリスちゃんの相手をしてるんだけど、

「ママ、おねーちゃんどーしたの？」

起きてきたアルトが、アリスちゃんを見て、僕の袖を引っ張って聞いてきた。

うーん、なんて説明するべきかなあ。

と考えてたら、アリスちゃんは自分の体をマジマジと見ている。

そして、

「おっきくなつた!？」

びつくりしていた。いや、最初に気づこうよ！

それからたぷつと自分の胸を持ち上げてわーっと目を輝かせる。

「せつちゃんにみせにいこー！！」

と、部屋を飛び出す。

「ちよつと待ってー！！」

大慌てで僕は朱音さんを止める。

せつちゃんが誰かはわからないけど、今出歩かれますとまずい！

いろいろとまずい！

「はなしてノエルお姉ちゃん。あたしせつちゃんのところに行くんだから！」

ぬお？！ アリスちゃんのパワーの前にリミッターを外すが、ずるずる押されていく。

つ、強い！ 機械天使とため張れるパワーがある？！

驚きの展開に混乱するけど、状況を打開するために頭を回す。

どうすればいい？ 考えろ！

「あか、アリスちゃん落ち着いて！ なんていきなりせつちゃんに会いに行くの？」

とりあえず原因と思われる相手の名前を出して尋ねる。

「えつとね、あたしね、せつちゃんとおつきなったらね、けつこんしようって約束したの」

えへへと嬉しそうに笑うアリスちゃん。

まあ、子供にありがちな微笑ましいエピソードだな。

「だから、せつちゃんに会いに行くの！」

またずんずんと進む。みしみしと床が悲鳴を上げる。これ以上は床を踏み抜きかねない！

ど、どうしよう。どうすればいいんだ？

その時、ぴーんと思いついた。

「アリスちゃん落ち着いて！ あなたは病気かもしれないの！！」

僕の言葉にピタッとアリスちゃんが止まる。うおっしゃあー！！
「びよっき？」

僕はこくこく頷く。

「そうよ。いきなり大きくなるなんておかしいと思わない？」

僕の言葉にアリスちゃんは目尻に涙を浮かべる。

「あたしびょうきなの？」

「ありゃ、意外と効果抜群だな。」

腕を離す。

「大丈夫。今お医者さん呼んだからね」

僕はにっこり笑いかけた。

「だから、家を出ないで待っててね？」

「うん」

こくとアリスちゃんは頷いた。

ふう、なんとかなった。

僕は家を壊さずに済んだことを喜んだ。

第六十五話 朱音さんが大変だ！（後書き）

鈴：「うーみゆ、改めて朱音が全然違うキャラだなあ」

刹：「ま、まあな。性格昔と今じゃ全然違うんだよあいつ」

鈴：「ふーん、ちなみにどっちの朱音さんがいい？」

刹：「どっちもだな。どっちもかわいい！」

鈴：「そ、そうか」

刹：「そうなんだ」

第六十六話 アリスちゃんと夕子さん

はあ、早くアグニ来ないかなあ？

アルトとアリスちゃんが戯れるのを眺めながら僕は待っていた。

普段は凜とした女性なのに、今は無邪気な女の子の仕草というギヤップはどこかなごむ。いや、異常事態に和んじやだめだよ。

と、待っていたらピンポンとチャイムが鳴った。

アグニ！？

すぐに玄関に向かう。

そこに、

「やあ、ノエル」

と、手を上げるバイクを止めるアグニと、きれいなおんなのひとがいた。

少し青みがかってウェーブの入ったきれいな長い髪、優しげな光を灯す瞳、穏やかな笑みを浮かべた顔は品のいい薄化粧で整えられている。

服は優しい暖色系の長袖で、ロングのスカートとともに彼女の柔和な雰囲気を出している。

年齢は……わかりづらい。十代と言われても信じられるし、四十路と言われても疑わないと思う。でも、たぶん二十歳くらいかなあ。十人に十人が美人と答える人だった。

いったい誰だ？

「初めまして。上坂夕子です。いつもうちの人がお世話になっていきます」

と、見てて惚れ惚れするくらい綺麗なお辞儀。

つて、今の自己紹介からはつまり……

「俺の嫁だ」

アグニが肩に手を置くと上坂さんはちょっと頬を赤く染めてあらあらと笑った。

う、噂に聞いてたアグニの奥さんが美人だったなんて……

「神は死んだ！」

気づけば僕は叫んでいた。

「お医者さん来たよー」

と、アリスちゃんを呼ぶとすぐに遊びを放棄してこっちに来た。

「ねえ、お姉ちゃん。そのお姉さんがお医者さん？」

とキラキラ目を輝かせながら聞かれた。

いつもと違うその様子に二人は軽く驚いたが、すぐに気を取り直す。

「あら、お姉さんって嬉しいわね。でも、私はお医者さんじゃないのよ」

お姉さんと呼ばれて嬉しそうに上坂さんが笑う。うーん、見た目ではわかり辛いもんなあ。

するとアグニが一步前が出る。

「俺が医者だ」

と胸を張る。

なぜそんな無駄に偉そうに言う？

そして、アリスちゃんはビクツと震えて僕の後ろに隠れてしまう。

「……」

アグニが横から覗くと、僕を盾にするように反対側に隠れてしまう。

アグニが位置をずらすと、その反対側に。

最初はゆっくり、だが、だんだんと速度が上がる。

右左右左右左右左右左右、しまいには反復横飛び……

「いい加減にしろ！」

思わず延髄蹴りをかましてしまった。

ノックアウトするアグニ。上坂さんはあらあらと笑っただけだった。

いや、蹴った僕が言うのもあれですが、旦那さんが蹴られたそれだけですか……

それから、さっそくお二人にアリスちゃんを診てもらってるんだけど……

「でね、せつちゃんがね！」

楽しそうにアリスちゃんが上坂さんに話をする。

上坂さんは、うんうんと丁寧にあリスちゃんの話聞いてくれる。対してアグニは……遊んでいた。

「君は何をしてるのさ」

一応聞いてみる。

僕の眼にはアルトとジェンガで遊んでるようにしか見えない。

「アルトと遊んでいるんだが？」

なに聞いているんだこいつって感じの視線がちょっとムカつく。

仕事してよ……

「アルト、僕も入れて」

僕はため息をつきながらアグニとアルトがやっているジェンガに乱入する。

アルトは笑顔でうんと答えてくれた。さて、どこから抜こうかな？

「上坂さんって何している人？」

本人は医者じゃないと言ってたけど、任せてるならそういうことに詳しい人なのかな？

「夕子も俺と同じ技術者だ。うちの開発室の室長だぞ」

へえ、そうなんだ。偉い人だったんだね。

僕は慎重に下段のブロックを抜く。穴だらけ、真ん中だけになった下段の中からだったけど、なんとか抜けた。

「ならなんで任せてるのさ？」

僕が上にブロックを置くと次はアグニ。

「話を聞くのは俺よりも適任だと思ってな俺は人の話を聞くのは苦手だ。対して夕子はそれが得意だ。俺の話も嫌な顔せず聞いてくれる。それも惚れた理由の一部だな」

答えながらアグニはブロックを選ぶ。

ふーん。って、さり気に惚気るな。

そして、上段のまだあまり抜かれてないブロックを取る。あ、アルトのために残しといたのに！

「まあ、それは置いて、先に言うておくが、幼児退行なんて普通起きるものじゃあない。大抵は精神的に追い詰められての現実逃避だ」

とアグニが説明する。

まあ、そう言うもんなんだろうね。

「だが、朱音がそんな状況にいなかった」

アグニの意見に賛同する。

少なくとも昨日まではいつも通りだった。いつも通り朱音さんは家事やアルトの面倒を見てくれていた。本当に助かっています。

というか、たまに思うが朱音さんの方がママって呼ばれるべきなんじゃね？

アグニがブロックを置き、次はアルトの番。うーん、とアルトはどのブロックを抜こうか悩む。

「となれば、あくまで予測だが、暗示かなにかだな」

暗示？

アルトが震える指で中段のブロックを抜こうとする。がんばれー。
「朱音は実はそういうことに詳しい。理由があって自分自身に暗示をかけたんじゃないのか？」

なんですと？

テレパシーといい放電体質といい、朱音さん多芸だなあ。でも、自分に暗示をかけるって、なんで？

ブロックが半分ほど抜ける。ぷるぷるとアルトの指先が震えている。な、なんか危ないなあ。

「だから夕子に話を聞いてもらってるんだ。なにかヒントがないかな」

ふむ、暗示かあ。

その瞬間、山積みになっていたブロックが崩れた。

「あー！ 崩れちゃった……」

しょんぼりとうなだれるアルト。

「あーら、残念だったねアルト。もう一回やってみようか」

「うん」

と僕たちがブロックを組み直していたら……

「アリスもー！！」

とアリスちゃんが飛び込んできた。お話は終わったってことなのかな？

アグニは立ち上がって上坂さんのそばに。結果を聞きに行ったのかな。なら、今度は僕がアリスちゃんの相手をする番か。

三人でブロックを組み上げて、ゲームを改めて始める。

「で、なにかわかったか？」

「いえ、これといってなかったと思うわ」

と上坂さんが残念そうに息を吐く。

「基本的に好きな男の子の話だけ。もしかしたらその子が関係あるのかしら？」

好きな子、確か『せっちゃん』だったっけ？ どんな相手なんだろう。

ふむとアグニは頷く。

「確か朱音の夫は幼なじみって聞いているからなにかわかるかもしれないな。連絡先は知らんが」

僕はガクツと肩を落とす。

ダメじゃん……

第六十六話 アリスちゃんと夕子さん（後書き）

鈴：「どうもー、今年は言って初めての投稿でせう」

刹：「遅かったな」

鈴：「いやあ、ちょっと色々と忙しくてね」

刹：「まあ、こんな時期だからな」

鈴：「うん、とにかく朱音の退行編の続きです」

刹：「以前から存在だけ示唆されていたアグニの嫁も登場だな」

鈴：「かなり若いですよー」

刹：「ノエルも年齢の判断に困ってたな」

鈴：「それに関してはまた今度で、それでは」

刹：「また次回に」

第六十七話 アリスと朱音

結局、原因も詳しくはわからず、お昼を食べてから、再びどうすればいいのかを相談して、

「ふと思ったのだけど」

と上坂さんが口を開いた。

「記憶喪失じゃなくて子供時代に戻っただけなのなら、今まであったことを思い出させられれば、もしかして元に戻るんじゃないのかしら？」

……なるほど。

と言うわけで、アリスちゃんと朱音さんの部屋に来る。えっと、鍵鍵つと。

がちやつとドアを開くと、そこにファンシーな世界が広がってた。ピンクを基調にした壁紙に、ところ狭しと人形が並べられている部屋。それが朱音さんの部屋だった。

朱音さんって以外とこういうのが趣味なんだよなあ。最初に入った時はびっくりしたよ。もっとこう、シックな感じを想像してたし。

「わあー！」

部屋に入ったアリスちゃんが目を丸くして周りを見る。

「かわいいー！」

そして、ベッドにもたれかかっていた大きなうさぎのクッションを抱きしめる。

「わーい！」

とアルトもそれに加わる。

さて……とりあえず連れてきたけど、どうする？

よく考えると朱音さんの思い出の品なんて知らないしなあ……

と、悩んでいたらアグニがベッドに置いてあった子連れのウサギ人形を取る。

「アリス、この人形の名前は？」

いきなりなに聞いてるんだ？

「のえるちゃん！」

とアリスちゃんが答える。えっ？ 僕？

「のえるちゃんはこどものあるとちゃんを一生懸命育ててる立派なお母さんなの！」

と、アリスちゃんが説明してくれる。

ちよつと自分が褒められたみたいで嬉しいなあ。

「朱音は人形に知り合いの名前を付ける傾向がある。つまり、ここは朱音の出会いが詰まった部屋とも言える」

と、アグニが人形を置きながら補足してくれる。

そつだつたんだ……

「この人形は？」

と次に背中に白い羽がついた猫の人形を指す。

「がぶちゃん！ がぶちゃんは黒猫のそーくんと恋人だけど、一度引き離されちゃうの」

と羽まで黒い猫と一緒にアリスちゃんは抱き上げる。

「だけど、また出会ってからは二人はずっと一緒にいるんだ！」

と嬉しそうに二匹を見せるアリスちゃん。

そして、次々にアリスちゃんに人形について尋ねるアグニ。

ああなつても誰と出会ったか朱音さんは覚えてる。ちよつといいなと僕は思えて、部屋を見回す。

所狭しに置かれた人形の数々。これら全部に名前があるとしたら、朱音さんは今までの出会いをどれだけ大切にしているのかわかる。

「じゃあ、これは？」

とあちこち解れたり、補修した後がある年期の入った犬の人形を見せるアグニ。

「せつちゃん！」

と飛びきり嬉しそうにアリスちゃんは答えた。

「せつちゃんは鈍感で意地悪でね」

散々な言われようだな。

「でもね、すごく優しくて、かつこいいの！ アリスを助けてくれて、子供の頃の約束も守ってくれて……」

そこまで言って、アリスちゃんは止まった。どうしたんだ？

「約束守ってくれた？」

そう呟いて部屋を見回す。その目はどこか遠くを見つめていた。

「あたし、あたしは……」

そこでアリスちゃんは一つの写真箱を見つめた。

真っ白なウェディングドレスを着て、とびつきり幸せそうに笑う朱音さん。そして、そんな朱音さんをお姫様だっこする銀の髪と青い瞳の少年。

それを見てそっとアリスちゃん、もしかしたら、朱音さんは微笑む。

「そうだった。そうだったよね朱音ちゃん」

朱音ちゃん？ 何言ってるの？

「アリス姉さん、もう、いいの？」

朱音さんの口調！ でも姉さん？

「うん、ありがとう。あたしのためにわざと戻らなかったんでしょ？ でも、あたしはあの写真見ただけで十分だから」

と、嬉しそうに笑ってから、自嘲気味に笑う。

「事故でたまたまっただけだね。どうせならって」

一人でなにを言ってるんだろ？

僕には全然わからない。でも、邪魔しちゃいけないと言うことだけは理解できた。

「でも、ありがとう。うれしかったよ。せっちゃんによろしくね……」

朱音さんが胸元に手を置く。ぽたつと一筋の涙が零れる。

「おやすみ姉さん」

そついつから朱音さんが顔を上げる。

「みんなごめん。迷惑かけちゃったね」

と、いつもの朱音さんがそこにいた。

元に戻った朱音さんはアグニと上坂さんに迷惑をかけたと謝ると、すぐに今日の分の洗濯などやるべきことをこなした。ただ、その行動はなにかを振り払いたいようにも見えた。

そして、その夜。僕はアルトを寝かしつけてからリビングに向かった。

そこで朱音さんは誰もいない席に、ワインを注いだグラスを置いて、一人晩酌をしていた。

「朱音さん、それは？」

朱音さんの背中に向かって尋ねる。

「姉さんの分」

僕に振り向かず朱音さんは答える。

姉さん、ね。

僕らは単に幼児退行とかなにかをしていたのかと思っていた。だけど、本当は違うんじゃないのか？

もっと違う意味じゃ……

「私が勝手に自分を区別するためにそう呼んでるだけだけど」

朱音さんはグラスを口に付ける。

区別するため？

「隔離性同一障害って知ってる？ わかりやすく言うなら多重人格だけだ」

？

「それなら知ってます。自分と違う人格を生み出すっていうと、そこまで言って、気づいた。」

朱音さんとアリス。全然違う性格。そして、一人でまるで二人いるかのような会話。パズルのピースがカチツとはまり込んだ。

つまり、朱音さんは……

「そ、正確には違うけど、私は多重人格者。アリス姉さんが創り出

したもう一人の『アリス』なの」

こともなげに朱音さんは言った。

「アリス姉さんは子供の頃に酷い虐待を受けてね、そして、現実逃避のために私は姉さんに『作られた』」

確かに聞いたことがある。虐待を受けた子供が防衛のために別の自分を作って、身を守ろうとするって。

でも、そんなのって……

「ただ、私が生まれてすぐにある事件があって『私たち』は施設に預けられたの。その頃には主人格のアリス姉さんは思い出に閉じこもって表に出なくなってたね」

あっさり言うけど朱音さんの話は重かった。

別の人格を作る。それはいつたい、どれだけ辛い目にあっただのだろう？ そう考えると、胸が痛んだ。

「それから私は私として生きてきたの。だから、私は自分というのがすごく大事。あいつも、『朱音もアリスもどっちも大切だ！』って言うてくれたっけ」

朱音さんは苦笑気味に笑う。

それって、朱音さんがたまに話してくれる旦那さんのことかな？ 「だから、押しつけかもしれないけど、私は『自分』っていうものを大切にしてもらいたいの」

そして、じつと僕を見つめる朱音さん。

「ノエル、あなたは消えてもいいて思ってるかもしれないけど、周りにそれを認めない人がいるってことを、どんなになっても覚えてね」

それだけと言って朱音さんは再びワインを飲む。

自分、か……

その朱音さんの言葉は、それからの僕の中にもずっと残ることになった。

第六十七話 アリスと朱音（後書き）

鈴：「朱音、大変だったんだな……」

刹：「正直、話された時は耳を疑ったよ。元気に過ごしてるとばかり思ってたからさ」

鈴：「お前も大変だったんだな……」

刹：「ああ、銃を突きつけられての再会だったからなあ」

鈴：「そうか……ってすごい物騒な出会いだな、おい!!」

刹：「それでは、この辺で」

第六十八話 文化祭と喫茶店編

鏡の前で、スカートの裾をちょこつと摘んで、クルリと一回転してみると、ふわりとスカートが広がる。

それからニコツと笑って、

「いらつしゃいませ！」

満面の笑顔を浮かべてから、僕は考え込む。

うーん、自分では似合ってると思うんだけど……周りがどう見るかだよなあ。

裾を持ち上げながら、自分を見まわす。

今、僕が着ているのは、一週間後に迫った文化祭で着る予定の制服だった。

話は夏休み前に遡る。

文化祭でなにをしたいのかと言う話になって、はやなさんの喫茶店の意見が採用された。

まあ、普通かなと思ったけど、さらにどうせなら女子はかわいい制服を借りて着てみようという話になったのだ。

そのことを朱音さんに話したら、衣装は任せなさい！ と言って、どこからともなくこの服を持ってきた。

流石にクラス全員分はなく、またサイズの問題とかで、僕とはやなさん含めた数人分しかないけど、僕らの制服の代金分をメニューに当てることになった。

そして、今僕が着ているのがその制服。

黒を基調とした、落ち着いたワンピース。ポイントにフリルをあしらいい、純白のエプロンと頭には白のレースをあしらわれたヘッドドレスが鎮座して、シックな雰囲気の中で可愛さもアピールしている。

メイドとウェイトレスを足して割ったようなデザインで、非常に

かわいらしい。

朱音さんが薦めるのもわかるね。僕も悪くないと思う。むしろいいなこれ。

「よし！」

似合おうが似合うまいがやるしかない。僕は気合いを入れ直す。

男、じゃなくて女は度胸！

そして、一週間後……

着替えを終えた僕らは、喫茶店となった教室の再チェックを進める。紅茶はどこか、お茶菓子はどこかと。

女子に対し、男子の何人かは子供狙いの着ぐるみ。

頭はまだ外してるけど、ちょっと熱そうで、自分が女子でよかったと少しだけ思う。

そして、校長先生の訓示が流れてから、文化祭が始まった。

「テストロッサさん、これ二番テーブルでこっち三番」

「はい！」

バックヤードから受け取ったトレイを持って、テーブルに向かう。「ホットコーヒーとアイ스티ーお待たせしました」

うちの店はそこそこの人気で、お客さんがなかなか途切れなかった。それに、あくまで個人的なことだけど、来る人来る人に注目されてるようで背中がむずがゆい。

はやなさんにそれを言ったら、「ノエルは美人だからね」って返された。でも、同じ衣装だけど、はやなさんの方が似合ってるかわいって、僕は思うんだけどなあ。

なんて考えながら給仕をしていたら、

「ママ！」

とんと腰にアルトが抱きついてきた。

「アルト、来てくれたの？」

僕はアルトの頭を撫でる。

「うん！ お姉ちゃんもだよ！」

と顔を上げると朱音さんがいた。

「人気みたいねノエル」

朱音さんが店内を見回しながら、笑う。朱音さんの笑顔に注目が集まる。

まあ、十人に十五人が（半分が二度見）振り返りそうな美貌だもんねえ。

道中も色んな人が朱音さんを振り返ったことだろう。

「では、こほん……いらっしやいませ！ 席までご案内いたします」

そして、席にアルトと朱音さんを案内して、注文を受けてからバックヤードに伝える。

そしたら、

「あ、テストロッサさん休憩に出ていいよ」

と委員長が言ってくれた。

「いいの？」

委員長がにつと笑う。

「うん、アルトちゃんと色々と見て回ってきたら？」

じゃあお言葉に甘えさせてもらうかな？

宣伝のためと着替えずにアルトと手を繋いで校内を歩く。

美術室で美術部の絵を見たり、売店で焼きそば、お好み焼きを買って食べる。

「おいしー！」

口の周りにソースを付けながら美味しそうに焼きそばを頬張るアルト。

「ほらほら、口の周りにいっぱい付いちやってるよ」

苦笑しながらゴシゴシとハンカチで口の周りを拭ってあげる。

ああ、楽しいなあと思っていたら、

「あ、いたいたノエルー！」

とはやなさんが駆けてきた。

「はやなお姉ちゃん？」

アルトが首を捻る。

「もう、どこにいたのさ？ もう時間だよ？」

へ？ 時間？

なんのことが聞く前に僕ははやなさんに手を捕まれて引きずられていく。

そして、連れてかれたのは体育館の裏。

「ねえ、はやなさん、いったいなに？」

すると、はやなさんは呆れたようにため息を吐く。

「ノエル、忘れたの？ あんたミスコン出る予定だったでしょ？」

……あつ！？

思い出した。確か一週間前。

「ねえ、テストロッサさん。出てくれないかな？」

一週間前に突然、うちのクラスの実行委員である栗原辰美さんに、そんなことを頼まれた。

「私は嫌です」

僕は渡されたプリントを見て、きつぱりと断った。

それにはミスコンと書かれてた。

「そこをなんとか！」

と食い下がってくる辰美さん。

ミスコン、つまり学校の女子の中で誰が一番美人か決めるコンテスト。

注目度はかなり高く、はやなさんの話では、学校の中で裏ランキングで上位を取っているような子たちも出るらしいから、人も集まると思う。

でも、それが問題だ。僕は人前に出るのは苦手。そして、

「これって確か自薦ですよ？ なんで私は推薦なんですか？」
と質問する。

「わかるでしょ？ あなたが参加するとしなないんじゃ盛り上がりが

違うのよ！」

そんなこと言われてもなあ……

人前で自分の可愛さをアピールするなんて僕にはできっこない。
なにより、

「他の子に失礼ですよ、私が……僕が出るなんて
少し地を出す。」

なるほど、確かに僕は見た目は美少女というのは認めよう。この
学校の中でも（見た目は）外国人は僕だけというのもある。

しかし、中身は違う。こんな男女。

まったく、うちの親ももう少し僕に女らしさを教えてくれてれば
……って僕は元男だよ！？

危ない危ない。最近、自分が男だったこと忘れかけてるよ……
はあ、と息を吐く。

「ねえ、そんなこと言わずにお願い！。委員会のみんなも注目して
るんだよお」

だが、なかなか辰美さんは折れずに、しまいには泣きそうな顔で
頼んでくる。

仕方がないなあ……

「どうなっても知りませんよ」

結局、僕はプリントにサインした。

第六十八話 文化祭〜喫茶店編〜（後書き）

鈴：「ひ、久しぶりに投稿できた……」

刹：「お疲れさん。でも、この調子で狐火本当に終わらせられるのか？」

鈴：「……努力します」

刹：「まあ、がんばれよ」

鈴：「今回は文化祭編です！」

刹：「文化祭かあ、やっぱり学園物の王道だな！」

鈴：「次はミスコン編です」

刹：「お楽しみに」

第六十九話 文化祭〜ミスコン編〜

あつたなあ、そんなやり取り……

と朱音さんにアルトを預けてから、控え室で思い出す。

「つて、ノエル、それで出るの？」

とはやなさんに聞かれる。

どうやら彼女も出るらしくて、衣装を着替えていた。なぜか朱音さんから借りたネコの着ぐるみ。

ミスコンとしてどうなんだその衣装のセレクトは？

「そのつもりだけど？」

僕の衣装は喫茶店のウェイトレスのまま。

可愛いしちょうどいいとは思うんだけどなあ。

「確かにかわいいと思うけど、店の制服のままじゃ、店に来た人に対してインパクトは薄いと思うけど」

まあ、そうかもしれないけど……

「ま、あなたの自由だとは思うけど、せっかくならねえ」

ふむ、確かにせっかく出るんだから勝ちとは言わずともそこそこの点は取りたいなあ。

僕は少し考えて、ぽんと手を付いた。

「ちよつと朱音さんに会ってきます」

と控え室に出て、朱音さんに会いに行った。

そして、本番一分前。

「緊張するなあ」

僕はドキドキする胸を押さえる。

「だね。にしても、朱音さんもそんな衣装どこに用意してたんだろ？」

はやなさんが僕の格好に首を捻る。

僕の服は、白を基調とした、体つきを如実に現すであろうタイト

な服と、膝ほどの丈のスカートの要所要所に金属パーツを配した白いジャケット。そして、頭にウサミミが装着されている。

実は僕の今の格好は両腕の手甲と右腕に巻きついたベルトを除いたアーマードドレス姿。朱音さんに許可を貰って展開したものだ。朱音さんが僕のためにデザインしたって言うてたの思い出して、この格好が一番いいって思ったんだ。

ちよっとコスプレっぽいのに目を瞑れば、僕もデザインは気に入ってるしね。

『大胆な事しますね』

呆れたように待機中の蒼窮が呟く。

いいじゃんこの位。

そして、ミスコンが始まった。

出場者は十五人で順番はくじで決まっており、僕は最後から二番手。はやなさんは七番。

アピールは一人五分。五十点満点で勝敗を競う。

僕は今、アピールの参考にするため、他の出演者を舞台袖から見ています。

今は新体操部の三年。体の柔らかさや新体操に使う道具でアピールする。

なるほど、そういうやり方があるのか。まあ、僕の場合、蒼窮使うわけにいかないから、違う方法かな？

そして、その先輩は四十四点という高得点。うーむ、やるなあ。

「さて、私の番ね」

と顔以外、ネコの着ぐるみを纏ったはやなさんが笑う。

本当にいいんかその衣装で？ と、再び心配してしまう。

そして、先輩が袖に引つ込むと、はやなさんは舞台上に飛び出す。

『こんにちはー！ 一年生の柏木はやなですにゃー！』

なんかがっかりした雰囲気広がる。そりゃそうだ。可愛い女の子を期待したら、出てきたのはかわいいけど、着ぐるみを着た女の

子なんだから。

『みんな、出てきてー！』

とはやなさんが足をたんと鳴らすと、どこからともなく猫たちが！

なるほど。自分の特技『ビーストタイマー（自称）』で猫たちとアピールするのか！ これなら着ぐるみもわかる！

でも、それじゃあ一発芸じゃ？ と心配してたが、無用だった。

『うー、猫たちが集まったから暑いなあ。着ぐるみを脱ごうつと』

そして、はやなさんが脱ぐとおおつと会場がざわつく。

そこには黒いゴスロリ服に耳と尻尾、さらに肉球グローブを付けたはやなさんがいた！

なるほど。そういう手か！ 最初にがっかりさせて、そして、後からかわいい衣装でアピール。見事なカウンターパンチ！

そして、ネコと戯れるはやなさんは見事に四十八と言う今日の最高点をかつさらっていった。こんなインパクトのある内容だと、僕の負けかなあ？

そして、その後もはやなさんを超える点は現れなかった。

まあ、みんな悪くはないけど、はやなさんのインパクトには負けるなあ。

そして、ついに僕の番。

「がんばってノエル！」

「う、うん」

はやなさんに背中を押されて舞台に出る。

おおつと視線が集まる。それに耐えてなんとか、マイクの場所まで進む。

「い、一年のノ、ノエル・テストロッサです！」

そこまで言つて、なにも出ない。舞台袖では色々考えてたのに……

僕は固まってしまふ。視線、視線、視線、視線…… よくはやなさんたちは耐えたなと感心してしまふ。

なにもしない僕に落胆する雰囲気広がるのがわかる。ああ、やつてしまった……

「ふえっ」

目尻に涙が溜まる。顔が紅潮するのがわかる。

その時だった。

『ノエル！』

頭に朱音さんの声が響く。

そっちを見ればこくつと頷く朱音さん。そして、心配そうに僕を見るアルト。

それを見た時に、光を浴びた雪が解けるように緊張が消えていく。そんな顔しないでよアルト。大丈夫。僕は大丈夫だから。

僕はマイクを取って、顔を上げると、

『——』

頭にメロディが流れた。どこか懐かしい、暖かいメロディ。

自然と口が開く。

——例え、どんなに君が離れていても、例え、繋がれ動けなくても、私はずっとあなたのそばにいる——

会場がざわつく。

なんなのかわからない。ただ自然と知らない旋律を紡いでた。

——この空には光がある、厚い雲に遮られても、あなたを照らす幸いの光は……

きつと見つけられる、あなたが生まれた意味を、きつとたどり着ける、あなたの安らぎの場所に——

ざわめきが消えてた。ただ、誰もが僕の歌を聞いてくれた。それが少し嬉しい。

——いつか、いつか……

歌が終わる。ふうつと僕は息を吐き出してお辞儀する。

「ご静聴ありがとうございました」

僕がお辞儀すると同時に盛大な拍手が鳴り響いた。

うわ……！

そして、提示された僕の点は文句なしの五十点満点だった。

僕は袖に引っ込む。すると、すぐにはやなさんを先頭に人が集まってきた。

「すごい、すごいよノエル！ あんなふうに歌えるんだね！！」

と、はやなさんが褒めてくれると周りのみんなも「すごかった！」「プロ顔負け」と言ってくれる。

あはは、僕自身は歌は好きだけど、得意じゃないし……やっぱり彼女のかな？

知らない歌となれば、そうなんだろう。僕の脳が組変わっていく過程で彼女の記憶らしいものを見ているし。

そのことに関してすごいと思うけど、同時に残念とも思った。

どうせなら、自分自身で満点取りたかったな……

そして、次の先輩が四十七点というはやなさんに次ぐ点を取ったものの、一人満点を取った僕がミスコンの優勝者となった

第六十九話 文化祭〜ミスコン編〜（後書き）

鈴：「ミスコン編です」

刹：「まあ、ヒロイン（？）が優勝か、有りがちな」

鈴：「歌と言えばマクロスだな」

刹：「なにを突然……」

鈴：「セブンは面白かった。ゼロもいいな」

刹：「まあ確かに」

鈴：「というわけで俺の歌を聞けえ！！」

刹：「だが断る！！」

評価、感想お待ちしております。

第七十話 文化祭〱終了〱

ミスコンを終え、僕はアルトとはやなさんと教室に向かう。

「あれ、そう言えば漫研はいいの？」

幽霊部員だからすつかり忘れてたけど、快活なイメージが強い割に、はやなさんって漫研部員だったよね。

「まあ、たった三人だから部屋取れなくてね……」

と、残念そうにはやなさんが笑う。ああ、そうだったんだ。

まあ仕方ないと言えば仕方ないけどさ。

そんなたわいもない話をしながら僕は教室に戻ってきて……

「犬神さんこんにちは。あとなんで、アグニがここにいるのさ？」

犬神室長とアグニが遊びに来ていた。

「もちろん遊びにだ。ばつちり優勝した時のお前の姿は撮ったからな」

愛用のカメラを僕に見せながら、ぐつと親指を立てるアグニ。

あ、そうなんだ、ありがとう。

「あ、おじさん、犬神さんお久しぶりー」

と、はやなさんが二人に挨拶をする。

「知り合いなの？」

「うん、よく酔い潰れた父さんをうちまで連れてきてくれるから」

ああ、そういえば、柏木先生って朱音さんと同じでお酒好きなんだっけ。

「おじさんこんにちは！」

とととととアルトがアグニに駆け寄ると、アグニは自分が食べていたものをアルトに分けて一緒に食べる。ほんと、子供に甘いよなこの人。

そういえば、奥さんの夕子さんは見たことあるけど、娘さんには会ったことないな。今度アルトと会わせてもらおうかな。

「あ、そうだ犬神さん久しぶりにあれ、やって見せて」

「ああ、そうだな。せっかくの祭りだしな」

と、犬神さんが頷く。

あれって？

すると、犬神さんは手元からオオカミの人形を出す。

<オッス！ オレじゅうべえ！ 誇り高き一匹オオカミさ！>

ぱくぱくと人形の口が動くと、元気な少年のような声が聞こえた。

「おい、相棒、私の存在を忘れるなよ？」

<ああ、すまねえ相棒、俺は一匹オオカミじゃねえなあ>

がっはっはと笑うじゅうべえ。

えっと、腹話術か。普通に聞けば、まるで人形がしゃべってるように感じるけど、聴覚センサーでは音源が犬神さんって出してるし。周りから犬神さんの腹話術に感心した人たちが集まり、子供たちが目を輝かせる。

なんか僕の周りって変な特技持つてる人が多いなあ。

「こんにちはノエルちゃん」

いきなりかなねえに声をかけられた。

振り替えるとそこに、

「香苗さん、と前田くん？」

「どうもテストロッサさん」

僕の通っていた高校も近いっちゃ近いけど、少しびっくりだ。

「たまたまそこで前田くんとあつたんだ」

ふーんそうなんだ。

と、前田くんが僕を見ていた。

「なに前田くん？」

と、問いかけると前田くんが紅くなった。

「あ、いや、き、きれいだなって……ってなに言ってるの俺?!」

え、あ、うっうっう。そういえば、ミスコンの時の格好のままでった……

前田くんの言葉に僕も紅くなる。

な、なんだよ。これじゃ女の子見たいじゃないか。いや、今は女

の子だけどさ。でも、なんていうか、この反応は違うと思う。

と、にやにやとはやなさんが僕を見ているのに気づいた。

「な、なに？」

「いやあ、初々しいなあって」

親父か？！

と、そんな風に和やかな空気で僕らの文化祭は終わりを迎えた。

文化祭が終わり、その後片付けをしてから、僕らは家に帰る。

アルトはすでに朱音さんが連れて帰っている。ちよっと残念そうだったつけ。

「楽しかったね」

「そうね。はやなちゃんも、ノエルちゃんもきれいだったよ」

かなねえにありがとうとはやなさんが笑う。

うん、確かに楽しかった。喫茶店も儲かったし、またこういう風にみんなで騒げたらいいなあ。

そんなことを考えながら、僕ははやなさんたちと姦しく騒いでいて、

その人はいた。

フードにサングラス、口元を覆うマスク。殆どその人の特徴が隠され、辛うじて見える長い金色の髪から、女性とわかる程度。はっきり言って怪しい。ここまで怪しさ大爆発な姿に怪しさ通り越して逆に怪しさを感じられない。

その人は静かに僕たちの横を通り過ぎようとして、

「相変わらず綺麗な歌声ね」

え？

どこか聞き覚えのする感じの声を聞いた途端に頭に痛みが走った。

気がつくと、何もかもがぼやけた世界に僕はいた。

「で、ここにいるのね」

呆れたような声とともに誰かと遊ぶ妹だけが視界に映る。

「母さんと父さんに親戚はいないし、施設に入れるにも私と離れるのを嫌がつてね」

と僕が、いや『彼女』は笑う。

「あなたが離れたくないだけでしょ？　まあ、気持ちわかるけど、無理だけはしないでね」

『リン』

夢と現実の声が重なった。

僕はふらっと倒れかけ、なんとか踏ん張った。

「ど、どうしたのノエル？！」

すぐに、はやなさんが支えてくれた。

「どうしたの？！」

かなねえも心配そうに顔を覗き込んでくるけど、心配ないと答えてから振り返るけど、誰もいない。

今の人はいったい誰だったんだ。それに……リンって誰だ？

誰もそれに応えてくれる人はいなかった。

第七十話 文化祭〱終了〱（後書き）

鈴：「エンジェルダストやっとな文化祭編終了」

刹：「遅かったな」

鈴：「まあ、いろいろあつてね」

刹：「まあいいさ。余談だが、今回登場の人物のイメージは仮面ライダーWのシユラウドです」

鈴：「次回から久しぶりに非日常パートです」

刹：「俺も活躍……」

鈴：「するわけないでしょう」

第七十一話 リンの夢

朝、朝、日差しが部屋に差し込む。

僕はまだ布団の中でぬくぬく。

まだ残暑の厳しい時期。晩夏。気温は二十三度。暑い。

それでも布団から出るのが億劫なのは、いつも変わらない。

だが、その時間も、

バン。

音。ドアが開く音。

シャッ！

再び音。カーテンの開く音。

もうすぐ終わる。

「起きなさい！」

そして、彼女。彼女が勢いよく布団をはがしてきた。

舞う布団。朝の空気。

僕は思わず丸くなる。

布団が恋しい。

まだ眠い、頭重い。起きたくない。

「うー。あとごふん」

そんな台詞。おなじみの文句。

彼女のため息。

「そんなこと言ってないで早く起きなさい。アルトだってもう起きてるんだよ？」

アルトが起きてる。

なら、僕も起きる。

むくつと起きる。

「おはようリン」

「おはよう——」

彼女、同居人、リン——とあいさつ。

出会いはここに来た頃から。
よく僕を起こしにくる彼女。

「早く下に来なさい。朱音さんもご飯準備してるんだから」
くるっとリンがステップし、ふわっと広がる綺麗な髪。

出ていく彼女。見惚れる僕。

何度見てもきれいだと思う。

それから、寝間着から制服に着替える僕。

早くしないと、みんな待ってる。

ただよう香しい香り。

扉を開ける。

「おはよう朱音さん、アルト」

「おはよう——」

「——おはよー」

帰ってくる返事。

僕らの保護者代わりの朱音さん。

妹のような存在のアルト。

リンはゆったりとコーヒータイム。

この三人が両親のいない僕の『家族』。

食卓に並ぶ朝ごはん。

すぐに席につく僕。

手を合わせる朱音さん。

それに倣う僕ら。

「いただきます」

「いただきます」

みんなでいただきます。

おいしいごはんにみんな笑顔。

『いつてきまーす!』

食事を終えて、家を出る僕ら。

とても学生に見えないリンも僕と同じ学年。

「おっはよー、――、リン」

声をかけられる。

そっちを見ると友達のはやなさん。

最初に仲良くなったのは僕。次がリン。

それから、いつも登校はいつも一緒。

「今度休みの日にでかけない？」

「あ、いいね」

「私、遊園地いきたいなあ。アルトも行きたいって言ってたし」

女三人寄れば姦しい。

賑やかに過ぎる僕らの時間。

僕は布団から這い出す。

んゝ、なんか夢を見てたんだけど、よく思い出せない。

でも、ただとても楽しい夢だったような気がする。うーん、気になるな……

まあ、いいか。そろそろ起きないとな。

それから着替えて朝食を食べるんだけど、誰かが足りない気がする。

なんで？ アルトも朱音さんもいるのに。

そのことに疑問に思いながらご飯を口に入れてたら、

「ノエル、なにか調子がおかしかったりしない？」

いきなり朱音さんにそんなことを聞かれた。へ？

「別になにもないですよ？ 体の調子は変わりませんし」

僕の返答に朱音さんはそうとだけ頷いた。本当にどうしたんだろ？

第七十一話 リンの夢（後書き）

鈴：「やっと、投稿できた」

刹：「ま、大変だったな」

鈴：「サークルの提出頑張ってたんだけどな」

刹：「テーマは『オラザク』だったからな。あ、オラザクは既存のプラモを自己流に改造してオリジナリティを出すというもの」

鈴：「そのうちf gにアップする予定」

刹：「そんじゃ、また次回に」

第七十二話 朱音の夢

「ふう」

寝る前の日課である髪の手入れを終えてから私はベッドに潜り込む。

今日も今日もで、アルトちゃんかわいかったなあ。とほくそ笑む。私にもあんなかわいい子がいたらと想像するだけで頬が緩みそうになる。

でも少し不安。虐待された人間は子育てによく失敗するって聞いたことあるし……そこまで考えて、ぶんぶん頭を振ってその考えを追いつ出す。

にしても、いいなあアルトちゃん。ちっちゃくてお人形さんみたいにかわいくて、昔は私もあんな風だったのに……

突然背が伸びて、スタイルもよくなつて、昔はみんなに十代って言っても嘘だ。なんて言われちゃったし……ああ、私ももう少し小さかったらなあ……

つらつらそんなことを考えているうちに私は眠りに落ちた。

私が目を開けると、目の前に覚えのある家があった。ああ、姉さんがおかあさんとおとうさんと住んでた家だ。

もう存在しないはずだからすぐに夢だとわかった。明晰夢ってやつね。

「ずいぶん懐かしい場所ね」

ほとんどおぼろげにしか覚えてない家を見る。

なんというか、この家はいい思い出がたくさんあるけど、できるならさつさと去りたい。うん、そうしよう。

私はそう決めて背を向けたら、

「やあ、どこにいくのかね？ 汝？」

こ、この声は！？

「お父さん！　しかも若本ヴォイスで！？」

目の前に、かろうじてネコなんじゃないかなあ？　と推測できるものが立っていた。いや、浮いていた。

体の半分は顔というか顔と体が一体化したオレンジ色で、それに申し訳程度の手足と頭の頂点の耳。まだかわいらしいと言える体型に反し、あ。ごさんの渋い声と死んだ魚の目。つまり……知る人ぞ知る名（迷？）キャラクター、ちよ父！

別に私のお父さんがこの人外というわけじゃないよ。言うておくけど。

「私は君のお父さんではない。娘のアリスがいつもお世話になっております」

「あ、いえこちらこそ」

ちよ父が丁寧に頭を下げるので、つい反射的にこっちもお辞儀してしまう。

「つて、え？」

なんでアリス姉さんの名前？

そのことを口にする前になぜかちよ父が腕を振りかぶる。

「早速だけど戦闘訓練を始めようか。武器を構えなさい」

「……はい？」

え？　なんで……突然の言葉というか、提案に私はちよつと呆ける。

「さあ行くよー」

ちよ父の細い右腕が一直線に伸びる！　かなり早い！

すぐに私は鎌を取り出しその一撃を受けるが、勢いで吹き飛び後ろの家にぶつかる。

家突き抜けるがなんとか踏みとどまる。

「ふむ、やるね。遠慮なく私にかかってきなさい」

余裕すら感じさせる声音で目の前にちよ父が迫る。

「言いましたね」

右袖から愛用の銃を取り出し、トリガーを引き弾丸内の力を開放。

銃口から迸る雷のエネルギーが目の前に迫ったちよ父ごと家を吹っ飛ばす。さらに距離を取るため一気に上空へと飛び上がる。

そこに、土煙の中から飛び出すちよ父、早い！

私はサンダーランスにショートサンダーなどの牽制の術で攻撃するが、それを悉く回避し一瞬で顔がぶつかりそうなほど肉薄される。嘘！？全然見えなかった！！慌てて最大速度で後退するけどまったく距離を離せない。

「哀しい、悲しいなあ。残念だがあ、私は地球を一秒で、七周飛べるのだよ」

ああ、そんな設定あったわね……でもその速度ありえない？地球の重力圏離脱しちゃうじゃない。

ぺちつと本当に軽そうに、柔らかそうな手で叩かれた瞬間、凄まじい衝撃に襲われる。相当な高さだったのに一瞬で先ほどまで家があった場所に叩きつけられた。衝撃であたりの物体が吹き飛び、でかいクレーターが生まれる。

幸い夢なので痛みはないが、衝撃中和の術が間に合ってなかったから、これが現実なら完全にフレーム強度の限界値越えてる筈。確実に戦闘不能になっているね……

顔を上げると、近くに余裕で降り立つちよ父。

「これで終わりかな？ まだまだだね？」

むむむ、このまま負けるのもなんか癪だし……

「これならどう！」

一瞬で魔法陣を展開、降りてくるまでの間に溜めた最大出力のサンダーブレイクを撃つ。

だけど、あっさりと、本当にあっさりはじき返され明後日の方向で爆発が起きる。

「私に銃撃は効かないのだよ！」

「無茶苦茶でしょ……」

というより、今の銃撃どころか荷電粒子砲に近い代物なのに……

「では、ここまで頑張った君に敬意を表し、私もちよつと本気を出

させてもらつよ?」

一気に接近してくるちよ父。も、もうだめ……
目の前に拳を振りかぶったちよ父が迫り……

そこで目が覚めた。

真夜中の寝室、私は全身に汗をかいたまま息を乱してしまっている。

「……何、今の夢?」

とてつもないおかしい夢で、これは私の深層心理にこんなハチャメチャな願望があるってこと?

とりあえず、私は寝汗を流すために一度シャワーを浴びてからもう一度ベッドに入る。

「……え?」

そこで気づいてしまった。

目の前、いくつかある人形のうちにちよ父の人形が置いてあったことに……確かタンスの中に片づけてたわよね?

私の背筋に冷たい何かが通り過ぎるのであった。

「あれ?」

朝、僕がリビングに入席の一つに人形が置いてあったのだ。しかもちよ父の。不思議に思いつつ朝ごはんを見ると、パンとベーコンエッグにコーンスープがなぜかちよ父の前にもお皿が置かれている。アルトのいたずら……なわけないよな。まだ起きてないし。

不思議に思いつつ朝ごはんを待っていると、アルトも起きてきた。いつもの日課で髪を梳いてあげた後、アルトは人形を見て首を傾げる。

「あれ? あのお人形さん……」

「ああ、あれね……」

キッチンから出てきた朱音さんが頬を引きつらせながらあの人形を見る。

……なんか朱音さんの眼の下にクマがあるんですが。しかもつきりはつきりと。なにかあったんか？

「あれはね」

「おねーちゃん、あのお人形ちよーだい！」

アルトは朱音さんが何か言う前にそんなことを頼んだ。

「え、えっと、それは……」

朱音さんが困ったように視線を宙に向ける。その様子は単に自分の氣に入ってる人形を人に渡すのを逡巡してるだけのように見えない。そもつと何かを不安がっているような……

「ダメなの？」

悲しそうにアルトが朱音さんを見ると朱音さんはうつと唸る。

「せつかく見つけたのに」

アルトが残念そうにそう漏らすと朱音さんは「え？」と目を丸くする。

「あれ、アルトちゃんか？」

恐る恐るといった感じで朱音さんが人形を指さす。

「うん。きのうねお姉ちゃんのへやでお人形さん見てたときに見つけたの」

そうアルトが言った途端朱音さんが崩れ落ちる。うわ、どうしたんだ？

僕が心配になって近づくと、

「よ、よかった……ちよ父の呪いじゃなかったんだ……ぐす、ひつく、うわああああん……」

なにか呟いたと思ったたらいきなり泣き出した。ほんとになにがあらったんだ朱音さん？

僕とアルトは首を傾げながら泣き続ける朱音さんを見つめていた。

第七十二話 朱音の夢（後書き）

鈴：「どうも、朱音の夢です」

刹：「カオスすぎる……… とうかこれ一部クレしん入ってるよな？
う。ばらウサギとか」

鈴：「うちの師匠が朱音なら、これくらいはっちゃけてもいいんじゃないかってね」

刹：「そうなのか」

鈴：「俺の中ではお笑いからシリアスどっちも行けるキャラを想定してるんで」

刹：「どつかのスナイパーなおねえちゃんだな」

鈴：「それでは、また次回！」

第七十三話 夫婦

最近、朱音さんの機嫌がいい。

カレンダーを気にしたり、鼻歌歌いながら料理をしたりと、いつもと違う。

アルトも気づいてるのか、不思議そうに朱音さんを

「朱音さん、なにかあったんですか？」

取り敢えず聞いてみることにした。

まあ、悪いことじゃなさそうだし教えてくれるでしょ。

「ああ、わかつちやったか。突然だけど明日、刹那が帰ってくるのよ」

と、朱音さんが嬉しそうに答えてくれる。

刹那？ 誰だっけ、聞いた覚えがあるけどって、ああ！

「朱音さんの旦那さんが？」

「うん！」

そっか、だから機嫌がよかったのか。微妙に返事が幼くなった感じがするのもそのせいかな？

朱音さんの旦那さんかあ。僕も会うのが楽しみだな。

そして、翌日、食卓には数々のごちそうが並んでいた。なんでも、刹那さんの好きなものを取り揃えているらしい。

寿司や麻婆豆腐、コロツケ、ハンバーグ、餃子、コンソメスープ、色取り取りのサラダ etc. etc. どれも非常においしそうだ。

てか、和食、中華、洋食と国籍に一貫性が無いな。中には見たことないのものもあるし。

それらを並べながら朱音さんは楽しそうに時計を気にしている。

朱音さんって待ち時間を楽しめるタイプなんだ。

「楽しそうですね朱音さん」

「うん、楽しみよ」

と、僕が言うと、朱音さんは満面の笑みで答えた。

「せつなおにいちちゃんはいつ来るの？」

なんてアルトが聞くと、朱音さんは時計を見て、

「後、十二分と三十六秒かな」

細かいよ。

それから、僕たちは刹那さんを待っていたんだけど、時間になっても現れなかった。

「あはは、道が混んでて遅れてるのかなあ？」

なんて朱音さんが笑って、同時に電話が鳴った。

目の前から朱音さんが消える。

えええええ！ は、早すぎる！！

遅れて僕も席を立つと、

「え？ 仕事を立て込んで帰ってくるのが難しい？ ちょ、ちょっと刹那！！」

しばらくの間、朱音さんは呆然と立っていて、ゆっくりと受話器を置いた。

そして、ゆっくりと僕らの方を向いて……アルトが僕の腰にしがみついてきた。

そこに、満面の笑顔の朱音さんがいた。でも、怖い。すごく怖い。目が欠片も笑ってない。

頭の中でワーニングが鳴り響き、朱音さんをエネミー設定しそうになる自分を必死になって止める。

「二人ともお腹すいたよね？ 先食べちゃおっか？」

朱音さんの提案に僕らはこくこくと頷いた。

そして、一時間後、僕はアルトに話し相手として蒼穹を渡してから、部屋に避難させた。

そして現在、リビングにはひどい惨状が広がっている。

とっておきと言っていたシャnpanをグラスに注がず、こくこく

とラッパ飲みする朱音さん。

「ぷっはあ！ 刹那のばあか！ 甲斐性なし！！」

……すっごく逃げたい。

ていうか、朱音さんってこんなに酒癖悪かったっけ？

そんな疑問を浮かべながらも、僕は朱音さんに立ち向かう。気分はゴジラに挑む自衛隊（戦車）だ。

「あ、朱音さん、そろそろお酒は……」

ちらっと床を見ると、すでに四本ほど空になったビンが転がっている。

「なあに？ こんな不幸な私からお酒までとるなんて……うつつ、鬼だよ犯罪だよ」

いい感じに出来上がっている朱音さんは両手で顔を覆って泣き真似なんてしてくれる。

く、だが、引けない、引いてなるものか！

「ま、まあでもさ、もっと味わって飲まないとお酒もかわいそうだよ？」

と、言ったら、ぴたっと朱音さんが止まった。そして、

「それもそうね」

うおっしやああ！ 適当に言っただけ、うまく言った！！

朱音さんがボトルを置いて……二つのグラスに注いだ。って、結局飲むんかい！ それに、二つ？

「ほら、同伴しなさい」

ずいっと朱音さんがグラスを僕に突き出す。

「えっと、僕は未成年だから……」

「十分成人じゃない」

と、胸のあたりを見ながら朱音さんが無理やりお酒を渡してくる。

「身体はですけど、脳はまだ未成年です！」

「大丈夫。前にも言ったけど、その体には浄化装置あるから、アルコールもアセトアルデヒドも脳には行かないから」

ああ、そういえば言ってたっけ。確かにあの時は酔わなかったけ

ど、それって、これから一生、酔えないってことなのかな？

僕の考えを置き去りにして、朱音さんがグラスを差し出してくる。無言のまま僕はグラスを受け取る。

それから僕は朱音さんから愚痴をえんえんと聞かされる羽目になった。

「まったく、あいつって、いつもそう。あんまり連絡してこなくてさあ、今回みたいなこと昔もあったのよ」

はあ、と頷く。ついに五本目の酒瓶を開けてグラスに注ぐ朱音さん。もう真赤だ。

確かに朱音さんの言うとおり、僕は体内の浄化装置のおかげでまったく酔わない。

「でさあ……」

まだまだ続く朱音さんの愚痴にため息をつく。ここで酔えた方が幸せかなあとか思ってしまったよ。

ゆらゆらと朱音さんの頭が不規則に揺れる。本当に大丈夫か？

もしかして意識もなくて、ただ、愚痴だけが出てるだけとか？

「『愛してる』なんて甘い声で囁いてくれたっていいのに、あいつそれもしないし」

朱音さん、約束破られたって言うのもあるんだろうけど、刹那さんに不満多いなあ。夫婦ってそういうものなのかな？

「あいつ『口にしないで胸の奥に仕舞っとく言葉だ』なんてかつこいいこと言ってたけど、実際は恥ずかしがつてるだけよ」

ああ、その気持ちはなんとなくわかる気がする。でも、子供みたいなんて思ってしまう。

「子供なのよ。いつまでもね。でも、そこが好き」

と、そこでボタンと朱音さんが勢いよくテーブルに突っ伏した。って、大丈夫なのか？

「あ、朱音さん？」

心配になって顔を覗き込むけど、その眼は焦点が合っていない。い

や、なにも見ていないのだろう。

「何かとかつこつけたがるし、子供みたいな言い訳する時もある。でも、一緒にいて居心地いいの」

えっと、意識あるのかな？ かなり酔ってるみたいだけど……
でも、朱音さんは止まらない。

「刹那は絶対に私を裏切らない。ずっと一緒だって、もう離れないって約束してくれた。姉さんとの約束なのに……私とね。でも、それが嬉しかった」

僕は黙って朱音さんの独白を聞き続ける。

「だから、私は刹那と一緒にいる。どんなに離れても最後は刹那と一緒に……」

だんだんと声は小さくなって、そこで言葉は途切れた。
そつと顔を覗き込むと、安らかな寝顔。やつと終わったからか、なんかほつとした。

僕は朱音さんを抱えて部屋に連れて行く。

そして、ベッドに寝せてから、古びた犬のぬいぐるみ、『せつちやん』を抱かせて僕は部屋を出た。

にしても、明日、朱音さん大丈夫かな？

翌日、リビングでは少し機嫌のいい朱音さんが朝ごはんの用意をしていた。

……あんなだけ、意識を失うまで飲んだのに、なにもないって、どっただけすごいのか？

「お、おはようございます朱音さん」

「おはようノエル、昨日はごめんね？」

苦笑気味に朱音さんが謝ってきて、いいですよと僕は返す。

それから、椅子の一つに座っている見たことのない人形が目に映った。

「あの、それ」

ああ、とかなりの大きさのテディベア朱音さんが微笑む。

「新しいメンバーの『はやなちゃん』だよ」

第七十三話 夫婦（後書き）

鈴：「お前なあ……」

刹：「いやいや、ちゃんと帰ったよ？ ノエルやアルトは知らないけど、ちゃんと深夜に一度帰ってきたよ?!」

鈴：「それでデイベアだけ置いて行ったのか？」

刹：「あ、ああ……」

鈴：「……甲斐性なし」

刹：「う、うるさい!!」

第七十四話 はやな誘拐

その日、僕ははやなさんと一緒にショッピングをしていた。僕はアルト用の服に絵本だけを買うつもりだったんだけど、子供服を見ていたらはやなさんが、

「ノエルはかわいいんだから、もっとかわいくしなさい！」

なんて言われて、僕は自分の服を買うことになった。

「うん、かわいいわよノエル。私が男ならきつといちころね！」
男、ね。

僕も元男だけど、かわいい服は嬉しいけど、鏡の中の自分ときめいたりしないなあ……

「ノエル、どうしたの？」

「あ、なんでもないよ」

心配そうに僕の顔を覗き込むはやなさんに笑いかけた。

それから、はやなさんとまあ、買い物をした帰り、

「ねえ、ノエル、何か悩みあるの？」

「へっ？」

いきなりはやなさんにそんなことを聞かれた。

悩んでること？

「別にないけど？」

「ウソ、この前の文化祭からどこか変よ？ だから気晴らしにならないかと思って買い物に誘ったっていうのに」

スパツと断言される。まあ、はやなさんにこんな言い訳意味ないのはわかっていたけどさ。

まあ、確かに文化祭から考えていることはあるけどね。でも、相談する程のことじゃないよ」

「というか、できない。この前話しかけてきた人が何だったのかなんて。」

そしたら、はやなさんにガシツと肩を掴まれた。

「あーもう、もどかしい！　だったら、そんな迷った顔しない！」
そんな顔してたの？

確かに朱音さんに顔に出やすいつて言われてるなあ。

「わかった、次からは気を付けるから」

「だけど、僕の答えにははやなさんは、

「あーそう、わかったわよ」

手を離す。

「バカ、もう知らないから」

そう言っではやなさんが背を向けてしまった。

しまった、せっかく心配してくれたのに、怒らせたなんて。

「ご、ごめんはやなさ」

その時、僕の頭の中にアラートが響いた。

高エネルギー反応？　上？！

僕は空を見て、それがはやなさんの前に降り立った。

大きさは変わらず十メートルより少し小さいくらいで、頭に二本の角がある。目らしきものは見当たらず、その甲殻は丸っこいが、随所に鋭利なパーツがあり、相変わらず生理的な嫌悪感を抱かせる毒々しい甲殻の色。

ただ今までののが半分ほど地面に埋まったままに対し、こいつは全身が出ている。その上、今までのヴェノムにはない、固そうなカプトムシのような甲殻と薄い二対四枚の翅があるからか、余計に巨体の迫力がある。

中型種！　なんでここに？！

「えっ？」

はやなさんが突然現れたヴェノムに固まる。

それが『瞳』を開いた。

「蒼穹、戦闘形態！！」

『了解！！』

僕は戦闘服を纏い、蒼穹を持って飛び出した。

ライフルモードで牽制しながら間に割って入る。

「ノエル?!」

「はやなさん下がって!!」

そのまま蒼穹をブレードに切り替えて斬りかかり、ヴェノムが二つある前腕の片方で受けた。

バキツと甲殻を砕いて刃がめり込み、緑色の体液が噴き出す。

だが、刃を引こうとして、横殴りの衝撃。

かるうじて、横から太い棍棒のような腕で殴られたということだけはわかったが、そこまでだ。壁に叩きつけられた。

「大丈夫ノエル?!」

こつちに駆けてくるはやなさんが僕を殴り飛ばした腕に捕まる。

「え? きゃあああああ!!」

そして、はやなさん捕まえたヴェノムが飛び上がった。

「くそ!」

すぐに立ち上がって、それからレーダーを見る。まだ、そこまで遠くない!

人が集まり始めてるし、街中で飛ぶわけにもいかず、もらってから練習以外では使ったことのないバイクを転送して、ヘルメットを被る。

「頼んだよ」

ぽんつとエンジンを叩いてから走り出した。

レーダーを頼りに追いかけるとともに、相手の情報を検索する。中型種、強行突撃型。以前のほどではないが、固い甲殻で突撃、正面突破するタイプだ。武装はさっき僕を殴り飛ばした腕と、レーザー。

本来はもう少し早いはずだけど、はやなさんを連れてるからか、あっちがそこまで速度を出せてないのが救いだ。

にしても、あいつどこから来たんだ? それに、なんではやなさんを……いや、それよりもはやなさんを助ける方が先決だ。

アクセルを絞る。とつくに法定速度を超えてるが気にしない。後ろで四台目になるパトカーが引き離されていく。

さらに、飛んでいるヴェノムを見上げる人々が視界の中で何人もいた。後々、面倒なことになりそうだな。

っ！ 赤信号！ でも、止まるわけには行かない！

地面を全力で蹴る。

碎けるアスファルト。宙に飛ぶバイク。

冷静に空中で姿勢制御して着地する。ぎゃりつとタイヤが地面を噛む瞬間、体勢が崩れかけるものの、なんとか持ち直す。

我ながらすごいことしてるな。と、自分でそれに呆れてしまう。そのまま、追いかける。少しずつ近づいてる。でも、いったいどこに向かってるんだろう？

そして、やっと肉眼で確認できる距離まで迫った。

よし！

さらに距離を詰めて、バイクを遠隔制御に移行。翼を広げる。あの程度、郊外に出てるから平気だと自分に言い訳する。

そして、タイミングを見計らって、

「はあ！」

蟲に向かって飛ぶ。

「はやなさん！」

聞こえないと思った呼びかけはどうやら、届いたみたいだ。

はやなさんが、目を丸くして口を動かす。声は聞こえないけど、たぶん僕の名前だ。

僕は蒼窮を振りかぶる。

「はあ！」

そのまま、すれ違い様にはやなさんを捕まえていた『手』を両断する。

「きゃわわわわっ！ー！」

急旋回し、宙に投げ出されるはやなさんをキャッチ。

そして、そばにあった山に不時着した。

第七十四話 はやな誘拐（後書き）

刹：「なんか、一気に加速した感があるな」

鈴：「ま、まね」

刹：「ここから一気にクライマックスまでいくつもりなのか？」

鈴：「あと数度の事件の後、ラストバトルが始める予定」

刹：「そっか、がんばれ。狐火もな」

鈴：「……善処します」

それでは、感想、コメントお待ちしております！

第七十五話 空中戦

はやなさんを抱えたまま、目の前に山の斜面が迫る。

「こんのお!!」

翼を広げてスピードを殺しつつ、しっかりとはやなさんを抱えなおして、地面を挟りながら斜面に降り立つ。

数メートルほど速度を殺すために滑ったが、なんとか、倒れずに踏ん張りきった。

な、なんとかなったけど、はやなさんは大丈夫か?!

「はやなさん大丈夫?」

と、はやなさんに聞くと、目を白黒させていた。よかった怪我はなさそう。

かなり強引に助け出したけど、安心した。

「え、えっと、ええ。大丈夫よ、ノエル……で、合ってるよね?」

一瞬誤魔化そうかとも思ったけど、今更無理だなと考えて頷く。

「い、いったいなにがどうなってるの? それにその羽なに? す

ごくかつこいい!!」

はやなさんが一度にいろいろと聞いてくるが、先に下ろす。

「うん、ちゃんと説明しないといけないのはわかるけど、その前に

……こつちを先に片づけないとね」

後ろを向くと、ヴェノムがこつちに迫ってくる。

蒼穹を構える。

「はやなさんは隠れてて!」

僕の言葉にはやなさんが頷いて離れる。僕はヘルメットを投げ捨てて、翼を広げて飛び上がる。地上で戦うより空中のほうが周りに被害を与えないでしょ。

上空に上がって、ごうつと流れる風に一瞬、目を細めてしまう。

風が強いな。空中戦初めてだけど、ちゃんとできるかな? まあ、先の一撃で二つある前腕の片方を奪って、残り一本。少しは戦いや

すくなつてると思いたい。

空に飛び出した僕に対し、ヴェノムの顔の甲殻の一部が開き、動物の『瞳』のようなものが現れる。

『警告、敵熱量増大、ビーム発射体勢、確認』

その警告に狙いを定めないようにバレルロールしつつ、撃ちだされた極太のビームを回避。接近する。一瞬、青空が視界に入って、なんでか、その光景に綺麗だななんて感想が浮かんだ。

再び空が上になった状態で前進して、ヴェノムが今度は一気に急加速してきた。

げえ！？

慌てて翼を振って上に向かって急加速し逃げる。ごおっと空気を切り裂く音に急激なGに視界が狭まって、さっきまで僕がいた空間をその巨体が押しつぶす。

と、突撃型って言うのはちゃんと検索したけど、あの加速はびびった……

さらに旋回して、こっちに迫りながら残った鎌のような前腕を叩きつけようとしてくる。それを避ける。

その背中に特注弾を撃ちこもうとして、背中の甲殻が『割れた』
新たに現れた四つの『瞳』がこっちに向けてビームを撃ってくる。
「うわっとお！？」

ギザギザに飛び、急制動してから再び加速とランダムに動いて四つのうち三つをなんとか回避。地平線、空、地面と、捲る捲る視界が移り変わる。だが最後の一発を避け損ねて左腕のイージスで受けた。

以前のより出力が低かったようで回路は焼き切れなかったが、体が跳ね飛ばされる。

「ぐううう！！」

空中で錐揉みしながら、ばたばたと翼を振ったりして体勢を整える。

く、空中戦って思ったより難しい！ 高速で地面と太陽のある空

と視界が移り変わっていく。

それでもなんとか姿勢を回復させようとして、視界の中でこちらに迫るヴェノムが見えた。大きく鎌を振りかざしている。

だめだ、タイミング的に避けられない。せめてイージスを張って少しでもダメージを軽減しようと考えて……

「うおわっ!？」

突然、横合いから凄まじい衝撃が僕を襲い、その突撃から救ってくれた。

気づけば、僕は誰かに抱きかかえられていた。

硬い鎧のような甲殻に包まれた、ほんの少し暖かい腕。見上げると、逆光の中、そこに四つの角が王冠のようなものを持つ凶悪な顔が浮かぶ。

「き、君は……」

僕を救ったのは、以前戦った小型種だった。

——大丈夫か？

テレパシーで問いかけられる。ちょっと顔が赤い気がする。か、かつこいいじゃないか。

「ああ、うん助かったよありがとう。でも、なんでここにいるの？」

僕は腕を下りながら問いかける。

確か、彼(?)は僕、というか、たぶん『彼女』と協力して中型種を倒してからどっかに飛び去ったんだっけ。

——たまたまだ。主を捜していたらお前たちを見つけた。

主ね。

そういえば探しているみたいなこと言ってたっけ。

「そう、あのさ、そっちも忙しいだろうけど、今はちょっと手伝ってくれないかな？」

——そうだな。あれを放っておくわけにはいかない。

こくつと頷いてくれる。よし。

試しに頼んでみたけど、助かった。

まあ、そんなあつさり頼んだり、信じていいのか？　と言われるかもしれないけど、彼は信用できると思う。ほとんど直感だけど。「よろしく」

そうとだけ言って僕らは左右に別れて飛ぶ。と、ヴェノムがこっちに向かってくる。

まあ、こいつにとつて彼はおそらく仲間であるのだろう。だけど、その横から一条のビームが突き刺さり、毒々しい色の甲殻を焼く。彼の攻撃だ。

それに気を取られたのか動きが鈍る。その隙にピッチアップ、さらにロールして、縦方向にUターン。ごうごうと耳元で風が鳴る中で再加速。そして、交差する瞬間に蒼穹で斬りつける。

若干できた高低差による位置エネルギーと、加速エネルギーによって破壊力を増した一撃が残った前腕を砕く。弾き飛ばされた腕は、くるくると放物線を描きながらそばの山の斜面に突き刺さる。

かぱつとさつき見た四連装の『瞳』が開いて、

――迂闊だな。

一気に接近した彼によって四つのうち一つが蹴りで潰され、一つが腕から伸ばした刃に貫かれる。

身悶えるヴェノム。今！

ヴェノムの上を取り、くるっとロール。そして、

「空断・煌き！！」

なんでかそんな名前を叫びながら一瞬、蒼穹を突き出し、地上に向かつて全力で突撃する。

そして、悶えるヴェノムのその背に僕という鉄槌が突き刺さった。

地面に降り立つ。その後ろで真つ二つになったヴェノムの死骸が轟音を立てて地面に叩きつけられた。

な、なんとかなった。はあはあと荒く息を吐く。

そういえば、『僕』自身がヴェノムを倒したのは初めてだな。
倒した、つまり……殺した。命を奪った。

「うっ」

そう考えた途端、気持ち悪くなるけど、頭を振る。あれは倒さないといけないもの、なによりはやなさんを浚おうとした。

そう自分に言い聞かせて、

「ノエル、だ、大丈夫?!」

すぐにはやなさんが駆け寄ってきた。

「う、うん、なんとか」

なんとか笑いかける。あ、返り血浴びた状態で笑うのって、すごく不気味じゃないか? なんて変に冷静な自分が問いかける。

彼も僕の横に降りてきた。そして、はやなさんを一瞥して、

——主?

「え?」

え? 主?

彼はゆっくりとはやなさんに近寄ると、ざっと片膝を付き首を垂れる。

まるで、古い騎士が主君に傳くように。

——お久しぶりです。十年ぶり、でしょうか?

はやなさんはえっとおと戸惑って、あ! と声を上げた。

「もしかして、クロ?」

はやなさんが問いかけるとクロと呼ばれた彼はこくつと頷く。

えええ? な、なんなの? この二人いったいなんなの?!

あまりのことに僕は朱音さんやアグニからの通信に気づかず混乱するのだった。

第七十五話 空中戦（後書き）

鈴：「遅くなりました。いやあ、空中戦書くのむずかしかったあ」

刹：「そして、話も一気に加速したな」

鈴：「このために戦闘機のマニューバをネットで調べました」

刹：「いいよな空中戦、ガンダムは最近少し飛びすぎ感あるけど、マクロスのバルキリーの飛行シーンはかっこいいよな。イサムとガルドの口喧嘩しながらの戦闘とか、アルトとブレラがクイーンに挑むシーンとか」

鈴：「ここでZOIDSのアーラ・バローネの名を出してみる」

刹：「古い！」

鈴：「と、会話が明後日の方向に言ってるしそろそろ終わらそうか」

刹：「それでは、また！」

鈴：「感想、コメント、なんでもお待ちしております」

第七十六話 はやなとクロ

私が小学生になった頃かな？

家に帰ろうとしたら声が聞こえたんだ。

声って言うっても感覚的なもので、何て言えばいいのかわからないけど、こう、呼ばれてるきがしたの。

それで、呼ばれるままに学校のそばにあった山に向かったの。

で、その声の元を探したら変な生き物を見つけたの。

抱えるくらいの大きさで、黒い変な生き物。

すぐにわかった。私を呼んだのはこの子なんだって。

「それが私とクロの出会いかな」

はやなさんは珈琲を一口飲んで一区切りする。

あの戦いの後、遅れてやってきた神無にはやなさんは保護され、クロと呼ばれた小型種は今は本部地下施設の訓練所に拘束されている。

クロは黙って従っていたけど、はやなさんは憤ってた。心情はわからなくないし、僕も彼が味方だとわかってはいるけど、仕方ない。一応僕らの敵の一種だもの。

そして、現在僕らはアグニの研究室ではやなさんからクロとの関係を聞いていた。

その説明にアグニはなるほどと頷き、柏木先生は難しい顔をしている。まあ、自分の娘が、ね？

「で、その後どうしたんだい？」

アグニに促され、はやなさんは続ける。

「うちはペット禁止だったから、それからしばらくはその山に毎日通って、ご飯になりそうな木の実あげたり、殻を拭いてあげたり面倒を見てたよ」

はやなさん面倒見いいもんなあ。猫にあげるためのニボシ常備し

てるしね。

でも、クロもはやなさんにとっては猫たちと同じ感覚だったのかな？　なんか、少し違う感じがする。

「クロも何度か脱皮して順調に大きくなっていったんだけど、クロの面倒を見始めてからしばらくして、山に遊びに来た子達にクロを見られちゃった。そしたら、『ツチノコだ！』って追い回されてね」
それではやなさんはどこかの知らない山にクロを逃がしたらしい。
あの時は勝手に遠くまで行って、帰るのが大変だったとはやなさんは笑う。

「心配していたけど元気だったから安心したな」
それは、朗らかで、優しい笑顔だった。

僕は一度研究室を出て柏木先生に、はやなさんの『能力』について説明を受けた。

「テストロツサさんも知っているでしょうが、あの子が動物と話せること。それがあの子の能力です。ある程度の知能を持つ生物とコミュニケーションを取ることができる、本人は『ビーストテイマー』と自称していますが」

それなら知っている。

確かに普通ならあり得ないくらいスゴいと思っていただけ、やっぱりそういう能力だったんだ。

「この能力である子は動物を従えることができます。と言ってもあの子の性格が、それとも能力の制約が支配とまでいきませんが」

それでも影響力はすごいよな。十何匹っていう猫に芸をさせたりするの見たことあるし。

「それで、ヴェノムともコミュニケーションが取れた訳か」
興味深そうにアグニは頷く。

「おそらく」

ということは、話し合いもできる可能性があるってことかな？
まあ、試さないといけないことか。

「まあいいか。次はあの小型種と話をしてみよう」

そうして彼が拘束された状態で話をすることになった。

一応上からの指示で僕は蒼穹を持って相對しなくてはならなくなつた。朱音さんも例の大鎌を取り出してしている。

はやなさんお願いだから睨まないで。こつちも命令でいやいやなんだから。

僕らが彼の訓練所に入ると、腕と脚を拘束衣で動きを束縛され、さらに首には遠隔操作で爆破できるチョーカーを付けられた状態でクロが待っていた。

最初、はやなさんはその状態に不愉快そうな顔をしたが、すぐに切り替える。

「ねえクロ、あの後、何があつたのか話してくれる？」

『わかりました』

はやなさんの問いかけにクロは頷いた。

はやなさんに山に逃がされてから、クロはいろんな場所を流離つたらしい。

時に人に見つかつては、珍しい生き物と追いつけ回されたこともあつたとか。

そして、ある日、とある山奥にあつた山小屋に訪れた時に、彼は武術の師範に出会つたらしい。

『素晴らしい方だつた。人間ではない俺を弟子として迎えて育ててくれた』

クロは遠い目で述懐する。

その人物はクロに武術の基礎を教え、知識を得るために勉強させ、教養のためと本を与えたという。

「ああ、だから荷物の中にあんなに本があつたんだ」と朱音さんが納得する。

報告では荷物の中に古今東西様々な本が入っていたという。中に

はライトノベルの類まで。

『そして、俺という人外がこれからどうすればいいかを教えてくれた』

誰かのために生きること。そうすればいいと。

そして、その師匠が病気で亡くなった後、クロはその人から受け取った少しの遺産とともに、はやなさんを探し始めたらしい。

師匠の言う誰かが彼女と思って。

『それに、なにかが起きると予感していたからな』
なにか？

「なんだねそのなにかとは？」

アグニが問うけど、クロは横に首を振る。

『わからない。だが、何か胸の奥がざわめいているのだ』
なにかが起る？

それを聞いた瞬間、僕も胸の奥がざわめくのだった。何かが起きようとしているのか？

第七十六話 はやなとクロ（後書き）

鈴：「どうもお久しぶりです。いえ、本当に」

刹：「学祭の準備で大変だったんだっとな」

鈴：「うん、最後だしちゃんと顔出ししないと思ってね。作品もちゃんとできた。まあ、相変わらずのいくつか反省点はあるけど…

…」

刹：「まあそれは置いといて、だいぶ話が発展してきたな」

鈴：「うむ、ここからどんどん話をややこしくしていきたいと思っ

刹：「ややこしくかい!!」

感想、コメントなんでもお待ちしております。

第七十七話 ノエルとはやな

『ところで、お前は何者だ？ ただの人間ではないようだが』

「あ、そういえばノエル、なんなのあの翼？ びつくりしたんだけど」

クロとはやなさんが僕をじつと見る。

まあはやなさんたちについて聞いたのだから、僕もちゃんと話さないといけないか。

朱音さんとアグニを見れば二人がこくつと頷く。いいんだね。

「うん、話すよ僕がなんなのか」

そして、僕は話し始めた。僕が人間でないこと。かつて栄えた文明で生み出された守護者『機械天使』であることを。

「———ということで、戦いを終えた後に眠っていた僕はアグニと朱音さんによって現代に目覚めたってわけ」

説明を終えるとはやなさんの目がキラキラと輝いていた。

「ほ、本当に？ 本当に本当？ すごい！ そんなマンガみたいなことが現実にあるなんて！！」

自分のこと棚に上げてますねあなた。

それから首を捻る。

「あれ？ じゃあアルトちゃんは？」

まあ、そういう疑問を抱くよなあ。

「僕の姉妹機つてところかな。僕らが今のところ残った生き残りなんだ」

他にもいる可能性があるけど、最終決戦の生き残りって確か一割未満だったはずだし、あれから一万年以上経ったからなあ……

あれ？ なんで僕そんなこと知ってるんだ？

自然と浮かんできたことに僕は首を捻るのだった。

はやなSide

それからノエルが託児所に預けているアルトちゃんを迎えに行つた後でした。

「はやなちゃん、あの子を支えてあげてくれないかな？」

突然、朱音さんは私にそんなことを頼んできたのは。

「え？ どういう意味ですか？」

「言葉通りの意味かな。あの子はとても……危ういから」

ノエルが危うい？

そこから朱音さんは独白を始めた。

ノエルは目覚めた時、長い休眠期間のせいですべての記憶を、自身の名前すらもなくしていた。

基本知識は朱音さんとアグニさんが彼女の頭に入れたものの真つ新な状態で目覚めたらしい。

「最初の頃はまだ人格が不安定で少しずつ人格を調整していたんだけど、そしたらあの子はたまたま外出させた時に草薙圭一くんに出会ったの」

草薙圭一……確か先輩の亡くなった従弟で、ノエルの友達だった人。

「あの子は圭一くんと知合いになつたらあつという間に人格を再定義して、気がついたら人格が完成していたの。理由はよく分からないくて、たぶん、相性がよかつたんでしょね。結果、今のあの子が出来上がったの。僕 っていう一人称がいい例でしょ？」

朱音さんが苦笑する。

ああ、ノエルがどこか男の子に近い部分があつたのはそういうことだったんだ。

「でも、今ではその人格も危うい。昔の記憶がどんどん蘇ってきて、あの子という人格を飲み込もうとしている」

「どういうことですか？」

朱音さん曰く、ノエルという人格は波打ち際に建てられた砂の城で、記憶は海水。少しの波でもあの子の人格は波に浚われて失いかねない。

「どだい生まれて数か月の人格だからね、もう少し経験をして確固たる自己を確立してたら話は別なんだろうけど、そんな時間もないし、なによりノエル自身が飲まれることを受け入れちゃってるの。抗う気がない、それなら容易く飲まれてしまう。ノエル・テストロツサという人格は消えてしまう」

朱音さんは深く息を吐く。私は息をするのも忘れてしまっていた。ノエルの人格がなくなる？ それって、ノエルがいなくなるのとおんなじじゃあ……

「そう、見た目は同じだけど、まったく別人になるってこと」

「そんなの……よくないです」

ついぼつりとつぶやいていた。

なんとなく今までのノエルの記憶が蘇る。

最初に会った時はあまりに綺麗で、まるで人形のような子なんていう印象だった。

でも、全然違った。笑うし、怒るし、泣く……のは見たことないけど、印象通り少し控えめながらも人間らしい可愛いところが多い子だった。

そんなノエルが消える？

嫌だと思った。確かに元に戻るだけなんだろうけど、私の友達にはノエル、ノエル・テストロツサ。知らない誰かになんてなってもらいたくなんかない。

「まあ、支えてって言うても友達として相談に乗ってあげてもらいたい。今回のことではやなちゃんともある程度秘密を共有できる仲になったからね」

うん、これの前にもノエルはなにも言えなかったのはきっと、このせいなはず。なら、きつと私も話を聞いてあげられる。少しは力になれる。そう思う。

「わかりました」

私が頷く。

「お待たせしました」

「はやなおねえちゃん、あかねおねえちゃんおまたせ」
そこでちょうどアルトちゃんを連れてノエルが戻ってきた。
さてと、機会を見てノエルと話さないと。話して、もし朱音さん
の言っとおりだったら。とっちめよう。友達として。

第七十七話 ノエルとはやな（後書き）

鈴：「あけましておめでとうございます。鈴雪です」

刹：「刹那です」

鈴：「エンジェルダストやつと更新しました。今回はノエルの事情をはやなに説明する回です」

刹：「さすがに脳を移植したなんて言えないから虚飾織り交ぜた説明になってるんだな」

鈴：「まあな。でも、圭一だった自分の人格を今のノエルの人格に組みなおしているって言うのはおおむね間違っていないし」

刹：「これからどうなるかはまだわからないってところか」

鈴：「それでは、また次回！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1916f/>

エンジェルダスト

2012年1月9日17時58分発行